

1989年伊東沖海底噴火と災害情報の伝達

平成 3 年 3 月

東京大学新聞研究所

まえがき

1989年7月、静岡県伊東沖において海底噴火が発生した。幸い噴火は小規模で人的被害は皆無だったが、この噴火は高度情報社会における災害情報のあり方についてさまざまな問題を提起するものであった。

そのなかでももっとも大きな問題は、災害の予知とその伝達の問題であろう。

最近、台風・地震・噴火など自然災害の予知技術が急速に進歩し、災害予知体制はしだいに充実してきた。もちろん、この体制はまだ完全というにはほど遠いが、以前にくらべて正確な予知情報や災害警報を出すことが可能になってきたことは争えない事実である。一方、近年、高度情報社会の出現を背景として、情報メディアの発展もめざましく、防災関係だけをとりあげてみても、各種の防災無線網に加えて通信衛星や放送衛星もごくふつうに使用されるようになったし、またこれらの通信網の多くは単に音声通信ばかりでなくファクシミリなどを導入して文書伝送もできるようになっており、情報伝達の迅速性ばかりでなく、正確性も確保できるようになった。そして、このようなメディアを有効に使って災害情報を適切に流すなら、被害を大幅に軽減する可能性は非常に大きくなっている。

けれども、これはあくまで可能性の話であって、現実の災害時にはしばしば困難がつきまとう。たとえば、災害の予知はまだ完全ではないから、異常現象を検知できても災害が発生する日時や場所・規模などを正確に予測することはむずかしいし、場合によっては災害が発生するかどうかすらわからないことも少なくない。そこで、予知情報は必然的にあいまいにならざるを得ないことになる。けれども、これを受けとる住民はあいまい情報に対するトレランスをもたず、災害が発生するのかもしれないか二者択一を学者や行政に迫るから、さまざまな摩擦が生じる原因になる。予知がまったく不可能ならこうした要求は起こらないが、ある程度可能になった社会では、災害予知の現実と住民の期待とのこのギャップは避けて通ることのできない大きな問題といえよう。

発達した情報メディアについても、いくつかの災害ではこれを有効に使って被害を軽減した事例があるが、他方、実際の災害時にはしばしばこれが効果的に使われなかったケースもあるし、むしろ1981年に神奈川県平塚市で起こった「警戒宣言誤報事件」や82年に静岡県三島市で起こった「警戒宣言サイレン誤報事件」のように、もしメディアが存在しなかったら決して起こらなかったようなミスが生じることも少なくない。また1985年に東京都杉並区で発生した「防災無線ジャック」のように、情報メディアが悪用されるケースさえある。こうした出来事は、要するにメディアのハードウェアの発達にくらべ、それを管理運用するソフトウェアの整備がきわめて遅れていることから派生したものであるが、こ

れはまた、わが国が高度情報社会に移行するそのプロセスにおいて、必然的に経験せざるを得ない一種のハードルであろう。

1989年7月に発生した伊東沖噴火は、高度情報社会における災害情報の問題、とくに予知情報と情報メディアの問題点を、まさに象徴的に示したものであった。本文でくわしく触れるように、そこにはこうした社会がもつ可能性と現実の断絶が投影されている、といってもけっして過言ではない。ややおおげさではあるが、このケースの分析を通じて情報社会の「光」と「影」がみえてくるともいえるのではないか。そこで、文部省科学研究費・平成2年度総合研究B『高度情報化にともなう、社会システムと人間行動の変容に関する研究』（代表：高木教典東京大学新聞研究所教授）の一環として、本報告を発表することにした。忌憚のないご意見をいただければ幸いである。

1991年3月

東京大学新聞研究所

目 次

ま え が き

1 章 伊東沖海底噴火と災害情報の伝達	2
1. 群発地震から連続微動へ	2
2. マスコミの取材と報道	11
3. 災害流言の発生	14
4. 未確認情報の一人歩き	17
5. 海底噴火の発生と情報問題	20
6. 市民の不安	26
7. 「津波情報さわぎ」の発生	28
8. 「余震情報パニック」と「避難準備指示パニック」	33
9. 「津波情報さわぎ」の分析	35
10. 補論 1－教育委員会の対応	42
11. 補論 2－新聞報道における「地震・噴火予知」の評価に関する内容分析	47
2 章 伊東沖海底噴火と住民の対応	69
1. アンケート調査の概要	69
2. 群発地震に対する心理と行動	69
3. 連続微動発生時の心理と行動	73
4. 流言の聴取とその信用度	75
5. 海底噴火時の心理と行動	77
6. 「津波情報さわぎ」における心理と行動	80
7. 疎開について	83
8. 災害時の情報ニーズと役立った情報源	84
9. 伊東市民の防災対策	89

附属資料

1. 聞き取り調査の結果（抜粋）	93
2. アンケート調査の単純集計	116

1989年伊東沖海底噴火と災害情報の伝達

Dissemination of Disaster Information in 1989 Eruption of

Itoh-Oki Submarine Volcano

廣 井 脩
Hiroi Osamu

小 田 勝 利
Oda Katutosi

阿 部 潔
Abe Kiyosi

中 村 功
Nakamura Isao

1 章・伊東沖海底噴火と災害情報の伝達

1. 群発地震から連続微動へ
2. マスコミの取材と報道
3. 災害流言の発生
4. 未確認情報の一人歩き
5. 海底噴火の発生と情報問題
6. 市民の不安
7. 「津波情報さわぎ」の発生
8. 「余震情報パニック」と「避難準備指示パニック」
9. 「津波情報さわぎ」の分析
10. 補論1－教育委員会の対応
11. 補論2－新聞報道における「地震・噴火予知」の評価に関する内容分析

2 章・伊東沖海底噴火と住民の対応

1. アンケート調査の概要
2. 群発地震に対する心理と行動
3. 連続微動発生時の心理と行動
4. 流言の聴取とその信用度
5. 海底噴火時の心理と行動
6. 「津波情報さわぎ」における心理と行動
7. 疎開について
8. 災害時の情報ニーズと役立った情報源
9. 伊東市民の防災対策

附属資料

1. 聞き取り調査の結果（抜粋）
2. アンケート調査の単純集計

本調査は、聞き取り調査とアンケート調査によって構成されており、このうちアンケート調査は、京都大学防災研究所・山本康正助教授と合同で実施したものである。住民避難と自主防災組織の対応等に関してはここではあまり触れなかったため、同助教授の報告を参照されたい。また、聞き取り調査は伊東市役所、同消防本部、同教育委員会、同漁業協同組合および宇佐美地区自主防災組織などに対して実施した。多忙のなかを快く協力された皆様に厚くお礼を申し上げる。なお、本報告の執筆分担は以下の通りである。
（廣井 1章1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, および2章）
（小田 1章10）
（阿部, 中村 1章11）

1 章 伊東沖海底噴火と災害情報の伝達

1 群発地震から連続微動へ

1989年6月末から7月はじめにかけて、伊豆半島東方沖に激しい群発地震が発生した。この地点に発生する地震は「伊豆群発地震」と呼ばれ、昭和53年以降すでに19回も発生しているが、6月30日からはじまった今回の群発地震は地震回数がきわめて多く、震源の深さも5キロ程度とかなり浅かったため、伊東市ではいままでもなく激しい揺れとなった。伊東市役所が独自に設置している地震計によって、今回の地震の揺れの程度を見ると、6月30日から7月2日までの3日間は無感地震だったが、7月3日には震度2が2回、4日には急増して震度2が68回、震度3が56回、震度4が11回、震度5が4回と、総計138回の有感地震があった（表1）。

伊東近辺にはしばしば群発地震が起こるため、市民の多くは地震慣れしており、昨年の群発地震のさいには、地震により犬・猫などペットのストレスがたまって犬猫病院は満員になったのに、住民は平然としていたなどという話もあった。しかし、今年は多少事情が異なったようで、有感地震の頻度がふつうよりずっと多く、また揺れも下から突き上げるような縦揺れがほとんどだったため、これはいつもと違うぞ、と感じていた住民が多かったという。

この有感地震は続く5、6、7、8日にも頻発し、そして7月9日午前11時09分には、マグニチュード5.5の地震が発生した（図1）。日曜日の昼前に起こったこの地震は、市役所の地震計で震度6（284ガル）を記録し、家具倒壊によるけがや沸騰した油による火傷など負傷者22名の人的被害を生んだほか、伊東駅・宇佐見駅付近など7ヵ所のガス漏れ、宇佐美全域など2400世帯の停電、屋根・外壁など1445件の家屋被害を生じ、今回の地震・噴火における最大の被害となった。表2には、今回の事態における被害状況の一覧が示してあるが、これらは一部を除いて、ほとんどが7月9日の地震による被害であった（伊東市役所資料より）。

なお、地震活動が活発化した7月3日からこのころまで、予定を早めてあわてて帰宅する宿泊客が続出し、旅館の予約をキャンセルする観光客の数も急増した。たとえば、伊東温泉では8日（土曜日）、宿泊客の3分の2にあたる10,000人が解約し、群発地震発生以来のキャンセル数は53,000にのぼったという。また観光業者の側でも、12日に都内主要駅でスズムシを配る、恒例の観光キャンペーンを行なう予定だったが、「群発地震の最中に客を呼んでも不安を与えるだけで申し訳ないし、誘客効果も望めない」として、とりあえず26日までこれを延期することに決定した。この観光客問題は、後にまた触れることにしたい。

表1 伊豆半島東方沖群発地震の有感地震回数（伊東市役所提供資料より）(1)

平成元年7月20現在（市役所地震計）

震 度 月 日	2	3	4	5	6	計
7月3日（月）	2 / 2					2 / 2
7月4日（火）	68 / 70	56 / 56	11 / 11	4 / 4		139 / 141
7月5日（水）	46 / 116	52 / 108	16 / 27	1 / 5		115 / 256
7月6日（木）	53 / 169	34 / 142	13 / 40	1 / 6		101 / 357
7月7日（金）	20 / 189	16 / 158	5 / 45	3 / 9		44 / 401
7月8日（土）	33 / 222	21 / 179	6 / 51	1 / 10		61 / 462
7月9日（日）	32 / 254	27 / 206	18 / 69	5 / 15	1 / 1	83 / 545
7月10日（月）	12 / 266	3 / 209	3 / 72	0 / 15	0 / 1	18 / 563
7月11日（火）	2 / 268	3 / 212	0 / 72	0 / 15	0 / 1	5 / 568
7月12日（水）	2 / 270	3 / 215	0 / 72	0 / 15	0 / 1	5 / 573

表1 伊豆半島東方沖群発地震の有感地震回数（伊東市役所提供資料より）(2)

平成元年7月20現在（市役所地震計）

震 度 月 日	2	3	4	5	6	計
7月13日（木）	6 ／ 276	2 ／ 217	0 ／ 72	0 ／ 15	0 ／ 1	8 ／ 581
7月14日（金）	2 ／ 278	1 ／ 218	0 ／ 72	1 ／ 16	0 ／ 1	4 ／ 585
7月15日（土）	2 ／ 280	0 ／ 218	0 ／ 72	0 ／ 16	0 ／ 1	2 ／ 587
7月16日（日）	1 ／ 281	0 ／ 218	0 ／ 72	0 ／ 16	0 ／ 1	1 ／ 588
7月17日（月）	0 ／ 281	0 ／ 218	0 ／ 72	0 ／ 16	0 ／ 1	0 ／ 588
7月18日（火）	0 ／ 281	0 ／ 218	0 ／ 72	0 ／ 16	0 ／ 1	0 ／ 588
7月19日（水）	0 ／ 281	0 ／ 218	0 ／ 72	0 ／ 16	0 ／ 1	0 ／ 588
7月20日（木）	0 ／ 281	0 ／ 218	0 ／ 72	0 ／ 16	0 ／ 1	0 ／ 588

○ 最大震度 6 284ガル 元年7月9日午前11時09分

図1 7月9日の地震を報じる新聞記事（「静岡新聞」1989年7月10日朝刊）

震度6、初の負傷18人

伊豆東沖 伊東・各地で被害 群発地震

伊豆東沖群発地震は九日、活動が活発化、午前十一時九分、伊東市で、今回の群発地震では最大の震度6（伊東市観測、気象庁観測は伊東で5、網代で4）M5.5を記録した。同市では市の中心部から北部を中心に石垣やブロック塀の倒壊、家屋損壊などが多発。午後七時現在の伊東署のまとめによると被害は負傷者十八人、家屋損壊十件、石垣崩落六カ所、ブロック塀倒壊五カ所、がけ崩れ、山崩れ十八カ所などとなっている。負傷者はいずれも軽傷で、同市内の一部で起きたガスの漏れも間もなく修復されたが、がけ崩れによる道路の不通、JRや伊豆急のダイヤ混乱など交通網に影響が出た。有感、無感の地震は依然続いているため、伊東市、伊東署など関係当局は警戒を強めている。

■関連記事22、23面へ

同日午前九時二十分、伊豆東沖で震度6が一回、5が五回、4は十四回など、有感地震の回数全体はピーク時の四日、五日に比べて減っているが、震度4、5の比較的大きな地震はピーク時と同じかやや上回る回数になっている。同日午後六時までに道路損壊九十カ所、水道管漏水二十八カ所、家屋損壊九件などが報告されているが、落石や崩土、家屋の損傷など軽微な被害は極めて多数に上っている。

被害は市外にも及び、田方郡中伊豆町では伊豆スカイラインが五十メートルにわたり、二車線分道路崩落した。被害復旧は順調だが、旅館の予約キャンセルが推計延べ十万人に達するなど、伊東の基幹産業の観光は、年間最大の行楽期を目前に大きな打撃を受けた。

網代測候所によると、伊豆半島東方一帯を震源とする群発地震は、昭和五十三年以来、今回を含めて約二十回、昨年七月末から約一カ月間の群発地震では有感地震二百八十七回、無感地震二万六千九百余回を記録、今回はこれを上回り九日午後十時までの総地震回数は四百四十回の有感を含め一万九千六百回になった。

今後の見通しについて、地震予知連絡会の浅田敏会長は「この地域でM6を超える大地震が起きることはないと思うが、活動はあと二週間ぐらいは続くだろう」と、さらに警戒が必要としている。

表2 伊豆半島東方沖群発地震の被害一覧（伊東市役所提供資料より）(1)

1.伊東市関係

区 分	主 な 被 害 内 容	
市 庁 舎	・廊下等モルタル壁剝離外	
市 道	・道路亀裂	峰中線 留田線 水道山線等 11か所
	・道路石積破損	和泉大山線 山田線 鎌田坂下線等 12か所
	・路肩破損はらみ	寺山線 伊東道線等 5か所
	・路肩崩土	馬場道線 留田線 山田線等 14か所
	計42か所	
河 川	・初津川護岸欠壊 1か所	
公 園	・丸山公園	崩落 1か所 亀裂 7か所 小屋全壊 2棟
	・松原公園	亀裂 1か所
	・伊東公園	石積崩壊 1か所
	・宇佐美駅広場	亀裂 1か所 側溝陥没 1か所
市 営 住 宅	・瓦等屋根損傷 23戸	・山 田 2 ・長門洞 13 ・赤 坂 3 ・逆 川 3 ・城 星 2

表2 伊豆半島東方沖群発地震の被害一覧（伊東市役所提供資料より）(2)

区 分	主 な 被 害 内 容
農 道	・伊東開拓道路 路肩崩壊 8 か所 路面ひび割れ 10 か所 農地崩土 2 か所 落石10か所 ・磯辺山線 路面ひび割れ 2 か所 落石 1 か所 ・峰農道 路面ひび割れ 3 か所 ・蔵ヶ窪農道支線 崩土 1 か所 ・初津農道 法面崩土 1 か所 ・阿原田農道 法面崩壊 1 か所 ・滝洞農道 路肩崩壊 1 か所
林 道	・松原線 崖崩れ 5 か所 陥没 1 か所 落石 1 か所 立木の倒れ 2 か所 路肩損壊 1 か所 ・新井線 路面ひび割れ 3 か所 陥没 1 か所 路肩崩壊 1 か所 ・大平線 路面陥没 1 か所 石積崩壊 1 か所 崩土 1 か所
漁 港	・宇佐美漁港 岸 壁 延長60m前面にずれ スパン陥没 物揚場 延長25m陥没 スパン平均 2 cm沈下
水 道	・道路漏水 43か所
福 祉	・保健福祉センター タイル陥没 硝子破損 - 老人施設 機械室配管損傷 外 - 保健施設 タイル陥没 機械倒損 配管損傷 外 ・老人ホーム 廊下 ガラス損傷

表2 伊豆半島東方沖群発地震の被害一覧（伊東市役所提供資料より）(3)

2. 公共機関関係等

機 関	主 な 被 害 内 容			
国 県 道	7/7	県道伊東川奈八幡野線 魚見崎～川奈間	落石	通行止
		(15:10～)		
	7/9	135号線 宇佐美白波ドライブイン付近	7 m亀裂	片側通行
	"	伊東高校付近路肩	100m沈下	
	"	赤坂バス停前路面	亀裂20m	
	"	川奈入口路肩	決壊30m	
	"	大原町バス停前路面	亀裂10m	
	"	田代バイパス路面	亀裂3か所	
		伊豆スカイライン冷川～亀石間崩土		全面通行止
J R 東日本	7/ 9	伊東線	30分～1時間程度遅延	17:14 復旧
	7/14	"	1時間程度運転停止	15:34 復旧
伊 豆 急 行	7/ 9	一部遅延	復旧	
東 海 バ ス	7/ 9	11:10 頃	運転中止	13:55頃より平常運行
ガ ス	7/ 8	午前1時03分	音無町1-41 建善木工所前市道	午前3時28分復旧
			住民避難 午前1時10分～午前3時55分	西小学校屋内運動場80人
	7/ 9	午前11時10分頃	大原町3か所・新井磯辺・岡・杉山製茶付近	
			・伊東駅付近・宇佐美駅付近各1か所	
			計7か所ガス漏れ	復旧
N T T	7/ 9	個人電話9件故障	復旧	
東 京 電 力	7/ 9	停電	宇佐美全域・湯川駅裏	1,900世帯
			宇佐美海峰苑	500世帯
		電柱傾斜	4本	復旧

表2 伊豆半島東方沖群発地震の被害一覧（伊東市役所提供資料より）(4)

3. 一般市民関係等

区 分	主 な 被 害 内 容
人 身 被 害	7/9 負傷22名（市内佐藤病院 入院1名・軽症12名） （ “ 伊東病院外 “ 5名） （ “ 森田医院 “ 2名） （市救急センター “ 1名） （市内小西医院 “ 1名）
土 木 災 害	崩壊か所 62か所 落石等 25か所 私道崩壊 5か所 “ 亀裂 38か所 計 130か所
家 屋 被 害	調査対象 1,445戸 内 容 ・家屋、屋根 945件 ・外壁、内壁外 1,425件 ・宅地、擁壁 367件 計 2,737件
水道・温泉管	209 件以上
住 民 避 難	ガス漏事故 7月9日 午前1時10分～午前3時55分 西小学校運動場 80名 崖崩れ等 7月9日～12日 東小学校 33名 帰宅 宇佐美コミュニティセンター 14名 帰宅 市営住宅 8世帯 内1世帯帰宅 ※7月13日以降は別表のとおり

表3 海底噴火後の伊東温泉宿泊客の推移（伊東市役所提供資料より）

（全収容人員 33,000人）

日 宿泊施設	7/14 (金)	7/15 (土)	7/16 (日)	7/17 (月)	7/18 (火)	7/19 (水)	7/20 (木)	7/21 (金)	7/22 (土)
旅館	857人	1,029人	676人	635人	615人	664人	515人	781人	1,421人
民宿	193人	315人	187人	162人	176人	168人	162人	151人	249人
寮・保養所	108人	230人	229人	144人	132人	46人	29人	209人	429人
ペンション	80人	152人	15人	30人	25人	20人	15人	23人	350人
計	1,238人	1,726人	1,107人	971人	948人	898人	721人	1,164人	2,449人

さて、M5.5の地震が起こった7月9日を境に、群発地震は10日以降、規模的にも回数的にも急激に勢いを減じていった。そして、11日には早くも終息かという楽観の見通しが出てきたが、その日の夜、今度は誰も予想しなかった新たな局面を迎えることになった。「連続微動」の発生である。

この連続性微動は、11日午後8時38分頃、伊東市鎌田や熱海市網代などの高感度地震計で観測されはじめた。そして、9時頃から微動の振幅が大きくなり、9時48分にいったん休止した後、11時35分頃からふたたび断続的な微動がはじまったのである。微動は関東一帯で観測されるほど大きなものだったが、鎌田や網代ではとりわけ強く、地震計の針が振り切れるまでになった。

多くの住民は、この微動を「太太鼓のようなドーン、ドーンという音」「ドスン、ドスンという工事現場の杭打ちのような音」「ドーン、ドーンというブロック塀をハンマーでたたくような音」「ゴー、ゴーという海鳴りのような音」などと感じたようで、微動発生直後から、伊東市役所や伊東消防署には、「異様な音がする」といった通報や「一体なんの音か」などの問い合わせが殺到し、市役所だけでもその数は300件に達したという。また伊東市消防本部にも、「湯川地区の者ですが、家の廻りで地響きのような音がして、付近の人も外へ出ています。調査して下さい」（午後9時29分受領）、「湯川JR伊東駅付近ですが地響きがします。何の音かわからないが突き上げるような感じです」（9時31分受領）、「工事の杭打ちのような音がし、地鳴りがしている」（9時31分受領）などという通報があった（伊東市消防本部資料より）。

このときは、とくに地鳴りが激しかった新井地区において、不安を感じた13世帯50人の住民が高台にある宝専寺に避難してきた。そのうち、海沿いに住むおよそ20人の住民たちは、本堂に座蒲団を敷き、家からもってきたふろしきやタオルなどを掛けて、寺に泊まり込んだ。なお、これら避難住民のようすを報道しようと多数の報道関係者が宝専寺に殺到し、就寝しようとする住民に照明を向けたり、マイクを突きつけたりして強引とも思われる取材をした

ため、見かねた副住職が警察署にこれを訴え、後に警察が、報道関係者に対して節度ある取材を申し入れるという一幕もあった。この種の「過剰取材」は災害時には決して珍しくない。次に、この点についてややくわしく触れていこう。

2 マスコミの取材と報道

一般に、地震・噴火などの災害が発生すると、新聞やテレビをはじめさまざまなマスコミが災害現場に殺到する。とくに、大災害であればあるほどその傾向はいちじるしく、各社の取材合戦は猛烈なものになる。そしてこうした競争状態によって、取材活動が「脱線」することも少なくない。

たとえば、昭和59年の長野県西部地震や、61年の伊豆大島噴火では、いやがる被災者への強引な取材はまだいいほうで、他人の家に無断侵入するとか、他人の車を無断で乗り回すとか、被災者に配給された弁当を食べてしまうとかいう、目にあまる行為があったと伝えられる。そのため、これらの被災地では、報道関係者に対する不満や苦情が噴出し、なかには避難所の入口のドアに「マスコミお断り」と書いたビラを張ったところもあった。

伊東沖海底噴火の場合もほぼ同様な事態が起きている。伊東市には、群発地震が激しくなるにつれてしだいに報道関係者が増え、最盛期は500人を越える数が殺到して、観光客がいなくなった旅館やホテルにはかれらの姿ばかりがめだつという状態になった。そして、功を急ぐあまり強引な取材を行い、市当局の防災活動を阻害したケースや、被災者や避難者に無神経な取材をして、住民から反発を受けたケースがしばしばあったという。

こうしたモラルや礼儀の欠如を示す典型的な例が、さきにあげた宝専寺における取材であり、現にわたしが宝専寺の住職に会ったときも、マスコミも仕事ですからと多少は同情しながらも、取材攻勢の猛烈さに相当あきれたようすだった。なお、このときの取材に対する市民の批判が、7月19日の「朝日新聞」朝刊の投書欄に掲載されている。それは次のような文で、投書者は伊東市在住の77歳の男性である。

【マスコミ取材 制度をもって

群発地震の伊東市に乗り込んだマスコミ陣は、週刊誌を含め500人を越えるといわれるが、そのマナーについて一言。

一例を挙げると、地鳴り騒ぎの11日、10世帯41人が避難した市内の寺に取材陣が殺到、体を休めていた人たちを起こしてまでマイクを突きつけた。見かねた副住職が警察署に訴え、警察から「節度ある取材を」の申し入れとなった。

この時は、自宅にいても幼児がこわがって眠れなかったり、子供たちが試験勉強できなかったりで寺に来たのに、幼児は起きてしまうし、子供たちも勉強どころでなくなり、みんな家に逃げ帰ったのが実情で、結果的に大勢のマスコミが避難者を追い払ってしまったという。

このほか、商店に週刊誌記者が来て、「棚の商品を落とし、空きビンでいいですから割

って散らしてくれませんか」といった例。テレビで放映された防災ずきんをかぶって登園する子供たちの映像も、当の幼稚園では「園児にずきんは持たせていますが、揺れた時に園内でかぶらせるだけ。かぶって歩いたら音は聞こえないし、周りも見えにくく、かえって危険。そんな指導はしていません」という。

例を挙げればキリがない。マスコミ陣よ！あなた方も肩書を取れば一個の人間、思い上がりを捨て、無冠の帝王たれ。】（「朝日新聞」7月15日朝刊）

この投書では取材の加熱に加え、もう一つ、過剰報道も批判されている。つまり、取材面ばかりでなく報道面でも、地震・噴火の状況と、住民の混乱や不安を過度に強調した、センセーショナルな記事や番組が少なからずあり、これも批判の対象になっている。この投書に載っているような、空きビンを割る話や園児に防災ずきんをかぶらせる話はその一例といえるが、それ以外にもわたしは現地で、7月9日の群発地震のあと、この日は日曜日でもともと商店が休みなのに「地震のため閉店となった商店街」などと報じたとか、地震によるさほど大きくない落石を下から撮影していかにも大きく見せかけたなどという、笑い話のような話を聞いた。

こうした話はヤラセに近い極端なものだが、このほか新聞でも、本文を見るとそれほどことはないのに、見出しには「地鳴り一市民スワッ 『脱出だ』伊東駅に殺到」「『もう、たくさん』募る焦り また・・・グラリ、グラリ」「群発地震 壁はがれ、民家荒廃」など、被害状況や住民混乱を過度に強調したものが少なくなかった。もちろんこのことはテレビも同様で、たとえば群発地震の被害箇所をクローズアップして集中的に報道したため、視聴者に伊東市内は大被害にあったという錯覚を与えたり、親戚や友人宅に一時的に疎開する人々の姿をくり返し放送したため、市民の大多数が脱出しているというイメージを植えつけたりしてしまった。

けれども、こうしたケースは災害報道にはよくあることで、国内では昭和53年6月に起こった宮城県沖地震のさい、地震に直撃された仙台市の倒壊した民家やブロック塀をテレビが集中的に放映したため、視聴者に仙台全滅という印象を与えて、全国から見舞いの電話（これを「見舞い呼」という）が殺到したという出来事があった。また1989年10月にサンフランシスコ湾岸地域を襲ったロマ・プリータ地震でも、アメリカ国内ばかりでなく日本、ヨーロッパなど世界中から、報道機関がサンフランシスコとオークランドの被害現場に殺到し、崩壊して瓦礫と化した高速道路や住宅街の火災のようすをくり返しくり返し放送した。そのため、日本の多くの視聴者はまるでサンフランシスコ全体が崩壊したような印象を受けた。ところが、その後わたしが現地調査に行ってみると、被害はきわめて局所的で、市内の大部分はほとんど何の被害もなかったのである。

前述のように、伊東沖海底噴火でもこのような過剰報道が散見されたが、これらの報道はいくつかのマイナス効果を生じた。

その一つは、観光業へのインパクトである。つまり、有感地震が発生しはじめた7月3日頃から、マスコミの報道量は急激に増えているが、ちょうどこの時期から、予定を早めてあ

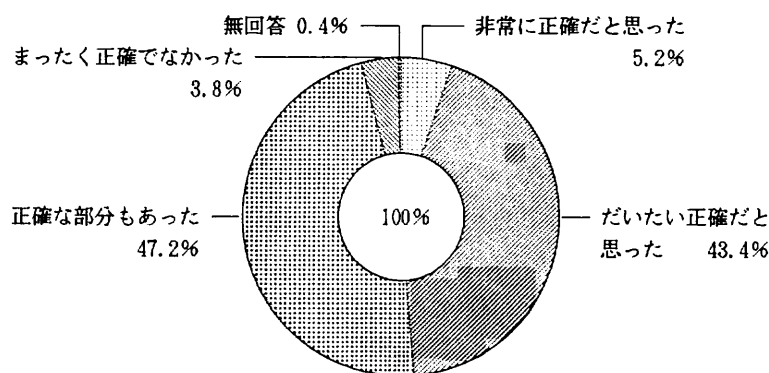
わてて帰宅する宿泊客が続出し、また旅館の予約をキャンセルする観光客の数も急増したのである。

一例をあげると、伊東温泉では7月8日（土曜日）には、宿泊客の約3分の2にあたる1,000人が解約し、群発地震発生以来のキャンセル数は53,000人にのぼったという。また、表3は海底噴火が発生した13日の翌日以降の宿泊者数であるが、ふだんなら30,000人以上の宿泊客でにぎわう街が、わずか1,000人前後の人しかおらず、その閑散ぶりが目に見えるようである。ある関係者によれば、今回のような大不況は、昭和25年に起こった「赤痢騒動」以来久しぶりだというのが、マスコミのセンセーショナルな報道がその原因のすべてではないにしても、かなりあずかって力があつたのではないと思われる。

マスコミの過剰報道がもたらすもう一つのマイナス効果は、いうまでもなくマスコミへの不信感の増大である。たとえば、わたしが会った住民の多くは、テレビや新聞に対して不信感をあからさまにしていたが、その理由はほとんどすべて、伊東市内の出来事を扱ったテレビ番組や新聞記事が事実をありのままに報道せず、いかにも大げさに事態を誇張して報道し、なかには事実でないことまででっちあげるからというものだった。

このことは、1989年9月に静岡新聞社が伊東市民500人に対して実施したアンケート調査によってもうかがうことができる。この調査では、群発地震から海底噴火までの一連の事態におけるマスコミ報道が正確だったかどうかをたずねているが、現地で実際に体験している住民の目からみて、マスコミ報道が「非常に正確だと思った」人はわずか5%にすぎず、「だいたい正確だと思った」人（43%）を加えても半数に満たなかったのである（図2）。

図2 伊東沖海底噴火についてのマスコミ報道に関する評価
（静岡新聞調査より）（N = 500人）



3 災害流言の発生

さて、話をまた7月11日の連続微動発生時に戻すと、この緊急事態のなかで、伊東市内では種々の流言が飛びかったという。この状況について、たとえば7月12日の「読売新聞」夕刊は次のように書いている。

【眠れぬ一夜・・・デマも 伊東沖微動 「火山爆発するそうだ」 広報に不備 伊東市民ら右往左往

群発地震から連続性微動へと様相を変えた伊豆半島沖地震で、震源地近くの静岡県伊東市では、11日夜、「火山が爆発するという広報があった」などのデマも飛び交い、市民間の電話情報が乱れ飛んで不安に拍車をかけた。一方、微動活動に関する同市からの問い合わせに、気象庁は「テレビでみてくれ」と答えるなど役所間の情報伝達の不備も出てきており、正体の知れぬ地震におびえる市民からは、広報体制の強化を求める声が上がっている。

同市銀座元町の喫茶店では、11日午後9時30分ごろから「海鳴りがする」「異常に海の潮がひいた」「地割れが出来始めた」などの情報が市内の友人から電話で次々と入った。半信半疑で客に知らせると、約150人の客は総立ちになった、という。当時、店にいた同市竹の内、印刷業Hさん（50）は、「家に飛んで帰った。地元にいながら正確な情報がまったくつかめず、なんだかわからない不安が続いた」と話す。

午後10時半には、情報不足にいら立った市民が、直接市庁舎に出向き、「火山が爆発するという広報があったと聞いたが、どこに逃げたらよいか」「宇佐美地区に避難命令が出ていると聞いたが」などと、詰めかけていた報道陣に聞き回る姿もみられた。

デマは、行政などからの情報不足が一因となった。同市では緊急時には同報無線で情報を全市内に流すことにしていたが、この日は「地震が発生しているのは湯川地域周辺」と判断。「局所的現象を全市に流せば市民の混乱を招く」として、同報無線広報はせず、湯川地区に広報カー1台を午後10時から1時間走らせたただけだった。

広報の内容は、「ただ今地鳴りがありました。現在調査中です。テレビ・ラジオの情報に注意し、慎重に行動してください」というだけ。

この間、同市が気象庁に情報を問い合わせたところ、気象庁は「テレビを通じ発表するので見てほしい」と回答。情報伝達役の市も微動についての正確な情報をつかむのが遅れてしまった。・・・（後略）】（「読売新聞」7月12日夕刊）（図3）

この記事にもあるように、7月11日の流言は短時間に急激な勢いで広がっていった。

たとえば、わたしたちが行ったアンケート調査によれば、連続微動の発生直後に地震や噴火・津波に関する流言を聞いた人が34.9%と、住民のほぼ3分の1にのぼっていた。

また、その流言の内容としては、

①地震に関するもの（「東海沖地震が発生する」「7月17日から20日にかけて大地震が来

眠れぬ一夜…デマも

不^レ広報^ニ備^フ伊東市民ら右往左往

「火山が爆発するという広報があった」などのデマも飛び交い、市民間の電話情報も乱れ飛んで不安に拍を打った。一方、運動活動に関する両市からの問い合わせに対し、市民庁は「テレビで見よう」と指示を求めた。この情報伝達の不備も出てきており、正確な知らせの強化を求める声が上がっている。

岡市銀座町の喫茶店で 十五人の客は建立ちになつて午後十時半には、情願不足にいら立つた市民が、要求もみられた。

「それから「海鳴りがする」
な岡市竹の内、印刷製紙野
「東京に海がひいた」
留置人系。いま、「家」に飛
が通脱するといふ広報があ
情願不足が「因」となつた。

「地割れが出来始めた」な
んで困った。地元になが
つた所聞いたが、どこに逃
がすか。市役所へ行って
同市では緊急時には同報無

半蔵で書に知らせると、約
との情報だ市内の知人なら
電話で次々に入った。半蔵
かめず、何だかわからない
不安が続いた」と話す。
聞いたが、なぜと、話めか
「地震が発生しているのは
区に避難命令が出ていると
にしていたが、この日はほ
して作業を市内に誘導す

勝川地蔵園に下り断。一局
所の奥交差した二股道を行

小町で鳴地
民の虚火を招くとして、
月形勢を全にみせし市

同級生は、麻川地区に広がり、一台を午後

で先伊東
十時から一時間走らせた

小中学校で欠席提出

伊勢市役所は十二日朝、市内の幼稚園と小、中学校を立寄る午前十時

（左）の者の、
送機後放置は、同日、中止して、機を搬入した。

[illegible]

の影響を受けてM
の小、中学校の欠陥者は計

地蔵の
につい
五十六人に上り、ほとんど
が前夜の振動音による寝不

BEI 1460264.000.

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
323
324
325
326
327
328
329
330
331
332
333
334
335
336
337
338
339
340
341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
416
417
418
419
420
421
422
423
424
425
426
427
428
429
430
431
432
433
434
435
436
437
438
439
440
441
442
443
444
445
446
447
448
449
450
451
452
453
454
455
456
457
458
459
460
461
462
463
464
465
466
467
468
469
470
471
472
473
474
475
476
477
478
479
480
481
482
483
484
485
486
487
488
489
490
491
492
493
494
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
506
507
508
509
510
511
512
513
514
515
516
517
518
519
520
521
522
523
524
525
526
527
528
529
530
531
532
533
534
535
536
537
538
539
540
541
542
543
544
545
546
547
548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
579
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589
590
591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
609
610
611
612
613
614
615
616
617
618
619
620
621
622
623
624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
634
635
636
637
638
639
640
641
642
643
644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669
670
671
672
673
674
675
676
677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
703
704
705
706
707
708
709
710
711
712
713
714
715
716
717
718
719
720
721
722
723
724
725
726
727
728
729
730
731
732
733
734
735
736
737
738
739
740
741
742
743
744
745
746
747
748
749
750
751
752
753
754
755
756
757
758
759
760
761
762
763
764
765
766
767
768
769
770
771
772
773
774
775
776
777
778
779
780
781
782
783
784
785
786
787
788
789
790
791
792
793
794
795
796
797
798
799
800
801
802
803
804
805
806
807
808
809
810
811
812
813
814
815
816
817
818
819
820
821
822
823
824
825
826
827
828
829
830
831
832
833
834
835
836
837
838
839
840
84

地蔵の影響で欠席者の目立つ教室で先生から地蔵！
について聞く児童ら（午前9時、伊東市立西小で）

所の製鉄を市に譲渡は市
の振興を助くとして、
同譲渡金は、市は、川
段に、昭和十一年年
十時から、時間運のた

小中学校、文庫、出
内、市は、十、百、
の、物、を、中、学、
に、対、し、同、日、は、理、の、活
動、を、中、止、て、校、長、を、
た、ち、に、休、校、と、さ、し、ま、
せ、う、と、さ、し、ま、す、。、の、日、
の、小、中、学、校、の、欠、席、は、計
五、十、六、人、上、り、は、ん、ど
が、保、護、の、勤、動、に、も、不、
な、ら、ず、と、さ、し、ま、す、。

水邊水をおいしく暮らす
珊瑚名水

「非
でした
界の第
三回（六
が、十二
の通過
行い、
を振り
ショ
い麻の
こなし
ず、全

伊豆沖微動

[illegible]

「う、武蔵屋は「テレビを通
じ発表するのて見てほし
い」と回答。情児団校の
しも運動中という正確な
情報をつかひのけ遅れてし
まった。」

しかし、巨魁力を走ら
せなすの南川地帯の主権
派野郎が「おまはは「情報
戦」といふはテレビのニュー
スだけ。しかも、市内の知
人ばかり。しかも、市で

同ま
「こ
到す
た。こ
利を
だが、
敵隊
と結
ゴル
一紙

「広報の内容は、たい
ま地湧りがありました。明
在調査中です。テレビ・ラ
ジオの情報に注意し、慎重
に行動して下さい」という
だけ。

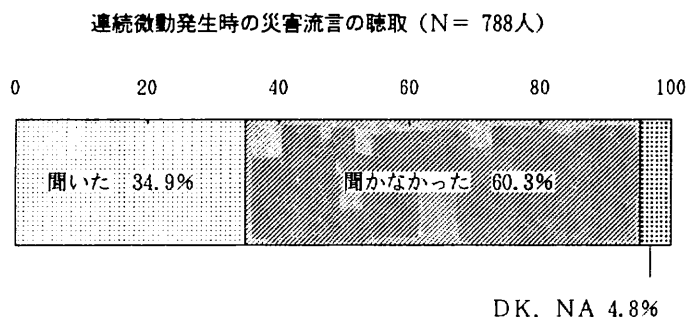
この間、岡市が気象庁に
「一週

る」)

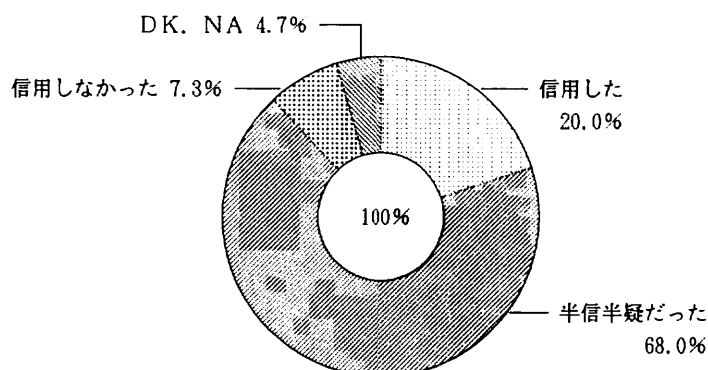
- ②噴火に関するもの（「火山が爆発するがどこに火を噴くかわからない」「大室山が噴火する」「巢雲山に火山脈があり爆発が起きるかもしれない」「須崎から噴火する」「富士山が噴火する」「宇佐美の町の中で噴火が起こる」「初島が噴火した」「湯川のあたりが噴火する」「海の中で噴火して島が出来らしい」「初津山が爆発する」）
- ③津波に関するもの（「海の潮が引いたから津波がくるかもしれない」「津波が来るから山の手へ避難するように」「大津波が来て海岸ぞいの家は皆流される」「津波が3分以内に来る」）
- ④避難に関するもの（「市役所では津波が来るから避難せよと放送している」「新井や玖須美方面では避難命令が出て住民が避難を始めた」「一部の部落では皆避難した」）
- ⑤海の異常に関するもの（「海の水が引いている」「宇佐美沖でアワが出ている」「湯川の海岸付近の海底から熱湯が湧いている」「川奈の海女さんが海の中はすごい音がしていると言っていた」「海から煙りのようなものが出ている」「海鳥がいなくなった」）
- ⑥その他（「道路に大きく亀裂が出来ている」「山から蛇が出現した」「手石島付近に赤い海老の浮遊物がある」「温泉が止まった」「地面が盛り上がってきた」）
- など、多岐にわたっていた。

けれども、こうした流言を聞いたときの伊東市民の信用度をみると、それほど高くなかった。つまり、こうした話を「信用した」人は20%にすぎず、68%という圧倒的多数が「半信半疑だった」と答えている。しかし逆に、これらの話を聞いたときの住民の不安度は比較的高く、「非常に不安を感じた」人が28.4%、「かなり不安を感じた」人が50.9%と、合わせてほぼ8割の住民が不安を感じたと答えているのである（以上、図4）。災害流言への信用度はさほど高くないのに、不安度はかなり高いというのはごくふつうにみられる一般的傾向であるが、これは、そうした話をにわかには信じられないが、万一のことを考えるとまったく無視することもできないという、揺れ動く心理の現れと考えられる。

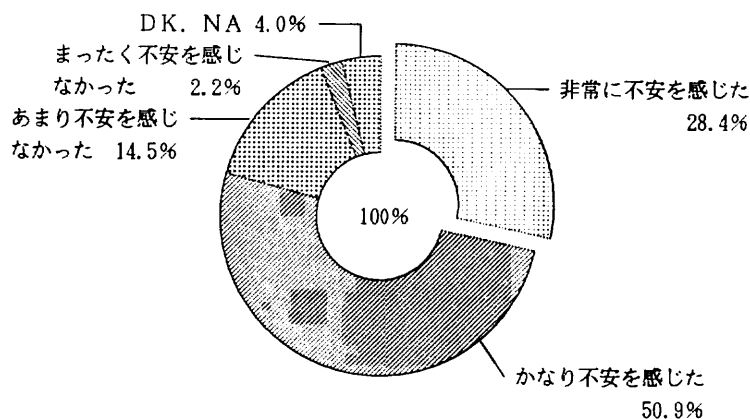
図4 災害流言の聴取・その信用度・不安度



流言の信用度



流言を聞いたときの不安度



4 未確認情報の一人歩き

ところで、この連続微動の発生を契機として、上で述べた流言に加え、もう一つの情報問題が発生している。それは、12日午前0時半からはじまった気象庁の記者会見で、「海から気泡が出ている」という、いかにも噴火の危険をおわせる未確認情報を、気象庁の担当者があたかも確認情報のように発表してしまったという事件であった。次に、やや長いが、このことを報じる「静岡新聞」の記事を引用しておこう。

【「海に気泡」独り歩き 発端は一本の問い合わせ電話 漁民ら現場調査 異常は確認できず 情報伝達の難しさを浮き彫り

「伊東市沖の海上に気泡が浮かんた。火山活動の前兆か」一。こんな情報が12日、県、気象庁、報道各社など関係機関の間を駆け抜けた。伊東市内も一時、騒然となり、地元漁民らが調査に乗り出したが、現場海域では何の異常も確認できないまま。結局、伊東市消防

本部に入った一本の問い合わせ電話がいつの間にか独り歩きしたらしいと判明。災害現場での情報伝達の難しさが改めて浮き彫りになった。

騒ぎの『火付け役』となったのは気象庁。火山性微動について行われた12日午前0時半の記者会見で、担当者が「伊東沖の手石島近くで泡が出ているという情報が静岡県から入っている」と発表。直前に火山噴火予知連絡会の下鶴大輔会長が緊急会見の中で、微動と気泡の関係を指摘していたこともあって、一気に緊張感が漂った。

情報の出所となった伊東市消防本部には会見直後からマスコミ各社からの問い合わせが殺到。12日昼には、長年、伊東沖で漁を続けている伊東市静海町の釣り舟業Tさん（69）が在京テレビ局と一緒に早速、舟で手石島近くを調べた。ところが現場海域で気泡は全く見つからず、海の色にも変化はなかった。水深15メートルの水温も22度と異常なし。念のため前夜、地鳴りが強かった同市湯川沖も調査したが、同じ結果だったという・・・（中略）

同市消防本部によると、一連の騒動は、11日夜の問い合わせ電話から始まった。「知合いの漁民が手石島近くで気泡を見たと言っているが本当か」との内容で、担当者が「分からない」と答えたとそのまま切れたという。

この問い合わせ電話の一件は、同本部から県地震対策課に伝わり、県地震対策課の担当者は気象庁の担当者に雑談の中で「未確認だが、泡が出ているという話もありますよ」と、耳打ち程度に伝えた。

これを、気象庁が会見の席上、全く確認作業をしないで発表したため、大騒ぎになったらしい。県地震対策課は「いろいろ難しい時期なのに、あまりに軽率な公表の仕方だ。これでは気象庁との間で信頼関係が保てない」とカンカン。気象庁は気象庁で、「あくまで参考情報の積もりで公表した。無視するわけではないが、早急に確認するほどではないと判断した」。

もちろん本当に異常があったかどうかは依然、わからないまま。地元の消防関係者は、「皆が神経質になっている時だけに情報の扱いには十分気を付けてほしい」と話している】（「静岡新聞」7月13日朝刊）（図5）

これは、あいまいな未確認情報がすでに確認済みの情報のように一人歩きしていったケースであるが、同時に、気象庁→静岡県→伊東市の情報連絡網が円滑にはたらかなかったことを示すものでもあった。

このように、群発地震から連続微動へと局面が急変したとき、伊東市内では流言の発生と、行政機関相互の連絡不備という、2つの情報問題が顕在化した。これらは、まったく予期しなかった事態の出現に対する、住民の強い不安と防災担当者の狼狽を物語るものといえるだろう。

(「静岡新聞」1989年7月13日朝刊)

発端は一本の問い合わせ電話

漁民ら
現場調査

異常は確認できず

情報伝達の難しさを浮き彫り

[illegible]

は全く見がたで、周囲の
山々が現著地であつた
も變化はなかつた。水層
五尺の水層に二三度傾斜
し、念のため前後、地面
が強かつた同市津沖へお
きしたが、同じ結果だつた。

「十一日午前にも手取川
近に行つたが、この時あま
はなかつた。今午七時面
におかしうこの意はじし
と。」田中氏云々

同日開成支部によらず、
津の騒動は、十一日突如
再び甘藷畑から始まつた。
い合ひの鐘が右手邊なる
池を越え、實つていとお水
たんの内陸で田舎カラリ
となつた。やがてやまやま
ふれたらう。

この間全甘藷畑三二
は、同本部から眞狩野に
経由して東地部が眞狩に
なり、眞狩部が眞藪の掛に

地殻のゆがみや地磁気観測

国土地理院など
測量班が伊東入り

伊予市地蔵の情景が、わ
り、層層と上り、熱帯海
沖の初と伊予市の距離
を測り、地蔵のゆきなど
を調べるため伊予市に上
る。船着く、十四日か、地
の奥に入る。
「伊予市地蔵」
動脈の井井洋、一助手、以三人
のスタッフ、十二日、伊
予の地蔵を調べるため伊
予市に上る。

海底地震計で
27日まで観測
大規模地震、伊予市に上る

スタッフは牧師館の院長
佐竹九人、十三日は伊東
市の小山主、田中伊豆町
の樂山主、岡町源水主、昨午
二日に設置した三角の状況
土、日かなき特約の關係者、
「分析」に入、海庭町
地蔵の寶藏殿の田三九
設置、海庭町林を二
日に清水遊藝場の用
「あまき」の翌で回収
「分析」に入、海庭町

27日まで観測

は海底の土下動、水変動
じめ水中の音を自動的に記
述する。今夏七日に設け
ていたため、九日のM₀
の地震、十一日夜の火山
による激動の分析に成
果を得ている。

雄針本体は直径四十
ガラム、球形の體で、
テフロン・ター、水注
くらを収納している。
をプラスチックケー
スめ、鉄製のフレームに据
置られゆる、設置後は
連分の記録を自動的に記
述し、電線を通じて海
面上から音響機を送り
ノーカー（費）を外し、

心算うに道を走る、めづるは江戸伊豆市静海にて

心腹を以てて腹を腹しぬるを腹らるゝ由東土神祇圖にて

5 海底噴火の発生と情報問題

そして、事態はまた急速に展開する。

7月13日午後6時33分頃、伊東市沖合およそ3キロ付近、水深100メートルの地点において、海底噴火が発生したのである。またその後も6時40分から45分のあいだに、灰黒色の噴煙をともなう噴火が総計6回続いた。

多くの住民が語るところでは、この噴火が起こる直前、下から突き上げるような揺れとともに、海の方からドーンという鳴動が1、2度あったという。驚いた市民が外に飛び出してもなく、噴火が起こった。

幸いにしてこれらの噴火は小規模だったため、人的・物的被害はゼロだったが、噴火直後には、津波の来襲を心配した沿岸沿いの住民154人が、東小学校（104人）・西小学校（40人）など6ヶ所の避難所に避難したほか、公的な避難所ではないが近くの宝尊寺にも124人が避難し、さらに翌14日以降には、主に海岸地域に住む寝たきり老人計19名が、市立老人ホーム・伊豆高原十字の園・城ヶ崎いこいの家の3ヶ所に収容されている（伊東市役所資料より）（表4）。

また噴火直後、伊東市教育委員会では緊急指示を発し、翌14日は市内の幼稚園、小学校、および中学校を臨時休校にすることを決定した。この休校措置は、最終的には7月19日まで延長され、20日の一斉終業式を経てそのまま夏休みにはいることになった。こうした措置もあったため、いざという事態を懸念して県内・県外各地に「一時疎開」する児童も少なくなく、噴火4日後の避難状況を見ると、全部で8,095人の小・中学生の10.2%にあたる828人が一時疎開しており、そのうち655人が伊東市外への疎開となっている（伊東市教育委員会資料より）（表5）。なお、今回の災害における教育委員会の対応については、後にくわしく述べることにしたい。

さて、この海底噴火が発生した13日頃にも、災害情報にかかわる情報問題がいくつか発生した。

その一つは、電話の輻輳である。これは決して珍しいものではなく、災害時にはしばしば発生しているが、今回の噴火さきでも、市内・市外とも電話がかかりにくくなった。噴火直後の通話状態を報じた新聞記事によれば、13日夜の伊東沖噴火が報道された直後から深夜まで、伊東市に向かう市外通話がほとんど不通になり、伊東市と市外局番が同じ熱海、熱川、天城高原、稲取もかなりの輻輳を経験した。また、これにともないファックスも使用できなくなった。さらに、噴火直後は伊東から市外へかける電話も、市内同士の電話も輻輳し、午後9時40分頃にはこれがピークに達して、一時的にパンク状態になったという（「静岡新聞」7月14日朝刊より）。このときの電話は25%から95%まで規制がかかり、午後11時10分、ようやく規制解除となった（表6）。

表4 伊東沖海底噴火時の市民の避難状況（伊東市役所提供資料より）

○ 一般市民の避難状況

(1) 公共施設

ア. 一時避難

施設名 \ 月 日	7 / 9	7 / 13	7 / 14	7 / 15	7 / 16	7 / 17	7 / 18	7 / 19	7 / 20	7 / 21	7 / 22	7 / 23	7 / 24	計
宇佐美小学校	0	2	0	0	0	0	0							2
宇佐美中学校	0	2	0	12	0	0	0							14
宇佐美コミュニティ	14	2	0	14	3	0	0	0	0	0	0	0	0	33
西小学校	80	40	35	41	5	0	0	0	0	0	0	0	0	213
東小学校	33	104	7	38	5	3	3	3	0	1	0	0	0	197
競輪場	0	4	13	1	6	8	8							18
市営住宅	3													3
計	130	154	55	106	20	8	3	3	0	1	0	0	0	480

イ. 市営住宅仮転居 11世帯 34人

（＊合成の数字が合わないが原表のままにしておく）

(2) 一般施設

ア. 一般避難

施設名 \ 月 日	7 / 9	7 / 13	7 / 14	7 / 15	7 / 16	7 / 17	7 / 18	7 / 19	7 / 20	7 / 21	7 / 22	7 / 23	7 / 24	計
宝 専 寺	—	124	105	31	31	5	0							296

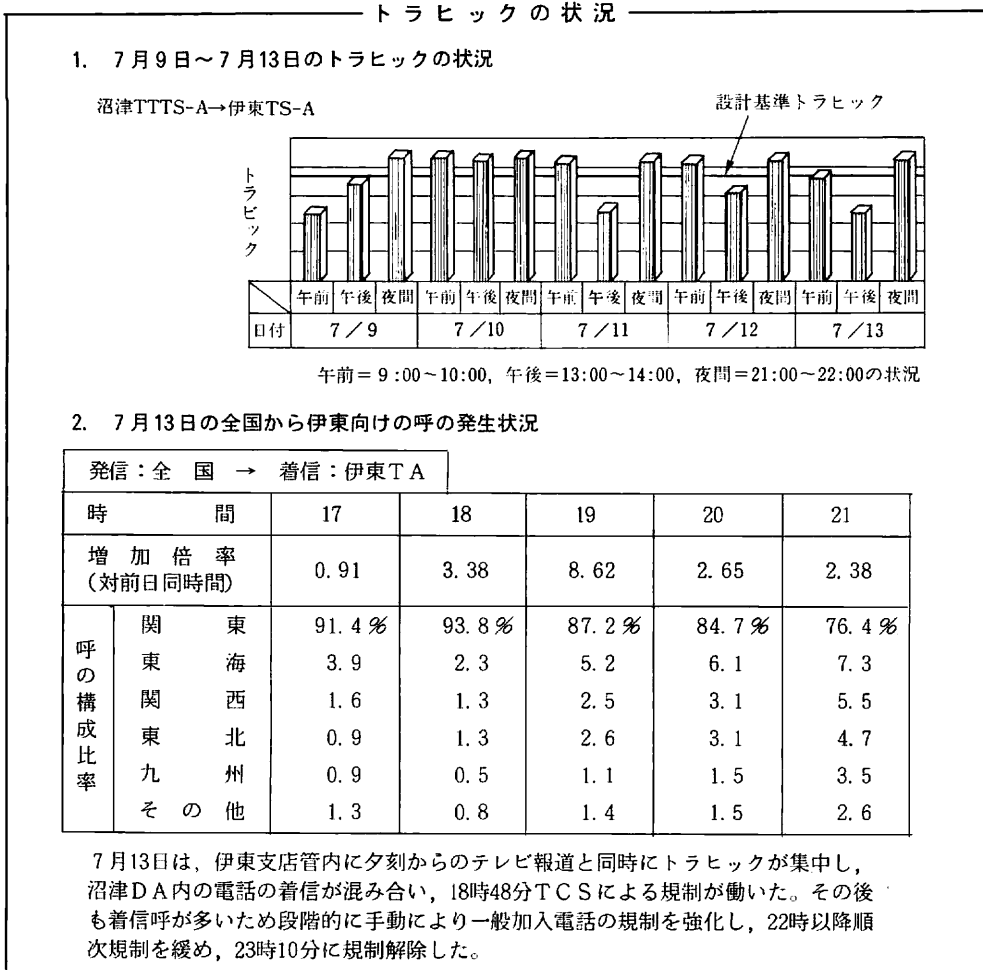
2. 寝たきり老人の避難状況

施設名 \ 月 日	7 / 14	7 / 15	7 / 16	7 / 17	7 / 18	7 / 19	7 / 20	7 / 21	7 / 22	7 / 23	7 / 24	7 / 25	7 / 26	計
市立老人ホーム		2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14
伊豆高原十字の園	2	4	6	6	6	6	8	8	8	8	9	8	5	84
城ヶ崎いこいの園		4	5	6	8	8	8	9	9	9	9	9	5	89
計	2	10	13	13	15	15	17	18	18	18	19	18	11	187

表5 伊東市内の公立小・中学校児童・生徒の避難状況(海底噴火4日後の状況)
(伊東市教育委員会編『手石海丘』より)

学 校 名		在 籍 A 人	避 難 内 訳				割 合 (%) B ÷ A	市 外 C イ+ウ	割 合 (%) C ÷ A	連 絡 取れない
			市内 ア	県内 イ	県外 ウ	計B				
小 学 校	東 小	688	21	25	36	82	11.9	61	8.9	3
	西 小	736	61	49	63	173	23.5	112	15.2	18
	川 奈 小	131	9	6	7	22	16.8	13	9.9	0
	大 池 小	651	1	4	17	22	3.4	21	3.2	0
	宇佐美小	817	39	111	117	267	32.7	228	27.9	36
	八幡野小	408	1	4	9	14	3.4	13	3.2	0
	富 戸 小	192	0	0	0	0	0	0	0	0
	池 小	99	0	0	0	0	0	0	0	0
	南 小	791	1	14	17	32	4.0	31	3.9	0
	旭 小	451	1	13	15	29	6.4	28	6.2	4
	小学校計	4,964	134	226	281	641	12.9	507	10.2	61
中 学 校	南 中	1,143	9	22	20	51	4.5	42	3.7	0
	北 中	470	24	9	12	45	9.6	21	4.5	0
	宇佐美中	508	2	25	40	67	13.2	65	12.8	6
	対 島 中	451	1	2	3	6	1.3	5	1.1	0
	門 野 中	560	3	6	9	18	3.2	15	2.7	0
	中学校計	3,132	39	64	84	187	6.0	148	4.7	6
小・中合計		8,095	173	290	365	828	10.2	655	8.1	67

表6 伊東沖海底噴火時の電話の状況（NTT提供資料）



噴火当日に顕在化したもう一つの情報問題は、いわば危機管理にかかわるもので、政府首脳に対する噴火の第一報が大幅に遅れたことである。このことを報じた新聞記事を、以下にあげておく。

【もろい官邸危機管理 携帯電話鳴らず】

不気味な地鳴りを伴って伊東沖でマグマが暴れ出した13日夜、先進国首脳会議（アルシュサミット）出席中の宇野首相の臨時代理として、国政の最高責任者となっていた塩川官房長官は首都を遠く離れた沖縄にいた。

参院選に出馬中の自派（阿部派）の新人が開く総決起大会に出席するための「党務出張」

だ。噴火直後、官邸で留守を預かっていた2人の秘書官（外務、大蔵両省から出向中）が緊急連絡を取ろうとしたが、長官の自動車電話は応答なし。既に車を降り、約100メートル離れた大会会場の公園内の特設テントに入っていた長官が噴火の事実を知ったのは、発生後50分近くたった午後7時20分すぎ。しかも同行記者団から第一報を聞くお粗末さだった。

防災は法的（災害対策基本法）には国土庁の担当分野だが、大規模な災害、事故は「危機管理」の観点から首相官邸が関係省庁を指揮する場面も出てくる。

昭和61年11月に起きた伊豆大島・三原山の大噴火では、後藤田官房長官（当時）ら官僚サイドが積極的に動き、島民離島用の救助船の手配を急がせるなど手際の良さを見せた。国土庁は、官邸の『過剰介入』に不快感を示したが、島民13,000人の脱出作戦がうまくいったことで、政府は面目を保てたことも事実だった。

ところが、昨年7月の潜水艦なだしおと釣り船の衝突事故では、列車で軽井沢に向かって竹下首相、小淵官房長官（いずれも当時）と官邸の連絡が取れず、多数の行方不明者が出ていることを知ったのは発生から約3時間後という事態が起きた。

危機管理体制の不備を指摘された官邸は、首相、官房長官らに随行する秘書官に携帯電話を常に持たせるなど機器の面でいくつかの改善策を打ち出した。

今回も、官房長官に随行していた秘書官（政務担当）はアタッシュケースに携帯電話を入れて持ち歩いていたが、スイッチを切っていたため、結局この電話は鳴らなかった。

「スイッチを入れっぱなしにしていれば、すぐにバッテリーが切れてしまうので・・・」と関係者が認めるように、形式だけの「緊急連絡体制」という印象はぬぐえない】（「静岡新聞」7月16日朝刊より）

昭和63年の「なだしお事件」を契機に導入した携帯電話が、今回の事件では役に立たなかったというわけだ。

しかし、この時期の情報問題としてもっとも大きかったのは、気象庁と伊東市役所との連絡不備ということであろう。これもまた、新聞記事を引用すると、

【的確な情報なく伊東市苦慮 異変に助言求めたが・・・気象庁「テレビみて」

海底噴火から3日目の15日、伊豆東沖は小康状態が続き表面上は平静さを保った。しかし、依然として火山性の連続微動や地震が観測されているほか、手石島北の海面で気泡が確認されるなど、見えないマグマ活動への市民の不安は消えていない。また、市対策本部が夕方、同報無線で流した津波に関する注意の呼び掛けにも市民からの問い合わせが殺到するなど、緊張の意図は張りつめたまま。情報入手に手間取り市も苛立ちをつのらせ、様々な難題が徐々に浮かび上がってきた。

伊東市で最初の火山性微動が発生した11日夜、助言を求めた同市と市消防本部に対し、気象庁が「テレビを見てほしい」と答えていたことが15日明らかになった。その後も事態は改善されず、同市災害対策本部（本部長・芹沢昭三市長）は刻々と変化する情勢の中で、避難の時期を決める的確な情報も得られず苦慮している。

図6 気象庁—伊東市の情報連絡の不備を報じる新聞記事
 (「静岡新聞」1989年7月18日朝刊)



群発地震発生後、同市は緊張事態に備えるため前兆のデータを欲しいーと同庁とのホットラインを求めているが、「常にテレビニュースより遅い連絡」（同市）が県を通じて流されただけだった。

宮崎三輝市助役によると、11日、一連の群発地震と異なる鳴動について尋ねるため同市が県を通じて気象庁に連絡を取った。その結果、同庁は「現在検討中。間もなく結果がでる。テレビで記者会見をするので見て欲しい」と回答してきた。一方、市消防本部も同時刻、直接、同庁に問い合わせたが、同じ回答だったーと齊藤人嗣消防長は話している。

海底火山の噴火した13日、同市鎌田に設置した気象庁の高感度地震計は午後6時25分ごろから揺れを記録し始め、同34分、噴火とみられる大きな揺れを観測した。この時、同庁が県を通じて噴火の情報を流したのは同50分ごろだったという。「これでは、避難措置の判断材料どころではない。この状態では今後、現場の勘だけで避難命令を出さざるをえない」と宮崎助役は話している。

芹沢市長は「気象庁からの情報が直に入っていない状態では噴火に対応できるわけがない。一番欲しいのは的確な情報。避難命令などの判断をするのは地元の自治体であり、住民の安全を守る義務があるのも、避難の結果に責任を持つのもわれわれなのだから」といふことを隠さない】（「静岡新聞」7月15日朝刊）(図6)

このように、災害情報に関して一般市民なみの扱いを受けた伊東市役所では、的確な防災対策をとるために、情報を速やかに入手することが必要だとして、気象庁に働きかけ、16日午後、気象庁の情報を直接受信できるファックスを、庁舎内に設置した。気象庁と地方自治体が直接情報をやりとりする「ホットライン」を結んだのは、これが初めてのことだという。ただし、このホットラインはファックスに限定され、電話回線が結ばれていないため情報内容の確認に難点が残った。また17日にはさっそく、微動に関する情報が伊東市に送られたが、解説やコメントがまったくない4枚の微動グラフなど、気象庁記者会見用の生データだったため、市の職員にはデータの意味がほとんどわからなかった。そしてその直後、「伊豆東方沖で微動観測」というニュースのテロップを見た市民から市役所に問い合わせが集中し、「避難しなくて大丈夫か」などの問い合わせが10分間で15本にのぼったということである（「静岡新聞」7月18日朝刊より）。

6 市民の不安

ここで、話をふたたび噴火当時に戻そう。

噴火から一夜明けた7月14日にも、網代で4日ぶりに震度3の地震が記録されたり、連続微動が続いたりした。またこの日、火山噴火予知連絡会が統一見解を出し、「噴火活動は、今後も同じ場所で起こる可能性が高いと思われるが、噴火地点が異動する可能性も否定できない。今後の火山活動の推移については、厳重な警戒が必要である」と指摘したため、市当局および住民の不安はますます高まるばかりだった。たとえば14日、伊東市災害対策本部は

噴火にともなう津波をとくに懸念し、津波の心配がある新井、湯川、松原など6地区の84自主防災会長にあてて、「津波が予想される海底噴火のあった場合はただちに広報連絡するので火の元に注意し、指定避難場所に避難してください」という文書を配付した。一方、海岸沿いの住民の津波不安も相当に高く、松原地区商店街の16の自主防災会では、市が決められている避難場所が遠距離にあるため、独自の緊急避難場所として5ヶ所を決定している。そしてこの頃、海底噴火を示す噴煙を「目撃した」と称する住民も続出した。もちろんこれは、恐怖や不安を背景とした錯覚にほかならない。

この時期の市民の不安を反映する「目撃談」には、たとえば次のようなものがあった。

【伊東に地震雲？「関係なし！」】

再噴火や地震への不安が高まる伊東市内で14日午後、うろこ状の雲が観測され、住民らは「地震の前触れでは」と緊張した。

同市和田一丁目の理容店経営弓田勝利さん（50）は「群発地震が続いている間、空はいつもどんよりしていた。久し振りの青空になったと思って見上げたら不気味な雲。何もなければいいが」と不安げ。

一方、網代測候所にも「地震雲ではないか」との問い合わせが入ったが、同測候所は「これはいわゆるうろこ雲。地震とは何の関係ありません」と否定した】（「静岡新聞」7月14日夕刊）

これは、うろこ雲を地震雲と見誤ったもの。また次のような記事もみられる。

【「噴火」実は発煙筒 海辺の住民ら一時騒然】

海底火山噴火の不安に包まれている伊東市で15日、海上保安庁の調査ヘリが海上に投下した発煙筒の煙が海底噴火と誤解され、海辺にいた住民らは一時騒然となった。

発煙筒が落とされたのは同日午後3時50分、同市宇佐美の海岸で海の様子を見ていた住民らは大慌て。「白い煙が立ち上った」「赤い火のようなものが見えた」などの話が伝わり、消防車も出動した。

発煙筒使用の連絡が海保から同市に入ったのは投下の直前。広報窓口の市秘書課に伝わったのは午後4時を回っており、同課職員は「もっと早く知らせられたはずなのに」と連絡の遅さにため息を漏らした。】（「静岡新聞」7月15日朝刊）

これは、海上保安庁の発煙筒を噴火と間違ったもの。さらに、デマとおぼしき次のような情報もあった。

【「現場海域に火炎見えた」海底噴火で怪情報】

海底火山の噴火をめぐる、伊東市内に怪情報やデマが流布されていることが14日午前零時過ぎ、同市の記者会見で明らかになった。

同市によると、市民の間に流れた怪情報は「噴煙の上がった現場海域で火炎が見えた」というもの。該当する情報は「航空自衛団」と名乗る者から13日午後8時54分、同市生活安全課に届いた。「高度150メートルから見たところ中心部にやや小さい火を確認した。風は岸に向かって吹いている。このことを市から各報道陣に発表してほしい」という内容

だった。不審に思った同市は海上保安庁や航空自衛隊に問い合わせたところ、悪質なデマとわかった】（「静岡新聞」7月14日夕刊）

要するに、市民は再噴火を懸念して不安のただなかにあり、何かのきっかけでその不安が行動面に噴出しうる「過敏な」状態になっていた。そしてこのことが、次に述べる「津波情報さわぎ」のもっとも大きな背景となったのである。

7 「津波情報さわぎ」の発生

この出来事は、海底噴火から2日経過した7月15日午後4時に発生したもので、海底火山の再噴火による津波の発生を懸念した伊東市が、住民に注意を喚起するため、市内各所に設置してある同報無線を通じて、「海底火山の活動により津波の心配があります。海岸付近のみなさん、万一の避難に備え十分点検しておきましょう」という情報を流したところ、少なからぬ住民がこれを「いますぐ津波がくる」と誤解して、市役所に問い合わせたり、避難所に避難したりしたというものである。

まず、「朝日新聞」の記事を以下に引用して、事態のくわしい経緯を紹介しておこう。

【「津波放送」思わぬ騒動 防災無線、市民ギョッ 「万一に備えた心構え」が裏目 電話へ、避難へ走る

静岡県伊東市沖での海底噴火から3日目の15日午後4時過ぎ、同市の防災無線を使った一斉放送で、「海底火山の活動により、津波の心配があります。海岸付近の皆さんは万一の避難に備え、十分点検しておきましょう」という「津波情報」が4回市内に流された。このため、市役所や伊東署に市民からの問い合わせ電話が殺到し、避難騒ぎも出た。「海面から5メートルのところで反応があった」という情報や、噴火海域での発煙筒の煙に「爆発か」と緊張した後の放送だけに、市民の不安が一気に高まったらしい。

同市のこの広報はこれまでも毎日朝夕2回行われ、学校の休校のお知らせなどをしていた。しかし、この日午前8時40分の放送では、「海底噴火の危険が続いています。ラジオ、テレビ、市の広報などの情報に十分注意してください」という内容。そして夕方の放送では、さらにエスカレートした内容となった。

放送直後から市役所の電話が、ひっきりなしに。内容は、「いますぐ避難したほうがいいのか」「爆発の確率は何パーセントぐらいあるのか」「自分の家のあたりは、津波は大丈夫か」などで、電話は、放送後1時間半の午後5時30分までに、156件を数えた。伊東署にも、「みんなはもう避難しているのか」など、同様の電話が数件あった。市や警察は、「避難命令が出たという事実はない」「あくまでも、万一に備えての心構えを呼びかけた」などと説明に追われた。

放送は、女性の声で、ごくゆっくりした調子だった。「津波の心配が・・・」まできいたところで、とくに海岸に近い低地に住む人たちが、今にも津波がくるように受け取り、総立ちになったらしい。

(「朝日新聞」1989年7月16日朝刊)

「火の噴火は？」火山の活動は

「万一に備えた心構え」が裏目

電話へ避難へ走る



市の広報放送で週回してきた人たち＝15
日午後7時20分、静岡県伊東市の東小で

[illegible]

は千坪に位、雁足山も同様に千坪に位、伊豆半島の東方に分布する成火山の幾は一四割の活動期にて其れるとされる。これに火成岩の田代北湖道

一般時には大きな火口で、

・ 雄偉大子殿寺跡の窟窟

・ 噴火場所を動くや伊豆大

[illegible]

あるだろう。しかし、異なる場所での噴火の場合は地震を伴い地震の活動があるはず」と今後、この疑問がいくらか読めるようになったことを祈願した。

う」と落ち替かない様子。

宇佐野船近くの大崎地区内では、放浪から間もなく、地区延長から一大崎の水位があがって来たから逃げように」との連絡が駆け通り、十数人が宇佐美

宇部興産の高級コンクリート住宅

ウベハウス

住宅事業部 ☎ 03-344-2941 代

その故郷が荒れた直後から、
開府の二つ、伊勢市に須賀の岡
市立小中学校は、市民が久々大
に集いの始め、午後六時半まで
には十五人になった。源兵衛も
岡田・田村に往々に東野町で
事と成ては三二回、大木三
匹を連れ、夜路寺・奥津にて
来た。「あの山脈は昔は海に
つながっていたんだ」といって
いたが、お茶屋にならなかつた

[illegible]

この放送が流れた直後から避難所の一つ、伊東市玖須美の同市立東小学校には、市民が次々と集まり始め、午後6時半過ぎには15人になった。海沿いの同市和田町に住む調理師Kさん（38）は妻と一緒に、犬3匹を連れ、放送終了直後にやって来た。「きのうまでは我慢してきたが、放送を聞いて逃げ出すことにした。放送でいうぐらいだから本当に危ないんだろう」と落ち着かない様子・・・（中略）

この広報文は、市企画調整部の広報担当者が毎日起案し、最終的には災害対策副本部長の宮崎三輝助役の決裁を受けて放送される。広報担当者らの話を総合すると、「津波」の注意を流すことになったきっかけは午前11時半ごろ、「伊東沖の海底が95メートルも隆起か」という、海上保安庁情報が県経由のファックスで市に入ったこと。

広報担当者は「広報文は、保安庁情報を重視して作った」と話している。しかし、午後1時半、この隆起情報は、「気泡に反応し、海底と見誤ったらしい」と訂正され、杉山俊朗・県防災局長が芹沢市長に伝えた、という。しかし、この情報は宮崎助役には伝わらないまま、放送が流れてしまった。

午後6時過ぎから、市役所で記者会見した宮崎助役は、「市民からいつも同じ放送だという指摘もあり、けさの定時放送から、内容をもっと工夫することにした。夕方の放送は、海上保安庁情報も参考にしたが、あくまでも参考情報のつもりだった。いずれにせよ放送内容が、市民から誤解、心配をいただいたということは、謙虚に反省している」と述べた】（「朝日新聞」7月16日朝刊）（図7）

要するにこれは、津波に注意しなさいという、一般的な注意を喚起しようとした情報が、いまずぐ津波がくるという、緊急事態を告げる情報として受けとられてしまった出来事である。

次に、われわれが海底噴火の後に実施したアンケート調査から、このときの状況を再現してみたい（アンケート調査の詳細は2章で触れる）。

最初に、図8、図9、図10を見ていただきたい。これは、このとき混乱がもっともいじめるしかったといわれる伊東市宇佐美地区の住民を対象に、津波情報の情報源とそれに対する心理的・行動的反応を調べたものである。

まず、この津波情報の情報源をみると、「当日、津波の話は聞かなかった」という2割を除いて、「市の防災無線から聞いた」人が39.3%と最も多く、次いで、「家族、友人、知人から聞いた」（22.8%）、「CATVの防災放送で知った」（14.1%）と続いていた（伊東市のCATVは日本テレビの伊東支局もかねた株式会社組織であるが、災害発生時には市からの広報を放送しており、その意味で行政の情報伝達網を補完する役割をもっている）。

また、津波情報を聞いたときの心理的反応としては、「いまずぐ津波がやってくると思って、非常に不安になった」人は6.1%にすぎなかったが、「ひょっとしたら津波がくるかもしれないと思って、かなり不安になった」人は30.0%もあり、これを合計すればほぼ3人に1人が津波情報に接して不安を感じたことになる。

図8 津波情報の情報源 (N = 859人) (複数回答)

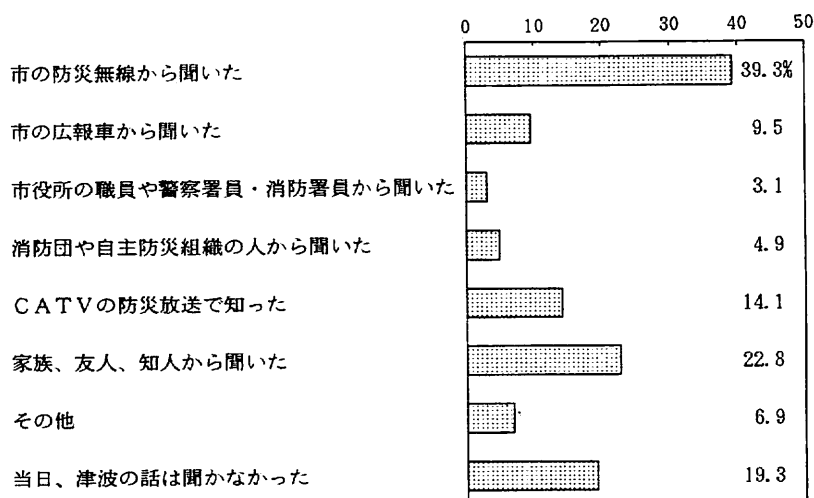


図9 津波情報に対する心理的反応 (N = 859人)

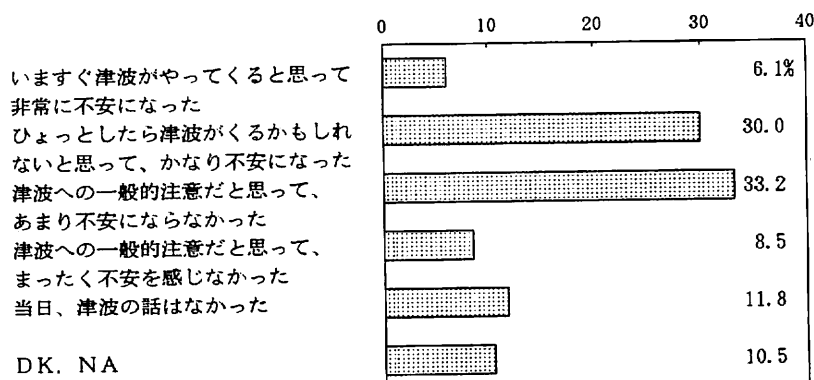
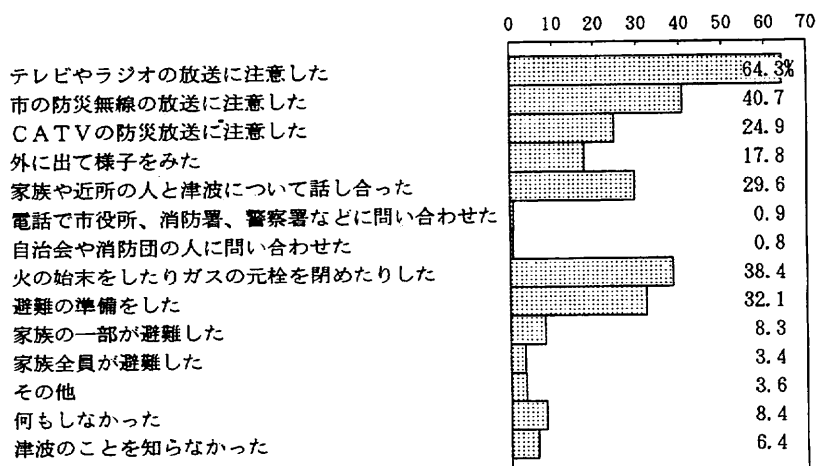


図10 津波情報に対する行動的反応 (N = 859人) (複数回答)



次に、津波情報を聞いたときの住民の行動をみると、「何もしなかった」人は8.4 %ときわめて少なく、多くの住民が何らかの対応行動をとったことがわかる。対応行動の内容としては、情報確認行動が圧倒的に多かった。つまり、「テレビやラジオの放送に注意した」（64.3%）というマスコミ情報の確認、「市の防災無線の放送に注意した」（40.7%）、「CATVの防災放送に注意した」（24.9%）など行政情報の確認、「家族や近所の人と津波について話し合った」（29.6%）というプライベートなネットワークからの確認などがきわめて多かったが、これは、生命・財産にかかわる重大な情報に接しても、多くの人々はすぐに避難などの対応行動をするのではなく、まずこの情報が本当かどうか確認する、といういままでの災害社会学の常識とも一致している。

しかし一方、少数とはいえ津波情報を聞いて避難した住民がいることも、注目に値する。この事実は、前回引用した「朝日新聞」にくわしく掲載されており、また「読売新聞」にも「毎日新聞」にも記されているが、宇佐美地区の住民に対するこのアンケート調査では、

表7. 津波情報への対応行動（パーセンテージと世帯数の実数）
（「伊東市宇佐美地区」）

	%	実数（世帯）
テレビやラジオの放送に注意した	64.3	2315
市の防災無線の放送に注意した	40.7	1466
CATVの防災放送に注意した	24.9	897
外に出て様子をみた	17.8	641
家族や近所の人と津波について話し合った	29.6	1066
電話で市役所、消防署、警察署などに問い合わせた	0.9	32
自治会や消防団の人に問い合わせた	0.8	29
火の始末をしったりガスの元栓を閉めたりした	38.4	1383
避難の準備をした	32.1	1156
家族の一部が避難した	8.3	299
家族全員が避難した	3.4	122
その他	3.6	130
何もしなかった	8.4	302
津波のことを知らなかった	6.4	230

「家族の一部が避難した」という回答が8.3%、「家族全員が避難した」が3.4%となっていた。これを実数になおすと、調査実施時点での宇佐美地区の世帯数は3,601だから、家族の一部が避難した世帯は299、家族全員が避難した世帯は122となり、これを合計すると、宇佐美地区だけで421世帯が津波情報を聞いて避難した、という計算になる。

また、実際の避難とは別に、「避難の準備をした」人が32.1%（これを実数になおすと1,156世帯となる）もいた。これらの人々は、もう少しショッキングな条件が重なれば、実際に避難したかもしれない「潜在的避難者」とも考えられるわけで、ここでも津波情報のインパクトが大きかったことがうかがえるだろう。なお、津波情報に対する宇佐美地区住民の対応行動率を、世帯数の実数になおしたものを表7にあげておく。

8 「余震情報パニック」と「避難準備指示パニック」

この津波情報の一件を一般化していえば、行政機関の流した災害情報が、住民に誤解されてある種の混乱が生じてしまったケースと考えられる。これときわめてよく似た出来事は、昭和53年1月14日の伊豆大島近海地震や、59年9月14日の長野県西部地震のときにも発生しており、こうしたケースは決して珍しいものではないといえよう。

伊豆大島近海地震のさいには、地震4日後の1月18日、一般に「余震情報パニック」といわれている出来事が発生した。

伊豆大島近海地震は静岡県一帯に大きな被害を与えたが、この地震の特長の一つは余震活動がきわめて活発だったことである。そこで、気象庁、地震予知連絡会、および国の災害対策本部がそれぞれ余震についての見通しを発表し、これに続いて静岡県庁も18日午後1時30分頃、県下の市町村に向けて余震情報を発表した。その内容は、伊豆大島近海地震の余震はまだ続く可能性があること、最悪の場合はM6（マグニチュード6）の程度になることなどであったが、この情報が、テレビ・ラジオや自主防災組織を通じて住民に伝えられるうちさまざまに変容し、いわば流言となって、住民のあいだに避難さわぎや買い出しさわぎなどの混乱を引き起こしたのである。

このような混乱が生じたもっとも大きな理由は、県の発表文のなかの「最悪の場合には（余震は）M6程度になる」という表現だった。周知のようにこのM（マグニチュード）は地震の規模を表わす単位であるが、当時の静岡県民の中にはこの言葉の意味がわからなかった人が少なくなく、これが、「震度6」や「午後6時（P.M.6）」と誤解され、「もうすぐ震度6の地震がくる」とか「午後6時頃に大地震がある」などという形で広がっていったと考えられる。

また、長野県西部地震のさいにも、地震3日後の9月17日、「避難準備指示パニック」と呼ばれる出来事が発生した。

長野県西部地震では、長野県王滝村の被害がとくにいちじるしく、各地で山崩れが発生して29名もの死者が生じた。またこの山崩れのため、近くを流れる王滝川の上流がせき止めら

れて、天然ダムが生まれてしまった。そして、このダムが決壊すれば下流の人家が被害を受けるため、王滝村では毎日自衛隊のヘリコプターに同乗して、天然ダムの様子を観察していた。

この「避難準備指示パニック」が起こった17日は、たまたま村役場職員は同乗していなかったが、乗っていた自衛隊員がダムをみると様子が違っているように思われたので、このことを村の災害対策本部に報告した。災害対策本部はこれを聞いて、ヘリコプターで村役場職員にふたたび確認させることにしたが、そのあいだにもダムが決壊したら一大事と考えた。だが、まだ確実な情報でないから避難命令を出すことを躊躇したが、一方、何も出さずに災害が起こることも望ましくないので、窮余の策として、住民に対し「重大な災害が起こるおそれがあるので避難の準備をしてください」という「避難準備命令」を出したのである。しかし、これを聞いた住民は、避難準備指示とはいったい何か、また具体的に何をすればよいのかかわらず、その多くが避難命令と誤解して、一部地域で住民が一斉に避難するなどの混乱が起こってしまった。

図11は、「余震情報パニック」のときもっとも混乱が激しかったといわれる静岡県伊豆地方の住民の対応行動を、また図12は、「避難準備指示パニック」のときの王滝村住民の対応行動を示したものである。

伊東市の津波情報の場合と同様、どちらのケースでも、情報確認行動がもっとも多くなっていることがわかるが、一方、住民の避難率は伊豆地方が3.8%，王滝村が18.8%であり、伊東市はその中間（ $8.3+3.4=11.7\%$ ）となっている。また避難準備をみると、伊豆地方は「非常持出品を準備した」が33.2%，王滝村は「避難の準備をした」が27.9%と、伊東市の場合（32.1%）とほぼ同様の結果であった。

図11 「余震情報パニック」のさいの住民の対応行動（伊豆地方）
（科学技術庁『東海地域における地震予知に関する情報システムについての調査研究報告書』昭和53年より）

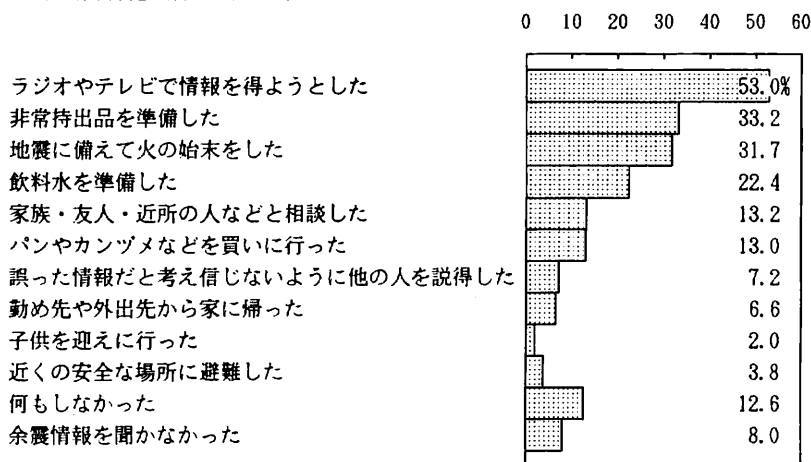
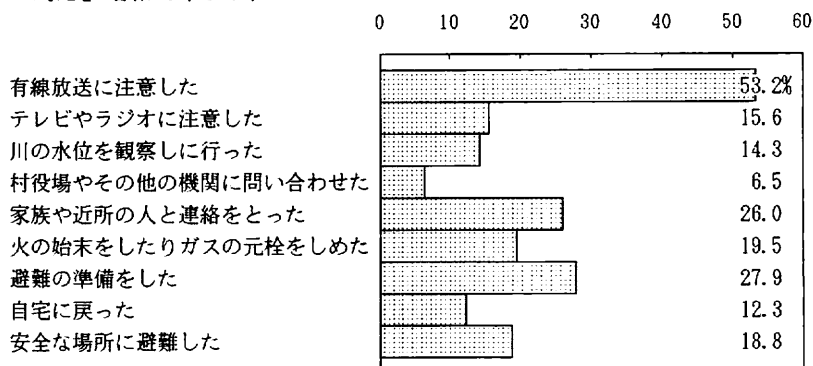


図12 「避難準備指示パニック」のさいの住民の対応行動（長野県王滝村）
（東京大学新聞研究所『1984年長野県西部地震における災害情報の伝達と対応』昭和60年より）



このように、いままで触れてきた3つの出来事は、その経緯（実際の災害の数日後に発生したこと、行政機関の災害情報が住民の誤解を招いたことなど）においても、また住民の対応行動（情報確認行動がもっとも多かったが、避難行動および避難準備行動も無視できぬ割合にのぼったことなど）においても、かなり共通する要素をもっているといえよう。

最後に、一言述べておきたいことがある。いままでわたしは、この3つのケースをかつつきで「パニック」と呼んできた。これは、これらの出来事が一般にそう呼ばれているが、わたしはそれをパニックとは考えていないことを意味している。

ここで本格的にパニック論議をする余裕はないが、パニックとはふつう、「群衆の統制のとれない避難行動、あるいはそれにとまなう社会的な大混乱」を意味しており、たとえば地震との関連でいうと、大地震発生時に地下街や地下鉄などで多数の人々が恐怖にかられて脱出するといった行動を意味している。いままで触れてきた3つのケースでは、情報確認という比較的冷静な行動が圧倒的に多く、また「火の始末をしたりガスの元栓を閉めた」など防災行動も少なくなかった。たしかに一部には、買い出しや避難・避難準備などもあり、その割合も決して小さいものでなかったが、買い出しや避難にとまなう大きな社会的混乱があったというのならともかく、たんに買い出しや避難が発生したからといって、それをパニックというのはあまり適切でないと思われる。これらのケースでは、住民の不安も大きく局部的には混乱があったのは間違いないことを考えても、せいぜい「余震情報さわぎ」、「避難準備指示さわぎや」、「津波情報さわぎ」くらいが適切なのではなかろうか。

9 「津波情報さわぎ」の分析

さて次に、伊東市の津波情報がどうして先に述べたような心理的、行動的反応を生み出したのか、その理由について考えてみたい。結論から先にいうと、

①連続微動→海底噴火という、かつて経験したことのない事態に遭遇した伊東市民の不安

がきわめて大きかったこと

②津波情報の表現自体のなかに、いまずぐにも津波がくるといふ緊急情報と誤解される要素があったこと

③同報無線の放送がよく聞き取れなかったため、噴火、津波、避難などという言葉断片的に耳にした住民が誤解してしまったこと

④当日は、海上保安庁の無人調査艇「マンボウ」が海底異常隆起のデータを送ってきたり（これは後に観測ミスと判明した）、海上保安庁が投下した発煙筒が噴火と誤解されるといふハプニングがあり、行政と住民の緊張が高まっていたこと

の4つがその主なものであろう。このうち、④はきわめて偶然的な要因であるが、①、②、③は、今後の防災対策の教訓になる一般的事実を含んでいるように思われるので、以下、この順序で解説を加えていこう。

まず第一に、津波情報がある種の混乱を生み出した背景には、伊東市民が海底噴火とそれにとまなう津波に対し、強い不安をもっていたという事実がある。

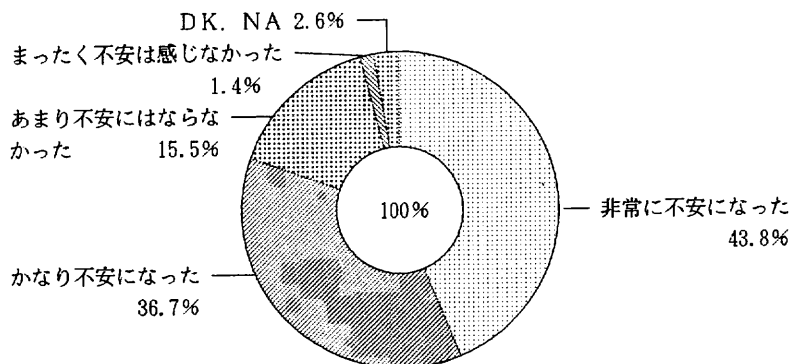
伊東市民は群発地震には比較的慣れていたが、今回は連続微動と海底噴火という初めての事態が起こり、いままでの経験則が成り立たなくなった。また噴火後、火山噴火予知連絡会が、「今後も（噴火は）同じ場所でおこる可能性が高いと思われるが、噴火地点が移動する可能性も否定できない」という統一見解を出したこともあって、市民の不安は急速につのっていった。そして、津波に対し独自の避難方法を考える自主防災組織も出てきたり、伊東市外に疎開する学童が急に増加するようになってきた。

連続微動、海底噴火、およびそれにとまなう津波への不安は、わたしたちのアンケート調査にもはっきり現れている。

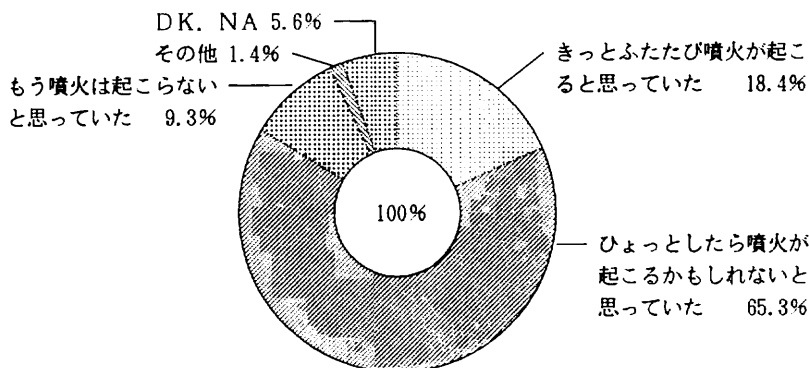
たとえば図13は、海底噴火時の宇佐美地区住民の不安度と、再噴火の予想を示したものである。これをみると、海底噴火の発生を知ったときに「非常に不安になった」人が43.8%、

図13 海底噴火時の不安度と再噴火の予想
(伊東市宇佐見地区 N = 859人)

1. 海底噴火時の不安度



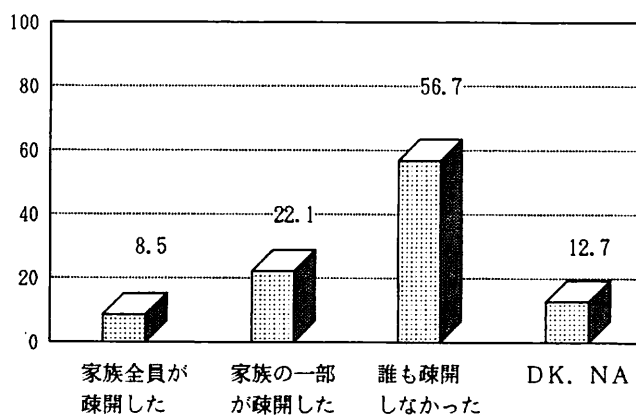
2. 再噴火の予想



「かなり不安になった」人が36.7%と、合わせて8割を超える住民が不安を感じており、また噴火後数日のあいだ、「きっとふたたび噴火が起きていると思っていた」人が18.4%、「ひょっとしたら噴火が起きるかもしれないと思っていた」人が65.3%と、これも8割以上の住民が再噴火を予想していたのである。

また、図14は、群発地震→連続微動→海底噴火という一連の出来事のなかで、自宅を離れて「疎開した」人の割合を示したものであるが、これをみると、「家族全員が疎開した」という回答が8.5%、「家族の一部が疎開した」が22.1%で、あわせて3割を超えている。このデータもまた、住民の不安が非常に高かったことを示すものといえよう。

図14 一連の出来事における疎開の有無
(伊東市宇佐見地区 N = 859人)



このように、海底噴火の後、多くの伊東市民は強い不安をもっており、何かのきっかけでその不安が行動面に噴出しうる「過敏な」状態になっていた。津波情報さわぎの背景には、まず第一に、こうした不安の遍在という条件があったのである。

津波情報さわぎの第二の理由は、津波情報の内容そのものにあった。

海底噴火の後、伊東市役所は再噴火にともなう津波の発生をとくに心配し、噴火翌日の14日、津波の懸念がある海岸沿いの6地区84自主防災会に対し、津波注意の文書を配付したりした。津波情報さわぎの発端となった15日午後4時の放送も、市役所の意図としては、津波への一般的な注意を喚起しようとするものであった。しかし、これを聞いた住民からは、単なる津波注意以上のものと受けとられる要素がいくつか存在していた。

たとえば、放送のなかに「津波」という言葉が登場したのは、この放送がはじめてであった。表8は、連続微動が発生する1日前の7月10日から、地震活動が鎮静化した7月19日までの同報無線放送の内容を示したものである。伊東市では、13日19時20分に海底噴火の告知をした後、14日6時30分と15日8時40分の2回にわたって、海底噴火の危険を放送したが、津波についてはまったく触れていなかった。そこで、15日午後4時に、同報無線からはじめ

表8. 伊東沖海底噴火前後の伊東市の同報無線放送の内容(伊東市提供資料より)

放送日時	放送内容
7月10日 8時43分 — 46分	・群発地震がつづいておりますが、今後のテレビなどの情報に気をつけてください。また、火の元にも十分注意してください。(繰り返し)
12日 8時40分 — 44分	・昨夜からの火山性微動については、テレビの情報に注意してください。火の元には十分気をつけてください。(2回くりかえし)
13日19時20分 — 30分	・先程の震動により、初島付近に異常が認められました。これからの行動については、冷静に対処してください。なお、火の元には気をつけながら、テレビ・ラジオの情報に注意してください。(繰り返し3回)
14日 6時30分 — 38分	・今日は、市内の幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校は休みになりました。また、昨日の海底噴火については引き続き警戒が必要です。テレビ・ラジオ等の情報に十分注意してください。(繰り返し2回)
14日17時30分 — 38分	・こちらは広報いとうです。明日も市内の幼稚園、保育園、小学校、中学校、高等学校は休みになります。なお、中体連の16日の試合はすべて中止します。(繰り返し3回)
15日 8時40分 — 44分	・こちらは広報いとうです。海底噴火の危険が続いております。ラジオ・テレビ・市の広報などの情報に十分注意してください。また、万一の避難に備えて身の回りの準備をしておきましょう。(繰り返し)
15日16時01分 — 10分 16時15分 — 17分	・こちらは広報いとうです。海底火山の活動により津波の心配があります。海岸付近のみなさん、万一の避難に備え、十分点検をしておきましょう。なお17日、18日、19日は、市内の保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校は休みになりました。(繰り返し3回)
16日 8時40分 — 44分 16時00分 — 04分	・こちらは広報いとうです。海底噴火の危険がつづいております。ラジオ・テレビ・市の広報などの情報に十分注意してください。また、万一の避難に備えて、身の回りの準備をしておきましょう。(繰り返し)
17日 8時40分 — 43分 16時00分 — 03分	・こちらは広報いとうです。このところ地震活動は静かですが、非常の場合に備えて、ラジオ・テレビ・市の広報などの情報に十分注意してください。また身の回りの点検もしておきましょう。(繰り返し)
18日16時00分	・今日は地震活動は静かでしたが、非常の場合に備えて、テレビ・ラジオ・市の広報に十分ご注意ください。また、身の回りの点検もしておきましょう。
19日 8時40分	・こちらは広報いとうです。市民の皆様おはようございます。今朝は地震活動も静かですが、非常の場合に備えて、テレビ・ラジオ・市の広報に十分ご注意ください。また、身の回りの点検もしておきましょう。

て津波という言葉聞き、また先に述べたような強い不安をもっていた住民のなかには、これを津波の来襲を告げる緊急情報と受けとる人が少なくなかったものと思われる。

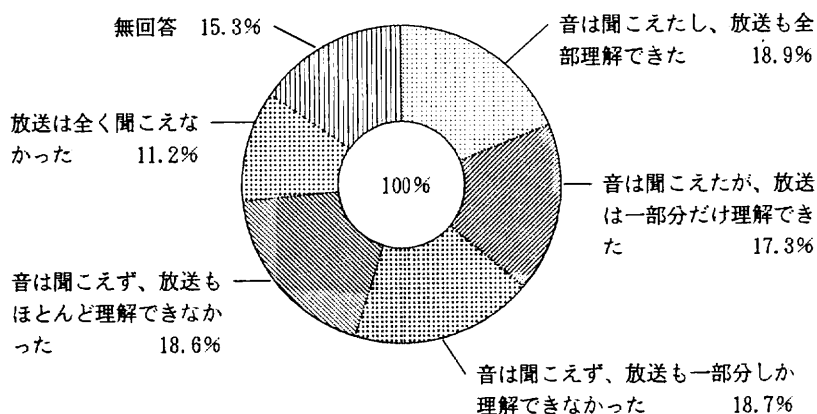
住民がこの放送を緊急情報として受けとったもう一つの理由は、放送文の内容そのものにあった。その核心は、「海底火山の活動により津波の心配があります」という部分である。伊東市では、津波に対する住民の注意を喚起するために、「海底火山が活動すれば、津波の心配があります（そしてその可能性は小さくありません）」というほどの意味で、これを放送したのであった。しかしこの表現は、「海底火山が活動しているから、津波の心配があります」というように、条件法ではなく、事実を告げる表現と受けとるほうがふつうである。つまりこの表現は、市の意図とは異なって解釈される危険が高く、現に、再噴火と津波に対し強い不安をもっていた住民は、これを一般的注意としてでなく、いまにも津波がくるという緊急情報として解釈してしまったのである。

先に触れた「余震情報パニック」や「避難準備指示パニック」と同様に、この「津波情報パニック」も、災害時の情報伝達の難しさを浮き彫りにしたものであり、また災害情報は、だれにでもわかりやすく、誤解の余地のない簡潔な表現を用いなければならないという、基本原則をあらためて認識させた出来事だったといえるだろう。

津波情報さわぎが起こった第三の理由は、第二の理由とやや矛盾するようだが、伊東市の同報無線があまりよく聞きとれなかったという事実にある。

図15をみていただきたい。これは、同報無線がどのくらい聞こえるかについてのアンケート調査の結果であるが、7月15日の津波情報さわぎのとき、防災無線放送がどのくらい聞こえたかをみると、「音はよく聞こえたし、放送内容もだいたい全部理解できた」人が18.9%、「音はよく聞こえたが、放送内容は一部分だけ理解できた」人が17.3%で、合計して36.2%の人しか放送がわからなかった。また、もっと一般的に、同報無線がふだんどのくらい聞こえるかをたずねても、「音はよく聞こえ、放送内容がだいたい全部理解できる」人が15.0%、

図15 津波情報さわぎのさいの同報無線の聴取度
(伊東市宇佐見地区 N = 859人)

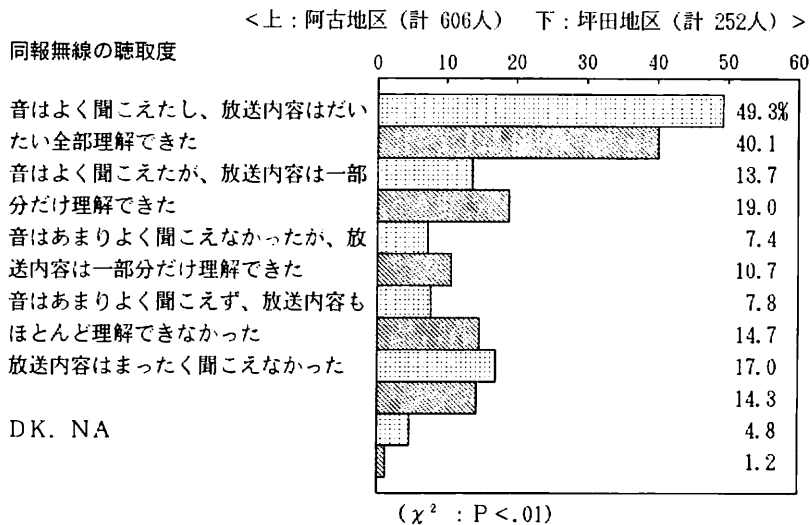


「音はよく聞こえ、放送内容は一部分理解できる」人が18.0%で、ここでも聴取可能度は33.0%にすぎないのである。

同報無線のこの聴取度を、昭和58年10月の三宅島噴火や61年11月の伊豆大島噴火の場合と比較してみると、三宅島噴火のとき同報無線の放送が聞こえた人がおよそ60%、伊豆大島噴火では51.9%となっており、非常に大きな差があるといわねばならない(図16)。そして、同報無線がこのような聞き取りにくかったため、15日の津波放送も住民は噴火、津波、避難などという言葉が断片的にしか聞こえず、前述のように大きな不安を抱いていたという背景もあって、一部で混乱が起こってしまったものと考えられる。

図16 三宅島噴火および伊豆大島噴火のさいの同報無線の聴取度
(東京大学新聞研究所調査より)

(1) 三宅島噴火



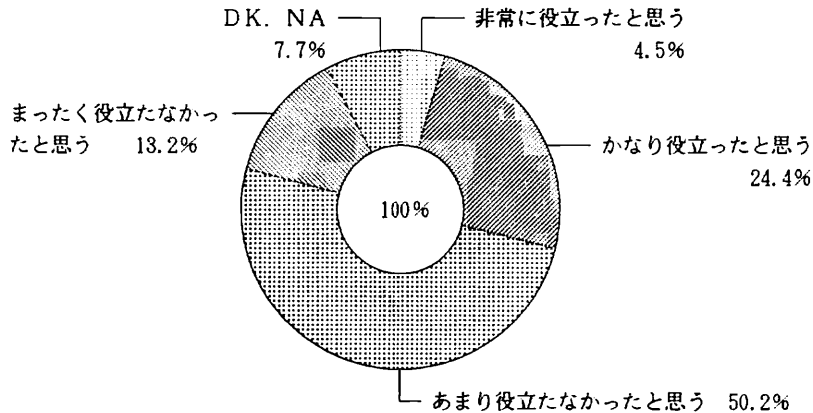
(2) 伊豆大島噴火

同 報 無 線 の 聴 取 度

	N	%
1. 音もよく聞こえ、放送内容もだいたい全部理解できた	295	38.1
2. 音はよく聞こえたが、放送内容は一部分だけ理解できた	107	13.8
3. 音はよく聞こえなかったが、放送内容は一部分だけ理解できた	93	12.0
4. 音はあまりよく聞こえず、放送内容もほとんど理解できなかった	118	15.2
5. 放送はまったく聞こえなかった	161	20.8
計	774	100.0

ついでに述べておくと、同報無線の聴取度がこのように低いため、今回の一連の事態において防災無線がどのくらい役立ったかと伊東市の住民に質問した結果、「非常に役立ったと思う」人は4.5%、「かなり役立ったと思う」人は24.4%と、防災無線を評価する人は3割にも達していなかった(図17)。この点も、昭和58年10月の三宅島噴火の場合にはほぼ7割の住民が、また61年11月の伊豆大島噴火の場合には55.6%の住民が防災無線を高く評価して

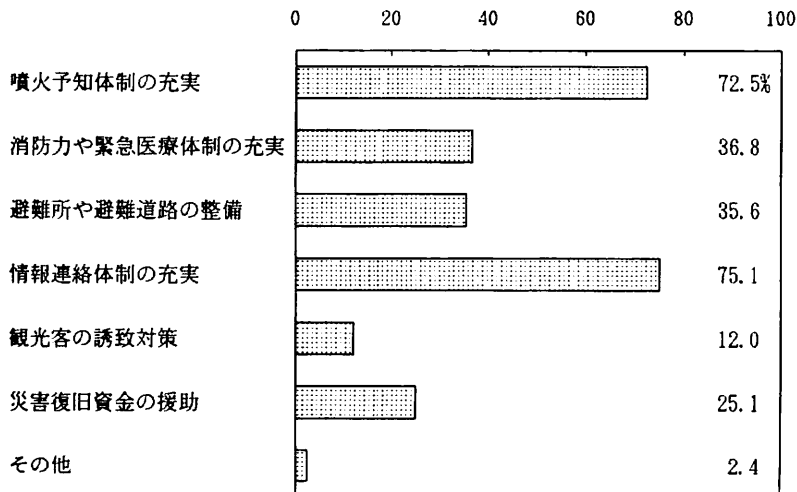
図17 一連の出来事における同報無線の評価
(伊東市宇佐見地区 N = 859人)



いたのとは、まったく対照的であった。

また、アンケート調査のなかで国、県、伊東市に対してどのような対策を望むかを質問すると、「情報連絡体制の充実」の項目がもっとも多く（75.1%）、宇佐美地区住民のうち4人に3人がこれを要望している（図18）。このことも、裏返していえば、今回の一連の事態において、同報無線の広報を含む情報連絡体制がスムーズにできなかったことを示すものといえよう。

図18 国・県・市に望む防災対策（伊東市宇佐見地区 N = 859人）



災害後、伊東市では同報無線の効果を高めるため、津波危険地域の公共施設や町内会など住民組織に、戸別受信機960台を増設することにした。住民への情報伝達を徹底するこうした努力は、もちろん今後も継続していかなければならないだろう。しかしそれに加えて、今後は、

一定の収容能力をもったホテル・旅館・民宿などにも戸別受信機を設置して、観光客への情報対策を積極的に推進することも必要であろう。観光客を対象にした防災対策は、伊東市が観光で生きるための必須の前提条件であり、また道義的義務ともいえるからである。

10 補論1—教育委員会の対応

はじめに

教育機関が災害時に直面する主要な課題は二つある。一つは、児童・生徒の安全を確保することであり、他の一つは避難場所として学校を提供することである。前者に関しては、とりわけ年少者を多く抱える幼稚園と小学校にとって、緊急事態が発生した場合には、平常時の職員数で在園・在校中の園児・児童を安全に避難させることは容易ではない。後者に関しては、敷地・建物の規模は一時的な緊急避難の場所として避難者を多数収容するのに都合がよいが、避難が長期にわたる場合には、施設管理の問題や教育機能の中断という問題が生じる。ここでは、以上の二つの課題に焦点を当てて、今回の地震・海底火山噴火に際して伊東市教育委員会（以下では市教委と略す）がとった対応について報告することにする。

(1) 地震・海底噴火の経過と教育委員会・学校の対応

1) 準備期における対応

前災害期から警告・準備期、衝撃期、復興・復旧期、再組織期という災害過程を設定するとすれば、伊東市は東海地震の警戒地域になっていることから、今回の地震・火山噴火に至るまでは、ずっと警告・準備期の段階にあったともいえる。教育委員会・学校に関していえば、たとえば、市立西小学校・同PTAではB4版1頁の「大規模・突発地震発生による学校・家庭の対応」という災害時の安全対策マニュアルを作成して全校生徒の家庭に配付している。また、昭和53年の地震以来、各種パンフレットが作成されており、全生徒に20～30分で連絡できるような連絡網の整備など災害時の対応についても細かな計画が立てられている。

2) 衝撃期における対応

今回の衝撃因子は、地震と、それに続いて起こった海底火山噴火という二つである。直接的被害は前者によってもたらされたが、地域生活および住民心理に衝撃を与えたという意味では後者の影響の方が大きい。そこで、衝撃期を地震が頻発した時期と海底火山が活動した時期とに分けて、前者を第一次衝撃期、後者を第二次衝撃期として、市教委の対応について見ていくことにする。

①第一次衝撃期

市役所震度計の記録では、有感地震は3日から始まり、翌4日には震度5を4回含む計139回の有感地震を記録している。この日が回数としては最も多く、5日115回、6日101回

と漸減し、7日には14回と急減したが震度5を3回記録している。

伊東市教育委員会「伊豆半島東方沖群発地震・海底火山噴火の記録」（平成元年7月25日）によれば、市教委の対応に関する記録は、7月5日の「各教育施設被害状況調査・緊急指示（安全指導、安全点検等）」という記述から始まっている。その内容は、園児・児童・生徒の安全を図るために、「校内の安全点検確認。登・下校時の安全の留意。教師は子供とともにいる時間を増やすこと」というものである。翌6日には、市教委から各学校に、毎朝被害状況（地震による欠席者）を報告することと、前述した「大規模・突発地震発生による学校・家庭の対応」を全校に配付して自校の対応計画を再点検することを内容とする「防災計画の確認と連絡網の再確認」の指示がなされた。そして、7日には「5つの重要事項」

（自校の防災計画の確認と点検。校内の安全点検の徹底。教師はできるだけ子供とともにいること。管理職（校長・教頭）はどちらかがかならず在校すること。登・下校路の安全に留意すること）が文書によって指示された。

地震の回数や規模も小さくなかったが、この段階までは直接的な被害も発生しておらず、児童・生徒の避難や学校を避難所として提供するということもなかった。そして、この段階になって個別具体的な準備が急ピッチで進められるようになったことから、結果的には第二次衝撃期に至る準備期の段階でもあった。

②第二次衝撃期

市教委・学校の直接的・具体的な対応行動は、有感地震が再び回数を増加させた8日（61回）の未明（午前1時分）に、市道で発生したガス管破裂によって付近の住民80人が西小学校屋内運動場に避難したときから始まる。しかし、ガス管は同日午前3時28分に復旧し、同55分には全員帰宅しているから、本格的な避難所開設にまでは至らなかった。この日は土曜日であったため、市教委は、「土・日曜日の家庭にいる時の安全指導に留意すること」という指示を各学校に出している。

最も大きな地震（震度6の烈震）があった9日には、震度5を5回含む計83回の有感地震が記録されている。各所で被害が発生しており、市教委関係でも幼稚園や小・中学校、図書館などの建物・機材に推定被害および復旧額6千数百万円の被害が生じた。また、西小学校に80人、東小学校の体育館に33人が避難している。市教委は、「7月10日（月曜日）朝の登校について、各校通学路での安全指導に立つこと。地震による欠席と病欠を分けて10時頃までに市教委に報告のこと」という指示を出している。また、市教委では、この日から職員の泊まり込みが始まった。

10日には、前日の地震による人的・物的被害の状況を報告するように各幼稚園および小・中学校に指示し、通学路の危険箇所を応急処置している。有感地震回数は震度4の3回を含めて計18回に急減し、以後は14日の震度5の1回を除くと震度3以下の有感地震が1～8回を記録する程度で、7月半ばを過ぎると震度2の地震がたまに記録されるまでに沈静化した。しかし、11日20時36分に発生した火山性微動に対する市の「第一次警戒体制に準ずる警戒体制」（約100名）に続く12日の「伊東市災害警戒本部」（約100名）の設置に呼応して、市教

委は12日、「各校、気象庁の最新情報の収集と適時・適切な対応を図ること」と「授業終了後は放課後の活動を中止して下校すること」を指示している。

午後6時36～45分に海底火山が噴火した13日には、22時に設置された市対策本部での決定を受けて（教育長出席）、市教委は夜中の23時20分に次のような緊急指示を出した。「全校避難所開設準備（6校開設指示）。明14日（金）は幼・小・中ともに臨時休業。職員は全員出勤すること。給食中止の手配をする事」。臨時休業措置は、その日のうちに各家庭に連絡されたが、明朝になったところもあった。この連絡には市広報も使われた。

翌14日は、幼・小・中・高は臨時休業になったが、14時に「（翌日の）15日（土）は臨時休業とする」指示を出すとともに（これは16時には市広報を通じて市民に伝達された）、小中6校を避難所として開設し、職員の宿直配備を決めた。この日は、市では「徹夜警戒体制」（約400名）がとられた。

13、14日の両日は、海底火山の噴火という予期せざる突発的事態の中で、市教委は、その日と翌日の対応行動に関してのみ指示するという、いわば即時対応的な緊急措置をとったが、15日に「臨時園長・校長会議」を開き、「7月17日（月）、18日（火）、19日（水）の3日間を臨時休業とすることを決定し、各幼稚園・小中学校に連絡」とするとともに、非常時に体育館等が使用されることを考慮して、各学校とも最低3名の鍵所有者を決め（通常は校長・教頭が所持）、市教委に報告するよう指示した。そして、16日（日）からは、必要要員が各学校に配置され、他の職員は自宅待機措置がとられた。こうして、市教委関係の警戒体制が整えられたことになった。

夏休み（通常は7月23日から）を間近にひかえていたため、19日までの臨時休業後の措置をどうするかが課題であった。夏休み開始時期を早めることは考慮されたが、終業式をやることに危険はないかも問題であった。しかし、「終業式をやるかやらないかは学校および生徒にとって大きな問題」であり、臨休措置のまま「ダラダラと夏休みに入ってしまうことは好ましくない」ことであると判断された（渡辺教育長）。18日には再び「臨時園長・校長会議」がもたれ、7月20日以降の対応について協議した。

また、7月19日には定例の園長・校長会が朝から開かれ、次のことが決められた。「7月20日に小・中・高が一斉に終業式を行い、21日より夏休みとする。夏休み期間は、小・中学校は8月27日まで、高校は8月31日までとする。幼稚園は20日より夏休みにする。保育園は20～22日を臨時休園とし、その後は再検討する」。そうした決定は報道機関に発表され、市の広報を通じて市民に伝達された。

17日以降は有感地震は観測されず、20日には川奈崎沖に発泡現象が見られたが、地震も震度2が日によって1～2回記録された程度で小康状態が続いた。市教委の対応は夏休みを迎えて一段落ついたことになったが、各学校には必要要員が配置され、他の職員は自宅待機の体制が維持された。21日には臨時教育委員会が開催されて、これまでの教育委員会の対応内容が説明され、被害状況の報告等と質疑が行われた。

3) 復旧・復興期

今回のような地震や海底火山の活動に関しては、台風や集中豪雨、土砂崩れなどによってもたらされるような一過性の災害と異なり、衝撃期から復旧・復興期への移行の時期を明確に設定することはできない。繰り返し衝撃が襲う災害や衝撃因子発生の予測が難しい状況の下では、災害過程のすべての局面が準備期であり、また同時に復旧・復興期でもある。したがって、ここでいう復旧・復興期という段階は、「国際観光温泉文化都市伊東」の活動の復活談話が市長から発表され、災害対策本部が災害警戒センターに縮小されて、要員以外は平常勤務体制に移行した25日以降を便宜的にそう呼んでいるにすぎない。市教委でも同日「非常日宿直態勢を解き平常勤務態勢」に戻ることと、「連絡網の点検と確認」を指示した。これによって、今回の地震・海底火山噴火に対する市教委としての行動はひとまず終了したことになる。

(2) 避難所開設と避難者数

伊東市の広域避難場所は21ヶ所が指定されているが、屋外および海岸に近い施設を避けて公共施設に開設された避難場所6ヶ所（最大収容可能人員22,500人、そのうち屋内運動場等の収容可能人員は2,600人）のうち、市教委が管理主体になっている小・中学校は4ヶ所で最大収容可能人員は11,500人（そのうち屋内運動場等には1,600人）であった。そのほかに、状況等に対応して開設を準備した施設が10ヶ所あったが、そのすべては学校であり、最大収容可能人員26,500人、そのうち屋内運動場等の収容可能人員は4,270人であった。

実際には、避難所が開設される以前の7月9日に4ヶ所130人が避難し（小学校2ヶ所113人、コミュニティーセンター1ヶ所14人、空き家になっていた市営住宅1ヶ所3人）、開設された6つの避難所には、13日以降21日までに延べ477人が避難したにとどまった。避難者が最も多かったのは13日で6避難所に154人が避難したが、翌14日には55人、15日には106人、16日には8人、18、19の両日にはともに3人、20日に0人となり、翌21日に1人を数えて以後は避難所に避難した人はいない。この他、寺院に13日から17日までに延べ296人が避難した（13日124人、14日105人、15日31人、16日31人、17日5人）。開設された6避難所に避難した人のうち、学校施設に避難した人は延べ426人で、避難者の89%を占める。寺院に避難した人も含めた場合は55%になる。一校で避難者が最も多かったのは13日の104人で、35～41人が3日間、38人が1日だけあったが、その他の日は1～14人は、日によって変動している。

幼稚園児、小・中学校生徒で避難したのは7月17日正午現在の概数でみると、園児は在籍数1,065人のうち157人（14.7%）である。このうち市内が46人、市内を除く県内が47人、県外が64人と遠距離避難が多く、中には北海道や沖縄へ避難した園児もあった。小・中学校では、在籍者8,095人のうち828人、約1割が避難している（この他に連絡がとれなかった者が67人）。避難先は市内が173人、市内を除く県内が477人、県外が365人である。市外への避

難が多く、遠く北海道や鹿児島へ避難した生徒もあった。小、中学校別では、小学校児童の避難率は13%、中学校生徒のそれは6%で、幼稚園児の避難率14.7%もあわせて考えると、年少であるほど避難した割合が大きいことがわかる。

市内に開設された公共避難所と寺院には合計300人ほどが避難したとみられるが、園児・児童・生徒で市外に避難した者は約1,000人に達する。家族が同行したケースも少なくないと思われるので、市教委の調べからだけでも少なくともこの2倍ほどが一時的にせよ市外に避難したと推定することができる。こうした市外避難が多くみられたのは、17日からの臨休措置によって、共働き家庭にとっては年少者が留守家庭に残されることになり、万一の場合は危険であることから親戚などへ一時避難をすることになったからである。

(3) むすび

海底火山噴火は市民にとって驚異的な出来事であり、再噴火が、いつ、どこで起こるかわからないという不安感を与えたが、幸いにしてそうした事態は生じなかったし、地震の被害も震度の割には軽微といえるほどにとどまった。夏休み直前であったことも、教育機能の中断を最小限にとどめることができたという意味で、学校運営にとっては幸いしたといえる。

今回の市教委の対応は、一日単位ともいえる短期的な対応計画で事態に即応するという方法をとっている。地震・海底火山噴火の動向の予測が困難であったからであるが、伊東市の渡辺教育長が指摘したように、「学校の対応は公的対応ととられるので市民に動揺を与えないような配慮、方法が必要」であり、慎重な対応が求められるからである。幾つかの幸運が重なったとはいえ、短期的な対応計画を可能にしたのは、事前に詳細な防災計画と連絡網が整備されていたからである。

見てきたように、やつぎばやともいえる連日の指示が有効に働くためには、受け入れ側の学校と家庭に指示内容が迅速かつ正確に届き、しかも正しく理解されなくてはならない。海での遊泳をなるべく控えるようにという内容が遊泳禁止ととられ、観光協会が市教委に抗議に来たという一幕もあったが、高校も市教委とともに対応にあたり、幼・小・中・高が一体となった対応行動の過程では重大な情報混乱や誤解もなかった。冒頭で述べた教育機関が災害時に直面する主要な二つの課題に関していえば、児童・生徒の安全は確保され、避難所運営にかかわる問題や教育機能の著しい中断もなかったといえる。その背景には、直接とりあげることではできなかったが、市教委職員および学校の教職員をはじめ多くの努力があったことはいうまでもない。

11 補論2—新聞報道における「地震・噴火予知」の評価に関する内容分析

(1) 予知に関する「科学の現実」と住民の「期待」

あらためていうまでもなく、地震や火山噴火が及ぼす被害を最小限に食い止めるための最大の手段は、こうした物理的な異常現象の発生を事前に予知することであろう。予知によって、被害が予想される地域の人々の物質的・精神的準備が可能になるからである。

しかし一方、下鶴火山噴火予知連絡会会長自身の次のような文章に典型的に示されるように、現段階での自然科学の知識をもってしては、特定の地震・噴火を的確に予知することは不可能に近いといえる。「地震や火山噴火は、固体、液体の破壊現象であるので、本質的には確率過程として取り扱わなければならない。しかし、我々は、一つの火山で精密な観測にもとづいて、噴火の確率を、降水確率と同じような数値で表現出来るほど、過去の前兆データ等を持ち合わせていないし、同じ火山でも噴火の前兆データが異なる場合も多いのである。このような現状から、予報という言葉が使えるのは遠い将来のことになるだろう。」（下鶴大輔「火山噴火予知について」『近代消防』1989年12月号）

このような予知に関する「科学の現実」と、一般の人々が科学に対して持つ「認識」、もっといえば地震や噴火の予知に対する「期待」とのあいだには、相当大きな「ズレ」があるように思われる。つまり、一方では上のような現実があるにもかかわらず、住民のほうは、現行の自然科学的知識によってかなりの確かな予知が可能であることを期待している。もちろん、予知に対するこうした「期待」は、現代科学に対する一種の「誤解」にはかならない。けれども住民に即してみれば、地震や噴火といった災害の発生は蓋然性の問題（確率過程）ではなくて、「地震や噴火が起こるか起こらないか」の二者択一の問題であり、起こるとすればいつどこで起こるのか、また避難命令が出ている場合にはいつまで避難していなければならないのか、というきわめて具体的な情報である。もちろん、この種の情報は誰にもわかるものではないが、住民としては予知の専門家が何らかの判断を下してくれることを切望する。そして、実際の災害時に期待するような「予知」がなされないと、そのことに強い不満を抱くのである。

そこで以下、「科学の現実」と住民の「期待」とのあいだのズレという観点から、今回の群発地震とそれに続く連続微動の解釈（住民からすれば「予知」）をめぐる、新聞報道の内容分析を行ってみた。

(2) 群発地震・海底噴火の「予知」関連記事の分析（ストレートニュースを中心に）

1) 事態の経過

最初に、今回の群発地震に関する地震予知連絡会強化地域部会の見解が報道された7月6日から13日の海底噴火の直前までの新聞記事を分析し、「予知」関連情報がどのように報道されたかを明らかにする。ここで主に分析対象としたのは、「静岡新聞」および「朝日新聞」。

「毎日新聞」,「読売新聞」,「日本経済新聞」の東京版である。また「予知」についての定義は後に行うが、ここでは「予知」関連情報を,「群発地震や火山噴火は今後どうなるにかかわる情報」と広く考えて,分析していくことにしたい。

まず,今回の一連の事態のなかで,どのような「予知」関連情報が報道されたかを,主として「静岡新聞」の記事から概括しておきたい。

前述のように今回の群発地震は6月30日にはじまったが,これについて7月5日午後1時に地震予知連絡会強化地域部会が開かれる。そしてこの部会では,今回の群発地震は,①活動のレベルが過去の活動にくらべて高いレベルにある,②活動の中心がこれまでの活動域より北西側にある,③震源の深さが浅いなどの特徴があり,その「活動はなお続くとみられ,今後,活動の規模や震源域の推移などの厳重な監視が必要」という見解を発表した(「静岡新聞」7月6日朝刊)。その後,群発地震の活動は鎮静化したり活発化したりするが,この時期,気象庁では「群発地震では回数の増減を繰り返すため,活動が再び活発化する恐れもある」(「静岡新聞」7月7日夕刊),「地震は全体として減少傾向にあるが,活動の規模の大きさからみて今後も活発な活動と小康状態を繰り返しながら,しばらく継続する(だろう)」(「静岡新聞」7月8日夕刊)などと予測している。そして,7月9日には今回最大規模のマグニチュード5.5の地震が2回起こり,怪我人も発生した。

しかしその後10日,11日と活動は弱まり,11日朝には,活動は終息に向かっているかもしれないという推測が多くなり,たとえば「静岡新聞」の7月11日夕刊には,「群発地震は活動が小康状態にあり,終局を迎えたと考えている」という東京大学地震研究所M教授の見解が掲載されている。この見解は正しかったわけだが,同教授が「今回はM5.5の地震以後の群発地震の収まり方が急すぎるのが気になる」と述べていたように,今度は11日午後8時頃から,まったく予想もされなかった連続微動が発生した。そして同日深夜,火山噴火予知連絡会の下鶴大輔会長の緊急会見が行われ,翌12日朝刊には,「群発地震活動があった近くで地震と異なる活動が始まった。火山性活動の可能性は否定できない。マグマが比較的浅い所で動いている可能性もある」という気象庁の見方と,これをふまえて「初めてのケースで慎重に推移を見守る必要があるが,突然微動が起き突然収まったことからみると直ちに噴火する心配はないのではないか」という下鶴会長の見解が掲載されている。さらに「12日夕方,火山噴火予知連絡会の緊急拡大幹事会を開き,下鶴会長が「伊豆半島東部及び東方海域は,東伊豆単成火山群があり,微動は地下のマグマの活動による可能性があると考えられる。しかし,現在,直接に火山活動を示す表面現象は認められていない。今後も注意深く監視していく必要がある」というコメントを発表した。こうした経過の後,13日午後6時頃,突然海底噴火が起こったのである。

2) 「予知」関連情報の種類

地震や火山噴火の「予知」という場合,一般に,いつ,どこで,どのような規模の地震や噴火が発生するかを予知することが必要であり,時期・場所・規模の3つを「予知の3要

素」と呼ぶこともある。しかし、この3つを的確に予知するのはきわめて困難であり、とくに今回のように過去のデータが皆無の地域ではまったく不可能なことといってもいい。もちろん、今回はこうした厳密な意味での予知はなかった。

地震や噴火の将来動向にかかわって今回出された情報は、いずれも本来の意味での予知情報をもつ定量的な内容でなく、将来起こり得る事態を「危険だ」とか「危険でない」というかたちで定性的に予想したものであり、ここではそれをかりに「予知」関連情報と呼んでおくが、これを情報源の種類や発表状況などから大きく3つに分類すると、以下のようになる。

①地震予知連絡会・火山噴火予知連絡会の統一見解および会長コメント

これは、予知連絡会などの開催後に記者会見のかたちで発表されるものであり、今回でいえば、7月5日に地震予知連絡会強化地域部会が発表した見解、12日の火山噴火予知連絡会の会長コメントなどである。今回の「予知」関連情報のなかでは、もっとも公的色彩の強いものといえよう。

この種の情報には、一定のパターンのみられることが少なくない。たとえば、次の文をみてもらいたい。「地核変動、重力測定、みかけ比抵抗等の結果は、山頂直下においてマグマの一部が深部に戻ったと解釈することもできる。しかし、火山性微動が続いており、三原山山頂の地震が増加していることは、地下でマグマの活動が続いていると解釈することもできる。また過去の噴火活動では休止期をおいて再び噴火した例が少なくないことから、今後も噴火が起こる可能性があると考えられ、厳重な監視を続けることが重要である」

これは、1986年の伊豆大島噴火のさいの火山噴火予知連絡会の統一見解の一つであるが、ここに典型的にみられるように、可能性の列挙の後に厳重な注意を呼びかけるとというのが、しばしばみられるパターンである。もちろん、このようにパターン化してしまう大きな理由が予知の困難さにあることはいうまでもない。

②気象庁の予想

もう一つ、新聞記事には、「・・・と気象庁はみている」とか「気象庁によると・・・」というかたちの「予知」関連情報も少なくない。たとえば、次にあげるのは7月9日に起こったM5.5の地震を伝える、「朝日新聞」（7月10日）の朝刊に載った「気象庁の見方」。

【気象庁 長期化を警戒

（前略）・・・気象庁によると、（今回の）2回の震度4の地震はいずれも震源域がこれまでの範囲の北方に当り、地震エネルギーのたまっている空白域の相模湾北西部にやや近づいた。特に2度目は、これまでにあまり活発な動きの起きていない北緯35度以北が震源と推定されている。この点について同庁は「震源が絶えず変動しているのは、地震活動のエネルギーがまだ残されている表れとも考えられ、群発地震が終息に向かっているとは思えない」とみている。今後の見通しについては、「現時点が活動のピークにあたるため、あと1週間程度は様子をみたい。これまでの群発地震と同様に比較的短期間で終わるのか、伊東群発地震のように長期化するのかが見極めができない」としている】（「朝日新聞」7月10日朝刊）

また、次にあげるのは11日の「朝日新聞」朝刊の記事である。

【地下マグマの上昇に加え活断層も地震誘発 気象庁見解

伊豆半島東方沖の群発地震はこれまで地下マグマの上昇によって引き起こされたとみられていたが、気象庁は10日、これに加えて一般の地震と同じような活断層による地震が誘発されていたとの見方を明らかにした。・・・（中略）・・・（また）伊豆半島東方沖の群発地震は11日目に入った10日、未明からの発生回数が大幅に減るなど沈静化しており、気象庁は「終息に向かっていくかもしれない」とみている】（「朝日新聞」7月11日朝刊）

当然ながら、地震や噴火における気象庁の主な役割は、客観的なデータを観測し適宜に発表することであるが、場合によっては、地震・噴火に関する今後の見通しなども、上記のように慎重な言い方でほめかすことがある。けれども、ここに見られるように「気象庁の見方」では、気象庁の誰が、どんな状況で言ったことなのか明らかにされないことが多い。すなわち、それは気象庁の組織としての見解なのか、ある職員（例えば地震予知情報課長など）の個人的見解なのか、あるいはそうした予想が記者会見で発表されたものなのか、記者の取材で得られたものなのかも、明記されないことが少なくない。

③専門家の見解

3つめのタイプは「専門家の見解」で、「地震予知連絡会〇委員の話」、「〇〇大学〇〇教授の話」などというかたちで、よく社会面に載っている。

たとえば、次にあげるのは7月10日の各紙朝刊に載っている「専門家の見解」。

* 東京大学地震研究所M教授の話「（7月）9日の地震が今回の活動の最大地震になるとすれば、これまでの傾向として、今後は震源域が広がり、20日ほどかけて活動は終息していくだろう。しかしさらに震源が北上したり、M5規模の地震が繰り返して起こるようならば、従来の群発地震とは様相が異なってくる。9日の地震は、今回の活動がこれで収まってゆくかどうか、判断の分岐点になる」（「朝日新聞」7月10日朝刊）

* 浅田敏・地震予知連絡会会長の話「普通の群発地震ではM6.0ぐらいが最大で、これを越すものは、まず起こらない。昭和5年に起きた伊東群発地震は3カ月間続き、今回より格段に大きかった。今回は、10年ほど前から続いている普通の群発地震と見たほうがいい。2週間ぐらいで収まるのではないか」（「読売新聞」7月10日朝刊）

* 東京大学地震研究所A教授の話「明日、明後日あたりの推移に注目したい。群発地震にはいろいろと種類がある。M5.5ぐらいなら普通の群発地震の活動と考えていいが、それより大きいものが発生するようなら、群発地震とまったく大きな地震の混在型と見られ、周囲の地殻のひずみに及ぼす変化がずっと大きいだろう。どちらのタイプになるか気になるところだ」（「読売新聞」7月10日朝刊）

地震予知連絡会の委員を勤めるなど公的な立場を兼ねている人と、そうでない人とのあいだには多少の差があるかもしれないが、当然ながら、これは「予知」というよりむしろ私的な立場で述べた「予想」で、比較的気軽な立場を反映してか、①や②よりもはっきりものを言う傾向がみられる。これらは新聞記者が取材で得た情報であり、公的な発表のあいまいさ

を補っているようにも見える。

以上、ここであげた「予知」関連情報は、量的には②、③、①の順で多く、それぞれ全体の約4割、3割、および2割ほどの分量であった（表9、表10参照）。

3) 製造される（？）「予知」関連情報

さきに述べたように、6月末から始まった群発地震が収まるかにみえた7月11日夜、突然連続微動が発生したのであった。そして、その夜11時から火山噴火予知連絡会の下鶴会長の記者会見が開かれた。このときの会見のようすを、「読売新聞」の社会面では次のように伝えている。

【下鶴会長、戸惑いの表情

午後11時から、気象庁2階の講堂で記者会見した火山噴火予知連絡会の下鶴大輔会長は、白いスポーツシャツに濃紺の背広姿。「気象庁でもはじめてのケース」という特異な動きに、「あくまで私個人の考え」と強調してマイクを握った。

「今の時点では」「予想でものを言うわけには」と慎重な言葉が繰り返され、戸惑いの表情が浮かぶ。マグマ噴出の可能性についての質問が何度も飛ぶと少しイラだったように「それはネェ」と質問をさえぎる場面も。

同席した津村地震火山業務課長が、「これ以上会長にお答えいただくにはデータが不足している」として30分で打ち切られた・・・（後略）】（「読売新聞」7月12日朝刊）

この記事を読むと、予想もしなかった事態に直面して、データもなく予想がつかない下鶴会長に対し、新聞記者たちが、今後の展開について何かのコメントを引き出そうとやっきになっている姿が浮かんでくる。会長は、そこで仕方なく「個人の考え」と断わったうえで、今後の展開についてコメントせざるを得ないことになる。そして、同じ日の第1面で、この会長のコメントは次のように伝えられている。

【火山性微動を観測 気象庁マグマ上昇で警戒 噴火の危険、今ない 予知連会長

・・・これについて気象庁の要請で、分析に当たった噴火予知連の下鶴会長は、同夜11時から会見。この種の連続性微動につき、マグマや地下水、ガスなどが地下で動いた場合か、小さな地震が連続して発生している場合に観測されることを明らかにし、伊豆半島東部には、大小70の火山があり、海底火山も2、30はあることから、今回の群発地震の影響でマグマが動き出した疑いは強いとした。

しかし、同会長は「約1時間の震動なので、過渡的な現象ではないか。地割れができたり、海面に泡が出たりする前兆も認められず、マグマの噴出はいまのところ心配ないと思う」との見通しを明らかにした・・・（中略）・・・しかし下鶴会長は、「群発地震でこのような連続微動が発生したのははじめてのケースなので、先の予測は難しい」としており、気象庁でも、地元警察、消防に連絡、警戒を続けるとともに「今後の観測で材料を集め、様子を見たうえで、予知連の招集を改めて検討したい」としている】（「読売新聞」7月12日朝刊）

表 9 伊東沖噴火関連記事(1)

伊東沖噴火関連記事一朝日新聞(7/5~7/14)

日 付	見 出 し
5 朝	伊豆一帯発地震広がる 新幹線ストップ
夕	伊豆の群発地震やまず 気象庁一地域拡大、監視強める 伊東で水道管など被害
6 朝	まだ揺れ続きそう 発生域に変化 予知連が見解 瓦落ち路面に亀裂
夕	また震度4 揺れる伊豆「怖い」
7 朝	深夜また震度4 伊豆群発地震なお活発 観光揺るがす 解約すでに1000人 震源北上、35度線越す 何示す
夕	発生回数は低下傾向 気象庁、なお警戒続ける
8 朝	震源広がる傾向 発生回数、大幅に減る 群発地震は警告する(社説)
夕	ガス漏れ、住民避難 小康状態続き沈静化の兆し
9 朝	地震活動は低下傾向 ヤマ場再来の可能性も
10 朝	群発地震、連続2回M5.5 伊東で18人けが 気象庁長期化を警戒 割れるガラス 壁にヒビ 「慣れ」吹きとび緊張 避難続々、電話パンク 観光客も「怖かった」急いで家路に 不気味な「震源域一致」
夕	復旧作業はかどらず いつまた揺れるかわからない 大雨が不安増幅 通学危険と休校も 気象庁「4」市役所「6」震度に今回もズレ 伊東駅前の店、温泉噴き出す 群発地震発生は減る
11 朝	県外避難の子供らも 伊東の旅館、一部で休業 地下マグマの上昇に加え活断層も地震誘発 気象庁見解
夕	揺れ収まり後片付け 業者、海の家建設再開 新幹線も足元点検 沈静化の傾向強める 専門家
12 朝	海沿いに地鳴り 現地署は非常招集 マグマ上昇推定も 専門家 連続的微動を警戒 火山性?連続微動 マグマ活動と関係か 群発地震は急速に減衰
夕	断続的に微動続く 気象庁など厳重監視 「火山まで追い打ち!」寝不足、欠席児童も 不安増す市民 地殻の連続微動続く 気象庁、隆起など厳重監視 緊迫の一夜、朝は平静 「海面から泡」の情報
13 朝	後ればせ 警戒本部設置 伊東市観光優先甘い対応、伊東の微動マグマ説強まる 予知連、厳重な監視継続
夕	微動は小康状態に 伊豆東部、異変情報なし
14 朝	伊東沖で海底噴火 水柱三十メートル、六回 再び噴火の恐れ「水蒸気爆発」と予知連 船舶など厳戒必要 予知連下鶴会長 付近一帯は「火山の巢」 ドーンと地鳴り・揺れ 電話回線パンク状態 「冷静対処を」無線放送 再発に備え海岸線に広報車 目前海突き上げて 「終息」期待の矢先 陸からわずか3キロ 不安、避難の市民も 振動後、激しい衝撃 「船体をたたく波の音直後に海盛り上がる」船 長語る 11、12 日小規模噴火?東大地震研が微動記録 「予知は難しい」会長ら苦渋の表情 予知連記者会見 気象庁も驚き

表9 伊東沖噴火関連記事(2)

伊東沖噴火関連記事－読売新聞（7／5～7／14）

日付	見出し
5 夕	未明、網代で震度4 伊東で屋根壊れる
6 朝	群発地震を注視 予知連見解「震源浅く活発」
夕	伊豆群発地震やまず 未明に網代で震度4 伊東市の観測では「5」 マグマが海底近くまで 専門家の分析
7 朝	網代で震度4－3 連発 深夜東京でも「3」 不気味“おばけ波”海面に巨大波紋 「有感」 253回、最大級
夕	昼過ぎ網代「震度3」
8 朝	沈静化の兆しも 巨石が道路に転落（13面に解説）
夕	ガス漏れ、29世帯避難 「有感」が 300回越す
9 朝	週末観光グラリ 伊東温泉キャンセル1万人 夜の網代連続震度3 沈静化一転 ぐらっと来るのにどう備える（社説）
10 朝	お昼とき 激しい揺れ 伊東市で18人けが 天ぶら油浴びた主婦も 避難セット売れて売れて 建物破壊10件 「ここ数日に注目」 地震発生4つの心得 網代で震度4 最大規模の活動に 新幹線ストップ 上下20本に遅れ
夕	不安の夜明け雨が追い打ち、山崩れなど心配 揺れは小康状態に 候補ら次々現地入り 危険箇所をパトロール
11 朝	地震余波はおさまらず ヘリで警戒 新幹線 無念の延期 観光誘致 温泉が復活 小康？終息？なお微妙「水平断層」が原因
夕	久々 揺れない朝 群発下「ほっ」 海の家一部開業 活動手低レベルに学者はほぼ終息の見方 噴きな空白念頭に
12 朝	「ズシーン」不気味な鳴動 「群発とは違う揺れ」 終息一転、不安募る夜 自主避難の住民も 下鶴会長戸惑いの表情 火山説を裏付け 考えられる火山噴火 火山性微動を観測 気象庁マグマ上昇で警戒 噴火の危険、今ない 予知連会長
夕	伊東の微動続く 伊東沖の海面には泡 極めて大きい振動 従来と波形に相違点 眠れぬ一夜…デマも 「火山爆発するそうだ」広報に不備 伊東市民ら右往左往
13 朝	困惑…未知のデータ次々「偶発下の有感微動は初」見解で下鶴会長 群発直前海水濁る 漁民目撃 マグマ活動濃厚 伊東微動、監視が必要 予知連見解
夕	海底調査始まる 微動なく小康状態 群発の疲労濃く 安全求め引っ越しも 漁民に不魚の追いうち
14 朝	伊東沖で海底噴火 マグマ水蒸気爆発 6－7回、白煙30メートル 「厳重な警戒必要」予 知連会長見解 伊東－初島間が22.5センチ拡大 くらやみの海に白煙かーてん 地鳴り－市民スワッ 「脱出だ」伊東駅に殺到 海面盛り上がった 拓洋船長の目撃談 観測の裏かく噴火 難しい予知 「噴火」あり得る地殻構造 マグマの動き活発化 異変しばらく続く

表10 伊東沖噴火予知関連記事(1)

伊東沖噴火「予知」関連記事（7/6～7/7）

①朝日②毎日③読売④日経

日 付	見出し／記事（・「予知」主体・「予知」内容）
6 朝	①まだ揺れ続きそう 発生域に変化 予知連が見解 ・地震予知連緊急強化地域部会・同部会では直接大きな地震に結び付く可能性は薄いと見ているものの、厳重な監視を続けていく、としている。……「活動はなお続くものと思われるが、さらに大きい地震が発生するかについては今後の活動や活動域などを注意深く見守る必要がある」との結論になった。 ②厳重監視続ける予知連緊急部会 ・地震予知連緊急強化地域部会・「活動はなおも続くと思われる。さらに大きい地震が発生するかどうか、今後の活動度や活動域を注意深く見守る必要がある」とする見解をまとめた。 ③群発地震を注視 予知連見解「震源浅く活発」 ・地震予知連緊急強化地域部会・「今回の群発地震は、震源の深さがかなり浅く、活動のレベルも高い。活動はなお続くと思われ震源域の変化などを注意深く見守りたい」という見解をまとめた。……茂木部会長は「地震はもう少し続くだろう」と見通しを立てている。 ④震源域の北上を警戒 予知連部会 活動レベルは活発浅い震源 長期化の可能性 ・茂木部会長・記者会見で茂木部会長は「これまでの群発地震とほぼ同じであるが、震源が浅くて活動レベルも高く、北に移る兆候も見られる。急速に終息するとは考えにくく、厳重な監視が必要」との見解を示した。また東海地震との関連については「直接の関連性はない」としながらも、「震源が地震空白域の北部に移動すれば新たな地震が起きる可能性もある。」と語った。
6 夕	③群発地震やまず 北へ移れば要警戒 ・塩川官房長官・六日午前の記者会見で…「現在はそう心配ないが、群発地震の地域がもう少し北に移動すれば、警戒を要すると聞いている」と述べた。 ④綱代でまた震度4 ・塩川官房長官・「群発地震の地域が北へ移動すれば、警戒を要すると（報告で）聞いている。今のところとるべき特別な対応策はないが、観測体制を強化する」と述べた。
7 朝	①震源北上、35度線越す ・溝上教授や茂木部会長・「震源がさらに北上した場合は、注目の必要がある」としながらも「群発地震といわゆる小田原地震とは性質が違う。このまますぐにどうこうなるというものではない」といっている。 （伊東市の生活安全課には四日昼から六日夕までに、「今後地震はどうなるのか」といった問い合わせが約百三十件寄せられている。） ④群発地震再び活発化 ・気象庁地震予知情報課・「昨年7月の群発地震から類推するかぎり大きな被害は考えにくい」としているが、震源域が広がれば新たな活動が生じる可能性もあるとして、注意深く観測していく。
7 夕	①発生回数は低下傾向 気象庁、なお警戒続ける ・気象庁・発生回数としては低下傾向にある、としながらも今後もマグニチュード4～5の地震が起こる可能性が残っているとみて警戒を続けている。 ・地震予知連の浅田会長・「過去のケースから見ると、有感地震が1カ月も続くことは考えられず、一週間か二週間で有感地震が収まってくるだろう。群発地震の後に大きな地震があった例もあるが今回は今のところ大きな地震に結び付くとは思っていない」と話している。

表10 伊東沖噴火予知関連記事(2)

伊東沖噴火「予知」関連記事（7/8～7/10）

①朝日②毎日③読売④日経

日 付	見出し／記事（・「予知」主体・「予知」内容）
8 朝	②有感地震 289回に ・力武地震予知連副会長・同規模の地震がないとは言えない、震源域が現在の場所であるかぎりは大丈夫だが、内陸寄りに動くようだと要警戒だ。 ・地震予知連浅田会長・過去の例からすれば一、二週間で収まると思うが、1カ月以上続くならば再検討が必要だろう。 ③沈静化の兆しも ・気象庁・気象庁では「長期的には活動レベルは減衰気味ととれる」としており、震源域の変化などを見守っている。 ④再び小康状態に 気象庁「なお警戒必要」 ・気象庁・全体としてみると地震は若干減る傾向にあるが、今後も一時的に激しい活動と小康状態を繰り返しながら、しばらく継続すると見て、引き続き警戒が必要としている。
8 夕	①小康状態続き沈静化の兆し ・気象庁・再び活動が活発になる恐れも残っているとして警戒を緩めていないが、心配された震源の北上もなく、群発地震は沈静化の兆しを見せ始めている、としている。
9 朝	①地震活動は低下傾向 ヤマ場再来の可能性も ・気象庁・気象庁では、有感地震は一週間から十日程度で峠を越すとみているが、過去の例から、今月四日に続いて二度目のヤマ場が来る可能性も残っているという。…八日になって、震源域はややばらつく傾向を示している。こうした点について同庁は「これまでの群発地震でも終息前には震源域がばらつく傾向があった。しかし一方で発生が集中するヤマ場が一度だけで終わった例も少ない。震源が陸地に近く、ごく浅いこともあり四日に続いてもう一度ヤマ場がこないとは限らない」としている。 ④綱代また震度3 ・気象庁・気象庁は地震は全体として減少傾向にあるが、「引き続き警戒が必要」としている。
10 朝	①群発地震、連続2回M5.5 伊東で18人けが、気象庁長期化を警戒 ・気象庁・「震源が絶えず変動しているのは、地震活動のエネルギーがまだ残されている表れとも考えられ、群発地震が終息に向かっているとは思えない」とみている。…「これまでの群発地震のように比較的短期間で終わるのか、伊東群発地震のように長期化するのか見極めかできない」としている。 ①不気味な「震源域」一致 59年前の北伊豆地震「群発」の後大揺れ ・気象庁…こうした経験から、今後も本格的な地震が起きる恐れは十分有ると気象庁では警戒している。 ・溝上教授・今後震源域が広がり、二十日ほどかけて活動は終息していくだろう。しかしさらに震源が北上したり、M5規模の地震が繰り返して起こるようならば、従来の群発地震とは様相が異なってくる。九日の地震は、今回の活動がこれで収まってゆくかどうか、判断の分岐点になる。 ②群発地震過去最大規模に ・気象庁・気象庁では「九日をピークとして収まっていくか長期的な群発地震になるかは今後一週間ほど経過を見守る必要がある」として厳重な警戒を続けている。 ③「ここ数日に注目」 ・浅田予知連会長・「…今回は十年前から続いている普通の群発地震と見たほうがいい。二週間ぐらいで収まるのではないか。」 ・阿部教授・「…今後長引く傾向が出てきたら、注意深く見守る必要があろう。群発地震には法則がない。減少気味になっても素直に収まらないかもしれない。」 ④活動ピーク期に ・浅田予知連会長・「M6を越える地震はないと思うが、活動は後二週間ぐらい続くだろう」とし、警戒が必要だとしている。

表10 伊東沖噴火予知関連記事(3)

伊東沖噴火「予知」関連記事（7/11～7/12）

①朝日②毎日③読売④日経

日 付	見出し／記事（・「予知」主体・「予知」内容）
11 朝	①地下マグマの上昇に加え活断層も地震誘発 気象庁見解 ・気象庁・十日、未明からの発生回数が大幅に減るなど沈静化しており、気象庁は「終息に向かっているかもしれない」とみている。 ②終息なのか微妙 「有感」減り、活動衰える ・専門家・断層に沿った形で震源が並ぶのは1965年8月から70年末まで続いた松代群発地震や、80年の伊豆半島東方沖地震など、群発地震が終わりに近づいた時にみられる傾向がある。今回の群発地震もこれで収まるのではないかと見る専門家もいる。 ・窪田気象庁地震予知情報課長・「…地震の活動が今までの範囲内に留まっているならば、大きな地震は起こらないだろう。ただ再び小さなピークがくる可能性はある」 ・溝上教授・「今回の群発地震は活動が激しかったので、震源域のはじに当る断層を刺激してM5.5の地震が起きたと見られる。この地震でエネルギーが解放されたと見られ、東伊豆のひずみ計が横ばい状態を示していることから、群発地震が終息すると判断する材料はそろった。しかし、他に震源が広がるかどうか、ここ1～2日が微妙なところ」と話している。 ③小康？終息？なお微妙 ・気象庁・気象庁では「終息するかどうかの判断には、なお、数日の観測が必要」としている。 ④当面は周期的変動 気象庁判断 エネルギーほぼ放出 ・気象庁・気象庁では「九日の地震で一連の震源域でのエネルギーはおおむね放出された」としているが、活動は周期的な変動を繰り返しながらしばらく継続すると見られており、終息に向かうかどうかはこの数日がヤマ場という。
11 夕	①沈静化の見方強める 専門家 ・気象庁・気象庁は、マグマ上昇による群発地震が九日に活断層による大きな地震を引き起こし、M5.5を二度記録するとともにエネルギーを放出し切ったのではないかと、とみている。 ・溝上教授・「…今の震源域で起きている群発地震はこれで打ち止めになるのではないかと」 ②活動、沈静化の兆し ・気象庁・気象庁では地震の発生回数から見ると、活動は沈静化の傾向にあるとしながらも「このまま終息するか経過をみないとわからない」と引き続き監視している。 ③活動、低レベルに 学者は終息の見方 ・気象庁・気象庁ではいせん警戒を続けているものの「今のところ、発生回数は落ち着いており、震源域の変化にも危険な兆候はみられない」としており、専門家の間では、今回の地震はひとまず終息に向かうとの見方が強まっている。 ・溝上教授・「…今回の群発地震は終息したと見ていいだろう。九日昼に起きたマグニチュード5.5の地震で残ったエネルギーも出尽くしたと見られ、今のところ、もうないと思う。ただし過去の例を見ると、一兩日、すっかり静かになった後で、突然大きな地震が発生する“不気味な空白”というケースもあるので、この点は念頭において注意しなければならない」
12 朝	①火山性？連続微動 マグマ活動と関連か ・気象庁 下鶴火山噴火予知連会長「こうした現象は初めての経験で今後の予測は難しい」 ・下鶴会長・マグマの上昇による本格的な火山活動の可能性については「否定できない」としながらも、微動が突然発生し、すぐに消えた点から「そこまで心配することはないのではないか」と話した。 ①マグマ上昇推定も 専門家 断続的の微動を警戒 ・宇津名善教授・「…今すぐ、新しい火山ができるような噴火に結びつく恐れは少ない」 ②初の連続性微動 火山噴火予知連会長は“一過性” ・下鶴会長を・「マグマがやや動き出していることは否定できないが、微動は過渡的な現象だと思う。微動が連続して起これば心配しなければならない」と今回は一過性の現象だとの見方を示した。気象庁は同日夕、群発地震の事実上の終息宣言を出していた。 ②ドスン不気味な地響き 気象庁「終息見通し」直後「マグマ噴出の可能性も」専門家指摘

表10 伊東沖噴火予知関連記事(4)

伊東沖噴火「予知」関連記事（7/12～7/13）

①朝日②毎日③読売④日経

日 付	見出し／記事（・「予知」主体・「予知」内容）
12 朝	・荒牧教授・「…連続微動が出てきたことでマグマが噴出する可能性が強まったのではない か」 ・井田火山噴火予知連伊豆大島部会長・「…噴火するかどうかはこの段階でははっきり言え ないが、可能性は否定できない。極めて注意しなければならない」 ・下鶴会長・「微動の継続時間は一時間ぐらい。突然来てピタッと止まった過渡的なもので 、連続して（微動が）起きれば心配だが…。これからどうゆう現象が出てくるのか、よく注 意したい」 ③火山性微動を観測 気象庁マグマ上昇で警戒 噴火の危険、今ない 予知連会長 ・下鶴会長 「一時間程度でおさまっており、今のところ危険はないと思う」との見解を明 らかにした。「群発地震でこのような連続微動が発生したのは初めてのケースなので、先の 予測は難しい」 ③「ズシーン」不気味な鳴動 「群発とは違う揺れ」「終息」一転、不安募る夜 ・気象庁・「この兆候が何を意味するのか分からない」 火山説を裏付け ・井田部会長・「…今後噴出の可能性も否定し切ることとはできないが、浅いところで終わる 可能性もある。マグマが非常に深い所に噴出した場合には余り影響はないが、浅い所だと、 海水とマグマが触れたときに爆発を起こすこともある」 考えられる火山噴火 ・荒牧教授・「…火山がいつ噴いてもおかしくない。噴火は学問的にも十分考えられる。 どんな噴火の仕方をするか分からないが、伊豆大島のような噴火の仕方にならないとはい 切れない」 ④静けさ破る「ドーン、ドーン」市民らに再び衝撃 “終息見解”で一息の矢先 専門家 の見方 水蒸気爆発の恐れも ・井田部会長……今後どうなるか、経過を見ないと分からないが、最悪の場合は海の浅い所 にマグマが噴き上がり、マグマ水蒸気爆発をおこすおそれがあるので注意が必要だ。 まだ即断できない ・荒牧教授……現在の微動が、マグマが地表に出てくるような大規模な火山活動の前兆かど うかは即断できないと思う。 ・木村助教授……通常地震地域で噴火するとは思えない。……まだマグマが上がっている 積極的な証拠はなく、火山性微動と判断するのは早計と思う。
12 夕	①断続的に微動続く ・気象庁・「…地下でどんな変動が起きているか全く分からない」 ②連続微動依然続く 気象庁「火山性と判断できぬ」 ・沢田気象庁火山室長・「今のところマグマが直接関わっているかは判断できない」 ④地震でマグマ上昇 火山活動直結？即断できず ・多くの専門家・群発地震でマグマが上昇したという見方では多くの専門家の意見は一致し ているものの、火山活動につながるかどうかは今後の経過をみないと判断できないとしてい る。

表10 伊東沖噴火予知関連記事(5)

伊東沖噴火「予知」関連記事（7/12～7/13）

①朝日②毎日③読売④日経

日 付	見出し／記事（・「予知」主体・「予知」内容）
13 朝	①マグマ説強まる 予知連、厳重な監視継続 ・荒牧教授・「微動が起きているのは…マグマの可能性があると考える」 ・下鶴会長・マグマが地表に噴き出す可能性については「わからない」としている。 ・荒牧教授・単成火山の特質として、一度噴火があった火口は再び活動することではなく、マグマが地表に出る場合は、これまでにない全く新たな地点になるはずという。 ②微動は火山活動か 噴火予知連 厳重な監視体制敷く ・下鶴会長・「…微動は地下のマグマ活動による可能性があると考えられる」との会長コメントを発表…コメントは「現在、直接に火山活動を示す表面現象は認められていない」 ③困惑…未知のデータ次々 「群発下の有感微動は初」 会見で下鶴会長予知連会長のコメント 「…微動は地下のマグマ活動による可能性があると考えられる。しかし、現在、直接に火山活動を示す表面現象は認められていない。今後も注意深く監視していく必要がある」 ④原因マグマの公算 伊東・連続微動で予知連見解 地殻・海水変化なし ・下鶴会長・噴火の可能性については「今のところ火山活動を示す地殻や海水の変化は認められない」としながら、今後も注意深く監視していく必要があることを強調した。 ・荒牧教授・噴火の可能性も否定できない」 ・予知連・予知連では「直ちに危険と言える状態ではない」としている。 予想難しく 予知連苦悩 解説 …連続微動は、多くの専門家がマグマの活動に関連したものと推測しているが、今後の動向については、予想が難しいとしている。微動発生メカニズムそのものが解明されていないうえ、付近一帯にある火山群は世界的にも珍しいタイプであり、どのような火山活動を示すかほとんど研究が進んでいない…下鶴会長も連続微動のメカニズムについて聞かれると「三原山や桜島に例があるが、いずれも噴火中のこと。今回のように火山活動が表面化していないケースは初めて。観測すればするほど初めてのデータが出てきて解釈に苦しむ。一つ一つ解決して予知の実力を付けていくしかないのでは」と苦悩の表情を浮かべた。
13 夕	①微動は小康状態に 伊豆東部、異変情報なし ・窪田課長・（13日午前0時以降微動が観測されていないことについて）「どういう理由なのか判断できない」という。 ②「微動」小康状態に 気象庁「まだ安心できない」 ・気象庁・「（微動、群発地震とも）いい傾向だが、数時間の傾向だけでは沈静化と言えるかどうかわからない」 ・窪田課長・「昨日午後から微動がかなり少なくなり、微動発生前の状態に戻りつつあるかもしれない」としながらも「まだ安心できる状態ではない」と説明。 ③海底調査始まる 微動なく小康状態 微動は、13日に入って一回も観測されず小康状態を保っている。また、群発地震も活動をさらに弱め、身体に感じる有感地震は丸一日以上観測されていない。しかし気象庁では「まだ安心できる状態ではない」としており…

また「毎日新聞」には、この日の会長発言が次のように伝えられている。

【火山噴火予知連会長は “一過性”

．．．．午後11時に緊急記者会見した（下鶴）会長は、微動の原因について、「活発な群発地震で生じたとみられる断層から地下に浸透した海水が、マグマから出る高温ガスによって急激に沸騰し、その運動によって引き起こされた」との見解を明らかにした．．．（中略）．．．さらに①群発地震の活動が過去最大級に活発化し、断層も大きくなった、②震源域が、よりマグマが多い陸地に近かった—と連続微動発生の原因を推定した。マグマ噴出の可能性については「マグマがやや動き出していることは否定できないが、微動は過渡的な現象だと思う。微動が連続して起これば心配しなければならない」と、今回は一過性の現象だとの見方を示した。気象庁は同日夕、群発地震の事実上の終息宣言を出していた】（「毎日新聞」7月12日）

つまり各紙は、下鶴会長の発言のうち、「一過性」とか「噴火の危険、今ない」とか断定的な表現をその見出しに掲げたのである。しかし、この発言は上にみたように、会長がはじめから言おうと思って発表したものではなく、記者が質疑応答のなかで会長から引き出した発言だった。それが、新聞でこのようにとりあげられることにより、一つの「予知」情報として一般に伝わるようになってしまう。

このように、「予知」関連情報がいわば「製造」されてしまう背景には、いくつかの点を考えることができる。

まず第1に正確な予知は技術的に困難であること。にもかかわらず、社会の「予知」情報に対するニーズはきわめて高い。具体的には、予知連絡会などで出すコメントや統一見解はあいまいなものとならざるを得ないが、住民としてはそれでは納得できないということになる。そこで、マスコミはこのギャップを埋めるために、結果として、11日の下鶴会見や専門家の話が紙面を飾るという事態になる。第2に、これは何も地震・噴火予知に限ったことではないが、マスコミはいわば「ニュース製造の方法」を持っている、ということがある。新しいニュースがない場合でも、インタビューや記者会見などでニュースを作り出すことはよくあることであり、政局の行方、殺人事件の行方、何にせよ関心をひくニュースには、専門家の話や解説が出てくる。今回も、方法としてはそれと同じことが行われたのであった。

(3) 群発地震・海底噴火の「予知」に関する新聞論調の分析

1) 群発地震発生

次に、今回の群発地震や海底噴火の「予知」関連情報に関する、各新聞の評価についてみてみよう。

まず、群発地震が活発になった7月上旬に「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」の3紙がそろって、社説のなかで地震に対する予知・対策について論じている。その内容には共通する部分も当然見られるが（たとえば、日頃からの準備の必要）、こと「予知」に関しては

群発地震は警告する

ガラスに力を加えると、一面にバリッと割れてしまう。しかし、細かなひび割れが次々さん入っているガラスだと、部分的にグシャと小さな穴が開く程度にとどまる。

群発地震の起こる地殻は、このひび割れのあまのうすのようなものらしい。ななくさんある断層が小さくさん入すれて、狭い地域内で数多くの揺れを引き起こす。

伊豆半島の東方沖で、先月末から続いている

る群発地震では、体に感じる地震がすでに三百回近くになっている。かわらが落ち、道路の割れ目も広がった。地元住民は、不安な日夜を過ごしている。

このような不安は、じつは他人ごとではない。群発地震のおこる場所は北海道東部から東北、長野北部にいたる地帯、千葉県沖、さらに大分から熊本にかけての地帯など、あちこちに見られる。いつでも群発の可能性と隣

り合わせにいらるというもい。

しかし、一般の不安というのはそろしたと以上だ。このななくさんの小さな地震が明日にも大きな地震になるのではないか、という心配だ。そろそろななくさんおこる東海地震の前震ではないか、という不安もあふえないう。気象庁や研究家は、大地震とのつながりには肯定的だが、群発の規模や震源域の広がりについて佳境よく断言を置いている。

専門家としても「絶対に大丈夫」と断言できないのがつらいところだろう。それがまた、不安を呼ぶということになる。

このような不安をかかえて日夜の揺れに耐えている人はかりでなく、そのニュースを速く耳聞きしている私たちの対して、今回の群発地震は速回しに、改めていくつかの警告を与えていると受け止めた。

その一は、東海地震に代表される巨大地震への備えに「中だるみ」はないか。十年前に「いつ起きても不思議はない」といわれたこの地震に備えて、警戒宣言を出す法律が厳しい、東海地域を中心に防災対策も進められてきた。だが、たとえば津波からの避難場所さえまだ十分に確保されていない。住民の警戒心も薄れがちだといふ。

これは、恐怖に勝てず当面の対応を急いだことの限界を示すものかもしれない。危険性を冷静に見定めて、住民自身はひろく自治

体、国も力を結集してはいる。

その二は、地震情報の伝え方についてである。警戒宣言が出せるほどに予知のできそうな地震は、いまのところマンニチードロウスといふべきはすべの大規模地震だ。これをあれると、群発地震がさらに大きな地震にもときにはなもって分かるはずだという錯覚に陥ることもない。逆に、いたるに不安を感じることもなる。

その三は、震度4から震度の地震は、いつ来てもいように防災の心構えと対策をきちんとしておく必要がある。伊豆半島の東側では、この十年間毎年、群発地震が発生している。住民は慣れているというが、それは万全の防災対策に裏打ちされていることなら結構だが、そうであらうか。

震度4-5の地震は、ヒヤリとするほどの揺れだ。場合によっては死者が出る。全国的に、年に十数回は起こる。この程度の地震は、どこにいても安全対策に自信をもって迎えられるようにしたい、と思う。

最近、日本列島の地震活動は「異常に」静かだ、という専門家の見方がある。東京圏下で二十年以内に、中規模の地震が起こる可能性が強い、と中央防災会議の専門委員会が見解をまとめたのは昨年春。観測体制の充実から家庭の備えまで、そのために残された時間は少ないのではないだろうか。

少なからぬちがいがいるといえる。

「朝日新聞」の7月8日の社説「群発地震は警告する」では、今回の群発地震を、①10年来言われ続けている東海大地震への備えの「中だるみ」、②地震情報の読み方の問題、③日ごろからの防災の心構えと対策の必要の3点に関して、われわれに警告を与えるものとして受け止める必要性を指摘している。なかでも、他紙と比較して興味深い点は、②の点についてであり、そこでは「警戒宣言が出せるほどに予知のできそうな地震は、いまのところマグニチュード8クラスというケタはずれの大規模地震だけだ。これを忘れると、群発地震がさらに大きな地震になるとときには前もって分かるはずだという錯覚に陥ることになるし、逆にいたずらに不安を感じることにになる」と、現段階での「予知」の水準を冷静に認識する必要を説いている。つまりこの社説は、「科学の現実」の立場から、「一般の認識」がもたらす危険性（予知に対する適度の期待から生じる準備・対策の欠如や、反対に必要以上の不安のかき立て）に対して警告を発しているといえよう。全体的にも、「朝日新聞」の論調は今回の群発地震に限って論を展開するのではなく、地震災害の危険の多い日本全体の問題として、長期的観点からの安全対策が必要不可欠であることを主張している（図19）。

一方、7月9日の「読売新聞」の社説「ぐらっと来るのにどう備えるか」のなかでまず目につくのは、「予知」の可能性に関しかなり肯定的だということ、つまり人々が群発地震の後にくるのではないかと恐れている大地震を予知することはかなりの程度可能である、との前提のもとに論議が展開されているようにみえることである。そこでは、「この地域の地震活動はよく研究され、観測網も整備されている。群発地震についても10年間の観測実績がある。現在の群発地震が大地震の前震でないかどうか、専門家はよく見張ってほしい」と、予知に対する期待が述べられている。さらに、「前震だと思われる現象をキャッチしたら、地震予知連絡会は適切に対応してもらいたい。“怪情報”が飛ぶと、行楽シーズンをひかえた観光業者が迷惑する」とも述べられている。予知連絡会から出される情報のあいまいさへの批判（しかし、下鶴大輔・火山噴火予知連絡会会長が述べているように、科学としての予知が「起こるか起こらないか」の問題ではなく、確率の問題であるかぎり、あいまいさは避けられない）と、それが原因となるデマの発生に対する批判は、これより後の読売新聞の論調にも現れてくる。ここで興味深いのは、「朝日新聞」とくらべてみた場合に、「読売新聞」の社説は「科学の現実」よりは「一般の認識」の視点から語られていることである。現段階での予知の困難さを指摘するのではなく、これまでのデータの積み重ねから予知が可能であるように論じる仕方は、その顕著な現れであるといえよう。さらに地震への恐怖が、観光業界へダメージをもたらすことへの危惧の表明は、来るかどうかわからない危険（確率の問題としての地震）を気象庁やメディアが云々することによって、日常生活に支障をきたす（地震を恐れての観光客の減少）ことへの地域住民のいらだちの感情を代弁しているともいえよう。このような「読売新聞」の社説の論調は、たしかに地域住民の琴線に触れるものであるが、「予知」の効用と限界をふまえた真の安全対策の確立に寄与するメディア報道ということを考えたとき、ある種の問題を含んでいるように思われる（図20）。

次に、「毎日新聞」の7月11日の社説「伊豆群発地震が問うもの」では、伊豆地域にはこれまでに大地震が数多く発生したことを指摘したうえで、「しかし、これだけの過去の記録やさまざまな観測データを持ちながらも、私達は还真的に地震を予知することが出来ない。残念ながら、それが地震学の現在の実力なのだ」と述べ、現在の地震予知の水準が、一般の人々が考えるほど高くないことを指摘している。つまり、ここでの論調は「科学の現実」に則ったものであるといえよう。さらにこの社説では、予知の困難を指摘したうえで、必要とされるべきことは「近い将来の大地震を想定して十分な備えをする」ことであると論じる。さらに、このような備えは、現在群発地震に見舞われている伊豆地域だけの問題ではなく、地震多発国である日本の全国民の問題であるとも論じる。このような論調は、「朝日新聞」社説の論調と相通じる部分が多いといえよう。また、「大地震は必ずやってくる。地震そのものを制御することは不可能だ。しかし、地震の影響を少なくともとどめることはできる。二次的な災害を防ぐことも可能である」という指摘は、今回の伊豆の群発地震だけをとらえた短期的視点に基づくものではなく、伊豆の体験をもとに長期的な観点からの全般的な安全対策を高める必要を説くものであるといえよう（図21）。

2) 連続微動から海底噴火へ

ところで、上に述べたような社説が出された段階では、群発地震だけが問題とされていた。しかしその後、状況は群発地震から連続微動の発生へと移行していき、7月13日にはついに海底噴火が発生する。この過程で「予知」は、地震予知連絡会だけの問題でなく、火山噴火予知連絡会の問題ともなってくるのであるが、結論的にいえば、住民が期待するようなかたちでの海底噴火の「予知」を行うことは出来なかった。もちろん、このこと自体は、今回のような事態は前例がなく、十分なデータを持ち得なかったことを考えれば、やむを得なかったことであるが、気象庁から伊東市への情報連絡のまずさ等もあって、予知連絡会や気象庁に対するさまざまな批判が生じることになった。そこで次に、連続微動発生以後、各紙において「予知」がどのようにとりあげられ、どのように評価されたかをみていく。

7月12日の夜から始まった連続微動は、伊東市民に火山噴火の危機感を与えた。当然、市民の予知連絡会に対する期待は、「火山噴火が起こるのか否か、また起こるとしたらいつどこで起こるのか」という事前の予知である。地域住民にとって、避難の問題は生活全般にかかわるものであるから、的確な予知を期待するのは心情的に当然のことと思われる。しかし現実には、今回の連続微動は初めての事態であり、十分なデータを欠くため事前の噴火予知はきわめて困難だった。そして、災害の予知が経験科学の論理に基づき、確率論的に物事を考えていくものであるかぎり、データが不足していれば、「何とも言えない」、「わからない」という発言は、むしろ当然のことである。しかし、こうした現実にもかかわらず、13日に起こった海底噴火を事前につかめなかったことは、さまざまなかたちで予知連絡会に対する批判を生むこととなった。

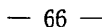
新聞紙面においてまず第1に指摘されたのは、連続微動が起こった段階での予知連絡会の「戸惑い」であった。「下鶴会長、戸惑いの表情」（「読売新聞」）、「困惑 未知のデー

タ次々」（「朝日新聞」），「予想難しく予知連苦悩」（「日本経済新聞」）といった各紙の見出しは、その記事内容としては「現段階での予知の困難」を指摘しているものの、全体的にみると、少しでも正確な情報を地域住民が欲している状況のもとでは、“頼りない予知連”という印象を与えるものであった。

そして次に指摘されたのは、7月13日の海底噴火を事前に「予知」できなかったこと、また「前兆」ともいえるデータ（異常隆起）をあらかじめ得ながら、それを十分に生かせなかったことであり、このことが予知連絡会に対する批判をいっそう高めることになった。なかでも、「読売新聞」の7月14日「観測の裏かく噴火 難しい予知」という見出しの記事は、噴火前の11日の下鶴会長の「マグマが動き出した疑いが強いが、前兆は認められず、マグマ噴出は今のところ心配ないと思う」という発言や、12日の「嚴重な警戒が必要だが、直接に火山活動を示す表面現象は認められない」といった噴火の可能性に対して否定的だった予知連絡会の態度について述べたうえで、13日の地震予知連絡会の強化地域部会ではマグマの異常な動きをとらえたデータが報告されていたことを指摘し、地震予知連絡会のありかたに対して批判的論調となっている。

また「読売新聞」は15日、「伊東沖・海底噴火 避難体制を万全に 難しい科学的予知 無用の危機感あおるな」との記事で、噴火の危険におびえる地元住民の立場から、さまざまな立場の専門家が噴火の危険性に関して発言するため、一般の人々は困惑してしまうこと、さらにそのような不確かな情報が増えることによって、根拠のないデマが生まれる危険性があることを指摘している。このような指摘は蓋然性でものをいう「科学の論理」が、一般の人々にとっては「あいまいさ」を意味し、そのことが的確な予知にもとづく安全対策の充実ではなく、反対にデマ発生危険を高めるという側面を明らかにしていて興味深い。さらに「読売新聞」は、続く19日の「検証 7.13海底噴火予知連、無念の連敗」との見出しのもとで、前兆とも言えるデータを持ちながら、マグマの活動を予知できなかったとして、三原山噴火に続き「連戦連敗」との表現で予知連の批判を行っている（図22）。

一方、他紙の論調は、「読売新聞」ほどには批判的でないように思われる。たとえば、「朝日新聞」の7月14日の「予知は難しい 会長ら苦渋の表情」という記事では、下鶴会長の記者会見での質疑応答の模様を掲載し、直接の評価を控えている。「毎日新聞」は15日の紙面において、現在の火山監視体制そのものの不備を指摘している。そこでの論調は、今回の予知の不成功を批判するというよりも、長期的視点から監視体制の強化の必要を強調しているといえよう。また同日の社説「海底噴火に万全の備えを」でも、「今にして思えば、先月末以来の群発地震とそれに続く微動は、地下のマグマの動きを反映した噴火の前兆現象であった。そのことがほとんど指摘されなかったことに、火山予知体制の不備を感じずにはいられない」と述べるものの、議論の矛先は今回の予知連のありかたへの批判にではなく、今後の観測体制のいっそうの強化の必要性に向けられている。



3) 情報伝達のありかた

群発地震から連続微動を経て海底噴火にいたる一連の過程で、もう一つ興味深いのは、地震予知そのものではなく、予知に関する「情報の流し方」に関する批判や問題提起がなされたことである。このことは、「科学の現実」と「一般の認識」とのズレの問題に加えて、両者を媒介するものとしての「行政のありかた」を、今後の安全対策の確立のために考えていくのが必要不可欠であることを示唆しているといえよう。つまり本来ならば、さまざまな「予知」関連情報を、行政サイドは住民の安全確保のために有効に利用しなければならないのであるが、今回の伊東のケースでは逆に、予知を担当する気象庁と地元の行政とのコミュニケーションがうまく行かなかったために、住民の不満や不安を高めてしまった側面があった。各紙は、そのような情報伝達の不備を安全対策における問題として指摘したが、何よりもインパクトが強かったのは、行政サイドの斉藤慈与史・静岡県知事が、予知連絡会に対してあからさまに不満を表明したことであろう。

斉藤知事の批判は、①7月13日の地震予知連絡会強化部会で、伊東市周辺の隆起のデータが報告されているながらマグマ活動を予知できなかった、②気象庁と伊東市とのホットラインはもっと早くから設置されるべきであった、の2点に向けられている。このうち、①に関しては、下鶴火山噴火予知連絡会会長や浅田地震予知連絡会会長がその批判に答えているように、異常隆起という1つのデータだけをもって、噴火を予知するほどの水準に現在の予知科学が達していないことを考えれば、今回の海底噴火を事前に予知できなかったことは、予知連の失敗というより科学の限界として受け止めるべきであろう。つまり行政側にも「科学の現実」よりは「一般の認識」に近い科学観（予知に関する過度の期待）のあることが、斉藤知事の発言からうかがえる。

それに対して、②に関する批判は、連続微動や海底噴火の発生以前にはさほど問題にされなかったことであるが、斉藤知事の発言を契機に、各紙の紙面にもこの点を批判するものが現れ出した。たとえば、「読売新聞」は18日の「予知連の対応に不満 静岡県知事『異常隆起あったのに』」という記事に斉藤知事の発言を引用する形で、「（斉藤知事は）『情報伝達など、現実に即した速やかな対応が出来ていない』と、気象庁と両予知連の対応の遅さに強い不満を表した。特に情報伝達に関しては、気象庁と県災害対策本部、伊東市災害対策本部を結ぶホットラインを取り上げ、気象庁―伊東市間が『電話でつないでも対応できるかどうか分からない（気象庁）として、ファクシミリによる「音声」なしの回線になったことにも不満を述べた」（「読売新聞」7月18日朝刊）と論じ、さらに19日の「検証 7.13海底噴火

情報伝達 市の広報は後手に回る」でも、ふたたび市の住民への広報活動の遅さ、その原因と考えられる気象庁と市との間の情報交換の遅れを指摘している。一方、「毎日新聞」も18日の紙面に斉藤知事の予知連批判に関する記事を載せ、また20日の「難しい直前の予知」では、災害予知の科学的困難さに加えて、社会的困難とでもいうべきもの、つまり予知を出すことにともなう地域住民への多大の影響（不安の増大・経済活動の阻害等）の重要性を、気象庁の職員の発言を引用する形で述べている。

さらに「毎日新聞」は、21日のニュース三面鏡「伊東沖火山の噴火予知 予知連に住民の不満と期待」において、斉藤知事の批判と、それに対する気象庁側の反論を掲載している。しかし、ここでの議論は主にさきにのべた斉藤氏の批判の①の点に関するものであり、情報伝達の問題はとりあげられていない。全体としての論調は、「斉藤知事がいう『予知』は一般に直前予知と呼ばれ、発生場所、規模に加え、数時間から数日間以内の単位で時期を特定することが要求される。しかし現在、日本だけでなく世界中で、火山噴火予知は多くの場合できていない」という記述に明かなように、さきに紹介した社説の場合と同じく「科学の現実」の立場から、予知への過度の期待の「無理」を指摘するものとなっている。

このように、7月初めの群発地震の段階から連続微動、海底噴火へと事態が移行して行く過程で、予知報道に関して各新聞の紙面においてとりあげられた内容も、「事前の予知は可能か」という科学の問題から、「的確・迅速な情報伝達の不可欠性」という社会の問題へと広がって行ったように思われる。それは当然のことながら、実際の災害時に行政側から出される情報が遅れたり、曖昧であったために人々のニーズに答えられなかったことの反省に基づくものであったといえるであろう。

2 章 伊東沖海底噴火と住民の対応

1 アンケート調査の概要

1 章でくわしく述べたように、1989年6月30日、伊東半島東方沖に発生した群発地震は、7月9日にマグニチュード 5.5の地震を記録した後、11日には激しい連続微動に変わり、そして13日には、伊東沖3キロの地点で海底噴火が発生する、という異常な展開となった。幸いにして、この海底噴火は人的・物的被害を生じなかったが、連続微動や海底噴火という予想もしなかった事態に直面した伊東市民の不安は大きく、このこともあって、7月15日には、海底火山の再噴火による津波の発生を懸念した伊東市が、津波に対し注意を喚起する情報を流したところ、いますぐ津波がくると誤解した住民が、市役所に問い合わせたり避難所に避難する、という事態も発生した。

このアンケート調査は、伊東市のなかでも、海底噴火とそれにとまなう津波がとくに懸念された宇佐美地区を対象として、群発地震→連続微動→海底噴火→津波情報さわぎという、一連の事態における住民の心理と行動を調べたものである。

調査は、1989年9月から10月にかけて、伊東市宇佐美地区の1007世帯を対象に、留め置き法により実施した。調査対象地域と調査票回収数および回収率は表1に示す通りである。なお、以下では、1章の記述を抜き書きして事態の経緯を簡単に追いながら、アンケートの結果を紹介していく。事態の経過の詳細は、1章を参照していただきたい。

2 群発地震に対する心理と行動

(1) 過去の群発地震との比較

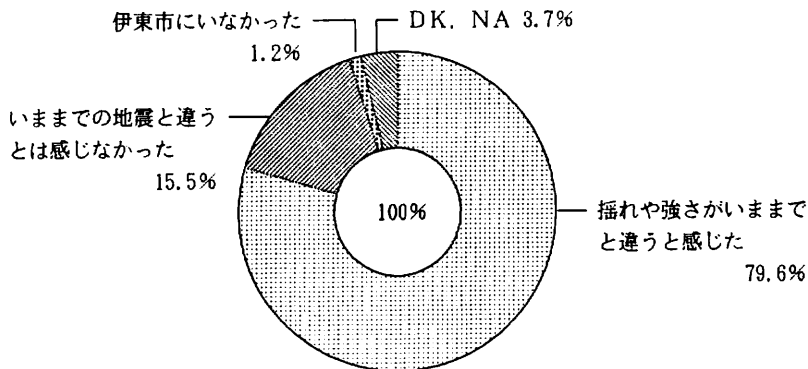
1989年6月末から7月はじめにかけて、伊豆半島東方沖に激しい群発地震が発生した。これは「伊東群発地震」と呼ばれ、昭和53年以降すでに19回も発生しているが、6月30からはじまった今回の群発地震は地震回数がきわめて多く、震源の深さも5キロ程度とかなり浅かったため、伊東市ではいままではなく激しい揺れとなった。伊東市にはしばしば群発地震が起こるため、市民の多くは地震慣れしているが、今年は多少事情が異なったようで、有感地震の頻度がふつうよりずっと多く、また揺れも下から突き上げるような縦揺れがほとんどだったため、これはいつもと違うぞと感じていた住民が多かったという。

われわれのアンケート調査でもこのことがはっきり現れており、今回の地震と過去の地震との比較をしてもらったところ、「いままでの地震と違うとは感じなかった」人は15.5%にすぎず、79.6%の圧倒的多数が「揺れや強さがいまままでと違うと感じた」と答えている（図1）。

表1 伊東沖海底噴火に関するアンケート調査の調査対象地域
(宇佐美地区)と回収状況

調査対象地域	配付数	回収数	回収率 (%)
留 田 東 区	101	61	60.4
留 田 仲 西 区	101	91	90.1
城 宿 4 区	147	123	83.7
城 宿 5 区	130	99	76.2
八 幡 3 区	113	101	89.4
初 津 1 区	80	75	93.8
中 里 2 区	159	135	84.9
桑 原 1 区	176	174	98.9
計	1,007	859	85.3

図1 今回の群発地震と過去の地震との比較 (N = 788人)



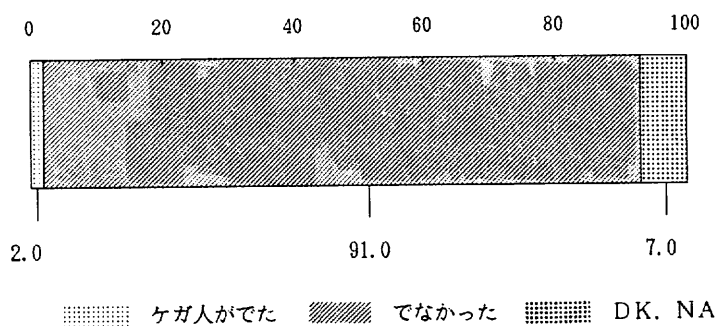
(2) 群発地震の被害

そして、7月9日午前11時09分、今回の群発地震としては最大のマグニチュード5.5の地震が発生した。日曜日の昼前に起こったこの地震は、市役所の地震計で震度6(284ガル)を記録し、家具倒壊によるけがや、沸騰した油による火傷など負傷者22名の人的被害を生んだほか、伊東駅・宇佐美駅付近など7ヵ所のガス漏れ、宇佐美全域など2400世帯の停電、屋根・外壁など1445件の家屋被害を生じ、今回の地震・噴火における最大の被害となった。

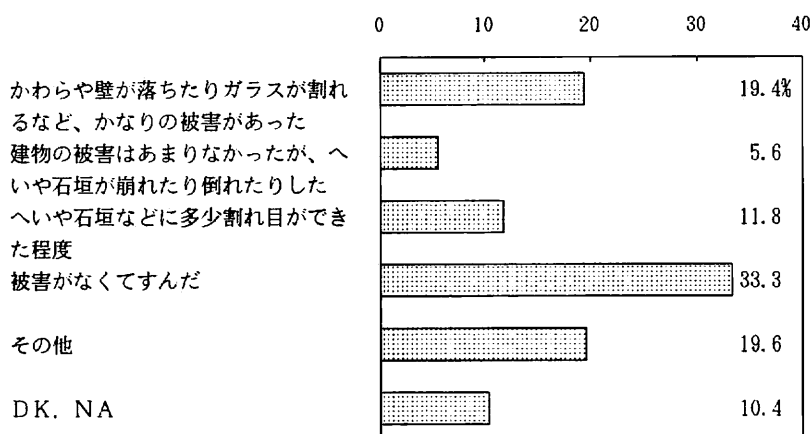
アンケート調査では、この地震による被害をたずねた。まず人的被害としては、「けが人が出た」という回答は2.0%であり、一方、家屋・へい・宅地などの被害は「かわらや壁が落ちたりガラスが割れるなどかなりの被害があった」が19.4%、「建物の被害はあまりなかったがへいや石垣が壊れたり倒れたりした」が5.6%と、合わせて4分の1の世帯が構造物の被害を受けており、また家具などの被害は、「家具がいくつか倒れ、食器やビンなどがこわれた」が28.3%と、構造物被害と合わせておよそ5割の世帯が被害を受けており、物的被害はかなり大きかったことがわかる(図2)。

図2 7月9日の群発地震による被害（N = 859人）

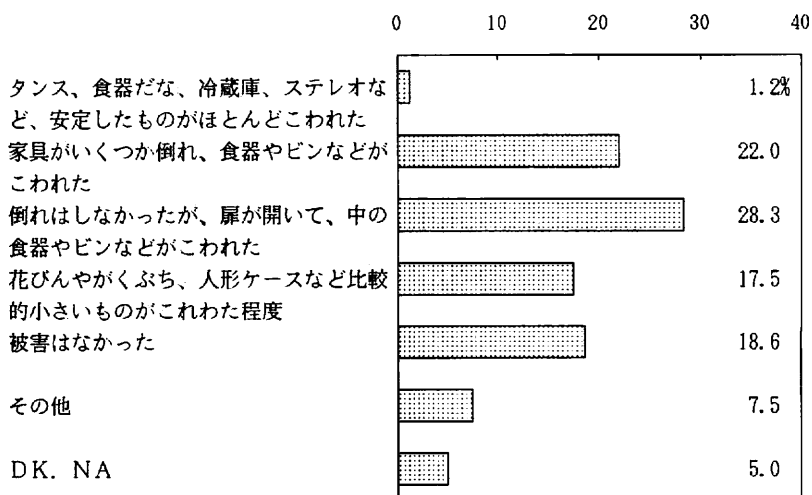
1. 人的被害



2. 家屋・へいなどの被害



3. 家具・食器などの被害

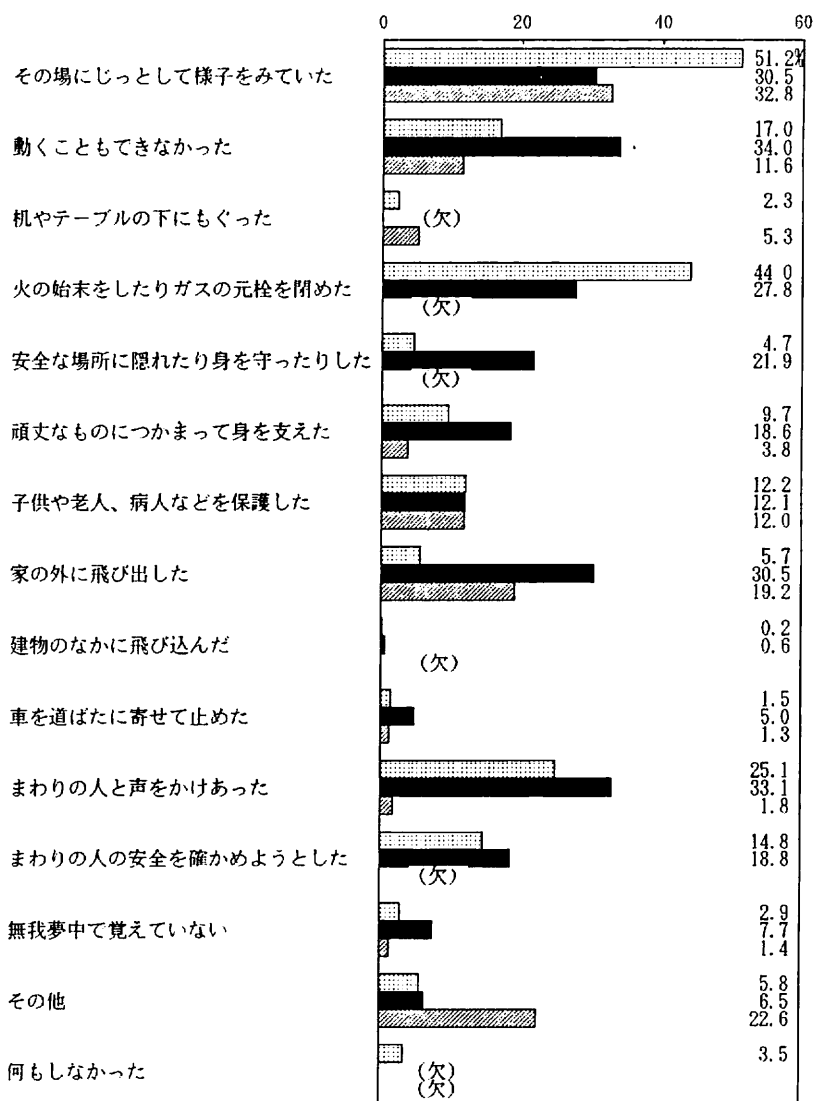


(3) 群発地震時のとっさの行動

次に、群発地震時のとっさの行動をみると、「動くことも歩くこともできなかった」という人が17.0%あり、これは揺れの大きさを示すものといえるが、それ以外の行動をみると、「その場にじっとして様子をみていた」人が51.2%、「火の始末をしたりガスの元栓を閉めたりした」人が44.0%と比較的冷静な対応がめだった。

図3は、わたしたちがかつて調査した長野県西部地震（昭和59年9月14日）における長野県王滝村、および千葉県東方沖地震（昭和61年12月17日）における千葉県市原市・長南町・長生村のデータとくらべたものであるが、これをみても宇佐美地区住民の対応が落ち着いて

図3 群発地震時のとっさの行動（N = 859人）
 <長野県西部地震時の王滝村（中）、千葉県東方沖地震時の市原市・
 長南町・長生村（下）との比較>



いたことがわかる。とくに「家の外に飛び出した」人が5.7 %と非常に少ないのが注目されよう。これは、今回の群発地震の揺れが長野県西部地震や千葉県東方沖地震にくらべて小さく、かつ局部的だったことを示すとともに、宇佐美地区住民がしばしば群発地震を経験しているため、適切に地震に対処できたことを示すものといえよう。

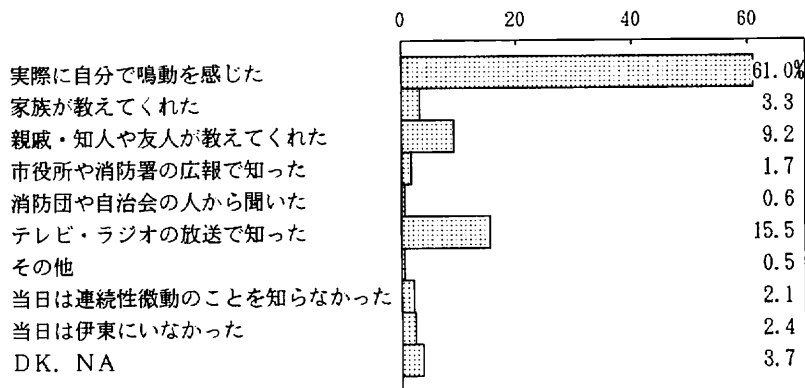
3 連続微動発生時の心理と行動

(1) 連続微動発生時の心理と行動

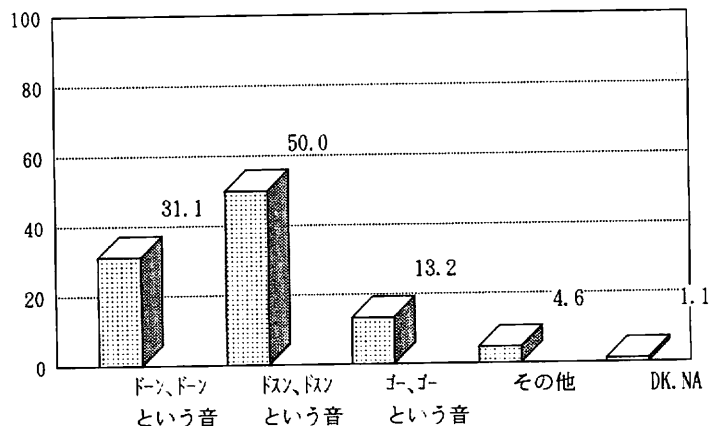
この群発地震は7月10日以降、急激に勢いを減じていった。しかし翌11日、今度は誰も予想しなかった「連続微動」が発生した。この連続微動は、11日午後8時38分頃、伊東市鎌田や熱海市網代などの高感度地震計で観測されはじめた。そして、9時頃から微動の振幅が大きくなり、いったん9時48分に休止した後、11時35分頃からふたたび断続的な微動がはじまった。微動は関東一帯で観測されるほど大きなものだったが、鎌田や網代ではとりわけ強く、

図4 連続微動の情報源

1. 連続性微動の情報源 (N = 859人)



2. 連続性微動のようす (N = 859人)



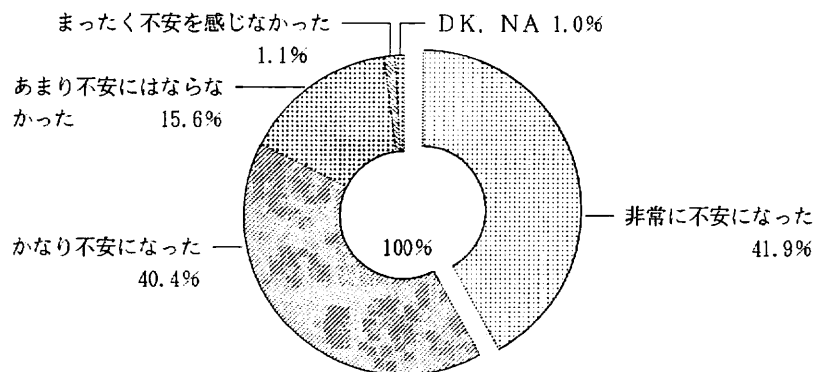
地震計の針が振り切れるまでになった。

わたしたちのアンケート調査では、この連続微動の発生を最初にどうして知ったかをたずねた。当然ながら、「実際に自分で鳴動を感じた」という回答がもっとも多く61.0%を占めていたが、一方、「テレビ・ラジオの放送で知った」という回答も15.5%あったことが注目される。また、「実際に自分で鳴動を感じた」人に、それはどんな感じだったか質問すると、「ドスン、ドスンという工事現場のくい打ちのような音」という人が50.0%と最大で、次に「ドーン、ドーンという大太鼓のような音」(31.1%)となっていた(図4)。

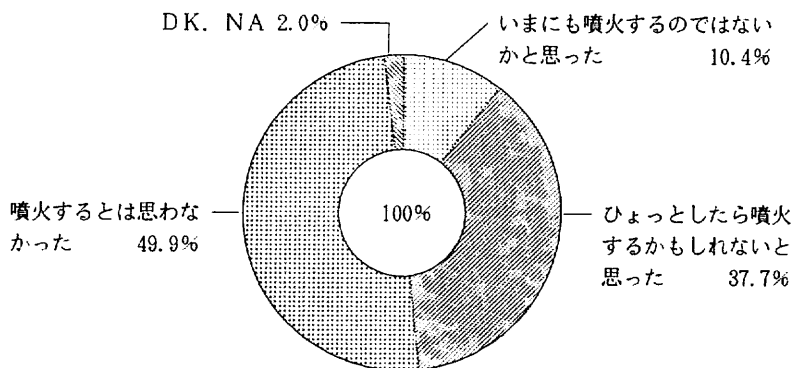
次に、連続微動を知ったときの心理をたずねた。まず不安度については、「非常に不安になった」人が41.9%、「かなり不安になった」人が40.4%と合わせて8割以上の住民が不安を感じていた。また、この連続微動が発生した初期の段階から噴火の発生が懸念されていたが、住民の側でも、微動を知ったとき「いまにも噴火するのではないと思った」人が10.4%、「ひょっとしたら噴火するかもしれないと思った」人が37.7%と、ほぼ半数が噴火の発生を心配していた(図5)。

図5 連続性微動を知ったときの不安度と噴火の予想 (N = 788人)

1. 連続性微動を知ったときの不安度

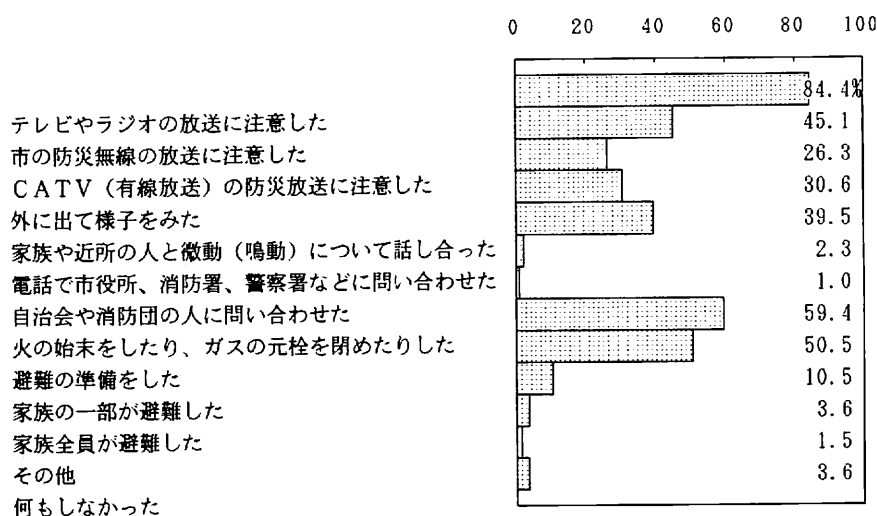


2. 噴火の予想



最後に、連続微動を知ったときの住民の対応行動をみると、「テレビやラジオの放送に注意した」（84.4%）、「市の防災無線の放送に注意した」（45.1%）、「家族や近所の人と微動について話し合った」（39.5%）など、情報確認行動が圧倒的に多くなっている（図6）。後にも述べるように、生命や財産にかかわる重要な情報を聞いたとき人々はただちに避難などの対応行動をするのではなく、まず事態はどうなっているか、またどう行動したらよいかについて、さまざまな情報活動をするのがふつうであり、上の結果もこのことを示すものである。

図6 連続性微動を知ったときの対応行動（N = 859人）（複数回答）



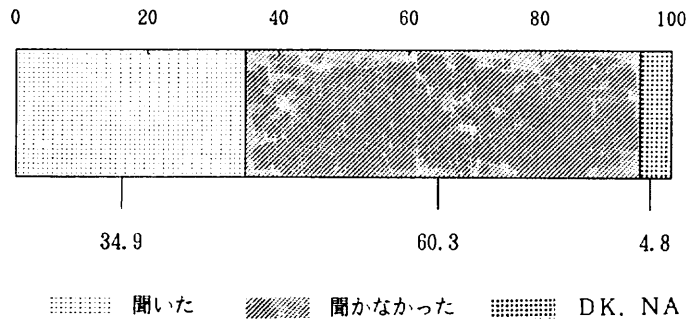
ところで、連続微動を知ったときの行動として注目すべきなのは、避難行動および避難準備行動である。まず避難行動をみると、「家族の一部が避難した」という回答が10.5%、「家族全員が避難した」が3.6%であり、これを宇佐美地区の世帯実数になおすと、調査時点での同地区の全世帯数は3,601だから、家族の一部が避難した世帯は378、家族全員が避難した世帯は130となり、総計508世帯が避難した計算になる。また、避難準備行動は50.5%と過半数にのぼっており、世帯数にすると実に1,819世帯という数字になる。

4 流言の聴取とその信用度

伊東市では、連続微動が発生した直後、各地で「異常に海の潮が引いた」「地割れが出来はじめた」「火山が爆発するという広報があった」「宇佐美地区に避難命令が出た」など、さまざまな未確認情報（流言）が流れた。昭和59年9月の長野県西部地震や61年11月の伊豆大島噴火では非常に多くの災害流言が発生したが、一般に災害時には、住民の不安を背景として流言が広がることは少なくない。

アンケート調査によれば、連続微動の直後に上のような流言を聞いた人が、34.9%と住民のほぼ3分の1にのぼっていた（図7）。

図7 連続性微動発生時の流言の聴取 (N = 788人)



また、その流言の内容としては、

- ①地震に関するもの（「東海沖地震が発生する」「7月17日から20日にかけて大地震が来る」）
- ②噴火に関するもの（「火山が爆発するがどこに火を噴くかわからない」「大室山が噴火する」「巢雲山に火山脈があり爆発が起きるかもしれない」「須崎から噴火する」「富士山が噴火する」「宇佐美の町の中で噴火が起こる」「初島が噴火した」「湯川のあたりが噴火する」「海の中で噴火して島が出来るらしい」「初津山が爆発する」）
- ③津波に関するもの（「海の潮が引いたから津波がくるかもしれない」「津波が来るから山の手へ避難するように」「大津波が来て海岸ぞいの家は皆流される」「津波が3分以内に来る」）
- ④避難にかんするもの（「市役所では津波が来るから避難せよと放送している」「新井や玖須美方面では避難命令が出て住民が避難を始めた」「一部の部落では皆避難した」）
- ⑤海の異常に関するもの（「海の水が引いている」「宇佐美沖でアワが出ている」「湯川の海岸付近の海底から熱湯が湧いている」「川奈の海女さんが海の中はすごい音がしていると言っていた」「海から煙のようなものが出ている」「海鳥がいなくなった」）
- ⑥その他（「道路に大きく亀裂が出来ている」「山から蛇が出現した」「手石島付近に赤い海老の浮遊物がある」「温泉が止まった」「地面が盛り上がってきた」）

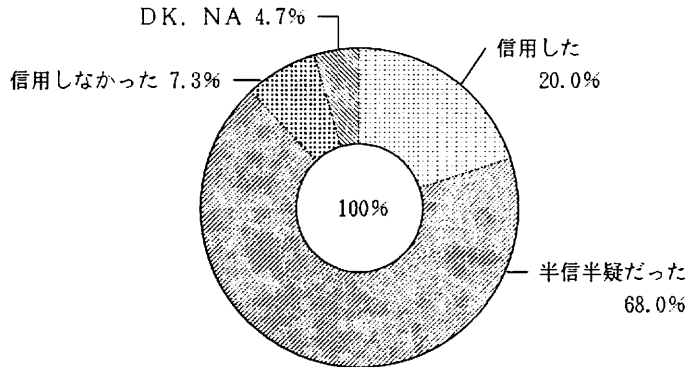
など、多岐にわたっていた。

次に、この流言をきいたときの心理反応をみると、その信用度は比較的低く、この話を「信用した」人は20.0%にすぎず、68.0%の圧倒的多数が「半信半疑だった」と答えている。しかし他方、この話を聞いたときの住民の不安度はかなり高く、「非常に不安を感じた」人が28.4%、「かなり不安を感じた」人が50.9%と、合わせてほぼ8割が不安を感じたと答えている（図8）。

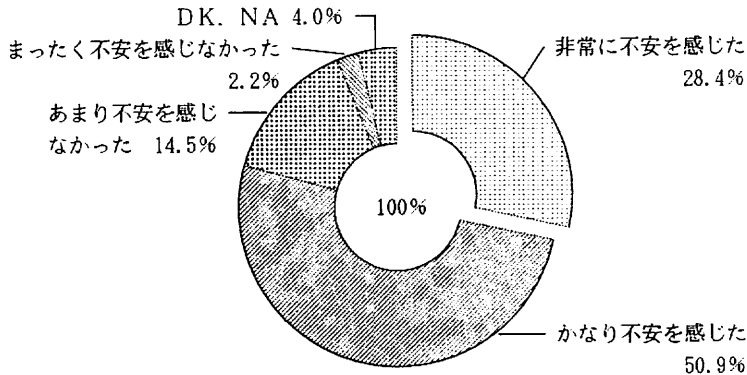
このように、災害流言に対する信用度は低いのに不安度は高いというケースは、きわめて一般的な現象であり、前述の長野県西部地震の場合も伊豆大島噴火の場合もまったく同様の結果が出ている。

図8 流言の信用度と流言を聞いたときの不安度（N = 275人）

1. 流言の信用度



2. 流言を聞いたときの不安度



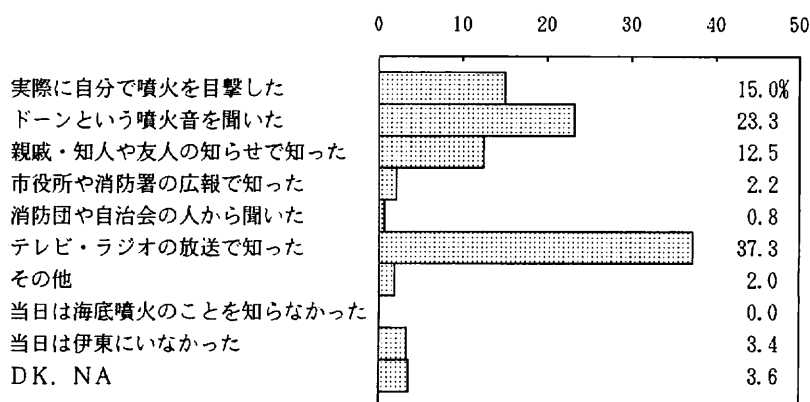
5 海底噴火時の心理と行動

(1) 海底噴火時の心理と行動

さて、連続微動の発生から2日後の7月13日午後6時33分頃、伊東市沖合およそ3キロ付近、水深100メートルの地点において、海底噴火が発生した。またその後も6時40分から45分のあいだに、灰黒色の噴煙をともなう噴火が総計6回続いた。多くの住民が語るところでは、この噴火が起こる直前、下から突き上げるような揺れとともに、海の方からドーンという鳴動が1、2度あったという。これに驚いた市民が外に飛び出してもなく、噴火が起こった。幸いにしてこれらの噴火は小規模だったため、人的・物的被害はゼロだったが、噴火直後には津波の来襲を心配した海岸沿いの住民およそ274人が、東小学校・西小学校など6ヵ所の避難所に避難したほか、翌14日以降には、主に海岸地域に住む寝たきり老人計14名が伊豆高原十字の園・市立老人ホームなどに収容されている。

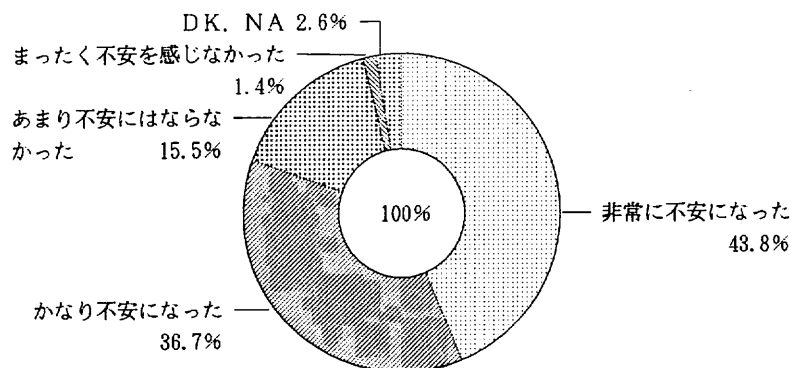
われわれのアンケート調査から、まずこの海底噴火を宇佐美地区の住民が最初にどのようなして知ったかをみると、連続微動のときとは若干異なり、「テレビ・ラジオの放送で知った」とマスコミ情報をあげた人が37.3%と最も多く、次いで、「ドーンという噴火音を聞いて」が23.3%、「実際に自分で噴火を目撃した」が15.0%となっていた（図9）。

図9 海底噴火をどのように知ったか（N = 859人）



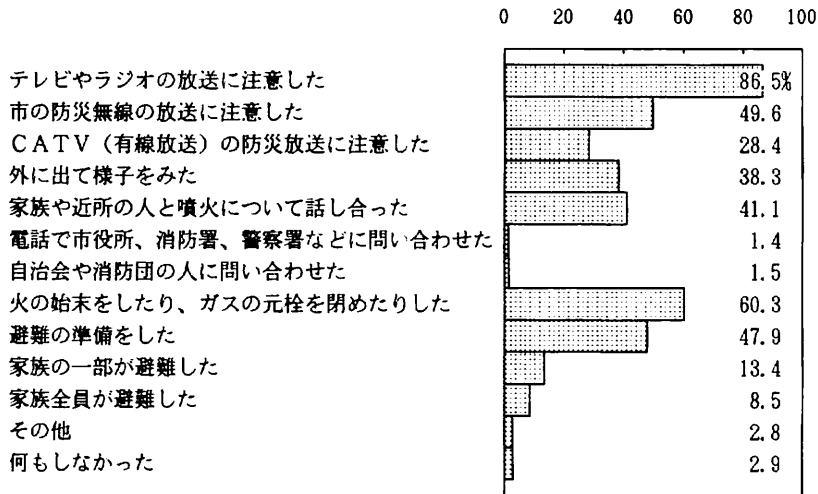
また、住民が海底噴火の発生を知ったときの不安度はかなり高く、「非常に不安になった」人（43.8%）と、「かなり不安になった」人（36.7%）を合わせて8割に達しており、これは、連続微動のときや流言を聞いたときとはほぼ同じ数字である（図10）。

図10 海底噴火を知ったときの不安度（N = 799人）



そして、海底噴火時の住民の対応行動をみると、これも連続微動発生時とほとんど同じであって、「テレビやラジオの放送に注意した」（86.5%）、「市の防災無線の放送に注意した」（49.6%）、「家族や近所の人と微動について話し合った」（41.1%）など、ここでも情報確認行動が最多になっていた（図11）。

図11 海底噴火を知ったときの対応行動（複数回答）



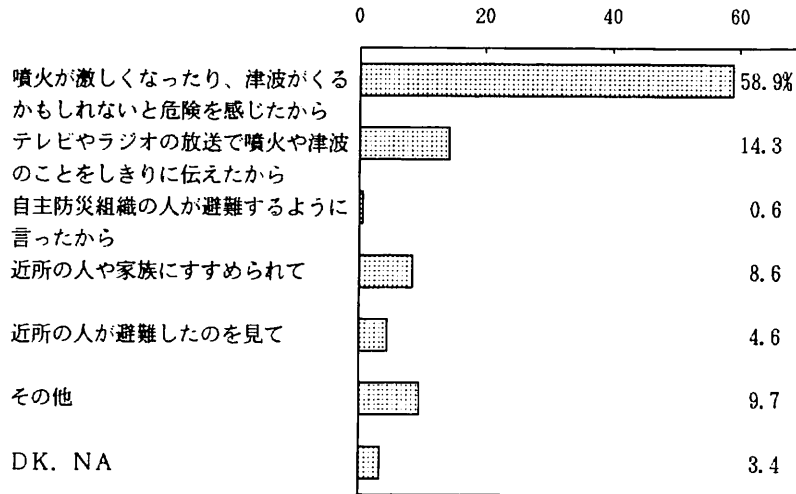
(2) 海底噴火時の避難行動

こうした住民の対応行動のうち、とくに避難行動を取りあげると、この海底噴火のとき「家族の一部が避難した」が13.4%、「家族全員が避難した」が8.5%にのぼっており、これを世帯実数になおすと、宇佐美地区の世帯総数は1,007世帯だから、家族の一部が避難したのが483世帯、家族全員が避難したのが306世帯で、総計789世帯が避難した計算になる。この数字は一般に報道されているよりもかなり多いので、小学校などの公共施設に避難した人のほか、伊東市内外の親戚・知人の家に一時的に避難した人も含んだ数字と考えることができる。

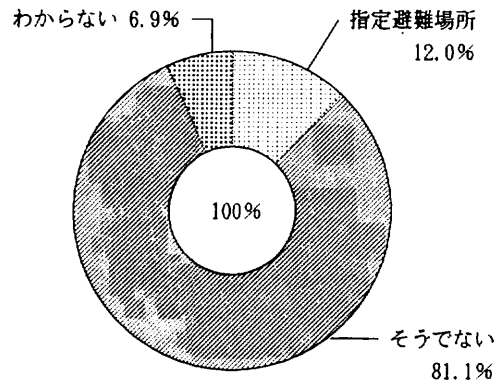
なお、これらの避難した人々に対して避難した理由と避難先をたずねたところ、避難理由としては「噴火が激しくなったり、津波がくるかもしれないと危険を感じたから」がもっとも多くて58.9%、次に「テレビやラジオの放送で噴火や津波のことをしきりに伝えたから」が14.3%となっており、また避難先としては、あらかじめ指定されていた避難場所に避難した人は12.0%と非常に少なく、81.1%の圧倒的多数が指定避難場所以外に避難していた。これは、連続微動のときもこの海底噴火のときも伊東市は避難命令（避難の勧告・指示）を発令しなかったため、危険を感じた住民が自主的に避難を決心し、かつ避難先を選んだことを意味するものである（図12）。

図12 避難した理由と避難先

1. 避難した理由 (N = 175人)



2. 避難先 (N = 175人)



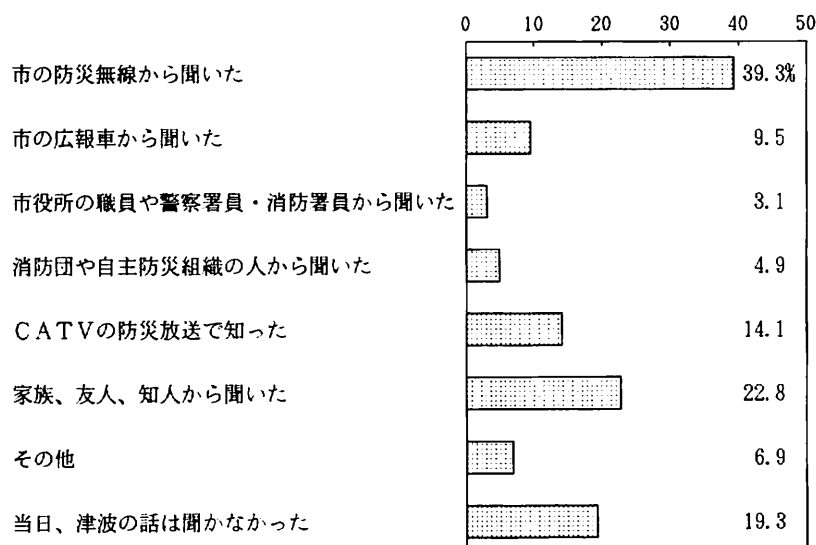
6 「津波情報さわぎ」における心理と行動

(1) 津波情報の情報源と心理的反応

1章でくわしく触れたように、「津波情報さわぎ」は、海底噴火2日後の7月15日午後4時に発生したもので、海底火山の再噴火による津波の発生を懸念した伊東市が、住民に注意を喚起するため、市内各所に設置してある同報無線を通じて、「海底火山の活動により津波の心配があります。海岸付近のみなさん、万一の避難に備え十分点検しておきましょう」という情報を流したところ、少なからぬ住民がこれを「いますぐ津波がくる」と誤解して、市役所に問い合わせたり、避難所に避難したりしたという出来事であった。

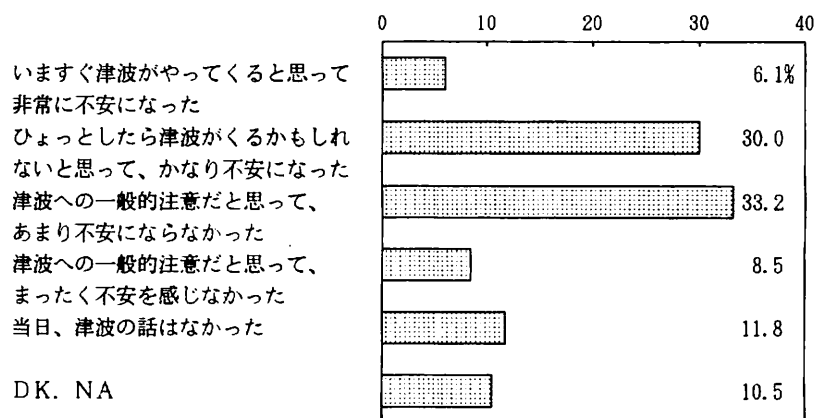
われわれのアンケート調査から、まずこの津波情報の情報源をみると、「当日、津波の話は聞かなかった」という2割を除いて、「市の防災無線から聞いた」人が39.3%と最も多く、次いで、「家族、友人、知人から聞いた」(22.8%)、「CATVの防災放送で知った」(14.1%)と続いていた(図13)。

図13 津波情報の情報源 (N = 859人) (複数回答)



また、津波情報を聞いたときの心理的反応としては、「いますぐ津波がやってくると思って、非常に不安になった」人は6.1%にすぎなかったが、「ひょっとしたら津波がくるかもしれないと思って、かなり不安になった」人は30.0%もあり、これを合計すれば、ほぼ3人に1人が津波情報に接して不安を感じたことになる(図14)。

図14 津波情報に対する心理的反応 (N = 859人)



(2) 津波情報に対する対応行動

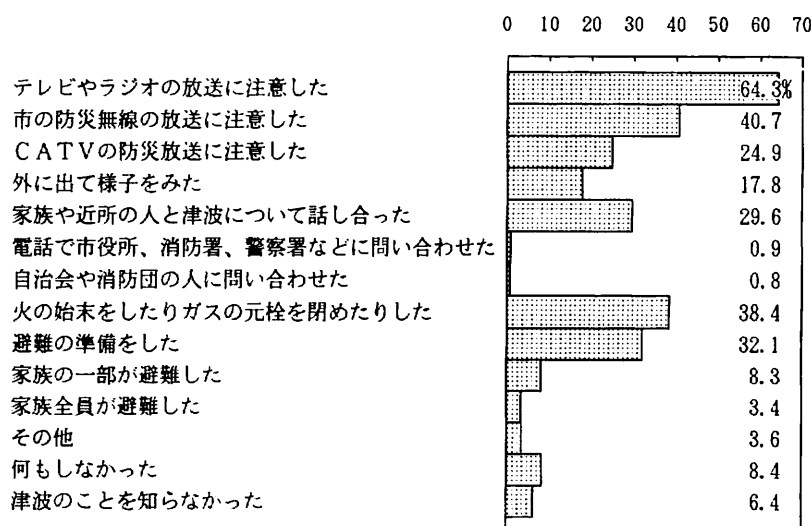
次に、この津波情報を聞いたときの住民の行動をみると、「何もしなかった」人は8.4%ときわめて少なく、多くの住民が何らかの対応行動をとったことがわかる。

その対応行動の内容としては、連続微動や海底噴火のときと同じく、情報確認行動が圧倒的に多かった。つまり、「テレビやラジオの放送に注意した」(64.3%)というマスコミ情報の確認、「市の防災無線の放送に注意した」(40.7%)、「CATVの防災放送に注意した」(24.9%)など行政情報の確認、「家族や近所の人と津波について話し合った」(29.6%)というプライベートなネットワークからの確認などがきわめて多かったが、これは、生命・財産にかかわる重大な情報に接しても、多くの人々はすぐに避難などの対応行動をするのではなく、まずこの情報が本当かどうか確認する、ということを示すものである。

しかし一方、津波情報を聞いて実際に避難した住民も少なくなかった。つまりアンケート調査では、「家族の一部が避難した」という回答が8.3%、「家族全員が避難した」が3.4%となっていたが、これを実数になおすと、家族の一部が避難した世帯は299、家族全員が避難した世帯は122 となり、合計すると、宇佐美地区だけで421 世帯が津波情報を聞いて避難した計算になる。

また、実際の避難とは別に、「避難の準備をした」人が32.1%（実数になおすと1,156 世帯）もいた。これらの人々は、もう少しショッキングな条件が重なれば、実際に避難したかもしれない「潜在的避難者」とも考えられるわけで、ここでも津波情報のインパクトが大きかったことがうかがえるだろう（以上、図15）。

図15 津波情報に対する対応行動（N = 859人）（複数回答）



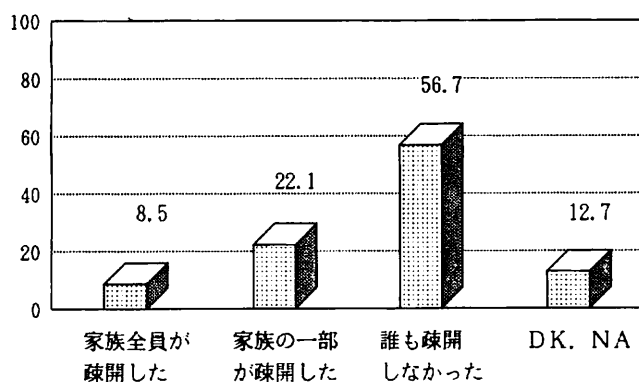
7 疎開について

1章でもくわしく述べたように、海底噴火の後、伊東市教育委員会では緊急指示を発し、翌14日は市内の幼稚園、小学校、および中学校を臨時休校することを決定した。この休校措置は、最終的には7月19日まで延期され、20日の一斉終業式を経てそのまま夏休みにはいることになった。こうした措置もあったため、いざという事態を懸念して県内・県外各地に「一時疎開」する児童も少なくなく、多いときには8000人余の小中学生のほぼ1割が一時疎開するまでになった。またこのほかにも、群発地震、連続微動、および海底噴火が発生するたびに、体力に自信のない婦人や一人暮らしの老人などが子供や兄弟、あるいは親戚・知人などを頼って一時的に疎開していったという。

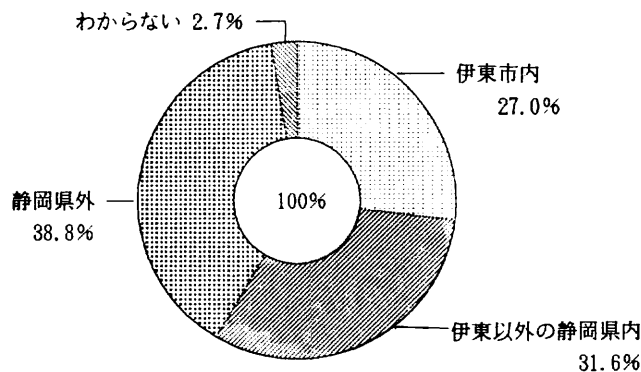
そこで、とくに事態が深刻だったと思われる宇佐美地区住民のうち、どのくらいの人が疎開したのかを質問してみた。その結果をみると、群発地震→連続微動→海底噴火という一連

図16 疎開の有無と疎開先

1. 一連の出来事における疎開の有無（伊東市宇佐見地区 N = 859人）



2. 伊東市民の疎開先（N = 263人）



の出来事のなかで、自宅を離れて疎開した人は、「家族全員が疎開した」が8.5%、「家族の一部が疎開した」が22.1%で、合わせて3割を越えていた。

またその疎開先をみると、「伊東市内」が27.0%、「伊東市以外の静岡県内」が31.6%、「静岡県外」が38.8%となっていた。疎開についての厳密な定義はむずかしいが、伊東市内への移動は、「疎開」といわないほうがよいかもしれない。すると、疎開したのは、伊東以外の静岡県内と静岡県外に移った70.4%であり、これを世帯実数になおすと、 $3601 \times (0.085 + 0.221) \times 0.704 = 776$ 世帯ということになる。(以上、図16)。

8 災害時の情報ニーズと役立った情報源

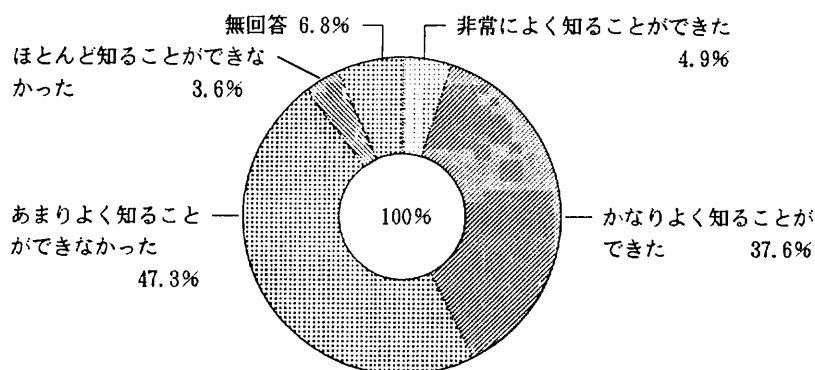
(1) 災害時の情報ニーズと役立った情報源

以上述べたように、6月末から7月中旬にかけて、伊東市民はさまざまな状況に直面した。とくに、群発地震の後の連続微動→海底噴火という事態は、予想もしなかったはじめての経験であり、住民の不安や心配はきわめて大きかった。なかでも、7月15日の「津波情報さわぎ」は、住民のこうした不安を象徴的に示した事件といえることができる。

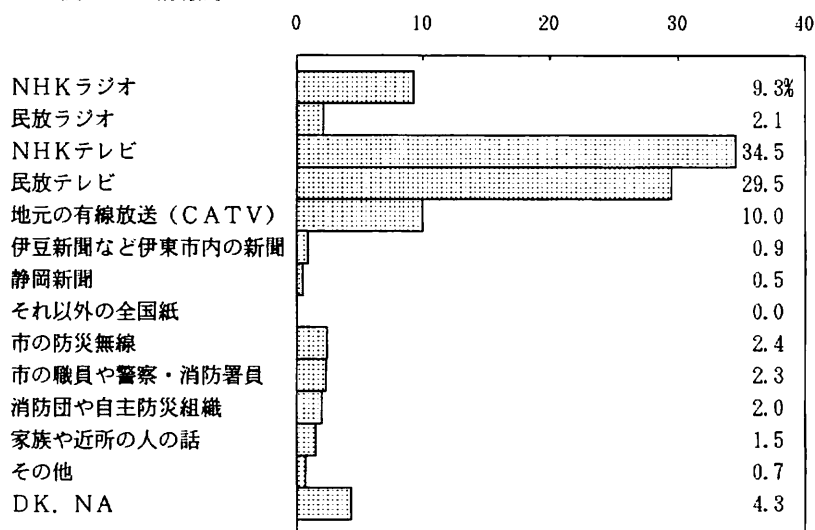
ところで、これら一連の出来事のあいだ、住民の情報ニーズがどのくらい満たされたかを質問すると、「非常によく知ることができた」という回答が4.9%、「かなりよく知ることができた」が37.6%となっており、情報ニーズが満足されたという人が半数にも達していない。しかし、災害時に被災者の情報ニーズを十分満足させることは一般に困難であり、たとえば、昭和59年の長野県西部地震における王滝村の場合にも「非常によく知ることができた」が0.8%、「かなりよく知ることができた」が14.1%にすぎなかった。したがって、今回のケースがとくに情報満足度が低いというわけではない。

図17 災害時の情報ニーズと役だった情報源 (N = 859人)

1. 伊東沖海底噴火における情報ニーズの満足度 (N = 788人)



2. 役だった情報源



さらにまた、どの情報源からの情報をもっとも役立ったかをたずねると、第1位が「テレビ」で64.0% (NHK34.5%, 民放29.5%), 第2位が「ラジオ」で11.4% (NHK 9.3%, 民放2.1%), 第3位が「地元のCATV」で10.0%といずれも電波メディアであり、過去の災害でもこうした傾向はあったが、今回はとくに電波メディアの評価が高かった (以上、図17)。これは、①今回の一連の災害では停電がほとんどなかったこと、②最大群発地震→連続微動→海底噴火→「津波情報さわぎ」という一連の出来事が一日おきに発生するなど、事態がめまぐるしく変わったため、詳報性よりも速報性のある電波メディアが有利だったこと、などのためと考えられる。もう一つここで注目されるのは、「市の防災無線 (同報無線)」に対する評価の低さであり、もっとも役立ったという人はわずか2.4%にすぎなかったということである。次に、このことについて述べていきたい。

(2) 同報無線の聴取度と評価

このアンケート調査には、防災無線 (同報無線) の効果をもっとストレートにたずねた質問があり、そこでは、今回の一連の事態において防災無線がどのくらい役立ったかとたずねているが、結果をみると「非常に役立ったと思う」人は4.5%, 「かなり役立ったと思う」人は24.4%と、防災無線を評価する人は3割にも達していなかった。昭和58年10月の三宅島噴火の場合には69.0%の住民が、また61年11月の伊豆大島噴火の場合には55.6%の住民が防災無線を評価していたのとは、まったく対照的であった (図18、図19)。

伊東市において防災無線の評価が低かったのは、あまりよく聞こえないということに関係が深いと思われる。たとえば、7月15日の「津波情報さわぎ」のとき、防災無線の放送がどのくらい聞こえたかをたずねたところ、「音はよく聞こえたし放送内容もだいたい全部理解できた」人が18.9%, 「音はよく聞こえたが放送内容は一部分だけ理解できた」人が17.3%

図18 一連の事態における同報無線の評価 (N = 859人)

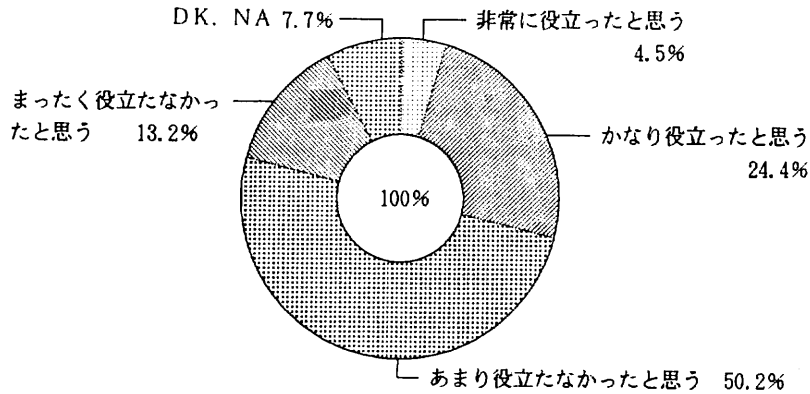
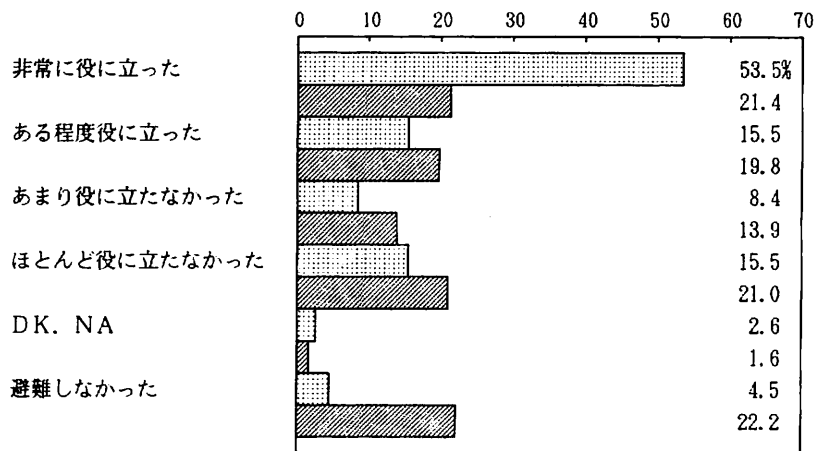


図19 三宅島噴火と伊豆大島噴火における同報無線の評価
(東京大学新聞研究所調査より)

1. 三宅島噴火

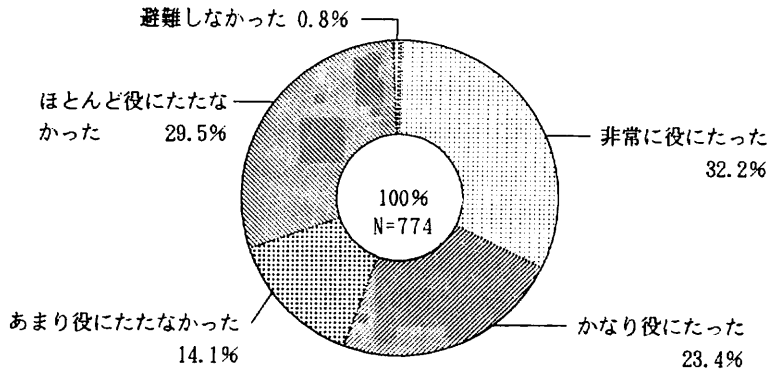
避難時における同報無線の評価



(χ^2 : $P < .01$)

2. 伊豆大島噴火

防災無線放送の有効性



で、合計して4割弱の人しか放送がわからなかった（図20）し、また防災無線がふだんどのくらい聞こえるかをたずねても、「音はよく聞こえ放送内容はだいたい全部理解できる」人が15.0%、「音はよく聞こえ放送内容は一部分理解できる」人が18.0%で、ここでも聴衆可能性は3割を少し越えているにすぎないのである（図21）。ふたたび、三宅島と大島の場合を引き合いに出すと、三宅島噴火のとき同報無線の放送が聞こえた人が63.0%、伊豆大島噴火では51.9%であり、これも大きな差があるといわねばならない（図22）。

さらにまた、アンケート調査のなかで国、県、市に対してどのような対策を望むかを質問すると、「情報連絡体制の充実」の項目がもっとも多く（75.1%）、宇佐美地区住民のうち4人に3人がこれを要望している。このことも裏返していえば、今回の一連の事態において、同法無線の広報を含む情報連絡体制がスムーズにいなかったことを示すものといえるだろう（図23）。

図20 津波情報さわぎのさいの同報無線の聴取度（N = 859人）

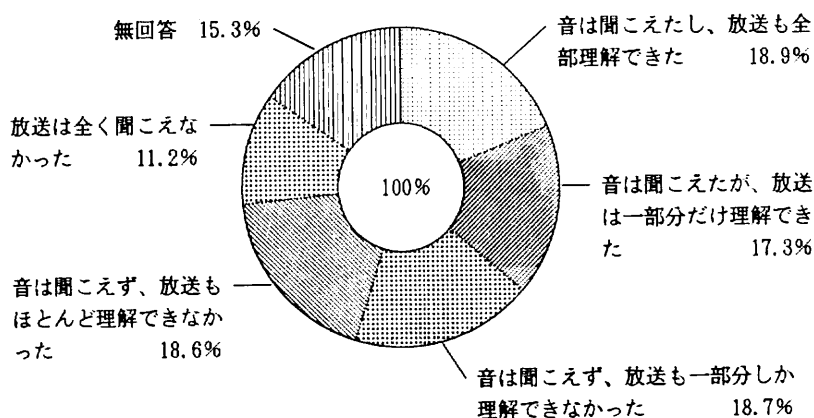


図21 ふだんの同報無線の聴取度（N = 859人）

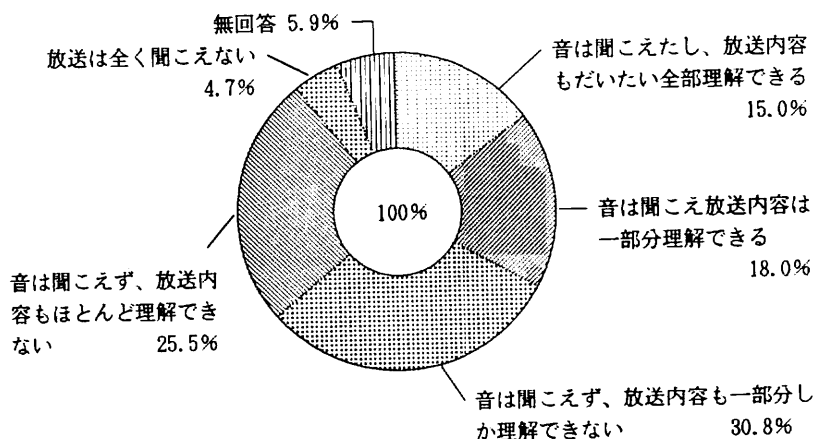
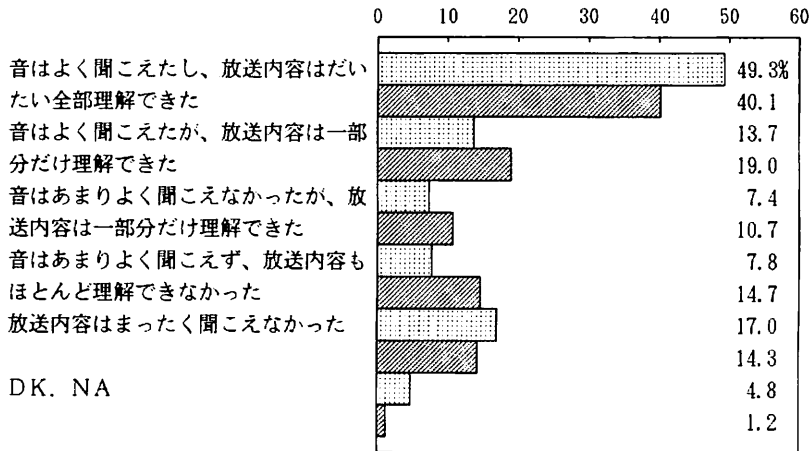


図22 三宅島噴火と伊豆大島噴火における同報無線の聴取度
(東京大学新聞研究所調査より)

(1) 三宅島噴火

同報無線の聴取度

<上：阿古地区（計 606人） 下：坪田地区（計 252人）>



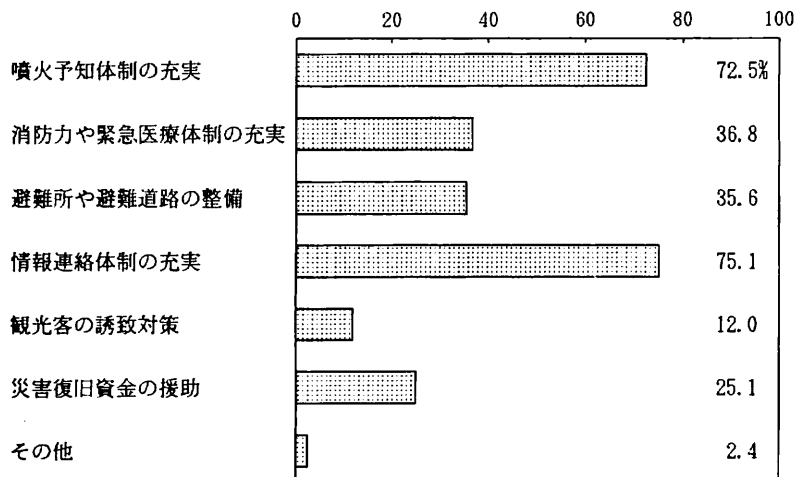
(χ^2 : P < .01)

2. 伊豆大島噴火

同報無線の聴取度

	N	%
1. 音もよく聞こえたし、放送内容もだいたい全部理解できた	295	38.1
2. 音はよく聞こえたが、放送内容は一部分だけ理解できた	107	13.8
3. 音はよく聞こえなかったが、放送内容は一部分だけ理解できた	93	12.0
4. 音はあまりよく聞こえず、放送内容もほとんど理解できなかった	118	15.2
5. 放送はまったく聞こえなかった	161	20.8
計	774	100.0

図23 国・県・市に望む防災対策 (N = 859人)



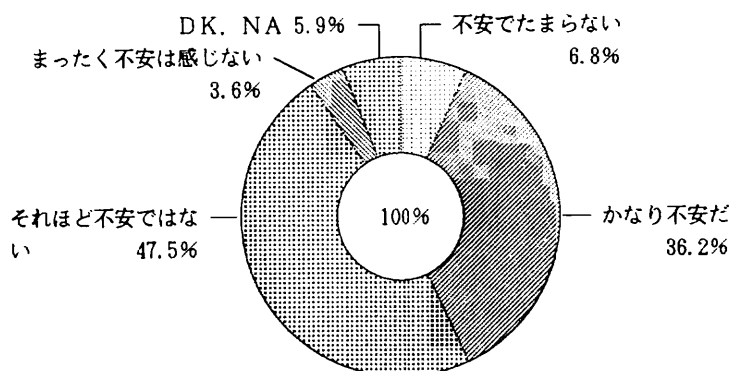
9 伊東市民の防災対策

(1) 再噴火の不安と家庭内防災対策

最後に、防災対策にかかわる質問を紹介しておきたい。

その前提としてまず、宇佐美地区住民の災害不安について触れると、調査時点の平成元年9月現在、7月13日のような噴火、あるいはそれより大きな噴火がいつまた起こるかもしれないと不安を感じている住民は43.0%もいて（「不安でたまらない」6.8%＋「かなり不安だ」36.2%）、これはそうとうな不安度だといえる（図24）。

図24 再噴火への不安（N = 859人）



けれども、こうした不安度の高さにもかかわらず、住民の家庭内防災対策はほとんど進展していない。すなわち、住民が今回の群発地震が発生する前に行っていた防災対策と、一連の事態の後の防災対策をくらべると、あらたに「噴火のきざしに注意している」人が34.9%の比率になっているのと、「避難などについて家族と話し合いをしている」人が30.7%から38.5%へ向上したほかは、ほとんど変わっていなかったのである（図25）。これは、住民にとって、海底噴火対策（およびそれにとまなう津波対策）としては避難対策しか考えられないため、それ以外の具体的な対策が進展していないのだとも考えられる。

なお、こうした防災対策のうち、とくに「非常持ち出し品の準備をしている」と答えた人に、その中身をたずねた。それをみると、「ローソクや懐中電灯」といった照明具がもっとも多く88.3%を占め、次に、「食料品」（78.3%）、「救急医薬品」（74.6%）の順となっている。また「トランジスタラジオ」（69.4%）と「飲料水」（59.0%）はいま一步、さらに「固形燃料や携帯用ガスボンベ」（12.1%）は非常に少ないことが多少気にかかる（図26）。

図25 家庭内防災対策（N = 859人）
（上：群発地震以前 下：海底噴火以後）

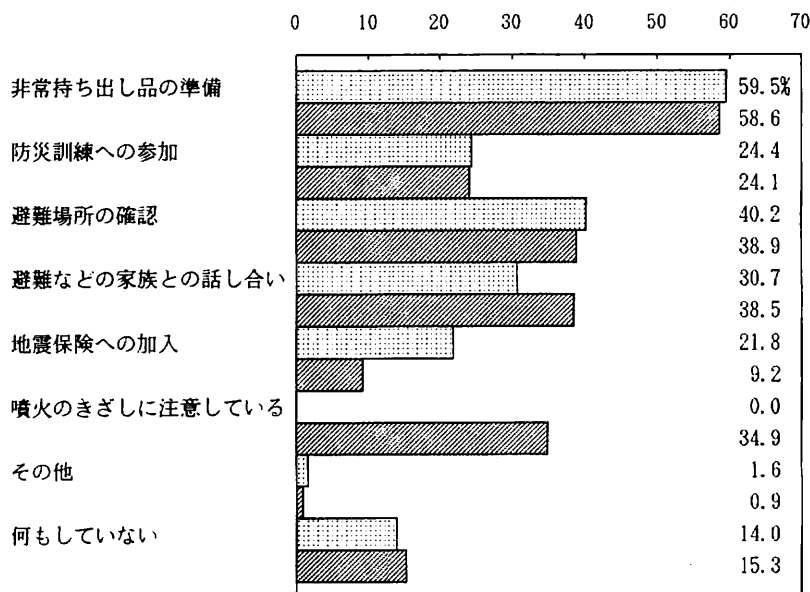
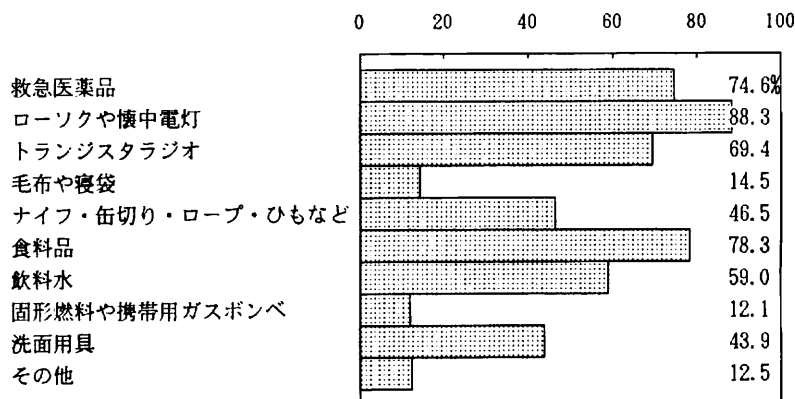
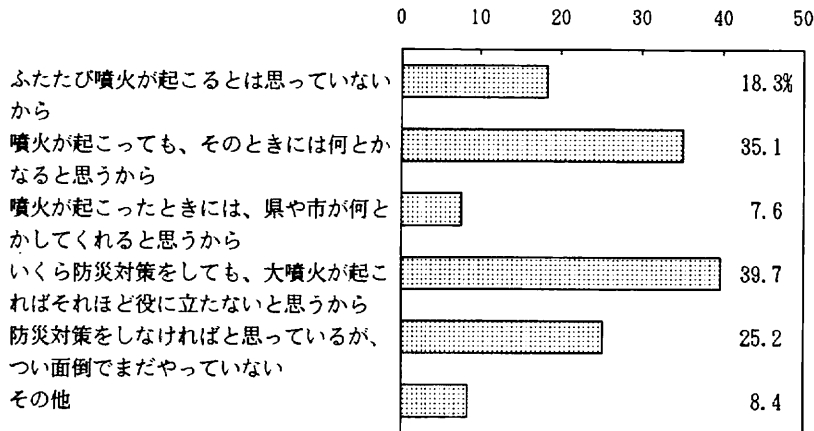


図26 非常用持ち出し品の中身（複数回答）



また、調査対照となった宇佐美地区住民のうち、「防災対策をしていない」という人は、群発地震の前で14.0%、海底噴火の後で15.3%となっていたが、これらの人たちに防災対策をしていない理由をたずねたところ、もっとも多かったのは「いくら防災対策をしても大噴火が起こればそれほど役に立たないと思うから」というあきらめ型で39.7%、次が「噴火が起ころうともそのときは何とかなると思うから」という成りゆき型で35.1%、その次が「防災対策をしなければと思っているがつい面倒でまだやっていない」というものぐさ型で25.2%となっていた（図27）。

図27 防災対策をしていない理由（複数回答）

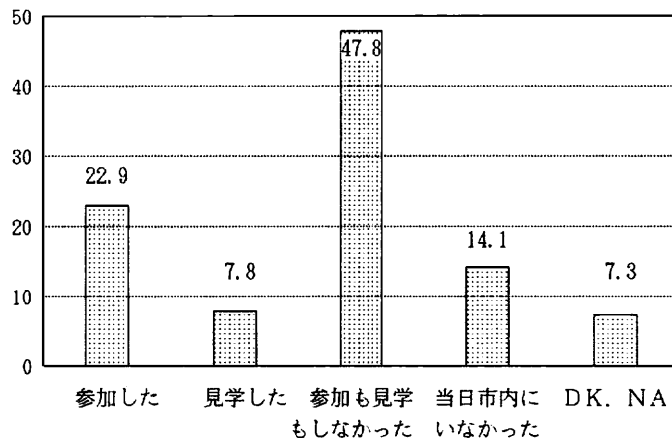


(2) 防災訓練への参加とその評価

この海底噴火からはほぼ1ヶ月半後の9月1日、伊東市ではふたたび起こるかもしれない再噴火という事態に備えて、情報伝達訓練や避難訓練などの大がかりな防災訓練を行った。そこで最後に、この防災訓練への参加の有無と防災訓練の中身、およびその防災訓練の評価についてたずねてみた。

まずこの防災訓練のどのくらいの住民が参加したかをみると、「参加した」人は22.9%とほぼ3人に1人、「参加はしなかったが見学した」人が7.8%だったのに対して、「参加も見学もしなかった」人が47.8%とほぼ半数にのぼっており、参加率はさほど高かったとはいえない（図28）。

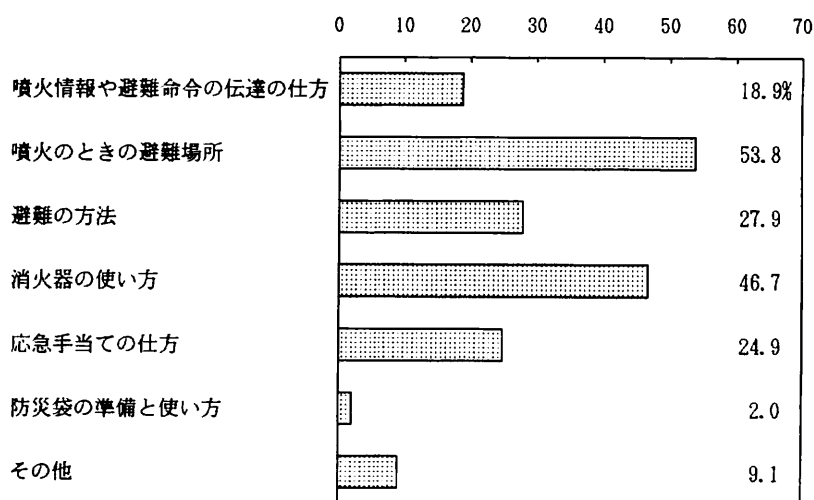
図28 防災訓練への参加の有無（N = 859人）



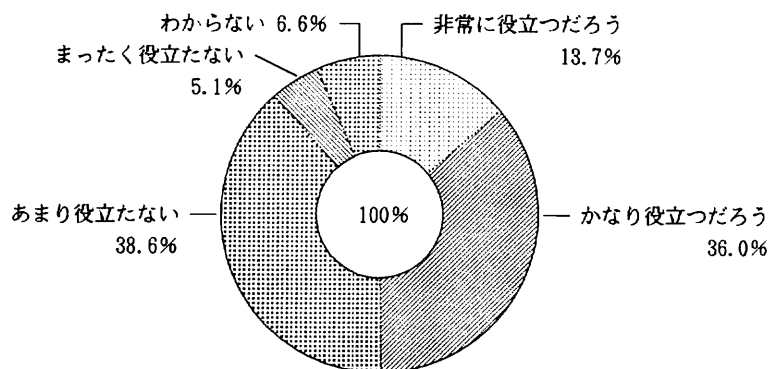
また、防災訓練の参加者にどんな訓練をしたか、その訓練は今度また噴火があったときどのくらい役立つと思うかをたずねたところ、訓練の内容については、「噴火のときの避難場所を学んだ」(53.8%)、「消火器の使い方を学んだ」(46.7%)などが比較的多く、また防災訓練の効果については、役立つと評価した人が49.7%（「非常に役立つ」13.7%＋「かなり役立つ」36.0%）、他方、役立たないという人が43.7%（「あまり役立たない」38.6%＋「まったく役立たない」5.1%）となっており、ほぼ拮抗していた（図29）。

図29 参加した防災訓練の内容とその有効性に対する評価

1. 参加した防災訓練の内容（N = 197人）（複数回答）



2. 防災訓練の有効性（N = 197人）



付属資料 1

聞き取り調査の記録（抜粋）

伊東市役所・生活安全課（1989年8月21日）

Q：今回の噴火について、いろいろ教えていただけたらと思います。さっそくですけれども、時間経過に沿っていろいろとおうかがいたいんですが、今年の群発地震がはじまったのは6月30日でしたっけ？

A：そうです、6月30日です。

Q：去年は7月中旬頃でしたか？

A：去年は少し遅かったです。でも、ここ10年間に群発地震が20回ぐらい起こっていますので、そういう意味では必ずしも今の季節とはかぎっていません。

Q：そうしますと、最初はいつもと同じ感じだと思いはなったわけですか？

A：そうですね。それと、一般的にはまた来たかという感じです。7月9日にM5.5の地震が起きました。いつもですと、もう少し長いスパンで群発が起きていましたけれど、今回は7日に1度大きいのが来まして、1日休んで9日に来るというようなことで比較的短い。そして、短い割には大きい。M4.9が2回、5.3が1回、5.5が1回というように、短い期間に比較的大きいものが来ました。それでも、市民が群発地震に対しては慣れているというか、心構えが出来ているという状況で、M5.5が起きたときにも、崖崩れが近くで起きた人があわてて避難して逃げて来た方はいますけど、一般に市民全体のレベルから考えてみますと、浅いところの地震ということもあり、地域が限定されていたということもありましたので、比較的冷静でした。

Q：なるほどね。昨日もいろいろな人に聞きましたら、どうも今回は急に群発の頻度が大きくなったり、それからドンと下から突き上げるような感じだったといえますね。

A：たしかに、地震の質というようなものは例年とちょっと違っている感じがしました。これは、ぼくらの素人考えですが、たぶん浅い地震で、直下型の地震が起きはじめたのだと理解していました。まさか、マグマがでるなんていうことは、当時考えてもいませんでした。今までの直下型地震より地震の深度が浅くなって来たと理解しました。比較的ドスンドスンという、短いタテ揺れの地震が全部です。横揺れの地震がほとんどなかった。ですから、ちょっと離れてしまうと地震があったかどうかかわからないという状況もあって、そのこと自体、地震の質が変わったよりも震源が浅くなったんじゃないかなあと。一般市民の理解は、おおかたそんなところではないかと思います。

Q：わたしの印象では、今回は、いろいろマスコミで恐怖をあおるような情報がいっつもより多かったんじゃないかって気がするんですけど。北上説なんてずいぶん出ましたよね。

A：いままでの群発地震は、川奈崎沖が震源ですからね。35度線よりだいぶ南側でしたから。ところが、今回は湾内にぐっと入り込んだというようなことで、35度線を越えている地震も発生していました。1930年の北伊豆地震も、今回と同じ地域で同じような前兆的群発地震があったという話で、その説からいくと、学者の先生方が言われるように、可能性としてはまったくないとは言いきれないと思われます。そういう説が出て来たのではないんですか。

Q：あのう、7月8日の午前1時ごろに大きな地震があったんですか？ガス管破裂ですか、これは？

A：実際には、そのときのガス管が破裂した前後には地震がないんです。後でガス会社の人と消防署の人に聞いてみますと、必ずしもグラッと地震が来たときにパッとはずれたというのではなくて、避難者の人たちに話を聞きますと、何か一週間くらい前からくさかったという人もいます。いちがいに地震が原因でガス管がずれて漏れたということでもないようです。そのへんがちょっと不鮮明です。いちおう7月8日の午前1時3分に通報がありましたもので、住民を避難させてガス管を交換した。真夜中でしたけれども、消防署職員が各戸を回りました。

Q：これは、行政のほうで住民を避難させたわけですか？自主避難ではなくて？

A：自主避難ではありません。これは、各世帯を見回しまして、いまガス漏れが起きているからこの地域は避難してくださいということで、一軒一軒回って避難させるというやり方でした。

Q：それで、9日の午前11時9分に、M5.5が来たということですね。被害はどのへんが大きかったんですか。やはり新井ですか？

A：そうですね、煉瓦とかの瓦系統がやられたのは、宇佐美全体と伊東の海岸に近い地域が圧倒的に多いです。他に崖地ですね。伊東は開発がけっこう無茶苦茶に行われている部分がありますので、そういう無理をして開発したところの被害が大きい。でも、そのようなところが壊れるのは当然ですが、過去に1回も崩れたことのない家が崩れた例も現にあります。

Q：それはどのへんですか？

A：宇佐美なんかがそうですね。

Q：それで、9日の地震の後、11日には群発地震のほうは終息するわけですが、今後は急に火山性微動が出てくるわけですね。で、伊東市では災害対策本部をつくるのかかなり遅れたということで、いろいろ新聞紙上で書かれています。これは、やはり新聞のいう通り、観光ということを考えて災害対策本部の設置が遅れたということですか？

A：まあ、中身的にはそういうことがあったかも知れません。それと、災害対策本部というのは、一定レベルの災害が出る危険があるとき、または出たときに設置するんですよ、どうもそのへんかそういう理解じゃなくて、とくに報道側から批判が出たわけです。対策本部が設置されたほうが報道としてはいいかもしれないですけど。対策として何をやったかのほうが重要なんですけどね。

Q：たしかに、災害が起きてから災害対策本部をつくるわけで、まだ災害が起きてないわけですからね。M5.5で多少の被害は出たかもしれないけども、そんなに大きい被害で災害対策本部をつくらないところはいくらかでもあるわけですから、それはそれでいいと思うんですが。では、警戒本部はつくりましたか。

A：警戒本部は、12日につくりました。これは、微動がおきて伊東市民が動揺しましたので。11日の8時38分から起きた火山性微動ですね、あれがなければ、そんなにあわてふためくことはなかったと思うんですが、それが起きたということで急きょ警戒本部をつくられたわけです。これは、その後に火山性だという情報も入りまして、それと、あれを経験した人はわかると思うんです。わたし達もずっと、役所におりました。M5.5の地震のときもいましたし微動のときもいました。全部いましたけど、やはり11日の微動は、うわーただごとじゃないっていう気持ちでした。それも、地震じゃないというのはわかるんです、何となく。地震計にも表示されないということもありましたし。これは、地震じゃないけど何か起きてるんだらうなということで、あたふたしました。

Q：新井あたりではかなり不安に感じて、宝専寺のほうにずいぶん自主避難したという話がありますか。

A：全体的には音だけです、微動ですから身体的にはあまり感じないはずなんです。でもまあ総合的にみますと、やはり湯川・松原のほうがすごかった。ぼくらはそう聞いているんですけどね。新井地域もたしかに聞こえてるんですけど、新井は町内が東、仲、西とわかれてる。いまは1丁目、2丁目、ですが。今回はこの東の部分だけです、要するに今回の手石海丘という名をとった手石島というのがあるんですが、そちら側の方の住民が避難したんです。そのほかの仲町も西町もほとんど避難してないんですよ。ですから、全体的にはやはり湯川・松原の人たちが一番で、その次が新井町っていう感じじゃないかと思うんですね。

Q：なるほど。で、新井の人たちがお寺に避難したことは、当日もうおわかりになってるわけですか？

A：ええ、もちろんです。

Q：午後11時すぎですね。

A：わかっています。もっと早くわかっています。もうその前に、10時40分頃には毛布などを運びこんでました。

Q：そのときに避難した人は、宝専寺以外にも湯川、松原にいるわけですか？

A：ええ、います。そういう方は西小や東小へ行かれたんです。それから、噴火のあった13日は宇佐美地区では、宇佐美小学校へ2名、宇佐美中学校へ2名、宇佐美の公民センターへ2名です。また、西小へ40名、東小へ104名、競輪場へ4名の他、新井地区で宝専寺へ124名が避難しました。

Q：これは13日の噴火の後ですか？

A：そうですね。おそらく噴火の後ですね。11日は、1回避難はしましたけれど、ほとんど帰ってるんです。

Q：何かマスコミの人が押し寄せて来て、眠れなくて帰っちゃったとか。

A：そういう方もいらっしゃるようです。

Q：それから、11日に火山性微動が発生したとき、一般職員とか消防職員100名を配備して警戒対制をとったと聞きましたが、これはどういうところに配備したんですか？

A：それはですね、もちろん市役所内はふつうなんですけど、各消防署、消防団の分遣所、それからさきほど言いました避難地などにはりつけたんです。それと広報車も一緒にはりつけまして、24時間ずっと職員に車に乗っていると。このときには、いろいろ未確認情報が入って来まして、情報が不鮮明だったということで、これはただごとじゃないと。それで、市役所が何か命令を出してももう間に合わない事態になるのではないかという話になりました。それでは、広報車両については現地へ全部行かしておこうということで、宇佐美に広報車2台、伊東の消防署にも広報車2台、川奈に広報車1台を置いて、また各消防団、消防署本部で全部分担して、緊急時の振り分けを決めておいて、その地域へすぐ行くと。その連絡もですね、もう電話なんかだと間に合わないだろうからサイレンでと。なにせさきほどのお話

のように、未確認情報が多いので住民にも説明しきれない。緊急事態だとうことはもちろん説明できるんですが、またどういう対応をしないといけないということもできるんですが、その現象をどう説明すればいいのかわからない。ただ緊急事態で、こういうシーンがあったらすぐ広報をしないとか、こういう行動を起こさないとかいうかたちで準備をさせておく状態でした。

Q：そうすると、未確認情報だけれども、いちおう最悪のことを考えておくということですね。

A：ええ。

Q：この前の大島噴火でも、防災担当の方に聞いてなるほどと思ったんですけど、たとえば火山性微動が発生すると、で、この火山性微動がどのくらいの規模で発生しているかっていう客観的な情報はわかるわけですね。ところが、将来これがどういうふうに移るのかということは、気象庁に問い合わせても当然教えてくれないからわからない。そこで、そういう将来の判断は別の専門家に聞かなきゃいけないわけですが、そういうことを誰かにアドバイスしてもらったことはないですね。

A：ないですね。

Q：そうすると、やはり火山噴火予知連のコメントだけが頼りですね。

A：そうです。でも、わたしもこの前、月曜日から木曜日まで気象庁に行ってきたんですが、そのときの話を聞くと、気象庁のなかでも大混乱していて、本当の意味を、伊東市にストレートに伝えていいかそうとう迷ったようですね。そのへんの話を知ったら、やはりいちいちに気象庁に文句を言えないなって感じがしたんですね。

Q：それは、気象庁で将来どうなるのかをいろいろ議論して、かりに噴火が来そうだと判断しても、伊東には伝えられなかったらということですね？

A：そうです。かりに噴火するって気象庁が発表したら、これは大変なことになったと思います。要するに、伊東市民の心の準備が誰もできてなかったわけですよ。そんななかで、伊東市が噴火しますよみたいなことを言ったら大変だと。そのともうひとつ、噴火をするというには、学説上ある程度説明しきれないといけないわけです。ですが、いまの学説では海底火山が噴火するなんていう理論は成り立たなかったと聞いています。いままでの歴史では。そういうなかで、現象としてはでてきたんだけど、噴火という発表はしきれなかった。だから、言えたのは火山性微動ですよ。要するに、マグマの動きでそういう現象が起きてますよ、までしか言えなかった。それから、かりにそういう火山性微動が起きて3日とか4日とか、長ければ1週間とかいうレベルに達しなければ、噴火なんかしないよ。だから、今回みたいに1日休んでもう爆発したと、あるいは最初の微動のときに爆発していたかもしれないわけですよ、噴火していたかもしれない。そういうことというのは比較的あり得ない、というような話をわたし自身は聞いてたんです。ですから、そんな状況のなかで、気象庁がああいう時点でおよそ噴火という表現は出来なかったんじゃないかなあということなんです。

Q：まあ、あんまり前兆現象があかったですから、ああいう時点で噴火するとは誰も想像しなかったでしょう、おそらくね。ところで、このときには避難命令は出してませんよね。自主避難ですね。

A：そうです。

Q：これもやはり、4キロ先で起きた噴火で被害が起きていないから、避難命令を出さないということでしょうか？

A：その避難命令を出すタイミングなんですけど、実際に微動が起きた瞬間に、もうすぐに爆発してるわけです。海で爆発の現象が出てくるわけです。まあ、もっと大きくなるかもしれないわけですけど、そのへんはもうぼくらは素人ですからわからないわけです。とりえず微動が起きて噴火してしまったと。で、なかには市民の方が海岸堤防まで行って、みんなこうやって見ていたという話があるくらいです。ですから、次にまた大きい噴火の可能性があるかどうかという、そのデーターを市がとれないかぎり、あるいは微動が止まらないで、次から次へと噴火したとか、そういうことであれば避難命令を出したでしょうが、...ただ、いろんな方がいるんですね。何で命令出さなかったのかという人と、命令なんか出したら、今度行政側の方として解除するタイミングが非常に難しいだろうという人と。とくに火山性なんていったら、10年間もおこらないかもしれない、解除するのがとても難しいってことです。それともう一つ、出さなかったのは、現象がただあそこでドンと爆発しただけで、それによって何の被害もなかったわけですね。そういうことが、避難命令を出さなかったことにつながっているんですよ。

Q：避難命令を出すか出さないか、討論はしたんですか？あんまりしていないですか？

A：討論はあまりしていないですね。

Q：この前の大島のときの避難命令の解除では、えらいいろいろと問題があったわけですが、そんなことがチラついて出さなかったのかなって感じがしたんですけども。

A：いや、そこまで検討する時間がなかったっていうのが正直なところですね。大島みたいに、ずっと何

時間も噴火しているっていうことがあれば、これはその時間のなかでいろんな検討するんでしょうけど、微動が起きたときはもう爆発だったわけですよね。そういうなかでは検討している時間がない。それよりも、次に何が起きるとかいうことを気象庁や県に情報を求めたり、そういう作業が大変でアタフタしていたというのが正直なところですね。

Q：ただ実質的には、避難している人にいろいろと食糧とか毛布を配っているわけですね。

A：やっています。うちのほうはそういう対策と同時に、どこかに避難者が出たというような情報が入れば、いち早くそこへ職員を行かして、時間が夜になれば、毛布とかそういうものをすぐにドンドン運ぶという体制はできていますので。まして、このときはずっと職員が避難所に張りついてましたので、どこどこにどういう物を持って行きなさいと。これは、対策本部のなかでそういう命令をしているわけですね。

Q：寝たきり老人の方も避難したんですか？

A：そうです。一時保護の施設を利用して、11日の微動が起きたときから、寝たきり老人についてはですね、かりに家族の方いかでも避難させるのがなかなか難しい人達を対象に保護しました。それ以外にうちにも老人がいるんだけどという通報があったものについては、それでは市の方でどこどこへ保護しましょうということ。しかし、全部の希望者を保護したかというところでもないわけです。まず、海岸線の近い部分から優先的に収容して、内陸部の方からうちも寝たきり老人がいるんだけどというのは、順番でそれではもう少しお待ちくださいと、もう少し経過を見て収容しますといった例はありました。原則的には、海岸線のほうを最優先に収容したんですね。今回は、他の災害弱者対策はやれなかった部分がいっぱいありますけれども、寝たきり老人対策は比較的スムーズにいったのではないかなあと思っています。

Q：そういう避難とはちょっと違うんですが、このあいだ宇佐美の中学生とちょっと話をしたら、夏休みが近かったということもあって親戚の家へ行っちゃったと。7月8日、9日、11日頃の時点で、まあ疎開ですよ。テレビなんかを見てましても、1人暮らしの老人が東京の息子のところに行っちゃうというのめっちゃうあったようですが、市としては、どのくらいの人間が疎開したかという数字は把握してませんか？

A：相当の人がいったようですね。伊東というところは、いうなれば都市とちがって田舎の町です。そのへんで伊東の気質っていうんですか、まだ親子や兄弟のつながりというのが割合とあります。明らかに群発の現象が伊東から宇佐美の海岸で起きている訳で伊東の中でも、ちょっと離れた別のところでは全然感じない。そういう情報を親子関係とか親族関係で連絡をとりあうなかで、そちらのほうで安全ではないかというのがありました。それから、たとえばお子さんが市外へ出ているような老人の方が、いい機会だから息子のところへ行こう、娘のところへ旅行がてらにいつてみようみたいな人が、たくさんいたようです。これは老人の方に限らず、子供達も親が日中仕事にでないの、心配だからという理由で多く疎開していたと聞いています。そういう方は相当いるんじゃないかと思うんです。ただ、そのへんの調査はまだしていません。

Q：さて、いよいよ15日の同報無線の話を聞きたいんですが。いろんな人に話を聞きますと、11日とか12日あたりは、同報無線をほとんど放送しなかったんだそうですね。

A：いえ。ただ、11日でしたか、同報無線で放送しましたら、みなさん敏感になってまして。いままでも同報無線はずっと放送してつ聞こえない地域には、ボリュームの調整とかスピーカーの位置の調整をしてきたわけですが、これまでは苦情があまり出なかったんです。というのは、ほとんどの人が同報無線をそれほど注意深く聞いてなかったですね。

Q：いままではね。

A：はい、けれども、今回だけは異常に情報がほしいと思って神経をとがらせた。そしたら、同報無線が鳴った。鳴ったんで聞こうと思ったら、聞きにくかったと。鮮明に聞こえたのと、聞きにくかった、聞こえなかったのといういろいろありますね。けれども、鮮明に聞こえた以外の人か70%いたという...

Q：NHKの調査ですね。

A：ええ。そういう話です。でも、実際には聞こえにくかった部分がほとんどで、聞こえないってことはないんです。そのいい例が、同報無線が流されて、まだ広報が全部話していないあいだに、もう本部の電話がいきなり全部鳴り出しましてね。で、いま何を言っているか聞こえなくてたずねるのではないですよ。もう最初から、鳴ったら役所に聞いちゃえ、みたいな。同報無線をきいてから判断しようというのではないですね。まあ、市民のあわてぶりがここにも出ているかもしれないです。

Q：7月13日の海底火山の噴火は放送しているわけですか。

A：いや。当時テレビ局がこの役所の前に、放送車が入りきらない状態がずっと続いてたわけです。で、

市役所の駐車場に入りきれない中継車が市内のあちこちで中継をやっていたんです。ですから、ちょうど噴火の時点が放映時間とかさなったためテレビがばっちりとらえてます。渚公園にいた中継車もあってやっぱりとらえてます。それが即時に流れてましたから、要するに実況中継の体制がどこまできあがってたんで、市が放送するまでもなく、テレビをつければどこのチャンネルでも見られたということもありましたので、とくにその現象をあえて放送することはしなかったんです。

Q：じゃあ、群発地震がはじまってから、同報無線をつかって放送したことはあまりないわけですね。

A：いいえ、そんなことはありません。一般の啓発的な放送は何回もしています。朝の定時放送もやりました、何回も。

Q：その放送文は、保存されていますよね。

A：たとえば、7月20日の放送は、「こちらは広報伊東です。市民の皆さまおはようございます。今朝は地震活動も静かですが、引き続き非常の場合に備えてテレビ・ラジオ・市の広報に十分ご注意下さい」という文面です。広報文が、全部わたしどものところにメモがあるわけではありませんが。

Q：多少の混乱を引き起こしたとマスコミでいわれている放送はどうですか。

A：避難したという話がありますけどね。いろいろなマスコミからいろいろとるわけですが、こんな言い方をするとまた非難されるかもしれませんけど、注意して下さいという放送で避難したから、放送の仕方が悪かったのではないかなというように言われていますけど、逃げる行為というのはどのくらい皆さんが真剣だったかということです。逃げて現状がわかれば戻れるわけですが、逃げなかったことのほうが問題なんです。今回は聞き違えて逃げたというわけですから、ある意味では、訓練と思えばいいんじゃないかなと。広報が聞こえる聞こえないは、また別の問題ですけど。それはそれで、改善していかなければならないわけです。

Q：宇佐美あたりだと、聞こえないという人がけっこういますよね。

A：ただ、見ていただくとよくわかると思うんですけど、伊豆というのは地形上平らじゃないんですね。山がどこもせまっているわけで、その反響音はすごいんです。たとえばいま放送しましても、エコーを留める方法がないんですよ。別の町ですと、ABコールみたいに、多少なりともエコーをおさえることが可能じゃないかと思うんですけど。伊東の地形は不規則になっていますので、いろいろ検討しているのですがうまくいかないと。

A：時差放送でもダメですか？

Q：ダメです。ですから、過去にもそのへんの検討をしてまして、そのなかで、ボリュームを落とすくらいしかないのではないかと。ボリュームを落とすと、1本のスピーカーからのエリアは狭まりますので、本数をもっともっとつけなければいけないと。そういうところで、いま行政ができる範囲のことを何年間でやってきたんです。それに、今回こんなことがあったから、聞こえないという話になるんですけども、いままでも伊東市民のなかには、うるさいといって、いったんつけたところを取り上げさせたというのが何箇所もあるんです。たくさんつけばいいんじゃないかという意見もありますが、たくさんつけば市民が満足するかというと、災害の時はほしいけれどふだんはうるさいよ、というようなこともあるんです。

Q：よくありますね。ふだんはうるさいと言って、災害のとき聞こえないからもっとつけろという文句は、いつものパターンですね。伊東市ではその後、同報無線の増設ということは考えているんですか？

A：考えてます。要するに、同報無線の屋外スピーカーをつければ良いということではないだろうということで、戸別受信機というのがありまして、これはいままでも公共施設とか区長さん宅とかにつけてありましたのですが、今回は、こういうことを教訓に戸別受信機を各組に、町内に組というのがありましたでいたい15世帯くらいが平均ですが、そのなかに1コか2コくらいの戸別受信機をつけようと。その地域でかりに聞きにくいお宅があっても、その家に聞けばいいと。役所だと混乱してる場合もありますし、電話が通じないなんてこともあまかもしれないけど、15世帯くらいのどこかの家にあれば、ちょっと走って行って「いまの放送は何だった」と聞けば、すぐに教えてくれるでしょうし、そのために組というのがあるわけですから。

Q：それは、自主防災組織の役員につけるんですか。組というと隣組ですか？

A：同報関係は秘書課がやりますので、すぐそちらのほうに確認します。ただ、いまの役員さんのお宅につけると、役員が毎年代わりますので。そのつど、取りはずしてつけ直すとか3万円くらいかかるんです。そういうことがありますので、今回は「いいよ、私の家にずっとつけておいても」と言っているお宅に、それでなおかつこの家へ比較的人が入り出すという家、たとえばお店屋さんとかたばこ屋さんとか、そういう比較的人が行きやすいというか、流れているようなお宅をお願いして、5年とか10年

単位で玄関側の入口のほうへつけてもらおうと、そういうことをお願いして、あんまり変更しない。

Q：その戸別受信機は、たとえば避難所にはついてるわけですね。

A：ついてます。公共施設や区長さんのお宅にはみんなついてます。

Q：避難についてはまた後でお聞きしたいんですが、同報無線の増設ということで、野外拡声方式のほうも多少は増えるんですか？

A：ええ、それもやります。ただ、そんなに本数は増えないと思います。というのは、いま市街地はほぼ網羅していますので、それ異常やりますとさっきのエコーの問題がもっとひどくなります。なかなかやれないということもあります。たしか3本か4本くらいしか考えていないで、あとは950 くらいの戸別受信機の充実をきちんとやろうということです。いや、戸別受信機は960 台でした。スピーカーについては6台。この6台は、年次計画でだんだん増設していくという計画で、それを実施するというので、

Q：この費用は、5～6千万になりますよね。

A：8千5百万か9千万くらいだとおもいます。

Q：同報無線の放送の文面を考えるのは助役さんだとうかがったんですが。

A：ええ、だいたい助役さんが考えられていると思います。文面はたしかにわかっています。同じ文面を朝3回くらい流したこともありましたが、その他は状況理由をつけた文面でながしております。

Q：率直にいうと、「海底火山の活動により津波の心配があります」という文は、海底火山が活動したから津波がおこるからきをつけろ」というふうに受け取られちゃいますよ。

A：ただ、緊急の可能性はいろいろな時点で考えられていたわけです。たとえば、火山が移動する可能性も十分考えられていたわけです。その時点で、もし市が、噴火が他のところ起こる可能性がありますなんて広報したら、それこそ伊東はパニックを起こすと思います。でも市民には注意してもらわないと困るわけです。そういうなかで、いろいろな気をつかった文面がそのへんにあったのではないかなと思います。それが適切だったかどうかは、その後いろいろトラブルがあったりしまして、問題は残るでしょうけど、「なんだかわからないが、津波の心配があるから書け」みたいな、そういう無神経な作り方ではないと思います。他のいろいろなことを本当は伝えたいのだけれども、伝えられない。でも、注意をもらいたいことをできるだけ伝えようというのが、この文面になっているのではないかなと思います。

Q：いろいろと苦しいところですね。

A：現象というのはいろいろなパターンがありますから。たとえば大島の場合だって、割れ目噴火はわからなかった。まして伊東は、噴火なんてもうまで考えもしなかったのですから。

Q：どんな災害でも、完全な対応はとてむずかしいわけで、後でこうすればよかった、ああすればよかったということもいろいろあっても、ある程度やむをえないと思いますけどね。それから、このあいだ市長さんにお聞きしましたら、同報無線はこれから改善していきなさいけれども、当面もし住民に避難が必要なときはサイレンを流すように考えているとおっしゃってましたけど、そのあたりのことをちょっとお話していただけますか。

A：先ほどもお話したように、11日の微動の後、各地域に広報車を配置させているわけです。これは、私のところに広報車のマニュアルがありまして、災害時に緊急事態が起きたらこの車はどこに行きなさい、それに誰が乗って誰が広報しなさい、というふうにみんな決められています。今回の場合、地域が限定されてしまったので、1地区に4台、伊東と宇佐美に配置して、それから川奈に1台、計9台を24時間はりつけた訳です。だから、わからない人はただそこに待機しているだけだと思っていたかもしれませんが、いちおう仮眠はしても、連絡があればすぐ出動する態勢にはなっていました。で、その後も、万が一海底噴火が起きて、すぐに津波がくるような場合、それともう1つ、津波じゃなくて火山だけの場合も、避難をさせるためには、現象が起きてすぐではないともう間に合わない。だから、そのときはサイレンを鳴らすから、サイレンが鳴ったら何の指示がなくても、広報車が非難の広報文を読みながら市内をまわりなさい、と言う命令をしてあったわけなんです。要するに、サイレンがなったら非難命令の広報文を読みなさいと。

Q：その24時間体制はいつからですか？

A：11日の夜からずーとやってきました、25日まで。25日にいちおう市長談話ということで、安全宣言をしたわけですが、そのときまでです。

Q：そうすると、何かあったらサイレンを鳴らして広報車が避難命令を読む、という体制はいまでも生きているわけですか。

A：そうです。ただ、25日以降はセンターにしましたので、とりえず24時間体制は解除してあります。今後は、同報を使ってやると逆に混乱が起こるのではないかなというので、避難についてはサイレンでや

るということが確認されているわけです。そのために、この9月1日の防災訓練もサイレンは鳴らさない、半鐘もやらないと。

Q：ところが昨日、宝専寺におじゃましてたら、たまたま火事があったんですよ。そしたら、サイレンが鳴ったんですよ。「あれっ」と思ったんですけど、火災のときも当然サイレンを鳴らすから、誤解を招くことはないんですか？音は違うんですか？消防のサイレンと。

A：このサイレンは、5秒間鳴らして6秒休む。要するに、切れるサイレンなんです。通常の鳴り放しのサイレンではないわけです。ただ、そのへんは市民の方が理解していれば、火災のサイレンが仮りに鳴ったとしても、さほど混乱はないと思います。そのへんのピーアールはだいぶやりましたので。

Q：もう1つ質問したいのですが。さっきちょっとお話しした宝専寺にいきましたら、そこは最大200人くらい避難できる場所だという話があったんですが、ここは市が指定した避難場所ですかと聞きましたら、いや違うと。宝専寺のあたりの避難場所は東小学校なんだけど、東小学校はかなり遠いから歩いていくうちに津波がくるかもわからないので、たいてい習慣として宝専寺に避難をするという話だったんですが。

A：その言いかたは、どうもまずいと思うんです。実は、第一避難所というのが新井にあるんです。新井の海岸にバイパスが通っていて、東の信号から入ってもう少し上に一本道路が通っています。ここから宝専寺に行く訳です。新井は、昔から東・仲・西と3つの町があって、仲町の真中に新井会館というのがあるんですよ。ここが避難場所になっています。そして、お年寄りが宝専寺まで上がる時間を考えますと、ここは平らなんです。要するに、お年寄りが坂を上がるのを考えると、こっちに逃げたほうが速いんですよ。この道路を通っているかぎりには、津波は大丈夫です。何もこの急坂を昇ることはないわけですよ。では、どうして東の人たちが宝専寺へ行ったかということ、どうしても住民意識っていうのですか、昔から東、仲、西で分割されていたんで、いまでも相変わらず東は東で行事をやる、西は西でやる、仲町は仲町でやるわけですね。で、避難所は仲町にあるわけですが、新井かいかんとはいいながら、真中にある仲町の会館よたいな感覚があるんです。ふだんは仲町の人が使っているわけですから。東は東町の会館を使っている、西は西の会館があるわけです。住民はみんなこういうところを使っているんで、今度も東の人は東の会館に行こうとするんですが、東の会館はバイパスの津波が心配なところにある訳です。そんなわけで、宝専寺さんにいったのではないのでしょうか。

Q：なるほど。

A：ですから、最初に住民の方が宝専寺さんに行くとは考えてなかったのですよ。ところが、みんなここへ避難してしまったんですね。これはたぶん、指導者がいて誘導したと思うのです。でも、そんな話は昔から1回もなかったですよ、避難場所以外に避難したというのは。では、なぜここへ避難したかという、おそらくその指導者の方が宝専寺さんの和尚さんと懇意だった、というのがあるのではないですか。誰が誘導したかわたしは知りませんが、そういう個人的な付き合いのなかで、たぶんこうなっていったのではないかと思います。それともう1つ、お寺さんというのは夏はとくに避難しても住みやすいですよ、一般の避難所は木の床に毛布を敷いて寝なければいけないんですが、こっちは畳の大広間で避難生活ができます。環境的にはこちらのほうがいいわけです。あのときは、住民の方に避難所のほうに移動してくださいという指示はいちおうしました。でも、動かないということ、宝専寺さんのほうで「いいです、いいです。避難してきた方はお寺へ来たんだから。お寺というのはそういう場所でもあるし、いっここにかまいません」というお話があったもので、無理やり避難場所に移ってもらわなかった訳です。

Q：伊東市の指定避難場所は、公共施設中心に考えてあるわけでしょう？

A：そうです。伊東では、広域避難場所と避難所を、全部で86か所指定してあるんですが、そのうち広域避難場所が21か所、避難所といわれるのが65か所です。この第1避難所とは、各地域にすぐに避難できるような場所ですが、これは全部が公共施設ではありませんが、いずれも準公共的なもので、たとえば宇佐美の児童公園とかいうところも指定してあります。あとは各区が持っている会館とかいうところですね。だから、住民の方がここを1番利用しているわけで、それだけ逃げやすい思っています。

Q：ところで、今度の9月1日の防災訓練は噴火騒ぎをふまえて、いままでにない特殊なことをやりますか？

A：訓練そのものというより、考え方を少し変えました。というのは、伊東市にはさきほど言いましたように、86ヶ所の避難場所があるわけですが、この経験を生かしまして、まあ生かしてというより教訓を得まして、突発的に災害が起こってしまった場合その86ヶ所の避難所への避難はもういいんだと、そんなことはいわないから、地区で話し合いをして緊急の場合一番近くの鉄筋3階建てくらいの建物にとりあえず避難する、噴火でも津波でもそれが一番有効ではないかと。それで、とりあえずその鉄筋3階建て以上の建物に避難したあと、ようすがわかったら避難所に集まってもらい、その後、市の指示により

広域避難場所に逃げていただく、というようにしました。それが一番大きく代わったというか、前進したところですね。それと、いままでは津波の避難ビルを指定してありますが、何にかあった緊急のときは避難ビルに指定されてなくても市民をそこへ入れてやって下さい、状況が変わりしだいまた避難所に移らせますからと、各地区のビルの持ち主にお話ししようと思っています。

Q：鉄筋ビルなら津波は大丈夫ですからね。

A：そうですね。大きな岩が飛んで来るような噴火なら何ともいえないんですけど、軽石が落ちてくるくらいでしたらね。

Q：鉄筋3階建て以上の建物の所有者の反応はどうですか？

A：大丈夫です。といいますのも、今回は伊東市民全員が緊張感を持ちました。旅館主とかホテル主とかも同じように緊張感を持たれたわけですから、そのへんは好意的に対応してもらえるのではないかと期待しているわけです。けれども、それよりもまず住民の方がどっくと思えます。ただ、自分勝手に決めてるのではなく、地域のなかでお願いをしていると思えますので、おおかたOKしていただけるのではないかと。

Q：群発地震は終息したという宣言が出たわけですが、ただ火山のほうはまだ長期的監視を要するというのが公的なコメントですね。将来またこのあいだのようなことがひょっとしてあるかもしれない。で、そのときに一番困るなどが、国に何とかして欲しいなどが、まあ気象庁とのホットラインなんかはそういうことの1つかもわかりませんが、ほかに何かありませんか？

A：そのために、ぼくらは4日間の研修に行かされたと理解しています。そのとき、気象庁のみなさんと非常に懇意にお話させていただきましたので、今度は何か現象があった場合直接すぐに聞いてもよいといわれています。こちらからも表面現象や自然現象みたいなものを見つけたらすぐ知らせます、といっています。

Q：そういう個人的なコネクションはいいですね。

A：それしかないと思います。そういう部分で教えていただかないと、公的なコメントはなかなか。気象庁でも、個人的な見解は言えても公的コメントは言えないということが、いっぱいあると思います。それだとやっぱり間に合わない。だから、仮に現象が違ったとしても、それは結果論であって、教えて頂いたことのほうが有効です。そのためにぼくらが4日間の研修に気象庁へ行かされたと理解して、それなりに成果があったのではないかと、今後の予知とはいえないですが、何かの予測をするときに有効な手段になるんじゃないかと思っています。こんなことは、特例中の特例だそうですね。ですから、今度また伊東市が派遣したいと思っても、なかなか不可能ではないかと思っています。

Q：そのきっかけは何だったんですか？こちらから強く要請したんですか？

A：要請しました。これはです、当初火山性微動が起って、住民の方からすごく電話がかかってきた時、県を通して気象庁にこの現象はなにを教えてもらえないかということを、何回も連絡を取りました。ところが結果的に連絡が来たのは、微動が終わってから。10時前に記者会見があるのでテレビをみてほしい旨の情報なんです。それではねえ。いまここで現象が起きてるのに、中央で記者会見をやってもね。ここの市民はどうなるんだ、置き去りにするのかって、伊東市が反発した訳です。それで県と協議をして、検討してくれるよう県の方も言うてくれたようです。そんな話のなかから、市長が市でも地震波を見たりいろいろな現象を理解できる職員を育てたい、1年くらいしごいてくれないかという話をしたんです。けれども、1年間も来られたら気象庁も困るでしょうし、そのなかで、では研修を受けましょうという話で、気象庁が4日間受けてくれたわけです。

Q：なるほど。

A：まあ正直な話、本当によくやってくれたなと思います。あれだけの偉い先生方が、ぼくらたかが3人のために時間をさいて、4日間も講義してくれまして。それに先生方は自分の学問を難しい形で話すのは非常に楽だと思うんですが、それをわたしにも理解できるようなくだいた話をして大変だったのではないかなあと、聞いているぼくらがそう思いました。

Q：特訓でしこかれて。

A：ええ。ただ1つだけ、本当に火山ってものは予測できにくいことの話だけは言われましたよ。

Q：そうでしょうねえ。

A：けれども、要するに表面現象をどのへんでとらかるかによって、予知はできないけれど、少なくとも防災の準備することはできる、まあ海のなかですとまたなかなか難しいのですが、地上で起こる表面現象を早くつかめば、その時点でけっこう対応ができるのではないかという話もありましたので。で、私のほうの体制が早く整うということは、住民を避難させるにも望ましいし、そのへんでいまでもよりも相当前進したのではないかなあと、思います。

Q：この海底には、観測機器もずいぶん増えましたか？

A：そうですね。海底にも地震計が置かれているようですし、伊東市はいまものすごい機器が入ってます。

Q：それから、もう1つおかしいんですけども、津波に対しての準備体制はかなり進んでいらっしゃるんですか？もし万一最悪の場合、つまり内陸で火山噴火があった場合ですね、火山弾なんていう頭上からの落下物に対する注意も必要だと思うんですけども、避難場所とかの施設に対して屋根の補強をするとか、そういう検討みたいなのはもうスタートしていますか？

A：いや、そこまではまだ進んでません。さきほどお話したように、当面は鉄筋コンクリートの建物のなかへ避難してくださいというのが現状です。

Q：一時避難地とか広域避難場所に指定されている施設が体育館の場合ですと、ストレートぶきというんですか、1枚板みたいな感じで施工されているのが多いですね。耐震構造ということで横の補強はだいぶされていると思うんですが、頭の補強はほとんど考えられてない、というのが現状だともうんです。そのへんを早急に改善していくということは、まだ検討材料になってないんですか？

A：まだそこまで話が進んでいません。というのは、現象が起きたのが先月です。そのなかで、火山の規模がどの程度かというのがいろんな議論になるわけですが、単成火山の最大級は大室山くらいだと聞いています。あんなもんが出来たら何をやってもダメで、体育館の屋根を補強したって壊れるでしょうし、ましてそんな近くへ避難すべきじゃないですよ、もっと地域をかえなければいけないわけですね。ただ、とはいっても建物の補強は考えておかなければいけない。たとえば、学校とかの公共施設なんかは耐震構造に。いま伊東はみんなそうになりました。そういう意味では、地震には強いのではないかなと思うんですが。ただ噴火となると、窓ガラスはどうするのかとか、いろいろな問題が出てくるので、よっぽど学問的に調べていくつかのパターンを作ってもらって被害想定をやらないと、やっぱりまずいのではないかなと思います。

Q：そういうのまで含めて、内陸部での火山噴火を想定したマニュアルを、これから作っていくという考えはありますか？

A：はい、それは考えてます。県もそれを考えて、そのために火山班をスタートさせました。でも、いろいろな話のなかで一番ぶつかるのは、観光客をどうするかということです。

Q：そうですね。

A：このあいだも議論したんですけど、海岸線にいる4万人の市民のほか、観光客が3万人も入ったとしたらどうするんだっていうことで、結局はどうやって被害が出てしまうだろうと。解決なんていくらやってもできないだろう、という話が出たんです。でも、だからといって怪我人を出したら大変なことになる。そこで、考えられる範囲の対策を考えないといけないのではないかな、という話はしているんですけども。

Q：何の兆候もないのに突然ボカンときたら大変だけど、火山性微動がしばらく続くような状況だと、観光客くらいは逃げ出すことができますよね。

A：そうですね。ただ、今回みたいに微動が始まったときには爆発していたとなります。つまり、11日の微動のときすでに爆発してたのではないかって説もありますね。だとしたら、伊東の場合、微動イコール爆発につながるわけです。そうすると、爆発が海岸線で起きたら、対応なんてあるかなって気がするんです。ですが、さきほども言った通り、表面現象をいち早くとらえて気象庁と密に連絡して、変化があったときにすぐ観測を強化して、少しでも観光客をそこから引き離すようなかたちをとることが、いまやれる最大のことでないかなと思っています。

Q：結果的には、今回は微動の期間が短くて噴火しなかったから、むしろ混乱が起きなかったのかもしれないね。

A：そうなんです。このあいだも議論していて、3万人の観光客をいくらピストン輸送しても輸送しきれないだろうと。それにまた伊東市民にしても、噴火が宇佐美で起きる可能性が強かったときには、伊東から熱海へ脱出はできないだろう。どうしても今度は南側へ動くことになるから、単線の伊東線で何万人も誘導できるかと。やっぱり交通機関では有効でなくて、もうみんな歩いて行くというかこうでないとできないだろう。よほどの災害弱者は交通機関を使って、それ以外はやはり歩いて逃がすようだね。人間というのは速いですよ。30分あれば、本気で歩くと4キロくらい歩けるですね。海岸でかりに爆発すれば、被害のあるのはだいたい半径3キロ～4キロですね。5キロ離れるとほとんど安全地帯です。ですから、そういう意味では30分の時間があれば健康な人を歩いて逃がしても、逃げられるのではないかなと。ただ観光客のほうは誘導の通り動いてくれるかという問題がありましてね。人間というのは何か被害があって怖いと思うと、うちへ帰ろうという本能があります。そうすると絶対に東京の人は、だめだと言っても東京まで帰ろうとする人が出てくるのではないかなと思います。

Q：それは一番の問題ですね。では、最後にまた同報無線の話をお聞きしたいんですが。同報無線の緊急放送は、同報無線で放送すると同時にCATVでもやるんですか。

A：同時に流れます。

Q：そのCATVには文章で流れるんですか、言葉で流れるんですか？

A：こちらにカメラが全部置いてありますので、カメラスイッチで同時に顔と音声を流します。最近では、いちおうテロップも合わせて流すようにしてあります。というのは、当然ご存じだと思いますが、市の放送の話し方がかなりゆっくりなものですから、コールサインのピンポンパンというのを鳴らしたと同時に、こちらは広報伊東ですと言う前に、もう市民の方から電話がかかってくるんです。

Q：それは、聞こえないから教えてくれっていうことですか？

A：ええ、聞こえないから内容を教えろというのと、聞こえるけれども早く聞きたいということとあったようです。それで、ゆっくり放送するよりも、テロップを流してそれを見ていただいたほうがより速いんじゃないかと思ひまして。

Q：放送の文面はどなたが考えるんですか？

A：いろいろです、助役とか企画調整部長とか。わたしどもも一緒に考えたりもしますけど、最終的には、助役と市長の了解のもとに。

Q：市の同報無線はいつからありますか？

A：防災無線というかたちでは未だ新しいですけど、昭和38年の8月から広報無線として開始しております。

Q：これは、だいたい女性が放送するんですか？

A：基本的にはそうです。声の通りは女性のほうがずっといいわけですから。

Q：だいたいどのくらい広報伊東の同報無線が聞こえるか、と言う調査はしたことがありますか？

A：昭和58、9年に隣組を通じて調査をしました。それによると、7割が聞こえるということでしたけれども、内容がわかるかどうかになりますと、それよりも落ちるでしょう。

Q：つまり、音が聞こえるのが7割ということですね。

A：その当時の調査方法など細かい点までは聞いていないものですから、時々聞こえるとかいう点までは踏みこんでおりません。ただ、同報無線がうるさいというのが、いままでは多かったのですよ。ですから、最初は時報チャイムを朝7時と正午、それに夕方5時と1日3回流していたのですが、現在は正午と午後5時の2回にしているのです。それに、市内の南部地域では別荘地がかなり開発されておりますので、その人たちはそういう情報はいらぬという話もあります。

Q：なるほど。長いあいだどうもいろいろありがとうございました。

宝専寺住職（1989年8月20日）

Q：どうもお忙しいところを申し訳ありません。宝専寺さんは、11日の火山性微動が頻発したときに住民の方が避難したという新聞を読みまして。それから、M5.5の地震のときにも避難した方はいるんですか？

A：はい。延べでは、だいたい5日間ぐらいでしたかな。避難者の控えは市が持って行っていました。初めはここにありましたけども。ですから、その確実な数はちょっとわかりませんが、一番多かったのは140～150人くらいだったでしょうか。

Q：そうですか。

A：微動のときが一番多かった。そのときはみんな泊まりました、本堂と庫裏にですね。それから、夜泊まりにくるというのが多かったですね。夕食をすまして泊まりに来ると。だいたい2日目くらいからは、40～50人くらい。だんだん数は減って来ました。

Q：それは、この近所の人たちですか、津波の心配ですか？

A：はい。だいたいこの近所の人たちですね。ここは昔から、大正12年の大震災のときから、ここへ避難するという習慣があるんですよ。地震のときは磯部へ行くんだと。磯部山宝専寺といいますからね。磯部へ行くんだという、この地域の不文律というか、そういうのがありますからね。それで、お墓があんなにひどいのはどうしてお寺にいくんだろうと、伊東以外の人は不思議に思ったらしいです。しかし、いまでも防災の日の9月1日にはここで訓練しますからね、そういうことで、ここはいつでも行くんだという癖がある。

Q：ここは、避難命令がなくても自分の方から？

A：ええ。避難命令が出ないうちに来ますね。年寄りとか子供を先に連れて、若い者は後から。そういう習性になってますね。ですから、こちら当然に思ってます。

Q：それでは、最初からおうかがいしたいんですが、6月の末から群発が起こりましたですね。これは毎年のことっていう感じもあるんですが、ほかの人に聞きますと、今年の揺れはちょっと違ってるとような気がしたと聞いたんですが、そのあたりはいかがですか？

A：ええ。とくに違ったのは、あの噴火の前。あのときは、もう今までとはちょっと違う、これは特別だ、どうもおかしいと思いました。いわゆる地の底からドンドンドンドンと大きな太鼓で下からひっぱたかれるような、そういう感じの連続が30～40分あったんですかね。いままでは経験したことがないですね。これはただごとではないっていうことで、みんなここまで上がってきたと思うんですね。

Q：気持ちが悪くなってやってきたと。

A：ふつうの地震なら慣れてますから。

Q：そうすると、噴火するかもわからんという気持ちがあったわけですか？

A：いや、噴火ということは誰も予想しなかったでしょう。あの噴火があって初めてわかったことでね。ドンドンという異様なね、ふつうの揺れでないという気持ちの悪さが、みんなを共通の恐怖感に持ってたんでしょうね。それで自然に、大量の人が避難するという形になったと思いますね。

Q：最初は女子供が避難するんですか？

A：お年寄りを、だいたい先に連れて来るんですよ。そして、若い人が着換えや寝巻や何かを、あとから持って来るんですよ。さしあたって足腰の弱い者を先にということ。

Q：この本堂に？

A：はい。本堂では入りきりませんから、本堂と上の庫裏と。上のほうが本堂より広いですから。両方では200人くらいは収容できます。ですから、市のほうでもそれに対応した物資や、各地区からのお見舞いなどがたくさんありました。

Q：すぐ来ましたか？

A：市は毛布、それから乾パン。本堂の横にありました。避難した人に使ってもらいたいと。それから今度は、ラーメンだとカリスカレーとかの食糧品。ありがたいなと思いますね。

Q：そのときは夏でしたけども、布団類は？

A：ええ、毛布は200枚くらいきましたね。それから、お寺にも合宿用のふとんがありますから。そんなのを40～50枚出して。

Q：避難した皆さんは、ジーンとしてるんですか？それとも、ラジオか何か聞いているんですか？

A：テレビをね、大きなテレビを入れてもらいましたね。電話局は無料の電話を持って来るしね。Q：NTTのですか。

A：はい。そういうサービスがありましたね。

Q：それは、その翌日くらいからですか？

A：ええ、だいたい2日目くらいからですね。テレビが上と下に入りました。それが大きかったですね。それから、報道陣のことでだいぶもめましたね。もめるというか、避難した人たちのうぶんが出ましたね。

Q：避難して来ると同時に、報道の人も取材にくるわけですか？

A：ええ。報道の人は夜になって来るんですよ。だから、子供が寝てしまうところでライトをつけますからね。そしてインタビューでしょう。それが避難してきた者にとっては、つらかったんでしょうね。だから、怒って追い返したり何かした者もいて。

Q：こんなところにはとても避難できないといって、家に帰った者もいるという話も聞きましたけど。何か新聞の投書欄にのってましたですね。

A：けっこうなってましたね。まあ、どちらも理屈はあるんですけど。一般の避難者に対してさえそうですから、ここの寺の当事者に対しては、本当にものすごかった。相談して誰か代表して来ればいいのに、「これは何です？これは何です？」って、みんな各々ここに来るわけですよ。しかも同じことを質問するんですよ。そういうようなのが非常に多かった。それでもうこれは止めようと、相手にするのをね。

Q：電話は多かったでしょう。電話が大変ですよ。

A：電話がふさがっちゃって困りましたよ、もう。だから、留守番電話にしましてね。これこれこういう状況でいまは混雑してますから後でどうぞと、そういう留守番電話に切り換えたりしたくらいです。

Q：13日の噴火の後にも、避難した人はいたんですか？噴火したからここに来ようと。

A：噴火してからは、数はそう多くはないんですけども、だいたい3日か4日続きましたかねえ。でも、

食事はなかったですね。食事はみんな近いですからね。食事をすまして、夜は不安だからこっちへ来るというかたちが多かったですね。昼間何か家ですごして。

Q：赤ん坊をかかえた人もかなりいらしゃったんですか？

A：それが、赤ん坊は割りに少なかった。お年寄りが圧倒的に多いんですけども。

Q：地域自体に子供が少なくなっているってということですか？

A：ええ、いまは全般に少ないですよ。

Q：宇佐美の中学生に聞きましたら、夏休みが近かったということもあるんでしょうけど、親戚の家に疎開していったというのもけっこういたんですが、このあたりでも小学生や中学生は親戚へ行っちゃったとか？

A：疎開したのはいましたね。同じ伊東でも、ちょっと離れたら何でもありませんから。ここから4～5km離れればもう何でもない。これは、今度の地震の大きな特長だと思いましたね。だいたい地震は、伊豆一円ってような広さで来ますからね。今までの地震はそうでした。ただその強弱は多少違いますけれども。ところが、今度の場合は伊東市内で全然感じない場所と、あの通りお墓がひどくやられる場所と、その差がものすごかったですね。

Q：地震の揺れに関しては、このへんが一番強かったんでしょうね。

A：そうでしょうね、震源に近いから。ちょうどここが、半島の先端になりますからね。お墓がとくにその一番先端になりますから。海へ面したほうの斜面が弱いんです。内側は何ともありません。ほとんど倒れません。同じ墓地の中でもものすごい差がある、斜面によってね。地盤もやっぱり海側が弱いんでしょうね。ですから、今度移転する墓地は山側のほうへ移転します。それから、工事のやり方にも原因があるようですね。お骨をいれる所をカロウトというんですが、カロウトの作り方もこれからは指導しないとダメだなと思いますね。上のほうのお墓ばかり立派にすることを考えて、地下の見えないところの手抜きをするとダメだ、ということが今度は実にはっきりしましたね。

Q：新しい墓石のほうがよく倒れてるように見えたんですけど、どうでなんですか？

A：新しいお墓の方が弱い。古いお墓の方が強いですね。古いお墓は、墓石を乗っけてる、接点をザラザラにしてあるんだよね。ところが、新しい最近のお墓は、いわゆる体裁よくってということばかりで、縦の面も横の面も全部みがくと同時に底もみがいてあるよね。だから、みがいてある同士だから、手でも動いちゃう。昔の墓はザラザラしてますから。

Q：それは、わざとザラザラにしておくんですか？

A：そうでしょうね、やっぱり。これがえらいところでですね。ああいう切ったお墓じゃなくて、天然の丸とか三角とかの格好をした石を平らな台の上に掘り込んで、乗っけてある。これはまあ強いですわね。そういうお墓が四つくらいありましたね。

Q：以前にあるマスコミの人に聞いたんですけど、伊豆地方ではお墓に芯が通ってて、墓石が倒れないようになってるんですか。

A：ここにも、かなり芯棒の入っているお墓はあります。もう立てちゃったから、わからなくなりましたが。だけで、それでも抜けて落ちてくる。

Q：相当な揺れなんですね。

A：だから本当に、形あるものはあてにはならん、壊れるんだよっていうのを実に厳しく教えたような地震でしたね。

Q：お墓がこわれたところの人は、また直すのにたいへんですね。

A：ええ、お寺としては強制しませんが、こうして欲しいという希望ですね、囲いはやめましょう、石燈籠だの、墓誌っていうのがあります、法名だけを彫る。墓石とは別にね。あれも石屋さんの儲けなんですすよ、あれもまずいんです。とにかく、そういう体裁のいいのは全部やめましょうと。それからお墓はなるべく小さくして、できたら寝かせましょう、横にしましょう。外国の芝生にはでっかいプレートが置いてあるだけでしょ。あれが理想ですね。理想ですけど、日本では容易じゃないでしょうね、お墓という観念がとて強いですからね。いわゆる見えっぱりっていうかね、これも日本人の特徴ですからね。上はきれいに飾って、肌着は汚い。本当のおしゃれは、肌着をきれいにして、上は粗末にする、これが本当のおしゃれです。そういう観念が日本人にはないですからね。

Q：ところで、新聞なんか読みますと、11日の火山性微動が出てくる前後から、噴火があることかいうような噂が広がったと新聞に載ってるんですが、何かお聞きになったことはありますか。

A：はあ、流言蜚語っていうのは、あまり耳には入らなかったですね。ただ、市役所でも一度そんなことがありました。言葉の使いかたが悪かったために誤解をして、どうのこうのっていうことが。だから、あんなにつつかれたら出す方もとても臆病になりますね。あれは善し悪しだと思いますね。本当は出

- したいけれども、出すとかえって叩かれやしないかっていう、そういう懸念を抱かせるでしょうね。
- Q：その出来事があったのは15日の夕方なんですけど、このお寺では、そういう広報無線はあまり聞こえないですか？
- A：ええ、市の放送は聞こえないんです、全然。で、仕方ないから、わたしは下の檀家の人に電話をかけて、今の放送は何でしたかというふうに聞かないと。ここではワンワンと声がだぶっちゃうんですよ。
- Q：しかし、200人くらいの人が避難してくるとなると、やっぱり無線が聞こえたほうがいいですね。それはまあ、変な情報が流れたら逆効果ってこともありますけど。そうすると、町からの連絡は電話で来るわけですか？
- A：いや、区長とか町内会長から来ます。そういう制度が、ここは非常にピシッとしてますから。そっちからの伝達があるんです。そのほうが確実ですね、何といっても地域がまとまってるからね。そういう意味では、お寺はこういう所だという考えがこちらもあるし、みんなのほうでも、いざというときに行くところだという親しみが常時あると。
- Q：じゃあ、檀家じゃない人もずいぶん来るわけだね。
- A：ですから、檀家とかそういうのではないんですね、もう地域ですから。
- Q：いざっていうときの、市が指定している避難場所にもなっているわけですか？
- A：市は指定してないんです。ここは、東小学校が指定の地域です。
- Q：すると、習慣的にくるわけですね。
- A：そうなんです、習慣的ですね。それと同時に、避難場所まで距離が相当あるんですよ。
- Q：遠いんですか。
- A：ええ、ですから近いほうがいいということでしょうね。
- Q：じゃあ、東海地震の警戒宣言でも出たら、やっぱり来るでしょうね。
- A：まあ、地震ということになれば必ずでしょうね。
- Q：噴火っていうのは、本当に予想外でしたもんね。
- A：ええ。地震は慣れててもね。あれが本当に今度のおまけでしたね。ちょっと珍しかったですね、あれは。
- Q：どうも長い間ありがとうございました。

民宿K氏（1989年8月20日）

- Q：今年も6月の末から、群発地震がありましたね。今年はちょっと今までと違うぞっていうような気持ちでいたら、とうとう噴火が起っちゃったと言う話を聞いたこともあるんですが。どうですか、Kさんは今回の群発地震をどう思いましたか。
- A：今までの気象の状況が異常っていいですかね、長雨とか入梅がズレたりというような、異常気象的なことがここ2年ばかり続きましたね。去年は長雨で寒くて、その前も長雨で。気象の変化が従来とは違っていましたね。今年の場合は、入梅時期が順調に来ていまして、だいたい7月18日頃には梅雨が明けるんじゃないかということで、だいたい今年は予報が当たるのではないかと、という腹づもりでしたんですね。そうしたら、7月9日にね。
- Q：地震ですか。
- A：今年はいいいではないかという期待で、今年も同じような群発地震が起こるんじゃないかっていうことはなかったですね。
- Q：7月9日のお昼頃ですね、11時に地震がある。その前は、あまりキャンセルはなかったんですか？
- A：ありませんでした。順調っていうか、例年、気象的なものがありますので、どうしても最盛期のときは6月を過ぎるとポチポチ入って来ますけどね。今年も入り方としては、そんなに悪くはなかったと思います、予約の状況は。
- Q：地震があったのは、午前11時9分ですね。Kさんは、そのとき何をなさってましたか？
- A：わたしは、ちょうどうちの嫁が病院に入院してたもんですから、家族みんな一緒に出かけるって言って、駐車場に車に乗って出かけようとしたときに、ガーと来たんです。
- Q：その日は、お客さんはいなかった？
- A：いませんでした。
- Q：このへんは、ずいぶん被害がありましたか？
- A：そうですね、ほとんどの家が傾いたとかいうことはありませんでした。互ぶきの家はみんな煉瓦が落

- ちたいうんですかね。うちの場合ですと、ヘビがのたくったみたいに曲がっちゃった。瓦自体は落ちなかったです。このへんは、360度見回したところ、瓦屋根の家は煉瓦がみんな倒れましたですね。
- Q：久しぶりの大きな地震ですか？
- A：そうですね。その前にはわたしもテレビに出さしていただいたんですけどね。地震慣れっていうんじゃないんですけど、いままでの直下地震っていうのは、横揺れじゃなくて縦揺れですね、ドシン、ドシンと。ですから、たいした揺れでもないっていうんですか、この程度じゃないかなっていうんですか、心構えができていますよ。大きいのは震度5とか4とかいうのがありますが、結局ドシン、ドシンっていう縦揺れですから。ですから、今度のものが初めてだっていう感じはなかったですね。
- Q：でも、11日に群発地震が減ってきて、まあ群発地震はこれで終わりかなと思っていたら、今度は火山性微動でしょう。微動の情報はやはりテレビで最初に知ったんですか、11日の夜ですね。
- A：テレビもありましたけど、その前の晩だったと思いますが、わたしはちょっと書きものをしてましてね、居間で書いてたときにドシン、ドシンという、ズシン、ズシンですかね、ちょうど2階のほうで子供がドタバタ、ドタバタあばれますね、ああいう音がしたんですよ。規則正しく。いちいち時計を見たわけじゃないですけど、そういう音はありましたね。
- Q：それは10日の夜ですか？
- A：そうです、噴火の前の日です。だから、いつも孫が来るものですからね、2階であばれてるんじゃないかって独り合点して、今日はもうずいぶん元気がいいなんて思ってたですね。それと、いつかちょっと忘れましたが、やっぱり地鳴りみたいなものは聞きましたね。
- Q：いままで、そういうことは？
- A：そういうことはなかったですね。経験がなかったもんですから、こういうことがあると噴火が来るっていうのは、あくまで未経験でしたからね。よく地鳴りがするっていうようなことは聞いたことがありますけど、実際に聞いたのは初めてです。
- Q：そうすると、市役所に問い合わせをするとか、何だろうって誰かに聞いてみるとかは、なさなかったんですか？
- A：先ほどの話じゃないけど、地震慣れっていうか、ずうずうしくなっちゃってね。いままで過去3年ぐらいですか、川津、川奈、そして今度は宇佐美と、そのつど揺れたりしてるものの、たいした被害が出ていないもんですからね。家が傾いたりすれば、もっと真剣になるんだけどね。同報無線っていうんですか、ああいうものは聞くんだけれども、自分のほうから自発的に情報について確認するとかっていうようなことは、わたし自身はやりませんでしたね。
- Q：その次の11日夜になると、ドシン、ドシンがひどくなるわけですね。新井なんかだとお寺に避難するということになるわけですが、11日の晩はお宅はどうだったんですか？
- A：うちは見たとおり四方が広場なもんですから。最終的には小学校が避難場所になっておりますけど。年寄りの話をききますとね、うちも代々ここにいたわけじゃなくて、国道ぎわにいたんですよ。大正15年ですか、伊豆震災のときに国道ぎわにいて、流されて、ちょっと下のうちに越して来て、それからまたここに引っ越ししたんです。伊豆の震災のときには、この線路ぎわまで山のほうへ逃げたっていうんですが、そこへ逃げるんならば、この田んぼのなかにいれば別に障害物もないから、特別に避難場所っていうものを選んで逃げなくても大丈夫じゃないか、という自己判断ですね。極端なことを言えば、小学校に行くあいだに地割れとか何とかあって、結局、二次災害っていっちゃオーバーですけど、そういうものへ巻き込まれるよりもここで避難したほうがいいんじゃないか、というような判断でしたですね。
- Q：そのとき、お客さんは？
- A：お客さんはいなかったと思いますね。いつも泊まってる方が帰ったんじゃないかと思います。
- Q：新聞を見ますと、この噴火が起こる前に、地割れがするとか噴火が起きるんじゃないかといううわさが一部でひろまったという記事もあるんですが、このあたりではそういううわさを聞かませんでしたか？
- A：聞きませんでしたね。
- Q：じゃあ、割合に平静だったと。
- A：取材の人は多かったですね。ヘリコプターが飛んだりということはありましたけども、地震が来るとか、噴火だとかいうデマはなかったですね。
- Q：13日に噴火があるわけですけど、この噴火はどこで知りましたか？
- A：うちにいました。
- Q：噴火があったのはどのようにしてわかりました？

- A：ちょうど、Nテレビの取材が来ておりまして、取材の方に何か海のほうがおかしいよってという情報をもらって。わたし自身は見に行きませんでした、夕食の仕度とか何かそういうのがありましたから。噴火を見たのはTVですね。こういうのがあったっていうのを。
- Q：Nテレビの取材班がいたのは、いつからですか？
- A：11日からですね。
- Q：Nテレビの一行だけがいたんですか？
- A：そうです。
- Q：例年、7月の初めはあんまりお客さんがいないんですか？
- A：だいたい25日頃から本番なんですよ。学校が終わりませんと。民宿の場合は割合に家族連れが多いもんですからね。
- Q：そうすると、キャンセルがあったわけじゃありませんか、その頃は？
- A：いや、地震がありましたから、連日キャンセルだらけでした。
- Q：それは、7月の後半から8月分のキャンセル？
- A：そうですね。キャンセル料の払い戻しの関係について、問い合わせもずいぶんあったりしたものです。従来ですと1日前は半額とか、当日は全額とか決めがありますね。ただ、地震のキャンセルについてはどうしようもない払い戻しをしたらいいかっていうことがありましたもんですから。組合員の方々にどういう状況だって聞きましたら、7月いっぱい、それから8月についてもキャンセルが出てるっていうんですよ。8月にはいってちょっと聞いてみたら、お盆だけは割合にキャンセルが少ない。例年、お盆はいつも1番最初から決まっちゃうんですね。まずお盆が決まって、それからだんだん8月の初め頃にく、決まり方としてはね。7月の状況は、100%っていったらちょっとオーバーですけど、97~98%でしょうね、全減っていうか。とにかく組合員に聞くと、「今日と何万円送ったヨ」ってなことで、うちあたりでも、キャンセル料を送るのが毎日のようなんで、ちょっと待っててくれて送らないでいまして、お客さんにおこられたりしまして。いつになったら返してくれるんだ、という苦情を受けましてね。
- Q：そうすると、お盆はまあいいけれども、8月の初旬あたりも100%近い？
- A：そうでしたね。その時点で感じたことですが、地震予知連ではまだ警戒を要するというので、雑誌、新聞、テレビなどの電話による取材はありましたし、何か特別のメニューを組んでキャンペーンをしたかどうかというお話もありましたし、そういう予定はないかという問い合わせもありましたけどね。ただ、さきほども申し上げた通りお客さんの主体が家族ですので、安全が確保できないかぎりには、いくら鯛の生き造りが出ますよって言っても、安全が保証できなければですね、アベックさんみたいに、大人の方で行動が速ければいいですけどね。子供がいまして、津波だっていうときに、行動がとれないっていうんではね。お客さんから状況はどうでしょうかというお問い合わせがありましたら、実際にわれわれとしては海は静かですよ、噴火が来る気配もないから来ていただきたいんですが、もう少しようすを見ておいでになったらよろしいじゃないですか、とお返事したんですけどね。
- Q：そういう受け答えをするわけですか？
- A：はい。わたしたちとしては、早く終息宣言っていうか、地震はおさまったんだよというようなものが出てくれればですね、お客さんは来るんじゃないかと。結果的に安全宣言はでましたですね。それで、お客さんは多少なりとも戻って来ましたが、とうていもと通りにはいきませんでしたけどね。料理っていうよりも、安全面が確保されれば、お客さんは来るっていう感じは受けましたですね。
- Q：安全宣言がでたりすると、とたんにお客さんが来ますか？
- A：いや、とたんというわけではありません。けれども、地震が7月9日でしたが、まあ素人考えで、1ヶ月間もそう毎日毎日揺れるっていうようなことはないだろうと、まあそのうちに静かになるんじゃないか、っていうことですね。それがたまたま7月の終わりでしたか、地震はおさまったっていうことで、そうしたら例年来てくださるお客さんから問い合わせがあったりしましたね。
- Q：わたしたちは、この一連の推移を見ていて、マスコミが騒ぎすぎじゃないかっていうのもあるんですが、その点はどう思いますか？たしかに、群発地震があったり火山性微動があるのは事実ですから、それは当然書かなきゃいけないことですね。だけど書き方っていうのがあるわけで、「不気味な鳴動」とか、そういうことを書くのはちょっと書きすぎじゃないかなって気がしたんですけども、地元の人から見てどうでしょうかね。
- A：先日も、食品衛生協会と旅館組合の会議がありまして、そのなかで、いまおっしゃられたようにあまりにもマスコミがやりすぎるという不満がありましたですね。けれども、それはそれなりに各社の競争があるもんですから、それは何ともいえないと思うんですけども、実際にわれわれが感じたのは、川奈の道に崖崩れが起きたんですが、地元の人間は135号線のここが壊れたって仕方ないっていうんです、

ふだんはあまり利用してないからたいしたことない。ところが、それがテレビに出る。また、新井の宝泉寺ですか、お墓がみんな壊れちゃったっていう。わたしたちの祖先のお墓も壊れないわけじゃないですけど、ちょっと誇大的ですね。もう少し現実の報道をやってもらいたい。ちょっとオーバーって言えばオーバーでね。自分たちが見て、何だこんなところたいしたことないじゃないんだってあつていうところですね、知らない人であれば、こんなひどいんだっていう印象は受けたでしょうね。

Q：テレビに放映されるのはウソじゃない、本当にそういうことがあるんだけど、ちょっと大きな感じがしますよね。

A：それはありますね。

Q：ところで、今度は15日になりまして、市の無線が「海底噴火により津波の心配があります」って流した、それで多少の混乱が起ったということがありましたね。この宇佐美ではどうだったんですか、その混乱については？

A：わたしは、その放送は聞かなかったんですけど、ちょうど取材の方が来ておりましてですね、で、あたりがザワめいているんで、実際はどういう状態なのかってことで、市のほうへそのとき初めて確認をとりましたですね。どういう情報を流したんですかって、市役所に放送内容の確認はいたしました。

Q：Kさんは、報道の人から話を聞いたわけですか？

A：そうですね。

Q：この家の30メートルくらい先に同報無線がありますよね。ふだんも聞こえますか？

A：聞こえますけども、家の前で自動車や何かが通ったりしますと聞きとれないときもあるし、仕事していた場合は特別にそちらのほうに耳を傾けることもありませんでね。通常の場合は、特別に何かあるっていうと外へ出て聞いてみるとかしますが。そのときは、津波が来るぞっていうんじゃないんですけど、来る気配っていうか、心配があるから準備しててくださいっていう親心じゃなかったかと思うですね。だけど、それが津波が来るぞっていうように受け取られた。それで、みんなしたくをして出かけるとか、あっちへ出た、こっちへ出たっていう行動を起こしたのは見てますね。

Q：お宅の娘さんとか、息子さんはどうだったんでしょうか？

A：うちは、先ほど申し上げたようにここへ津波が来るっていったって、そんな大きなのではないからね、だいたい大丈夫。それに、東大の名誉教授の先生が、そんなたいしたものはないと言っていました。そんなに大きいのは来ないんじゃないかかっていう感じは受けてましたからね。

Q：このあたりは津波の危険地域ではないんですか？東海地震なんかあるとどうなんですかね。

A：そこまでは確認はしてないですけど、特別に指定されてるとかっていうのは、ちょっと。

Q：そうですね。このあたりの方は、そんなに津波に対してはあんまり深刻ではないと。

A：いや。放送があったときは、みんな真剣に考えたですね。後で聞いた話では、海岸の人たちはみんな山のほうへ逃げたとか、電車で違うところへ避難するっていう行動はとったようですね。いつでも津波が来るっていうことを日常茶飯事に話し合うことはありませんけど、今度の場合は、現実目の前でそういう現象があったもんですからね。こりゃ大変だっていうことじゃないかと思えますけどね。

Q：わかりました。それでは次にお聞きしたいんですけど、火山噴火予知連の発表ですと、当面は大丈夫かもしれないけども長期的にはまだ警戒を要する、場合によってはまた、このあいだみたいな噴火騒ぎが起り得る可能性があるわけですね、将来。そこで、お客さんをかかえる職業としてですね、市役所とか県に防災対策としてどんなことを一番望みますか。

A：特別にこういうのをやってもらいたいとか、ああいうのをやって、わたしたちとしてお願いするものはないんですけど。ただ、これで3年も毎年続いているわけですね、だから来年また夏近くになると病気が起るんじゃないかかっていうことですね。来年もまたこれじゃあ、どうだろうかという先行き不安ですね。

Q：この3年間は、経済的にはかなり打撃ですか？

A：今年ほどではないですけどね。

Q：今年が一番ひどかったですか？

A：ええ、去年あたりでも地震はありましたよ、気候も寒かったですよ。ですけども、こういう現象がなかったからですね。お客さんは来ていただいても、冷たい雨は降って泳げない。家族づれで来るんだけど、よく来たわ。いつもの通り泳いで帰るっていうパターンが決まってるから、来た以上はいっぱい泳いで帰るっていうことで、予約の指定席を買っているものですからね、4時なら4時まで電車を待ってなきゃならないでしょ。雨は降ってる寒い、泳げない。連日お天気が悪いもんですから、サボテン公園とかハトヤのプールとかって行くわけでしょ。去年はそういうことがありましたけど、お客さんは来てくださったんですよ。今年の場合は、もう噴火があって、地震があって、伊豆の地震がトップで報道

されるわけでしょう。ですからもう今年の場合には、最終的には例年の3割ないし4割じゃあないかと思えますけどね。その前も良くありませんでしたけどね、年々悪いですが、今年の場合は特別に悪いんじゃないですかね。

Q：そういう経営不振になったときには、長期低利の融資をやりますよね。融資っていうのは、金を貸すだけでいづれ返さなきゃなんないから、あんまり意味がないんじゃないかなんて思いますけど、融資を受ける人はかなりいるんですか？

A：調査はしてませんが、民宿の場合は父ちゃん母ちゃんていいですかね、比較的專業でやってる人は数が少ない。宇佐美の場合でも、お父さんが動めるとお母さんが自分だけでやるとか、お父さんがアパート持てるとかいうように、他のところで収入が得られる人が比較的多いんですよ。だから、そういう融資を受けなければならぬという相談も、商工会議所なり何なりで気を配ってくださってはおりますけど、そういうことについて、いちいち私のほうに相談にのってくれていうことまではありません。結局、収入っていうものはどこかっていうと、やっぱりお客さんが来てくれないと利が生まれないわけですね。お客さんに来ていただくということが先決問題になるんですね。

Q：またこの次に、ドシンドシンという火山性微動があったら、Kご自身はどうなさいますか。

A：うちの場合は何回も申しあげるように、そんなに昔みたいに乾パンを抱えて持って行かなきゃならぬという状態ではないんですよ。そういうことについては、援護体制が完備されてますからね。夕べも、9月1日の防災訓練の打ち合わせがあるから出てくれているんで行きました。ご飯の炊き出しとか例年やってるものを今年はやめるっていうんですね。やらないのは何かっていうと、大かかりにご飯を炊かなくても、簡単にポリ袋みたいなのに、ご飯を入れて醬油をいれて熱湯の中へ入れればご飯が炊けるというような簡単なことが出来るとか、そうでなくてもヘリコプターなり何なりが来てすぐに食料については確保出来るっていうことでですね、比較的配慮しなくてもいいんじゃないかと。

Q：ところで、さっき話に出た、同報無線を聞いて逃げたという人はご近所にいらっしゃいますか。直接会って、その人に聞いてみたいんですけど。

A：海岸の近くにIさんがいまして、その人は逃げて行きました。ちょうどテレビにも出ましたけどね。取材してるときに、「あんたどこ行くんだね」って言ったら「津波が来るから逃げるだよ」って仕度して。

Q：どこのお宅ですか、行ってみましょう。いや、どうもありがとうございました。

Iさん（1989年8月20日）

Q：突然お邪魔してすみません。さっそくですが、7月15日に同報無線の津波放送がありましたね。そのことについてお聞きしたいんですが。お宅では、ふだんから同報無線の声はよく聞こえるんですか？

A：聞こえないんですよ、こだますみたいで。向こうから聞こえて、こちらのほうから聞こえて、二重に重なるんです。

Q：あのう、7月13日の噴火の日はここにいらしたんですか？

A：ええ、噴火は見ませんでしたけどね。ちょうどドーン、ドーンと大きな音がしたもんですから、外へ飛び出しちゃったんですよ。下から突きあげるような感じですね。それだもんですから、外へ飛び出して噴火は見なかったんですよ。

Q：外へ出ると噴火は見られないんですか？

A：玄関のほうへ出ちゃった。裏へ出れば見えたかもわかりません。

Q：じゃあ、まったく海底噴火だとは思わない？爆発みたいな感じですね。

A：そうですね。その4、5日前はドンドンって、工事やるときにトントんやりますでしょ。あんな感じの音がずっとしてたんですよ。それで、近所をずっと回って見たんです、何かやってるのかと思って。だけどそういうものもないもんですからね。そういう放送もありませんでしたしね。

Q：ドンドン突きあげるの、何となく不気味ですよ？

A：そうです、凄かったですから。

Q：市役所か何かに問い合わせるとかは？

A：わたしはやらなかったんですけど、すぐお向かいの方が消防署へ問い合わせたそうです。でも、全然わからないということだったんです、消防署でも。

Q：じゃあ、海底噴火とはまったく結びつけていないわけですね。

A：全然そうは思わなかったですね。海底火山のときは本当にひどかったですよ。

Q：音がですか？
A：ええ。うちがつぶれるかと思うくらいでしたからね。
Q：9日の地震のときはお宅は相当に被害がありましたか？
A：いいえ。その食器棚に時計を乗せてあったんですが、それが落っこちてガラスが割れただけでした。うちは去年の3月に出来たもので、地震に耐えられる工法だそうです。
Q：そこで、さっきの15日の津波放送の話ですが。
A：15日ですか。息子が東京からきましてね。津波、津波って東京のほうじゃずいぶん大きく報道してましたでしょう、TVなんかで。息子が東京からきて、津波がくるといけないから逃げろって。
Q：心配でいらしたわけですか。
A：それで逃げたほうがいいってことですね、沼津からちょっと先の原っていうところに友だちがいますのでね、そこへ2日ばかり行ってたんです。でも、津波の放送っていうのはちょっと覚えがないですね。
Q：Kさんのお話ですと、津波の放送のときにたしかIさんは避難したはずだと。
A：じゃあ、それを聞いてから行ったんだと思いますね。でも、その放送もこだまするみたいだったから津波とかそういうのは聞こえなかったですよ。
Q：どこに行くのって聞いたら、避難するんだっていう話だったんですが。
A：ちょうどその日に、TVに息子が呼び止められて、それでどちら行かれるんですか、避難するんすっていうことになったんです。
Q：それじゃあ、東京の息子さんがこられて、息子さんの判断で避難したと。
A：わたしたちは津波津波っていても、そんなに。もうここがつぶれれば、宇佐美は全滅だからっていうんで主人がなかなか動かなかったんですよ。ところが息子が来たもんで、息子にいわれて仕方なくね。
Q：息子さんは、東京からいろんな情報を聞いてきて早く避難したほうがいいよと。
A：そうです。それで、隣に主人の姉がいるんです。やっぱり東京に息子がいるもんですから、なんでも来いということで、わたしたちが行く前の晩になくなっちゃったんですよ。それで、隣が行ったんだからということで、息子も心配して来たりしたもんだから。
Q：で、その原の友達のところに行っちゃった。
A：そうです。3日ばかりいました。
Q：Kさんに呼び止められたのは、原へ行く途中だった？
A：そうです。
Q：車でずっと行かれた？
A：いえ、電車で。本当に、津波っていうことまでは頭がまわらなかったですね。あんまり大きなショックっていうんですか、ドーンドーンっていう。
Q：震動の方が不安？さっき、ここがダメなら宇佐美はみんなダメだっておっしゃったけど、津波についてはふだんからそんなに恐怖心みたいなのはないんですか？
A：そうですね。わたしはそんなに恐くないですね。主人の父親の話では、津波が来るときは家が持ち上がるようにして揺れるんだそうです。フワっときてね。昭和33年の狩野川台風のときに山津波がありました、このあたりに。あのときに家を潰されたんですけどね、そのときは本当に下から家が持ち上がるような感じで、横へユラユラと揺れたんですよ。きとお父さん、津波が来るかもしれないっていったら、そんな馬鹿なことあるか、早く寝ろっていったんですよ。でも、そのときは山津波だったですから。だけど、津波ってそんなに簡単に来るものではないと思ってますね。
Q：地震にも割と慣れてるんですか？火山性微動はふだんの地震とは違うから、不安でしたか。
A：そうですね。下からドーンドーンと突き上げて来るような感じの音でしたからね。音がして家が揺れるとかいうんじゃないで、下からドーンドーンって来ましたからね。
Q：原のお友だちの家へ連絡をとったのは奥さんですか？
A：そんな連絡はしなくても、何回でも電話が入ってましたからね。
Q：来い来いって？
A：ええ、兄弟みたいにしてますのでね。何かあったら、すぐいらっしゃいと。向こうからも年中こっちに遊びに来てますのでね。主人はこちらのようすを聞いて、別になんでもないから、じゃあ先に帰るかっらっていうことで、一日早めに帰って来ました。
Q：今度の噴火さわき全体で、市の対応といえますかサービスという点で、どこかに問題があったとかいうことがありますか？
A：そうですね。心配しないようにとか貴重品を持ち出せるようにとか、けっこう車がずいぶん回ってま

したからね。ただ放送ですよ、放送がこだましてどうしても聞き取りにくい。

Q：じゃあ、そのへんをもう少し改善してほしい？

A：そうですね、それはみなさんがおっしゃることです。

Q：宇佐美地区はだいたいこだます状態なんですか？

A：そうです。何を行ってるのかははっきり聞き取れないことがあるんですよ。

Q：噴火がまた来るんじゃないかっていう恐さはありますか？

A：それはわかりませんから、今のところべつに。

Q：落ち着いてる？

A：そうですね。貴重品だけは、いっちゃんとしたところに置いてますけど。でも、どこへ逃げるとしても、逃げるとこもないし。

Q：この近所の人は、いったんは外へ行ってもたいていは戻ってきましたか？

A：もうほとんどです。隣の人も1週間くらいですね。留田地区の方も、あちらはことと同じで海岸がすぐですから、けっこう避難した方がいらっしやるみたいですけどね。もう、わたしたちは逃げようとかそういう気持ちはなかったんです、本当は。でも、息子が来て、もしもっていうことがあると。後で聞いたら、みなさんが、わたしもいなかったのよ、わたしもいなかったのよということだね。

Q：じゃあ、そのときすでにいなかった人も多いということですね。わかりました、どうもありがとうございました。

宇佐美漁協（1989年8月22日）

Q：今回の群発地震は、例年の群発地震はちょっと違っていたという話も聞くんですが、このへんはいかがでしたか。

A：川奈崎沖とか伊豆沖とかありましたかね、たしかにそういわれれば、ドン！とっていう当たりの地震でしたよ。横揺れがたまにはあったかね。群発だったら横揺れなんてほとんどないですよ。ドン！とってからそのまま終わっちゃう。それが、ドン！とっていつからしばらくたつと、横揺れが感じられましたね。おかしいなってみんな言っていましたね、それは。

Q：例年ですと、群発地震があると魚がとれなくなるとかいうことはないですか。

A：やっぱり群発地震になると、イカとかそういうものはよくないってことはある。

Q：よくない？今年、特に悪かったなんてことはありますか？

A：やっぱり同じようなもんじゃないかね。

Q：噴火のあったときは、どうなさっていました？

A：噴火があったのは、ちょうど6時半ころだったよね。家にいたんですよ。それで、打ち合わせがあったもんで電話をかけておったですよ、専務のところへ。そうしたら、どうもおかしいんだよね。花火があがるようなドーンという音がして。夢にも思わなかったからね。それで電話しておりましたらね、ちょうど私の娘が40くらいになりますかね、浜のほうへ出て行ったんですよ。それが夢中で飛んできましたね、「おじいちゃん、噴いてるよ」って飛んで来たわけです。それで、「非常事態だから」って言って電話を置いて、すぐ浜に行ってみたんす。そしたら、ちょうどドーと噴いてるんですよ、白くね。これは大変だと思って、そのまますぐ家に帰って、警察へすぐ電話したんです。そうしたら、「わたしは今出かけるところです」って。それでわたしは支度して、また組合へ来たんです。なにしろ噴火なんてことはなかったからね。ちょうど家で聞いていると、花火のドン、ドンって音だね。

Q：警察へ電話してすぐこちらへ来られた。そのとき何かしようと思ってこちらに来られたわけですか。

A：何か必ず連絡があると思って。津波が来てもあそこじゃ、せいぜい1メートルか2メートルくらいいなんもんじゃないかろうかということは判断した。でも、もし津波がくると、重要書類っていうか、そうものはちょっとまずいんじゃないかと思って、11時頃になって職員に電話して、ここに来てもらった。で、そういう必要なものは家へ持って帰った。

Q：それくらいの津波がくると、ここの1階は？

A：もうここは1メートルか2メートルでつかっちゃう状態じゃないですか。

Q：いままで、津波の経験はありますか。

A：いや、ありません。

Q：この写真は何ですか。

A：台風です。この港はこんなふうな状態になっちゃうんですよ。去年の9月15日かね。

Q：噴火の後、魚がショックでぶかぶか浮いたのをテレビでみたんですか。

A：それは、潮の流れが南の方へ流れるでしょう。ですから川奈とか新井とか、あっちのほうへは流れていたようですが。こっちはそういう話は聞きません。

Q：船はずっとここに係留していたんですか、船を沖にやるとかということとは？

A：そのときはやらなかったんです。

Q：警察のほかには、どこかに連絡はされました？問合せとかなんとか。

A：いや、もう現場がそこだからね、目の当りに見たから。それで、わたしどもの主力船はここにいて怖いってって、次の日から避難だね。

Q：船を避難ですか。

A：ええ。船を避難するについても、近くより遠くのほうがいいということで、三浦岬へ19隻、下田へ13隻ですか。

Q：それはいつ頃のことですか。

A：噴火の次の日です、14日です。14日の8時頃からやりました。伊東の対策本部がありましたから、対策本部に相談して。そしたら、直接走っちゃいけない、まっすぐ走っちゃいけないって。警戒水域をかわして走って。

Q：その警戒水域というのは、いつまであったんですか。

A：7月24日でしたか、市長が終息宣言を出しましたが、まだこの水域は、走ることは走っているようですけれども、漁はしていません。

Q：そうすると、13日以降ぜんぜん水揚げがない？

A：水揚げは、24日からやりましたかね、それまで避難したりしてましたが。

Q：そうすると7月13日以降、ほとんど収入はゼロですか？

A：ええ、ゼロです。だってここではできないよ。いつ噴火するかわかんないから。

Q：昼間の操業はいいんでしょう。

A：昼間はいい。だから今は、沖のほうでイワシをとってます。

Q：すると、こっちはあまりとれないんですか、魚は。

A：イワシだけじゃねえ。イワシは安いからね、やっぱり金額にもよるからね。

Q：通常はどのようなが一番多いんですか、このへんは。

A：イワシですかね、通常は。わたしどものところはね、イワシをとって生け州へいれて、ここで生かしておいて、それでカツオ船が出漁のときにエサを買いにくる、その仕事ですね。カツオの餌料を供給する仕事です。

Q：昨日、消防の人と話をしましたら、11日の夜火山性微動^{ミクロモーション}になったですよ、群発地震が。そのときに市内に入ったらものすごく暑かったっていうわけですよ。空気が暖かかったっていうんです。海の水温が上ったなんていうことありますか？

A：いや、それはちょっとわかりませんね。

Q：あの、おばけ波^{おばけなみ}っていうのがありましたね、変な波が。

A：そんなこと聞きませんね。

Q：そうすると、日常的な海を見ているかぎりには、まさか海底噴火が起こるなんて？

A：噴火なんてことは考えた人はなかったと思いますね。

Q：例年は、7月の上旬から中ば過ぎは最盛期ですか？

A：そうですね。まあ、わたしどもの地区は結局、海水浴は7月が最盛期になるわけですね、天候さえ良ければ。sonだけれども、噴火があったし。

Q：漁業のほうは、どうなんですか。

A：漁業のほうは、暑い時期はあんまりないですね。

Q：じゃあ、一番忙しいのは何月頃なんですか？

A：やっぱり、秋とか春じゃないかね。

Q：このへんは、漁業者が家で民宿をやっているとか、そういうのは多いんですか？

A：ええ、あります。漁業者がやっている民宿は、2軒か3軒くらいです。

Q：そうすると、操業しなかった期間は仕事がないから、ほかに何かしましたか。

A：そういうアルバイト的なこともやらなかったと思います。なにしろ混乱してたからね。仕事なんて手につかないですよ。

Q：漁協としては、この期間の補償^{補償}っていいですか、そういうことは？

A：今になって災害対策資金^{災害対策資金}ってなことをやっておりますが、そういう申し込みは割に少ないですね。利

子補給が安いもんで、割りに調査が厳しいんですね。3%で5年間だからね、こちらはとびついてく
 と思ったんだけど・・・。

Q：査定の条件が厳しいんですね。実際には何件くらいですか？

A：わたしのところには今4件あります。

Q：これは1件当たりどれくらいなの？

A：1事業所あたりが2000万ありますから、ある船主は2000万で申しこんだんだ。それから、このへんで
 定置網をやってる人が300万申し込んだけれども、査定で200万にカットされたんだね。もう1人の船
 主は一本釣りで、100万の申し込みが700万にカットされたんだね。もう1人の船主は一本釣りで、10
 0万の申し込みが70万くらいにカットされて。

Q：今度の噴火騒動では、損害はどのくらいなんでしょう？

A：さあ。夜間操業ができればね、今の時期でしたら1500万から2000万の水揚げは出来たはずだよ。イワ
 シを捕っておってもイワシは単位が安いしね。

Q：1500万から2000万っていうと、それは1船主がですか。

A：ええ、それは船主の収入になるわけですけどもね、それから給料を払ったり、保険も払ったりしなき
 ゃならない。1500万じゃ、いっぱいでしょう。油代、氷代、全部払うから。

Q：1ヵ月間ってことですか。

A：ええ、1ヵ月でそのくらいかかるわけです。

Q：それが、ほぼゼロになっちゃったってわけですか。

A：それから、カツオのえさをここで供給するわけだけでも、予約があったわけですね。だけど、その
 カツオ船の乗組員の家族が、宇佐美へは行ってくれんなっていうようなことで、キャンセルだね。だか
 ら、ほとんどゼロだったね。目に見えない被害もあるんだよ。

Q：乗組員の家族が、危ないから宇佐美へ行くなっていうわけ？

A：宇佐美行くなやめてくれて、そういうようなことを言われましてね。キャンセルです。ほとんど。

Q：ここへ来るカツオ船は、だいたい焼津あたりからですか。

A：今は、焼津は少なくなりましたがね、御前崎とか仙台の船も来ますからね。昨日あたりも宮城の船だ
 ったかね。大きい船はだいたい宮城の船なんだよね。

Q：ここへ来て、ここでイワシを仕入れてそのまま出て行くんですか。

A：そうです。油から何から全部仕入れて、ここは最後ですね。生きてるもんだから。

Q：宇佐美漁港の組合員はどのくらいですか？

A：131人です。

Q：船はどのくらいあるんですか？

A：船は巻き網から何から全部入れて、74くらいあるかね。巻き網は13だよ。沖で働く船とイケスの番を
 するだとか、そういうのがありますけどね。全部で13隻、大きいのから小さいのまで。

Q：たいていは日帰りですか。

A：そうです。今は船員が高齢化しておりますから、午前2時半から出かけて10時頃になると、もう帰っ
 てきますよ。魚でもあげるとお昼になる人もありますがね。

Q：ところで、噴火の後の15日に、宇佐美あたりでは、無線で津波の心配があるって流して、住民が避難
 するとかいう騒ぎがありましたよね。

A：それは、自主避難ということですね。強制避難じゃなかったです。

Q：あのときは、このへんでもびっくりして逃げた人はいますか。

A：このあたりでも行った人はありますね。

Q：Pさんはその時どちらにいらしたんですか。

A：娘が函南におりますから、家族はそこに行きましたが、わたしは5日くらい1人で。

Q：じゃあ、お宅にいらっしゃったんですか。

A：15日の4時頃、土曜日の4時頃ですか、無線で津波の心配がありますっていう放送があったのは。そ
 の日は、10時から11時までここにいたんです。

Q：それじゃあ、ここで聞いた可能性が高いですね。その避難騒ぎはあんまりご存知じゃありませんか。
 住民が避難してちょっと騒ぎになったっていう・・・

A：ニュースではそんなこと言ってましたかね。わたしは、隣りが10分団の詰所になってますんでね、消
 防と連絡をとりあってましたね。11時頃までやって、今日は大丈夫そうだから帰ろうなんていって帰り
 ました。消防団は1晩中やっていましたけど。

Q：いやあ、大変だったんですね。でも、もう一段落では？

A：だけど、マスコミの攻撃がすごかったね。マスコミが一番うるさい、下手なことは言われないしね。

Q：どんなことを聞いてきました？

A：どんなことって、これからどうするんだとか。そんなこと聞かれたってどうしようもない。根掘り葉掘り聞かからね。それだけの知識もないし、困るよ。こっちでも混乱してるのに、そんなこと聞かれたって即答できるわけないよ。

Q：やっぱり、このあたりにもテレビカメラが来ましたか？

A：多かったですよ。8チャンネルとか6チャンネルとかは常時いましたよ。それと、静岡テレビだろ。夜は伊東の本部の方に行っちゃったけど。

Q：ここは有線テレビは見えるんですか。

A：有線はありません。有線の2チャンネルがこの地区はダメです。この橋から向こうまでで、こっちは2チャンネルは入りません。

Q：噴火のときに沖に出てた船はありますか。

A：そのちょうど、たまたま熱川沖に行ってた船があったんです。イカとりに行ってたんです。それで、家族もわたしらも心配して、港に同僚がいたからね、その同僚が無線を入れたわけだ。こっちからじゃ、無線が飛ばないんですよ。それで、伊東の無線局へ連絡して、いま噴火があったから危険だから早く帰ってこいと。それで10時頃だったかな。帰ってきたのは。

Q：遠まわりしてきたわけですね。

A：いや、その時はわからなかったから、直接来ちゃった。

Q：無線室はここの建物にあるんですか？

A：いや、伊東に無線局がある。ここにはありません。だから、局へ電話して連絡をとってもらうしか方法はありません。

Q：いまは、噴火当時の緊張感はだんだん減ってますか。

A：そうですね。いまは、そういうことはありませんがね。けどやっぱり、現場近くで操業する人は、まだないんじゃないんですかね。まして、巻き網の仕事は網を1回投網すると2時間くらいかかりますから、よけいそういうことは警戒するわけだ。

Q：2時間動けないわけか。

A：1本釣りだったら、いいかもしれないけどね。

Q：何人くらい乗っているんですか？

A：ええと、いまは34、5名ですね。

Q：1つの船にですか。

A：1船団です。主力は網舟乗ってますわね、網舟が17、8人乗ってるやないですか。

Q：あの、Pさんはもう津波に対しても余り心配なさってないですか？

A：結局、TVあたりのニュースを聞いているかぎりではね、あの水蒸気爆発か。これが恐い。それだから、わたしは各家族に川下には絶対逃げるな、川上の高いところに逃げろと、そういうことは言ったりします。

Q：ご家族の方は、何日間くらい函南に行ってるしたんですか？

A：5日くらい行ったよ。

Q：噴火の直後から？

A：ええ。噴火の日ね、1晩眠れなかったよ。それで、次の日にはもう行っちゃった。だから朝食事をするにもね、味噌汁はアサゲとかインスタントのものだよ。わたしは船に乗っていたから、作るんだったらわけはない。だけど、そんなもんがあるからね。

Q：いまは、漁師さんの若い後継者っていうのは、なかなかいないんですか？

A：後継者があるのは、1本釣りやっている人で3人です。3隻しかないですから、20代の人か。後はほとんどありません。

Q：すると、何か後継者対策みたいなことはありますか？

A：後継者対策ってもね、結局、漁師が稼げればやりたがりますよ。労働の割に金にならないからね。決った休みもないし。やっぱり稼ぎがないから。稼ぎがあれば、後継者の問題は解決するんじゃないかね。

Q：そうすると、やっぱり若い人は勤め人になったほうが収入がいいですか？

A：うん。安定しているからね。

Q：こういう噴火を機会に、もう舟から降りるなんていう話がありますか？

A：そういう話は、直接は聞いておりませんが、思ってる人もいるかもしれませんね。

Q：いま、一番最高齢の人はいくつくらいの人ですか？

A：いま、正組合員で最高齢が70いくつになるかな、あの人は。75、6になるじゃないかね。現役でやっ

てますよ。わたしだって68だもの。わたしの友達はまだ現役で5, 6人やってますよ。やっぱり、そういう人の考えは、もう何年もやれねえっていうことだね、次の世代に残すなんてことは割合考えないね。伊豆の下田あたりの人は、割合にそういうことを残すような意識が強いようですね。

Q: ふーん、下田ね。

A: 下田の漁師に話を聞きますと、そういうこと言いますよ。

Q: 下田は何がとれるんですか？

A: 下田は、サザエとかアワビとかあいうものね。やっぱり力も入れてるでしょうけどね。

Q: このへんは、7月9日の群発地震のときはどうだったんですか。

A: ええ、港の岸壁がひび割れしちゃってね。かしいでるですよ。それで、漁協の被害が大きいって、斉藤県知事が視察に来て、それから当時の国土庁長官が、わざわざここまで視察に来てくれた。で、わたしどもは市長らと一緒に、そのお礼もあって、総理大臣の宇野さんそこに行ったですよ。

Q: いや、長いあいだどうもありがとうございました。

付属資料 2.

アンケート調査の単純集計

伊東沖海底噴火についてのアンケート調査

平成元年 9 月

東京大学新聞研究所・京都大学防災研究所

問 1. まず最初に、今年の 6 月 30 日からはじまった群発地震についておたずねします。あなたは、いままでの地震にくらべ、今回の群発地震をどのように感じましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 揺れや強さがいままでと違うと感じた	79.6	684
2. いままでの地震と違うとは感じなかった	15.5	133
3. 群発地震があったとき伊東にいなかった	1.2	10
4. DK. NA	3.7	32
計	100.0	859

問 2. 今回の群発地震では、7 月 7 日、8 日と強い揺れがあった後、9 日午前 11 時すぎにはマグニチュード 5.5 の地震があり、各地で被害が発生しました。お宅では、この一連の群発地震によって何か被害がありましたか。まず、あなたあるいはご家族のなかに地震によるケガ人が出ましたか〈ひとつだけ〉

	%	N (人)
1. ケガ人が出た	2.0	17
2. ケガ人が出なかった	91.0	782
3. DK. NA	7.0	60
計	100.0	859

付問 1. 〈 問 2 で「1. ケガ人が出た」と答えたひとだけお答えください〉その方はどのような理由によってケガをしたのですか。具体的にお聞かせください。

○城宿 4 区

- * 時計がヒザに落ちてケガをした
- * 学校の体育館の外で地震にあい、壁に立てかけてあった角材が頭にあたりました
- * 落下物による打撲傷

○城宿 5 区

- * テレビがたおれて軽い打撲（あざ）
- * 跡片付けの時グラスのかけらで手を少しケガしました

○桑原 1 区

- * 棚から落ちた物をあげるとき椅子より落ち、腰をうった
- * 壁にかけてあった時計が頭部に落ちて

○初津 1 区

- * 台所の食器の戸をがむテープで止めてあったのですが、戸がはずれ、中の食器が出てしまい、ほとんど下に降ろしていたのですが、台所が足の踏み場もないほどになってしまい、その後片付けをしているとき、ビニールの袋に瀬戸物を入れて外に出すとき、子供の頭を切ってしまった

*子供が割れたガラスで頭を切って3針縫う

問3. お宅では、今回の群発地震によってお住まいの家やへい・宅地などに被害を受けましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. かわらや壁が落ちたりガラスが割れるなど、かなりの被害があった	19.4	167
2. 建物の被害はあまりなかったが、へいや石垣が崩れたり倒れたりした	5.6	48
3. へいや石垣などに多少割れ目が見えた程度	11.8	101
4. 被害がなくてすんだ	33.3	286
5. その他	19.6	168
6. DK. NA	10.4	89
計	100.1	859

(その他)

○城宿5区

*テレビ・電子レンジなどがたおれて修理

○桑原1区

*浴室のタイルのヒビ割れ

*風呂場のタイルのヒビ、ハガレ等

○初津1区

*家の外壁に割れ目が入り、外階段や家をささえている鉄骨の下にコンクリートにひびが入った

問4. では、家具など家の中の被害はいかがでしたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. タンス、食器だな、冷蔵庫、ステレオなど安定した大きなものがほとんどこわれた	1.2	10
2. 家具がいくつか倒れ、食器やビンなどがこわれた	22.0	189
3. 倒れはしなかったが、扉があいて、なかの食器やビンなどがこわれた	28.3	243
4. 花瓶んやがくぶち、人形ケースなど比較的ちいさいものがこわれた程度	17.5	150
5. 被害はなかった	18.6	160
6. その他	7.5	64
7. DK. NA	5.0	43
計	100.1	859

(その他)

○初津1区

*小さな家具は倒れ、おおきな物は手前に出てななめになった

問5. 今回のなかでもっとも大きかった7月9日（日曜日）午前11時過ぎの地震の直後、あなたはとっさにどんなことをしましたか〈いくつでも〉。

	%	N (人)
1. その場にじっとして様子をみていた	51.2	440
2. 動くことも歩くこともできなかった	17.0	146
3. 机やテーブルの下にもぐった	2.3	20
4. 火の始末をしたりガスの元栓をしめたりした	44.0	378
5. 安全な場所に隠れたり身を守ったりした	4.7	40
6. 頑丈なものにつかまって身を支えた	9.7	83
7. 子供や老人、病人などを保護した	12.2	105
8. 家の外に飛び出した	5.7	49
9. 建物のなかに飛び込んだ	0.2	2
10. 車を道ばたに寄せて止めた	1.5	13
11. まわりの人と声をかけあった	25.1	216
12. まわりの人の安全を確かめようとした	14.8	127
13. 無我夢中で覚えていない	2.9	25
14. その他	5.8	50
15. 何もしなかった	3.5	30
16. 当日は伊東にいなかった	7.2	62

問6. ところで、今回の群発地震は7月10日ころから急速に衰えましたが、今度は11日の夜から、連続性微動が発生しました。次に、この連続性微動についておたずねします。あなたは、この連続性微動の発生を最初にどのようにして知りましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 実際に自分で鳴動を感じた	61.0	524
2. 家族が教えてくれた	3.3	28
3. 親戚・知人や友人が教えてくれた	9.2	79
4. 市役所や消防署の広報で知った	1.7	15
5. 消防団や自治会の人から聞いた	0.6	5
6. テレビ・ラジオの放送で知った	15.5	133
7. その他	0.5	4
8. 当日は連続性微動のことを知らなかった	2.1	18
9. 当日は伊東にいなかった	2.4	21
10. DK, NA	3.7	32
計	100.0	859

付問1. 〈問6で「1. 実際に自分で鳴動を感じた」と答えた人だけお答えください〉それはどんな感じに近かったですか。

	%	N (人)
1. ドーン、ドーンという大太鼓のような音	31.1	163
2. ドスン、ドスンという工事現場のくい打ちのような音	50.0	262
3. ゴー、ゴーという海鳴りのような音	13.2	69
4. その他	4.6	24
5. DK, NA	1.1	6
計	100.0	524

問 7. この連続性微動の発生を知ったとき、あなたはどんな気持ちになりましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 非常に不安になった	41.9	330
2. かなり不安になった	40.4	318
3. あまり不安にはならなかった	15.6	123
4. まったく不安を感じなかった	1.1	9
5. DK, NA	1.0	8
計	100.0	788

問 8. では、あなたはそのとき、噴火が起ころうと思いましたが〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. いまにも噴火するのではないかと思った	10.4	82
2. ひょっとしたら噴火するかもしれないと思った	37.7	297
3. 噴火するとは思わなかった	49.9	393
4. DK, NA	2.0	16
計	100.0	788

問 9. この連続性微動の発生を知った直後、あなたはどんなことをしましたか〈いくつでも〉。

	%	N (人)
1. テレビやラジオの放送に注意した	84.4	665
2. 市の防災無線の放送に注意した	45.1	355
3. CATV (有線放送) の防災放送に注意した	26.3	207
4. 外に出て様子をみた	30.6	241
5. 家族や近所の人と微動 (鳴動) について話合った	39.5	311
6. 電話で市役所、消防署、警察署などに問い合わせた	2.3	18
7. 自治会や消防団の人に問い合わせた	1.0	8
8. 火の始末をしたりガス元栓を閉めたりした	59.4	468
9. 避難の準備をした	50.5	398
10. 家族の一部が避難した	10.5	83
11. 家族全員が避難した	3.6	28
12. その他	1.5	12
13. 何もしなかった	3.6	28

問10. 新聞によれば、連続性微動が発生した直後、各地で「異常に海の潮が引いた」、「地割れができ始めた」、「火山が爆発するという広報があった」、「避難命令が出た」など、さまざまな未確認情報（うわさ）が流れたようです。微動が起こった当日、あなたはこうした未確認情報（うわさ）を何かお聞きになりましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 聞いた	34.9	275
2. 聞かなかった	60.3	475
3. DK, NA	4.8	38
計	100.0	788

付問1. 〈問10. で「1. 聞いた」と答えた人だけお答えください〉 あなたがお聞きになった情報（うわさ）をできるだけ具体的に教えてください。

○城宿5区

- *近所の人に非常に危険な状態だと聞いた
- *海の潮が引いたから津波がくるかもしれない
- *危険な状態だと聞いた
- *火山地帯なのでどこで爆発するかわからない
- *津波の情報が流れた
- *どこかの火山が爆発すると聞いた
- *火山が爆発する、でもどこに火を噴くかわからないが、お宅からそう遠くはないらしいと言われた
- *「大地震がくる」と知人から電話があった
- *宇佐美地区に火山帯があるので、どこで爆発があるかわからない
- *伊東の山のほうが噴火すると聞いた
- *津波がくる
- *初津・留田に津波がくると言っていた
- *宇佐美沖でアワが出ている爆発が起こるので、津波に注意し、全員宇佐美に避難する。小学校だと津波が来るので山の方に逃げる
- *火山が爆発する
- *津波が来るから山の手へ避難するよう
- *津波が来るおそれがある
- *地震道が近づいている
- *水道管が割れ、地割れもした。方々の家々でカワラ屋根が飛ばされた。家具がたおれ、ガスボンベがたおれ、車イスの娘が難を逃れた。コミュニティセンター、小学校などに避難した。子供、祖父母は奥さんの実家に避難した、など
- *大室山が噴火するのではないか
- *宇佐美在住の友人よりの電話で知った
- *又、大きいのかあるのかと一時は思ったが、1回だけと信じた
- *川奈沖で気泡が発生している。海の色が変わった。火山が爆発する（大室山？）
- *津波が来る
- *自分の家の所くらいまで津波が来る
- *巢雲山に火山脈があり、爆発が起きるかもしれない
- *海の潮が引いたので、津波が来るという人もあった
- *津波が来る
- *宇佐美の留田の沖で噴火があると、避難したと友だちから電話があってびっくりした。電話のあと、別の人から、今伊東から車で戻ってきたが、確かに海で噴火のような音を聞いたと話があった。
- *須崎から噴火する。新井から煙が出ている。東海沖地震が発生する。マグマが、新井、宇佐美まで飛んで来る。富士さんが噴火する
- *海面が盛り上がって、どんぶりをさかさにしたようだ。何か異常なことが起こるに違いない
- *大室山が爆発する

○八幡3区

- *津波のおそれがあるのでは。宇佐美の方に北上してきている
- *津波が来るかもしれない
- *津波が来る
- *市の防災無線により津波についての避難場所等報道された
- *新井、玖須美方面では避難命令が出て、住民が避難を始めたということ
- *相当大きい爆発があるかも知れない。水蒸気爆発が怖いから早く避難するのがよい。留田の地割れがひどくなった
- *津波が来るかもしれないということ
- *自家用車で宇佐美－伊奈駅を午後10時ころ所用で往復する中で、湯川地域の人々の避難を目撃し、市広報車の広報をきいたあと、帰宅して、近所の人々が「湯川の海岸付近の海底から熱湯が湧いているそうさ。」とか、「海から湯気が出ていたそうさ。」など聞いた
- *津波が来ると聞いた
- *避難命令が出た
- *どこかわからないけど、火山の爆発があるから、年寄りには避難した方がよいのではないかとということ
- *津波が来る
- *噂に噂が重なり、はっきりしたことがわからず、何が何だかわからなかった
- *市の有線広報が正しいと思った
- *道路が大きく亀裂が出来、まがった
- *津波が来るなど
- *津波が来るから避難するように
- *近所の人消防に問い合わせしたら、「海の方へ避難するように！！」と言われたと聞いて避難の準備した。
 - *火山爆発があるのではないかと
- *伊東市湯川区方面の話と聞いた
- *海で爆発が起こる。4 km四方被害が出る（テレビのウケウリ）
- *テレビを夜おそくまでつけていて、眠れませんでした。年おいた（父、母）がいて、洋服を着て眠りました
- *（知人から電話があった）伊東の湯川の住民が避難をしているとのこと
- *地震の震源地は大崎だと聞きました。とにかく家の下がガラガラとくずれるような音が毎日していました
- *今は静かになるが、12月ころ大きな地震が来る
- *だんだんと北に向かって爆発しているので、今度は宇佐美の何処か（町の中）でおこるとか。津波が来るとか毎日聞きました。（北に向かってというのは大島の爆発から見て）
- *火山が爆発する
- *初島が噴火した
- *宇佐美の海であぶくが出ているので、噴火するかもしれないから避難したほうが良いと電話があった（伊東の友人より）
- *市役所では津波が来るから避難せよと放送しているとのことでしたが、私の家族は大丈夫と思って、避難はしませんでした（大正12年の経験から）

○桑原1区

- *火山という訳でなく、どこかに噴火があるだろう
- *（ウサミ）海辺の家の方々は避難しているということを知った
- *宇佐美の留田、大崎あたりが噴火するのではないかと
- *地割れなど
- *川奈の海女さんが、海の中はすごい音がしていると言っていた。魚がとれなくなった
- *宇佐美地区で火山が爆発する
- *宇佐美はツナミが来る
- *伊東市の職員が避難場所にとの連絡があったために知った
- *宇佐美の峯の方でマグマが爆発するかもしれないということ
- *火山爆発がある
- *CATVで知り、身近に感じたが、CATVの情報のみ信じた

- *海ばかりでなく、街の中でも爆発がおこるのではないかということでした
- *津波が来るので、すぐ海岸近くの方は避難して下さいとのことでした
- *津波がおこるかもしれないということ
- *宇佐美の町が、駅に向かって西を境に2つに割れるとか、大室山くらいの火山ができるとかいろいろ
- *宇佐美、大崎が爆発することです
- *湯川のあたりが噴火する
- *大津波が来ると聞きました。海岸ぞいの家は、皆流されると
- *場所により避難命令が出たとか。津波が来るとか、海面の様子が変化したとかいう情報を聞いた
- *大島のように噴火が起こるのでは
- *津波の恐れがあります
- *津波が3分以内に来るといふ噂があった
- *どこから噴火するのか分からないので、避難の方がよいと聞きました
- *市の防災無線の放送の仕方に、噂を流されるような言葉があったらしい
- *津波が来るかも
- *一部の部落では、皆避難した
- *津波のおそれあり、大室山が爆発する
- *火山が爆発するということを知りました
- *海底火山が噴火した。津波が来るらしい
- *避難命令が出た、と近所の人から聞いた
- *手石島付近にアワのようなものが発生している
- *川奈に避難命令が出た、と知人から聞いた
- *留田地区は全て避難しはじめている。他にもあったが、忘れました
- *海の中で噴火して島が出来るといふらしい。
- *避難命令が出て、津波があると言われたが、昼、仕事のため、子供が一人なので、田舎へ連れて行った。
- *海の水が引いている。
- *爆発が3回あって、津波が来ると聞いた。伊東と宇佐美の通行が、道に亀裂が出来、できなくなる。
- *地震の後に、津波ということ考えた
- *伊東の住民から海鳴りがしていると聞いた。

○中里2区

- *9日の震源地よりも震源地が宇佐美よりに動いた。
- *スルガ湾沖のマグマ、プレートを刺激して被害が広がること。
- *山から蛇の出現、及び赤い海老の浮遊物（手石島付近）
- *今回の地震は地底からツキ上げる地震で、どこかに火山口が出来るといった
- *火山が爆発すると津波の恐れがあるとのこと。
- *海岸地方に避難命令が出た。
- *一部で避難命令が出たこと、この噴火で津波が起きるので、早く子供を連れて実家（三島）へかえったほうがよいと言われた。
- *津波による避難命令
- *ひょっとしたら爆発するかなと思った。
- *避難命令が出たので新井、川奈付近の人たちは避難を初めているらしい。又、夜中にドンドンと地鳴りがするので眠れず、大室山の駐車場で車の中で寝泊まりしている人もいる。
- *海上から煙のようなものが上がったという情報を聞いた。海岸に行ったら、相当な人が出て色々な情報が飛び交っていたが、誤報らしかった。
- *津波が来る。
- *伊東より（知人の宅あり）の山手の石積の被害、昔の石積のため、ウラ込めのコンクリートなく、直立が多い。
- *子供が新聞記者なので、そこから話が合った、娘が消防署員でそこからも話が合った。
- *伊東市内では、津波を警戒して避難命令が出た。連続激動は火山噴火の前ぶれで、何処かで噴火する分らない。
- *外のざわめきで外に出て見ると、隣の海近くにいる親戚の祖父母が津波が来るというので、これから山の方に避難するところだった。そんなにあぶないのか、確かな情報なのか（津波）少々あわてた。
- *宇佐美のどこからか噴火する。

- *喫茶店をやっているの、いろんな人から情報を聞きました。留田の折に亀裂が入って爆発するとか、初津山が爆発するんじゃないとか、巢雲山もあぶないと聞いた。津波が近くまで来るのではないかと聞いた。
- *火山が爆発する。
- *どこかが噴火する。
- *「避難命令が出た」と聞いた。
- *津波がくる。
- *避難命令が出た。
- *落ち着いて行動をする。

○初津1区

- *温泉が泊まった。水の出が悪くなった。温泉水がにごった。地面が盛り上がってきた。
- *津波が来る。
- *家の近くで地割れが何か所もあった。
- *津波が来る。
- *海底火山が爆発して、津波が来るから避難の準備をすること。伊東の新井地区では、すでに避難したそう。
- *今までのと違って火山性の爆発が予想されるということ。
- *津波が2分くらいで来ると噂を聞いた。
- *海の一部に泡が出てきている。
- *海、陸にも噴火可能な地点が100 くらいもあり、小室山、大室山、宇佐美海岸付近もその中に入っている。
- *宇佐美、大崎、大室山。
- *避難命令が出た。津波が来る。
- *大地震が起こる。
- *7月17日～20日にかけて、大地震が来るという、噂を聞いた。
- *また噴火する。津波が来る。
- *関東大震災くらいの大津波が来るということを聞いた。
- *津波が起きる。又は山津波が来る。東海バスに勤めている方のお話で、大津波が来るとある所から連絡があり、バスを高い所にはこんでいるので、すぐ避難の方がよいとのことでしたので年寄りは一安心な所に行きました。
- *消防車がスピーカーで、ただ気をつけて下さいとしかいわので、何か起こるのか分かりませんでした。
- *飲食店をやっているの、回りのお店の連中が、津波がくるとか、銀行の前が地割れが始まったとか、今から1時間後はどうなっているのか分からないというようなこと。
- *地震が来るので伊東市内では大勢の人が避難を始めた。人よりの電話で知った。

付問2. <問10. で「1. 聞いた」と答えた人だけお答えください> あなたはそのとき、お聞きになったその情報をどの程度信じましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 信用した	20.0	55
2. 半信半疑だった	68.0	187
3. 信用しなかった	7.3	20
4. DK, NA	4.7	13
計	100.0	275

付問3. <問10. で「1. 聞いた」と答えた人だけお答えください> あなたはその情報を聞いて不安を感じましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 非常に不安を感じた	28.4	78
2. かなり不安を感じた	50.9	140
3. ほとんど不安を感じなかった	14.5	40
4. まったく不安を感じなかった	2.2	6
5. DK, NA	4.0	11
計	100.0	275

問11. くふたび全員がお答えください> さて、こうした連続性微動が続いたあと、7月13日午後6時30分過ぎには、伊東沖3キロの地点で、海底噴火が突然発生しました。そこで次に、この海底噴火についておたずねします。まず、あなたはこの噴火を最初にどのようにして知りましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 実際に自分で噴火を目撃した	15.0	129
2. ドーンという噴火音を聞いた	23.3	200
3. 親戚・知人や友人の知らせで知った	12.5	107
4. 市役所や消防署の広報で知った	2.2	19
5. 消防団や自治会の人から聞いた	0.8	7
6. テレビラジオの放送で知った	37.3	320
7. その他	2.0	17
8. 当日は海底噴火のことを知らなかった	0.	0
9. 当日は伊東にいなかった	3.4	29
10. DK, NA	3.6	31
計	100.1	859

(その他)

○城宿5区

*自宅に電話をして知った

問12. 海底噴火の発生を知ったとき、あなたはどんな気持ちになりましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 非常に不安になった	43.8	350
2. かなり不安になった	36.7	293
3. あまり不安にはならなかった	15.5	124
4. まったく不安を感じなかった	1.4	11
5. DK, NA	2.6	21
計	100.1	799

問13. では、海底噴火の発生を知った直後、あなたはどんなことをしましたか〈いくつでも〉。

	%	N (人)
1. テレビやラジオの放送に注意した	86.5	691
2. 市の防災無線の放送に注意した	49.6	396
3. C A T V (有線放送) の防災放送に注意した	28.4	227
4. 外に出て様子をみた	38.3	306
5. 家族や近所の人と噴火について話し合った	41.1	328
6. 電話で市役所、消防署、警察署などに問い合わせた	1.4	11
7. 自治体や消防団の人に問い合わせた	1.5	12
8. 火の始末をしったりガス元栓を閉めたりした	60.3	482
9. 避難の準備をした	47.9	383
10. 家族の一部が避難した	13.4	107
11. 家族全員が避難した	8.5	68
12. その他	2.8	22
13. 何もしなかった	2.9	23

付問1. 〈問13で「10. 家族の一部が避難した」および「11. 家族全員が避難した」と答えた人だけお答えください〉 お宅のご家族が避難したのはどのような理由ですか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 噴火が激しくなったり、津波がくるかもしれないと危険を感じたから	58.9	103
2. テレビやラジオの放送で噴火や津波のことをしきりに伝えたから	14.3	25
3. 自主防災組織の人が避難するように言ったから	0.6	1
4. 近所の人や家族にすすめられて	8.6	15
5. 近所の人や家族が避難したのを見て	4.6	8
6. その他	9.7	17
7. DK. NA	3.4	6
計	100.1	175

付問2. 〈問13で「10. 家族の一部が避難した」および「11. 家族全員が避難した」と答えた人だけお答えください〉 お宅で避難しようと決めたのは、海底噴火のあとどのくらい経ってからですか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 海底噴火の直後	20.0	35
2. 海底噴火のあと30分以内	21.1	37
3. それ以上経ってから	52.6	92
4. DK. NA	6.3	11
計	100.0	175

付問3. <問13で「10. 家族の一部が避難した」および「11. 家族全員が避難した」と答えた人だけお答えください> お宅で避難しようと決めてから実際に避難場所に向けて家を出るまで、どのくらいの時間かかりましたか。
(平均86.92 分)

付問4. <問13で「10. 家族の一部が避難した」および「11. 家族全員が避難した」と答えた人だけお答えください> お宅が最初に避難した場所は、平素からあなたの地域の避難場所として定められていた場所ですか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. はい	12.0	21
2. いいえ	81.1	142
3. DK. NA	6.9	12
計	100.0	175

付問5. <問13で「10. 家族の一部が避難した」および「11. 家族全員が避難した」と答えた人だけお答えください> では、その避難場所にいつまでいましたか。
(記入：7月 日 時頃まで)

問14. <ふたたび> 全員がお答えください> では、海底噴火が起こってから数日のあいだ、あなたはどんな気持ちでいましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. きっとふたたび噴火が起こると思っていた	18.4	158
2. ひょっとしたらまた噴火が起こるかもしれないと思っていた	65.3	561
3. もう噴火は起こらないだろうと思っていた	9.3	80
4. その他	1.4	12
5. DK. NA	5.6	48
計	100.0	859

問15. ところで、海底噴火から2日たった7月15日の午後4時頃、津波への注意を呼びかけた伊東市の防災無線放送が、いまにも津波がくるように誤解されて一部地域で避難騒ぎが起きました。そこで次に、このことについておたずねします。あなたは、このとき、市の津波広報をお聞きになりましたか<いくつでも>。

	%	N (人)
1. 市の防災無線から聞いた	39.3	338
2. 市の広報車から聞いた	9.5	82
3. 市役所の職員や警察署員・消防署員から聞いた	3.1	27
4. 消防団や自主防災組織の人から聞いた	4.9	42
5. CATVの防災放送で知った	14.1	121
6. 家族、友人、知人から聞いた	22.8	196
7. その他	6.9	59
8. 当日、津波の話は聞かなかった	19.3	166

問16. あなたは、このときの防災無線放送をどの程度聞き取れましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 音はよく聞こえたり、 放送内容もだいたい全部理解できた	18.9	162
2. 音はよく聞こえたり、 放送内容は一部分だけ理解できた	17.3	149
3. 音はあまりよく聞こえず、 放送内容は一部分しか理解できなかった	18.7	161
4. 音はあまりよく聞こえず、 放送内容もほとんど理解できなかった	18.6	160
5. 放送はまったく聞こえなかった	11.2	96
6. DK, NA	15.3	131
計	100.0	859

問17. では、7月15日の夕方から夜にかけて、この津波の話をお聞きになって、あなたはどんな気持ちになりましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. いますぐ津波がやってくると思って、 非常に不安になった	6.1	52
2. ひょっとしたら津波がくるかもしれないと思って、 かなり不安になった	30.0	258
3. 津波への一般的注意だと思って、 あまり不安にならなかった	33.2	285
4. 津波への一般的注意だと思って、 まったく不安を感じなかった	8.5	73
5. 当日、津波の話はきかなかった	11.8	101
6. DK, NA	10.5	90
計	100.1	859

問18. この津波の話をお聞きになったあと、あなたはどんなことをしましたか〈いくつでも〉。

	%	N (人)
1. テレビやラジオの放送に注意した	64.3	552
2. 市の防災無線の放送に注意した	40.7	350
3. CATV（有線放送）の防災放送に注意した	24.9	214
4. 外に出て様子をみた	17.8	153
5. 家族や近所の人と津波について話し合った	29.6	254
6. 電話で市役所、消防署、警察署などに問い合わせた	0.9	8
7. 自治体や消防団の人に問い合わせた	0.8	7
8. 火の始末をしったりガス元栓を閉めたりした	38.4	330
9. 避難の準備をした	32.1	276
10. 家族の一部が避難した	8.3	71
11. 家族全員が避難した	3.4	29
12. その他	3.6	31
13. 何もしなかった	8.4	72
14. 津波のことを知らなかった	6.4	55

問19. 次に6月末から7月中旬にかけての、群発地震→連続性微動→海底噴火と言う出来事全体を通じておたずねします。まずお宅では、ご家族のなかに、自宅を離れて一時的に「疎開した。人はいらっしゃいますか〈ひとつだけ〉」。

	%	N (人)
1. 家族全員が疎開した	8.5	73
2. 家族の一部が疎開した内	22.1	190
3. 誰も疎開しなかった	56.7	487
4. DK. NA	12.7	109
計	100.0	859

付問1. <問19で「1. 家族全員が疎開した。および「2. 家族の一部が疎開した」と答えた人だけお答えください> お宅で、もっとも長い期間疎開していた人は、いつからいつまで疎開していましたか。
(記入 月 日から 月 日まで)

付問2. <問19で「1. 家族全員が疎開した。および「2. 家族の一部が疎開した」と答えた人だけお答えください> お宅で、もっとも長い期間疎開していた人は、どちらに行っていましたか〈ひとつだけ〉

	%	N (人)
1. 伊東市内	27.0	71
2. 伊東以外の静岡県内	31.6	83
3. 静岡県外	38.8	102
4. DK. NA	2.7	7
計	100.1	263

問20. 次に避難についておたずねします。お宅では、この群発地震→連続性微動→海底噴火という一連の出来事のあいだ、家族全員あるいは家族の一部が避難したことがありますか。

	%	N (人)
1. 避難したことがある	25.4	218
2. 避難したことはなかった	58.1	499
3. DK. NA	16.5	142
計	100.0	859

付問1. <問20で「1. 避難したことがある」と答えた人だけお答えください> お宅が避難するとき、自主防災組織から避難について何か指示や忠告がありましたか。

	%	N (人)
1. あった	23.4	51
2. なかった	72.9	159
3. DK. NA	3.7	8
計	100.0	218

付問2. <問20で「1. 避難したことがある」と答えた人だけお答えください> お宅では、平素から災害時の避難場所を、家族のあいだで決めてありましたか。

	%	N (人)
1. あった	50.5	110
2. なかった	41.7	91
3. DK. NA	7.8	17
計	100.0	218

問21. 次に、自主防災組織の活動についておたずねします。この一連の災害のなかで、あなたの地域の自主防災組織はよく活動したと思いますか。それともあまり活動しなかったと思いますか<ひとつだけ>

	%	N (人)
1. 非常によく活動したと思う	13.4	115
2. かなりよく活動したと思う	32.8	282
3. あまり活動しなかったと思う	34.2	294
4. まったく活動しなかったと思う	8.5	73
5. DK. NA	11.1	95
計	100.0	859

問22. また、今回の一連の事態のなかで、いままで行ってきた防災訓練（情報伝達訓練や避難訓練など）は役立ったと思いますか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 非常に役立ったと思う	5.7	49
2. かなり役立ったと思う	22.5	193
3. あまり役立たなかったと思う	49.2	423
4. まったく役立たなかったと思う	9.1	78
5. DK. NA	13.5	116
計	100.0	859

問23. ところで、群発地震から海底噴火にいたる一連の出来事のあいだ、あなたはさまざまな情報をお知りになりたかったと思いますが、あなたが知りたいと思った情報はどれくらい十分に知ることができましたか<ひとつだけ>。

	%	N (人)
1. 非常によく知ることができた	4.9	42
2. かなりよく知ることができた	37.6	323
3. あまりよく知ることができなかった	47.3	406
4. ほとんど知ることができなかった	3.6	31
5. DK. NA	6.6	57
計	100.0	859

問24. では、そうした情報を知るのに、どこからの情報がもっとも役立ったと思いますか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. NHKラジオ	9.3	80
2. 民放ラジオ	2.1	18
3. NHKテレビ	34.5	296
4. 民放テレビ	29.5	253
5. 地元の有線放送 (CATV)	10.0	86
6. 伊豆新聞など伊東市内の新聞	0.9	8
7. 静岡新聞	0.5	4
8. それ以外の全国紙	0	0
9. 市の防災無線	2.4	21
10. 市の職員や警察署員・消防署員	2.3	20
11. 消防団や自主防災組織	2.0	17
12. 家族や近所の人の話	1.5	13
13. その他	0.7	6
6. DK, NA	4.3	37
計	100.0	859

問25. 次に、とくに市の防災無線についておたすねします。伊東市の防災無線は、今回の災害のとき、どのくらい役立ったと思いますか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 非常に役立ったと思う	4.5	39
2. かなり役立ったと思う	24.4	210
3. あまり役立たなかったと思う	50.2	431
4. まったく役立たなかったと思う	13.2	113
5. DK, NA	7.7	66
計	100.0	859

問26. それでは、今回も含めて、お宅ではふだんこの防災無線の放送がよく聞こえますか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 音はよく聞こえ 放送内容もだいたい全部理解できる	15.0	129
2. 音はよく聞こえ 放送内容は一部分だけ理解できる	18.0	155
3. 音はあまりよく聞こえず、 放送内容は一部分しか理解できない	30.8	265
4. 音はあまりよく聞こえず、 放送内容もほとんど理解できない	25.5	219
5. 放送はまったく聞こえない	4.7	40
6. DK, NA	5.9	51
計	99.9	859

問27. 最後に、お宅の防災対策の実態と国・県・市の防災対策への要望についてお聞きます。まず、今回の群発地震が発生する前には、お宅みどんな防災対策をしていましたか〈いくつでも〉。

	%	N (人)
1. 非常持ち出し品の準備をしていた	59.5	511
2. 防災訓練にときどき参加していた	24.4	210
3. 避難場所を確認していた	40.2	345
4. 噴火したときの避難や連絡の方法について家族と話あっていた	30.7	264
5. 地震保険に加入していた	21.8	187
6. その他	1.6	14
7. 何もしていなかった	14.0	120

問28. 現在、あなたは7月13日のような噴火、あるいはそれよりも大きな噴火がいつまた起こるかもしれないと不安になることがありますか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 不安でたまらない	6.8	58
2. かなり不安だ	36.2	311
3.それほど不安ではない	47.5	408
4. まったく不安は感じない	3.6	31
5. DK, NA	5.9	51
計	100.0	859

問29. ではあなたは現在、災害対策としてどんなことをしていますか〈いくつでも〉。

	%	N (人)
1. 非常持ち出し品の準備をしている	58.6	503
2. 防災訓練に参加した	24.1	207
3. 避難場所を確認した	38.9	334
4. 噴火したときの避難や連絡の方法について家族と話あった	38.5	331
5. 地震保険に加入した	9.2	79
6. 噴火のきざしがないかどうか気をつけている	34.6	297
7. その他	0.9	8
8. とくに何もしていない	15.3	131

付問1. <問29で、「1. 非常持ち出し品の準備をしている」と答えた人だけお答えください> お家で準備している非常持ち出し品の中身を教えてください(いくつでも)。

	%	N (人)
1. 救急医薬品	74.6	375
2. ローソクや懐中電灯	88.3	444
3. トランジスタラジオ	69.4	349
4. 毛布や寝袋	14.5	73
5. ナイフ・缶切り・ロープ・ひもなど	46.5	234
6. 食料品	78.3	394
7. 飲料水	59.0	297
8. 固形燃料や携帯ガスボンベ	12.1	61
9. 洗面用具	43.9	221
10. その他	12.5	63

付問2. <問29で、「8. とくに何もしていない」と答えた人だけお答えください> お家で、なにも防災対策をしていない理由を教えてください(いくつでも)。

	%	N (人)
1. ふたたび噴火が起こるとはおもっていないから	18.3	24
2. 噴火がおこっても、 そのときには何とかなると思うから	35.1	46
3. 噴火が起きたときには、 県や市がなんとかしてくれると思うから	7.6	10
4. いくら防災対策をしても、大噴火が起これば それほど役に立たないと思うから	39.7	52
5. 防災対策をしなければと思っているが、 つい面倒でまだやっていない	25.2	33
6. その他	8.4	11

問30. では、あなたは今回の経験をふまえて、国や静岡県、伊東市に対してどのようなことを望みますか(いくつでも)。

	%	N (人)
1. 噴火予知体制の充実	72.5	623
2. 消防力や救急医療体制の充実	36.8	316
3. 避難所や避難道路の整備	35.6	306
4. 情報連絡体制の充実	75.1	645
5. 観光客の誘致対策	12.0	103
6. 災害復旧資金の援助	25.1	216
7. その他	2.4	21

問31. ところで、この9月1日、伊東市ではふたたび起こるかもしれない再噴火という事態に備えて、情報伝達訓練や避難訓練などおおかかりな防災訓練が行われました。あなたは、このとき防災訓練に参加しましたか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 参加した	22.9	197
2. 参加はしなかったが見学はした	7.8	67
3. 参加も見学もしなかった	47.8	411
4. 当日は市内にいなかった	14.1	127
5. DK, NA	7.3	63
計	100.0	859

付問1. 〈問31で、「1. 参加した」と答えた人だけお答えください〉では、あなたはその訓練でどんなことをしましたか〈いくつでも〉。

	%	N (人)
1. 噴火情報や避難命令が どう伝えられるかを学んだ	18.8	37
2. 噴火のときの避難場所を学んだ	53.8	106
3. 避難の方法を学んだ	27.9	55
4. 消化器の使い方を学んだ	46.7	92
5. 負傷者や病人の応急手当ての仕方を学んだ	24.9	49
6. 防災袋をもらったり、その使い方をまなんだ	2.0	4
7. その他	9.1	18

付問2. 〈問31で、「1. 参加した」と答えた人だけお答えください〉その訓練は、今後また噴火があったときにどのくらい役立つと思いますか〈ひとつだけ〉。

	%	N (人)
1. 非常に役立つだろうとおもう	13.7	27
2. かなり役立つだろうと思う	36.0	71
3. あまり役立つたないのではないと思う	38.6	76
4. まったく役立つたないのではないと思う	5.1	10
5. DK, NA	6.6	13
計	100.0	197

問32. では、あなたご自身のこれからの生活で、あなたにとっていちばん心配なのは、どんなことですか。今回の噴火のことでもそれ以外のことでけっこうですから、できるだけ具体的に教えてください。

○城宿5区

*もし災害にあった場合の復旧作業のこと。

*やはり地震で家がこわれたりしないかということです。

*もしまた海底地震があったら津波の心配が非常にあります。家が海の近くなので、津波にもってられないかと思っています。

*今回の地震・噴火で観光地である伊東で観光客の姿が少なくなること。

- *観光地のため、今後もこのようなことが起こると、経済面で生活に困る。現実には多くの人が職を失った。
- *津波の警報とその現状が予想できたら早めに同報無線で知らせしてほしい。
- *地震や噴火の予知は今の科学では十分とは言えないが、できる限り細かい情報を提供してほしい。*観光地なものですから、今年の夏は大変こまったと思います。これから行楽シーズンまき返しをお願いします。キャラバンも出ていると思います。
- *とにかく火の用心だけは家中の者が気をつけています。
- *伊東市宇佐美に来たばかりで次男とふたりで働いています。噴火や津波。いろいろなことが起きた場合、ふたりが無事に出会えるように毎日のように話していますが、心配です。
- *今思うことは飲食店自営のため、まずお客様に十分注意をすること、ガスを使うので火事を出さないよう注意すること。家族（特に高校生の子供ふたり）にケガのないように十分注意させること、とにかく地震のこわさというものは、底知れぬこわさがあるということ、身にしました。これからも十分心にとめて生活していきたい。
- *ある10数人乗って、漁業をしている船が今年でやめます。その船は棒受けという網で魚を取って、1日20トン（多い時）ぐらいいし取れません。今、現在近海底引き網の船が何トンもあって、太刀打ちできると思いますか。去年もやめた船があります。私は、社会主義でも共産主義でもないけど、何か変だと思いませんか。農民を優遇するように漁業にも！1人乗りの船は高級魚しか取らないから金はあるけど。大衆魚を取る船を優遇すべきだ。
- *予知体制を確立して、その情報を正確迅速に流すことが最重要に思う。
- *道路がせまいので、皆で行動を同じくした時の混雑を考えると不安です。
- *突然の出来事ゆえ、大事にならぬよう祈るだけです。
- *単性火山群という火山があることを初めて知りました。
- *今回の噴火の時に市ではなにもせず、テレビでもただ伊東と言うだけで、市、国、県に対し不満を持っています。何のための税であるか。
- *祖父母が伊東市内に住んでいて、障害者のため不自由で、避難場所まで坂道のため、避難するのに困難である。また、主人が県外の勤めのためと、私が公務員のため、何か起こった場合休めないため、子供たちのことが気にかかる。
- *毎年群発地震が起きるのかと不安になる。
- *地震による津波。
- *火災、自分や家族だけではだめ、1人1人が十分に気を付けて欲しい。初期消火の強化。
- *情報がテレビ、ラジオで一般的なもので身近な地域の情報がぜんぜんわからない不安があるので、情報が早く伝わるようにして欲しい。伊東市内のことはテレビで状況がある程度わかったけれど地元の宇佐美はどうなのか区も町内も、何の連絡もなく不安だった。2チャンネルで伊東の状況を流す時に宇佐美の方も流してもらえれば良いと思う。
- *これからもっと大きな地震などが来る様な気がします。噴火よりもいばん心配です。
- *市の広報無線がよく分かるようにしてください。昼間はよいが、夜間の対策を突如の災害が発生時は、結局は自主対策になると思う。戦時中の防災訓練も実際の時はどれだけ役立ったことか。個人々の対応や心構え等を日頃話し合っておくことが必要と思う。
- *今1人で暮らしているので（近くに子供たちがいる）急に何かがあった時他の人に迷惑がかかるのではと。
- *大地震が特に注意されている中で私は会社へ妻は家庭（又は買物）、子供は学校に、という場合おそらく電話回線が不通になり連絡がお互いにとれないと思う。非常事態になったらこの辺が一番心配だなとおもう。
- *地震・噴火が毎年来るのではと心配してしまう。
- *今後大きな地震や津波の心配、災害にあった場合、それから後の生活の心配等。
- *如何に噴火予知が一刻も早く住民に知らせる事ができるか。
- *情報を正確に把握し、個々で判断していかなければならない。現在のように情報過多の状況では混乱が生じる可能性が高い。
- *家が高台ではないので津波が心配。
- *家族が（大人3人）全部離れて仕事をしているので伊東市内、熱海市内の交通が止まったとき、道路が止まったとき、家に帰れなくなると、電話での通話が出来なくなるのが一番心配。こうした点を最大に連絡出来るようにお願いしたい。
- *近い将来、東海地震や伊豆大地震がくるのではないかと不安が一番です。私の家は海からは割と

離れているので、海底噴火よりも地震がこわい。

- *地震（東海沖地震、伊豆北部地震はあるのか？）富士山が噴火したらその被害はどの位の地域におよぶのか。
- *大地震（震度6以上）、大噴火（溶岩を吹き上げる程度）の起こること、伊豆半島の一部又は局所的な大地震、大噴火は怖くない、広範囲に起こして交通遮断等にて孤立すること。
- *地震と噴火。
- *住んで生活をしている市民よりも、他に出ている人たちの方が心配している様な状態ですので、オーバーなニュースはしない方が良いとおもいます。
- *地震がだんだん近くなったので、来年あたりはもっと被害が出るのではないかと思い心配です。冷静に情報などを良く聞いて行動したいとおもいます。
- *津波。
- *地震及び噴火等で、家族がバラバラになり連絡がつかない事になることが心配です。（42）子供だけで家に居た場合。あまりにも騒ぎすぎて、どうすることもできない。女、子供、動きのとれない年寄り余計に不安なのに、どうしていいのかわからなくなるとおもう。
- *噴火で津波。
- *火災が起きた時。
- *何かが起きたら出来るだけ早く情報を知りたい。今は、車社会ですから何といっても道路です。道路が通行とめになるのが一番困ります。
- *東海大地震と噴火。伊東沖の海底は常時調査してたまには報道して欲しい。瓦屋根の修理が出来なくて大変だった。
- *再噴火の場合、今の位置よりの移動がありうるのか？諸外国では民家より100メートル位で急噴火があったとのこと。噴火が7月13日より4日前9日夕方頃、サンハトヤ前のテトラポットの下より石が当たる音がした。1時間位で終わった。その音については警察にも連絡した。周囲の民家からも問い合わせがあったようで…。
- *確かな情報。安全な避難場所の確認。
- *家のブロック塀が倒れ（約8米位）市役所や農協の係員に見てもらいましたが、農協には保険の入会がしてありますが、ブロック塀には保険から支給する事ができないと言われたので大変腹がたった。
- *1. 近い将来発生するであろうと思われる北伊豆地震や、もっと大規模な関東大地震に対する、漠然たる不安が常にあります。2. 今回マグマ突出は海底でしたが、来年は陸上だったらと思うと心配です。3. 今回地震は昼間、噴火は夕方と、活動時間帯に起きたので人的被害は無いに等かったのですが、もし真夜中の事だったらパニックになっていたと思う、多分我が家では、タンスの下敷きになったと思う。
- *寝たきり老人を抱えているので緊急時の避難方法について不安を持っている。

〇八幡3区

- *・高い所にむやみに物を置かない。・持ち出したい物（貴重書類）を整理しておく。・家族の連絡方法をなるべく課題にし、わかりやすくしておく。
- *明神礁、三宅島などの噴火が北上し、停石海丘の噴火も終息と考える（独断ですが）これからは、震源が更に北（西）に上がり、昭和5年の北伊豆地震に似たケースになると思う。この場合、丹那トンネルに於いて事故が考えられる（新幹線他）、今から対策を考える必要がある。
- *・小さい子供がいるのでいざという時に、家族とばらばらになり連絡がつかない場合。・海の近くなので本当に津波が来るという時に、どこまで逃げられるのでしょうか。
- *噴火当日床下を、濁流がゴーと流れる音を聞き、家の地下に火山脈が確かにあると思い、毎日溶岩の上で生活していくように、何ごともないうちどこかへ行きたい気持ちです。
- *予告、予報（多少の誤解を含めて）の早い放送を望みます。
- *勤務地が離れている（車で40分）。日中災害が起きた場合、足の不自由な夫のことが心配です。
- *どのように行動すれば安全かということ。
- *地震があっても火事とか大津波がなければ別に心配はないと思います。
- *子供のことが一番心配でした。
- *群発地震については毎年発生しており、あまり心配してなかったが。今回の地震について、特に噴火について心配である。
- *家族がバラバラになる日中に地震や、噴火が起きた場合、避難場所は決めてあったとしても、どの程

度連絡が取れるかどうか、（互はかかりにくくなる）。

- * 海が近いので津波が心配です。市の情報や避難命令を注意しようと思っています。
- * 地震や噴火があった後、津波がおそってくるのが心配です。
- * 今回の噴火は海底であった為、あまり不安は感じませんでしたが、やはり大きな地震が前もって予知できないかと、それが心配です。瓦の屋根は外に出た時、注意しないといけないと思いました。
- * ①5m位の川が海に流入する、海岸から約50m位のところに位置している住宅で表の道路は海拔4m、川伝いに津波が進行する時は直撃されるので（間30の7の）方法をとっています。②夫婦二人家族だが、鉄帽を用意。③常はサブサックに持ち出しを入れて履物も軽快に行動できるよう厚底のスニーカーを用意（間29付間の1の10の貴重品類）
- * 防災無線の内容が良く聞こえない。（音はよく聞こえる。）
- * 被害の大きな所を特に報道した為、あたかも伊東市全域がそのような状態のように思われ、遠くにいる子供達や親戚の皆様が大変心配かけました。その様な事から町全体の様子など（被害の少ない時等）も報道してほしかった。
- * 地震と同時に市内外の電話の混乱はもう少し早く通話ができるように解決して欲しいです。
- * 詳しい情報を一早く流して欲しい。
- * 家族が少ないので不安です。
- * 家族が全いない時に今回の様な事態がくる場合、心細い。
- * 再び地震の地鳴りがしてくることを非常に恐ろしいと思います。生活してて、何度も何度も地鳴りを聞いていると、とても怖いと思うので、地震はこりこりといった気持ちでいます。
- * 昼の間は家族がそれぞれ、仕事や学校などに行っているため、連絡がうまく取れるか心配です。とりあえず、決められた避難場所へ行くように決めてあります。
- * 宇佐美ですが市の防災無線が聞こえないのび改善していただきたい。
- * 大地震の起きた九日は日曜日で私だけが仕事で他の家族は全員在宅だったが平日にもし起きたら年寄り一人です。火の元とかか心配です。でも地震にしろ噴火にしろ、突然には起きないので、なる程度の準備期間がある。
- * 海拔5m以下の海岸地域に住むため、最も不安に感じているのは津波である。熱海方面からのR135、田方・平野からの大仁道路、JR伊東線などの交通路が絶たれた時の地域のパニック状態が想像される。
- * 現在、居住しているところは低地域でありますので、地震や噴火に依る津波が心配です。よって避難する場合には速やかに連絡が届く様な処理をお願いしたい。
- * 地震の事、噴火。
- * 川のそばですから、津波のことが心配です。働いていますので家に帰るまでには、時間がかかります。家には祖母が一人、耳も遠くなっているので気になります。
- * また噴火して、地域が危なくなる事や、地震の被害などで家や場所に崩壊があること。
- * 突然の海底噴火で津波がおきること（海に近いので）
- * 火災が起きること
- * 地震、噴火、津波がこれで終わったとはいえないので、もしまた起こったときのことを思うと、やはり心配です。
- * もし、また今回の様な噴火や地震があったらと思うと、子供を持つ親として、食料品や医療関係など、どうなるのか不安です。
- * 同報無線が聞きとりにくかったのので、市に要望する。宇佐美区全体の町会長、班長宅に設置に決定（総数206戸）、これは市の対応がすばらしいと思います。
- * 将来いつか来るであろう。
- * 情報がおそい、特にテレビ、地震がきたら速やかに状況を報道してもらいたい。
- * 今回の様な報道では、なんにもならない。
- * 国や県および市が何をやっても起こる事は起こるし、自然の力にまかせるしかない。（防災訓練と現実とは違う、現に私は火事のでた家にわていた。）
- * 東海地震は、果たしてくるのか、その大きさは、予知できるのか心配です。
- * 大きな地震がきた時、食料、衣類等は心配ないが、水の設備が破損等した時（水せん、風呂）等が一番心配です。
- * 噴火予知体制の充実
- * 情報連絡体制の充実

- * テレビ等で大学の先生や研究者の方々の解説があまりあたらないこと。今後の研究が大いに望まれる事。
- * 今回の地震で電話などほとんど、どことも通じない。よそにいる家族との連絡がとれず困った。
- * 家族がいないので、近所の妹と出来るだけいっしょに行動する様に話合っている。
- * 子供たちはすぐ東京に来るように言ってるけれど出来れば家を守っていきたいと思います。
- * 現在4歳と2歳の子供が幼稚園に通っております。何かあった場合でも、主人と私は職場（中学校）におり、大変不安です。特に伊東から宇佐美の道筋が途中で寸断されることを想定すると不安はつのるばかりです。
- * 家の場所が川端にある事も海に近いので津波などは非常に不安を感じるけど地の底の事はどうしても防ぎ様もないと思う。今後の被害を見ても隣と全く違う状態の事が多いので、どの様に対処してよいなど言えないし、地震は全く予知なしで突然に来るのでその時の状況によって個々にするしかないと思う。もし、大きな地震などの時は家族の連絡がつけられる様にそれだけは、しっかりとしておきたい。
- * 川と海の近くなので津波の事が心配。避難する時、非常用品を持って逃げる余裕があるのかどうか？
- * 宇佐美地区ですが、市の防災線が聞こえないので至急改善を願いたい。
- * 陸地や陸地に近い海で噴火があったらと思うと心配。
- * 防災無線がこだまして声が大きいくだけで意味が全く理解できない。是非改善してほしい。
- * それぞれ予知連の正しい早い情報提供が全て。
- * 噴火をなるべく早く予知できる様にしてもらいたい。そして早く逃げればよいことです。
- * 足の悪い老人がいること。避難の心配。
- * 毎年、群発地震が来ていたが、今回の噴火でエネルギーがなくなったと思う為、来年からは、群発地震はないと思っているため、心配はしていない。
- * やはり、伊東は観光地ですので、お客さまが来なくなることが、一番こたえます。安定した収入が得られなくなるようなことになるのが心配です。あと、我が家は海岸近く（海拔5M）にあるので、〈津波〉と、〈火災〉がこわいです。（住宅密集地です。）
- * 食事の支度の時、地震起き、火を止めたりつけたり、朝の食事、夜の食事にこまりました。年寄りがいるため、このひとたちをどのようにして守っていけば良いかと不安でした。
- * 再噴火の事が心配です。
- * 東海地震。
- * 家が海のそばなので、津波が心配です。（話だけで、どんな物か、宇佐美でいえば、どの辺まで逃げれば大丈夫なのか）
- * 広報放送が良く聞こえないため、正しい情報を早く知る事が出来ない。
- * 地震の最中は夜中は1人暮らしの老人たちで電話連絡をして助けあいました。もう少しで夜明けになるから頑張ろうと励ましていました。朝になると、てよかったね、と喜びました。
- * 今になってあの時のがんばりが体にきたのか、血圧高くなり、病院通いです。老人になることはさみしいことだと思いますが、なるべく皆さんの迷惑にならない様、生きていきたいと思っております。地震中は外出中は隣に（留守の旨）言っておりました。
- * いつ又は、群発地震が起きるのか。
- * 海の近くなので津波がこないか心配。今回の海底噴火は、津波がこなかったが、どの程度の噴火で津波が起きるのか？
- * 避難する時はあまり大きな荷物を持たない方がよいと思います。老人、子供のいる方は大変だと思いますので、助けあって避難場所に集まるよう平日より声をかけあっていた方がよいと思いますか？
- * 地震、津波、火災。
- * 自分なりに噴火の予知を研究し、いち早く発生に対処したい。国・市の予知は余り当てにしない。学者の見解もばらばら。
- * 海に近いため再噴火で津波が心配です。
- * 一人で住んでいるので、災害には不安であるので正しい情報を知りたいと思っている。
- * 地震及び噴火の予知がどの程度出来るのかどうか、実際自主的に自分達の身の安全をはかるため自分の判断で避難したらいいか、それとも組織を通しての避難をしたら良いのか、ちょっと迷う。今回の場合、幸い自宅以外に住める所があったのでそこへそこへ自主的に避難したが、市の広報は聞こえず結局情報は新聞・テレビに頼るのでやや疎外感を持つ。
- * 地震、噴火予知情報の充実と現況活動の伝達。

*老人、病人等の避難対策。

*どの様な災害がきても一人住い故にどうする事も出来ない。ただ精神的に大変な苦情であった。事の済んだ後は、身体の疲労のいかに大きいかを痛感させられました。（現在通院中）

*地震予知の時の学者先生の対応がのんびりしている様に思われます。今少し会合を早くして住民に知らせてほしい。

*現在自宅には寝たきり老人をかかえております。今回の地震の際、市の方で預かってもらえるかと老人会へ役員へお願いしましたが、空き室が無いと断れました。自主的に避難出来ませんので、家族からの要望があれば預かってもらえる様な施設を作ってもらいたいと思います。

*地震でも噴火でも適格な予知をしてほしい。

*また、大きな地震が起きた時、家族がバラバラになった時や、家が壊れた時、保険に入っていないので（まず家を全部直してからでないと保険に入れないそうなので）心配です。海にすぐ近いので津波が心配。

*地震慣れもし、以外とのんびり生活していましたので、今回の事は本当に恐ろしい思いをしました。でも反面、いろいろな事も教えられました。また地震があれば今度は何処か、の不安が消えません。早く予知の出来る事を願っています。

*地震、噴火予知体制の充実を強く希望しますが、実際問題としてなかなか難しい事と思います。国の力で地震その物の解明を急ぎ、駿河湾沖等地震の根源をつきとめ、いざという時は無事に避難出来る様、地震国日本（静岡県）に住む者の願いです。

○桑原1区

*青い静かな海と緑の木々のしっとりした息吹の中で生活して来ましたが、この山や海も人間の手に依ってだんだんと姿形を変えようとしています。そして次第に私達の生活の中にも入りこんで来て、目の玉のとびでる様な高い家賃や土地代。のんびりした伊東人の空気はどこかへいってしまい、現在は東京マネーが伊東を動かしている。特にせいたくは望みませんが自然をこの辺で見直しませんか。*いざ避難の時に備えて、家に右半身まひの年寄りがいるのでその対応に非常に困る。（主人は勤め先の関係で、非常時は常に留守にする事が多い）

*宇佐美地区から噴火が起こるかもしれないということ、数年か数十年先かに再び噴火が起きた時、足元から噴火された場合逃げようがないので、そのことが一番心配になる。

*今回の一連の噴火、又は地震と言うものにすごく動揺しています。また、今後3～4年大変遅れている所が目につきました。市の方でも信用出来る瓦屋さんを紹介したら、とも思います。

*万一噴火があった場合、陸上部でも危害が及ぶ様な事になった場合の避難体制はどうするのか。其の所まで考えて避難場所を作してほしい。

*自宅と職場が電車とバス通勤なので、早く予知・連絡を知りたい。

*旅館業なので観光客及び合宿のお客様が、殆どキャンセルになってしまったので、夏の収入の道が途絶えてしまい困ってしまっている。

*自宅がスカイライン通りの山の手にあるので、道路がだめになった時逃げ道が無い。放送が全然聞こえない。子供（小2・幼）を無事に引き取れるかが一番心配。

*全国放送テレビであれだけ災害の報道をし、また被害の大きい所だけ放送すれば、伊東市の観光にどれだけ悪くなるという事を考えてくれなかったか。もう少し良い所も同じように放送してほしい。

*報道関係が大袈裟すぎた。

*噴火等による停電がありうる。従って無線連絡網をしっかりと、各スピーカーの割れ音を最小限に、そしてもっと多く各所にSPを。

*最近越して来たので初めての群発地震とても怖かったです。毎年のようにあると聞いて、また近いうちに起きるのではと思うと不安です。

*今のところ特にありませんが、災害また事故にあった場合、どれだけのことをしてもらえるのか、例えば一人になった場合やはり心配になると思います。

*家族がバラバラで仕事また学校などに行っている時起きた時、どのように連絡しあうかということと、どの位の時避難したらいいかということ。早く避難した方がいいとは思いますが、生活が在りますとでもとも難しいと思いますし、遅くなりすぎて大変な事になることも有ると思いますので心配です。

*何か起きて家族の誰かが命の危険がある場合、出来るならば助けます。もしもお互いにかばいあえるものならかばいます。まずは人命救助です。それから火災などの建物の安全では、安全な所へ避難する。後はお互い知人親類などの確認です。

- *地震、海底噴火の後、観光客が伊豆に来てくれないので一番困る。観光客は、お客様が来てくれてこそ生活が出来るのです。マスコミもオーバーな放送は止めてほしい。
- *歳とった姑をかかえているので思う様に働けず、又自分が体調の悪くなったときのことなど思う時です。
- *長い病気になる事。
- *健康のこと、地震の被害があった時どうあるべきか心配です。
- *近年毎年のように地震が発生する。揺れ始めると長期間にわたる。収まるまでの間は仕事もろくに出来なくなるし、家を離れて遠方への用事など考えられなくなる。生活のリズムは全く狂ってしまう。長期間にわたる身の危険への緊張感が高く非常に疲労する。更に大きな揺れがある度に家屋家具にも大きな被害を生じ、復旧に大きな出費を要し、経済的に困ってしまいます。突然やって来る見えないものの不安感、これが非常に心配です。
- *また再噴火が起こることもありうるのではないかと心配しています。
- *近くで起こる噴火、海底地上を問わず。
- *2回めにあの様な地震が来たら、家や商品も全部割れてだめになったと思います。出来るだけ早い情報をお願いしたいとおもっております。
- *子供がまだ小さい為学校・幼稚園への迎え。家族・親戚への連絡（電話が混線）
- *子供（小、中学生）の登下校の途中、石垣やブロックの危ない所がある。津波が来た場合、小学校の登下校の時、20メートル道路（宇佐美）が津波の道になるのではないかと？
- *不安に追い討ちをかける様な未確認情報（噂）を流す事は良くないと思う。（かなり、惑わされた）地元に住ても情報はテレビ・ラジオからなので、余り「オーバーな」表現方法で全国に報道するのは、どうかと思う。親戚・知人・友人から毎日電話が有り、対応が大変でした。（一か月位生活がめちゃくちゃでした）
- *今回の様な噴火、地震が再度発生しないとは限らず、現在（？）住宅問題で最も不安が生じて来る。山側も海岸側も考慮しているが、誠に安全な場所は制限されるので、一層不安となる。
- *海底噴火でなく地上に噴火する様な事があつたら、という不安。
- *地上に噴火があるのでは、と心配。
- *情報無線が聞き取れない場所のため、サイレン等の活用をしてほしい。
- *共稼ぎなので家族がそれぞれ違う所に居るので災害の後の連絡がスムーズに出来るか不安です。
- *今回は海底噴火に終わりましたが、陸地で起こるのか心配しております。
- *1、家屋の倒れること。2、電灯・水道の破損。3、確かな情報なら安心だが、デマが流されること。4、一時的な食料は持っているがその後の援助。5、伝染病。
- *1、子供（中学生）が授業中に大地震が発生した場合の安全性。2、主人の仕事が高所になる事があり、安全性が心配。（ビル建設）3、伊豆地方は主に海岸が主要道路になっているので、万一の時の交通網の確保。
- *情報の正確さ。
- *災害による土地、家屋の破損崩壊の心配とその復旧のための資金。
- *市の防災無線を聞き易くしてほしいです。CATV放送より、民法テレビの方が早いのでCATVの充実をお願いしたい。
- *夫婦共働きのため老人一人家に居て留守番をしているので、もし何かあった時には心配だ。
- *群発地震の頃は、各TVでも連日放送をしていたが、噴火後地震がおさまったらTV、新聞にも情報が載っていない。地震がある時は住民・市民も注意しているのが、地震がおさまった後の情報が少しでも欲しいと思う。これからの地震・噴火についての情報が何も無いことが不満である。
- *今までの地震では多少慣れっこで来ましたが、今回の微動又噴火で改めて自然の恐怖を感じました。情報対策、速やかに願います。
- *市の放送内容が全く聞き取れない。狭い道路の駐車が多い。
- *今後の噴火の事が一番心配です。場所が移動するのが心配です。
- *次の噴火は宇佐美地区だと噂が広まり、「この事は、内密だか確かな筋から入った」と聞かされ困惑しました。それが確かな情報でしたら内密にしないで、知らせてもらえないものでしょうか。それなりの対応があると思います。
- *噴火の時の爆風がどの様な形で現れるのか、津波はどの辺まで来るものなのか、この辺なら大丈夫だと安心している人が多かったし、何メートルの高さの津波なら何メートル位迄行か、不安になりました。停電時の放送・電話線の切れた時の対応。

- * サービス業に従事している以上、災害等による観光客の減少が生活を圧迫する。又、個人的にはアパート暮らしのため災害によって住めなくなった場合の住居の確保が心配。
- * 非常事態が発生した時、それに付随して（イ）停電が起これば、（今回も停電した）①携帯ラジオ以外の情報の不足。②電話の通話不能による不便と心配。（ロ）水道管の破裂による断水。（今回も断水した）以上生活の基本的事項の破綻が一番心配。
- * マスコミ等によると、伊東市付近においては何処で噴火が起これば不思議ではない、などと言っており、伊東で生活していることが不安であり、心配です。
- * 自然の力では人間の考えを越えることが判った。
- * 家が壊れる様な大きな地震が来たらと思うと心配になります。
- * 家族全員が動機に出ますので、各人の連絡が取れないのではないかと心配です。電話が不通になり、乗り物も不通になりますので、一人一人の行方が心配になります。
- * 老人（２人）と同居の生活ですので大きな地震があった場合の避難の仕方が非常に心配です。
- * 災害は思いもかけない形で起こるので、心配もあるが具体的に書くことは難しい。（今回はその良い例）ただ心配ばかりしても仕方ない。それよりも今回の出来事についての反省とこれからの災害に対しての心構え等を書く所があれば良かったと思う。（個人の）例えば災害時に自分の居る場所によって、対応の仕方が変わるので（公共な場、自宅）落ち着いて行動出来るかが一番問題と思う（回りに自分より弱者のいる時等）今回の地震では皆が注意をしていたので火災無し、怪我人最小ですんだと思う。これは大事な事です。
- * 東海地震による被害。
- * 老人がちかちかに越して来ているので、付添い人がついていますがスムーズに対応出来るか、それが不安です。
- * 地震、台風、火事、交通事故。
- * 今まで以上の大きな地震がきたらどうしようか？
- * 子供達の事。学校や保育園に行っている時は、安心して居るが個人個人で外出している時は、連絡が取れないので心配になる。
- * 国の予算を増して、地震や噴火の予知が出来る様にしてもらいたい。
- * 大地震がいつ来るか心配です。
- * 水蒸気爆発が起こればどうしよう、と思います。一連の噴火の報道の中で、これからの可能性としてテレビで学んだ事ですが、外国で起こった事があるんでしょう？地震も噴火も恐くありませんが、それが一番不安です。
- * 家族が離れ離れになってしまう事。
- * 地震予知がはたして可能かどうか心配。家屋が地震に耐えられるかどうか。予想される東海地震の大きさは、今回の地震に比べてどの程度のものと予想されるか。今回の地震噴火による近くの断層が陸地に、どのように続いているのか研究の結果を発表してほしい。
- * 正しい予知情報を早く知りたい。ラジオ、テレビで放送してほしい。
- * 毎年地震が来ているので慢性化して、震度５位では平気になってしまい、どの程度で避難するのかかわからず、又噴火についても同様に判りませんので心配です。
- * 主人が身体が不自由なため、いずれという時は大変心配です。
- * 市の防災無線の方法を市民全員に聞き取れる様なやり方をしないと、パニックに陥ると思う。（役所より家庭個々に非常用のＴＥＬスピーカーで同時に通じる様な方法を考えてほしい。）
- * 家庭の連絡法。（一時電話がかけにくくなったので）
- * 子供が幼稚園に行っているの、それと幼稚園までの距離が長いのでその間に何かあったらと思う。
- * 自然災害。
- * 何かあれば、身一つで逃げるだろうし、又何か持ち出そうとすれば、人間怪我もなくいけば、それで結構だと思う。
- * 観光地伊東の住民として、今回またはいつ起こるか判らない群発地震による観光への影響。津波による被害。
- * 自然災害なので防ぎようがありません。が、急な被害があった時、家族が安全な場所にいる事。
- * 三原山の例の様に地上（市内）での噴火が起こればかも知れないという不安。
- * 伊東市は観光地なので、なるべく早く国の安全宣言を出してもらいたい。
- * 具体的に何処へ避難したら一番安全がよく判らない事が心配です。
- * 今回の地震、噴火で観光地伊東として受けたダメージは、災害面よりも経済面での被害の方が大きか

- った様に思えます。私の家でも観光みかん園を営んでいますが、秋の観光シーズンを控え果たして例年通りお客様が訪れてくれるかどうか、不安の方が大きく、もしも又地震、噴火が起こったら本当に死活問題です。また、津波警報や避難命令が出された時点で本当に全員が安全に避難できるか。（間に合うか）疑問もあります。
- *主人の勤務先が三島なので、いざという時電話がかからずとても不安でした。又、どの辺で噴火が起きそうなのかがもっと早く知らせしてほしい。
 - *観光で生活している町に住んでいる我々は、報道の過剰ともいえるものにどう対処して行くかということのを改めて考えなければならないと思う。
 - *私は一人でおりますので、テレビか市の放送がたよりですが、放送がガーガーで全く判りません。はっきり判る様にお願い致します。
 - *1、火災。2、訓練の時のように出来るのかどうか心配である。
 - *今まで地震で不安に思った事は無かった。しかし、今回ののは以前のとは全く違うと強く感じ、9日では来るものが来たと感じ、その晩は1週間ぶりによく眠れた。いざという時は、人間は度胸がすわるものだと自分ながら感心した。しかし、13日の噴火を知った時の驚きは、今まで一度も経験した事もない様な恐怖心で取敢えず、着換えをリュックに詰めた。スーパーでおにぎり等を買った。今後の一番の心配は、やはり噴火と津波、自然界の事でやむをえないとしたらせめて家族一緒の時にと願っている。
 - *新築1年なため、壊れないかと心配。
 - *地震の予知を早く知りたい。
 - *家族からケガ人が出ないようにしたい。
 - *自家から火を出さない。
 - *津波の被害はどんな具合になるか。
 - *情報連絡を敏速にわかる様明確にしてほしい。
 - *地震保険（農協の共済保険に入るつもりです。）
 - *市の放送が聞こえないので、何か非常事態が発生してもわからない。
 - *私は身体障害者で、再手術が目の前に来ていますのでそれが何よりも心配で訓練どころではありません（人造股関節）。
 - *近いうちに東海大地震が来るのではないかとということが、人の話でよく聞くので不安な時があります。
 - *何も心配なし。
 - *今年の5月にこちらに引越してきました。いままでにない経験でしたので、何をどうすればよいのかということが分からず、ただただ現状を受けとめるしかなかった様に思う、心配はここ10年続けて群発地震が続いているとのこと、来年も又あるのかしら・・・
 - *市の放送が場所によってほとんど聞こえない。普段の報告、また地震の情報ほとんど聞こえないので放送マイクを山の手の方にもつけてほしい。
 - *市の無線の情報があまりにも聞きづらいのと、テレビ・ラジオ各局の報道の食い違いが著しいのは住民に非常に不安を与えているとおもう。
 - *電話が通じなくなったり、子供と離れて居るときどうしようかと思ったりします。
 - *公共用地買収の問題があり立ち退きせねばならぬ破目となり目下最大の悩みとなっています。

○中里2区

- *自宅は崩れる心配は先ずないと思っていますが、車椅子生活の主人がいるので外ち逃げることはまずできません。津波も海拔5メートル以上の所ですので殆ど安全だとも思います。じっさいに起きてみないとわかりませんが、ひどく揺れてたら避難場所に行く間が心配だと思います。
- *避難の時の道路の整備、老人用の救援、情報の伝達を正確に確実に知りたい。
- *いつ来るのかと思っていたら何も出来ない、来たときはそのときは・・・。
- *仕事上、市外の仕事が多いので、もし地震が火事になったら、不安になることが多分にあります。
- *家族が別々の時大地震が起きたらどうするんだろう？
- *仕事が民宿なので、旅行者が来なくなるのがこまる。
- *再度起きるかもしれない地震、噴火に対する予知体制の整備とそれに対する正確な情報の入手。
- *年令とともに体力が低下し、災害時の対応が早くできない。
- *数年前から東海地震対策と言うことで常に避難訓練等の対策も強化されて来ている矢先の今回の伊東沖海底噴火が起り、今回の地震や噴火によって今までの群発地震の様ななれきった心構えていたの

が、新たに緊急時に対するいい教訓となった。一番心配されるのは火山性噴火で海底火山の噴火とはいっても場所が陸地に近いので、火山活動によって陸地のほうに関連の亀裂が生じて伊豆大島のような事が起こることも予想されるので緊急時における避難場所や避難道路の整備、市の情報連絡体制の充実を計って欲しい。

- * 来年の夏も又地震、噴火が起きるのではないかという心配、いざ起こっていただろうか不安。
- * 家を新築したばかりの為、住宅の被害等が気になる。
- * あまり心配していない。
- * 海岸線や人家の近くで噴火しないように思っている。
- * 年をとっていることが一番心配になります。
- * 働いているので、学校が休みになって、一番困ってしまった。学校へ行っていれば、何かあれば学校へ行けば子供が居ると安心しているが、休んで家に居ると行動範囲が広いので、何かあってもどこをどう探していいかわからないし、働いている所からすぐ帰れるかどうかかわからないという不安がある。
- * 情報伝達、初期に正しい情報をはっきり伝えてほしい。
- * 子供がまだ生まれたばかりで小さいため、自分だけで今回の様なことがまた起こったら、どのように対応してよいか心配です。
- * 今回の地震の騒ぎの中、テレビである方が、「予知連は研究予算がもらいたいので大袈裟に報道している。」ということ、二度程聞きました。市民にとって正確で早い情報をこれからはお願いしたいとおもいます。
- * 幼稚園が川の近くにありすぎる。
- * 百年の計のため、ご苦労様。
- * 事が起こると色々な噂が人の口から口へと伝わり不安ですので、市が情報を正確に市民にわかるように伝えてほしいと思います。
- * 高齢化社会の福祉対策をさらに推進してほしい。この町のこの家で、余生を健康に留意して、つつましく過ごしたい。
- * 大切な時に電話がつかない事が心配です。子供が県外の高校へ通学をしていますので、きまりごととは出来ていますが、やはり通信網がパンクすることは不安です。
- * いつ地震や噴火が起こるかわからないこと。
- * 群発地震も恐ろしいが陸で噴火した場合はもっと怖い。
- * 噴火予知があったとしても、それから短期間の間にどれだけのことが出来るか、命にかかわることなので家族の事が一番心配。
- * 避難場所へ行く間が危険だ。(瓦が落ちる場所が多いから。)
- * 市の防災無線放送の音声为重複して聞きとれなくて、又音声が届かぬ場所がある、研究してください。
- * 夜間路上駐車が多いので災害発生時に支障が多いと思う。
- * 街燈の必要な場所が多いとおもう。
- * いつ地震や噴火がおきるかわからないこと。
- * 噴火1ヶ月後、海底調査船が噴火地点を写したテレビを見てびっくりした。終息したとばかり思っていた噴火地点は未だに息づいて、めらめらと熱水がふきでているのを見て、いつか又噴火するのではないかと不安を抱いたのは私だけではないでしょう。
- * 火山国に住んでいる以上こんな目に会うのは仕方ないが、情報を早くて確に知らせてほしいものだと考えます。
- * 地震の時に火事にならないようにする。
- * 伊豆地方は大変地震の多い所だと思います。今回の様な大きな地震(8/9)海底噴火など再度起きるのではないかといつも心配しています。
- * 天災は人間の力で防ぎようがないのでとても心配。現在の安定した穏やかな生活が、そういう事態によって壊されてしまうと思うと人類の無力さを感じる。
- * 噴火の興奮もさめない、まだ市民があわただしく生活している最中(7月20日頃だったか)に隣の警察署管内では交通取締り(ネズミとり)をしていて残念ながら捕ってしまった。言い訳をするつもりではないが仕事の段取り等もあり皆普段よりも荒々しく動いていたせたいもあり悔やんでならない、一方ではまだ一部県警からも応援にきている時に市民感情を逆なで的なやり方とも思えた。熱海署管内にて、防災上障害になる悪質駐車でもつかまえる。
- * 噴火も地震も現在の段階では我々が知る限りではその予知は全く不可能としか思えないのが実情です。何か心配かと答える以前の問題だと思う。
- * 毎年のように地震があるから、また始まったかぐらいですが、今回のこのような大きな地震がありわ

- が家は余り被害はなかったが知人の家々がかなり壊れたので、これから先又今回のような大きな地震があったらと思うと不安でならない。
- *伊東市の経済動向。
 - *下田沖地震から震源が北上（富士山）していることに一番不安を感じている。
 - *地震被害の場合は、それぞれの家の立地条件によって、被害のさ（質、大きさ）が非常に大きく異なるので、自分の家の立地条件を考え対策を考えている。（行政の防災、避難方法は、一般論として理解している）
 - *予知連の発表について一予知連が召集されてから発表まで時間（４～５時間）がかかり過ぎていると思う。意見が分かれすぐ結論がでない場合は審議内容（争点）について中間発表があってもよいのではないか。
 - *最悪の場合を考えた発表であってもよいのではないか。（一時的混乱は避けられないが空振りであってもよい）
 - *新聞報道の在りかたについて一商業的発想を抑え、あくまでも真実の姿を報道してもらいたい。（あまりにも緊迫感を強調するため、一部にやらせの報道があったと聞いている。）
 - *心配はありません。
 - *地震が起きた時の安全性がはっきりわからないので、又地震が起きたらどうなるだろうとは思う。
 - *右半身の股関節、ひざ関節が曲がらないため歩行が全然遅いため（走ることは、早足さえも不可能一健常者のやっと３分の１の速度）ただそれのみが不安。
 - *情報伝達が無い。
 - *海岸の近くに住んでいますので津波が心配です。出来る限り早い情報が伝われば、山の方へと避難が出来る気がしました。又、市の広報のスピーカーがあまり聞き取れなくて困りました。
 - *群衆がいつくるかが不安です。
 - *情報の（地震などの）伝達が素早く正確に伝わるかどうか。
 - *情報連絡体制の充実。
 - *我々夫婦は子供がおりませんので老後の事が一番の心配です。
 - *群衆がまた１年後に起こるとして今回のような大きいのがあると不安で、また、海底噴火でなく陸地の噴火が起こるのではないかと不安です。市の情報が遅く、テレビ放送に頼っているのもこれからの情報伝達に不安を感じます。
 - *病気になる時。
 - *パニック状態。過剰な報道。建物の損害。
 - *親子が離れている時起こると心配である。
 - *今回の地震で多少のヒビが各所に入っているので次回に地震が起きた場合どの様になるか不安である。
 - *デマが飛びすぎてかなり不安になったので、正確な情報を少しでも早く伝えて欲しい。
 - *再噴火（市内）
 - *いつも思っている事です市放送は全然聞き取れません。それでＣＡＶを付けて情報を聞いていました。ＣＡＶの無い人は困ると思います。もっとはっきりと聞き取れるように出来ないものでしょうか。
 - *この地域ではいくつもの小さな火山帯が眠っているとのこと、いつまた今回と同じ様な噴火、それよりも大きな噴火が起こる可能性があると思います。その時の不安はいつもどこかにあることです。
 - *情報を正確につかむ。
 - *今回海底噴火であたがもし陸地であつたらいいんだと思いました。
 - *仕事に出ている間に噴火等があった場合家族の行動、様子等。
 - *仮に何かが起こった場合に家内と昼間、仕事で離れているので連絡がつきにくいこと、下手をすると二人とも別行動をとらなければならなくなり、決して良い状態ではない。具体的にけが等があった場合に、それすらも知らずができなくなるのでは？電話はパンク電車もストップ、車は通行止め、等が心配。
 - *災害を防ぐ事は出来ない、災害を少なくする事は出来る。
 - *いつ、地震や噴火が起きるかわからない事。
 - *家族がばらばらでている時地震や噴火が起きること。
 - *小さい子供がいるので、地震が特に心配。
 - *噴火の以前になるべく早く一般に分かる様通知がしてもらいたい。
 - *防災無線と良く聞こえなかったのですが、何か放送がある時はＣＡＶ伊東放をつけると同時に放送があつて良く聞く事ができました。大変たすかりました。

- *海に近いので一番心配なのが津波です。地震となら生まれた時からのおつきあいなのでそれほど心配はしていません。9月1日の訓練にしてもいままで全体参加でやったことはありません。津波が起きた時にどうしたらよいか、どこへ避難したら一番安全か、何分位でくるかというような事について知らせがほしい。電話は地震発生と同時につかえなくなるので普段家族全員で良く話あっておく事が必要。広報が聞こえないのが一番困る。マスコミが必要以上に大騒ぎしすぎる。おもしろ半分は止めてほしい。
- *津波、火災、もう少し連絡を充実して、完全な情報がほしいと思います。
- *あまりにもあちこちから情報が乱れ飛びすぎ、何を信じたら良いのかわからなかった。特にここは、海から近い所で津波がきた時の事を考えると不安、子供2人（4歳の長女と10カ月の長男）をつれてパニックになりそう。早く伊東から安全な所へ引っ越したい。
- *隣近所の連絡・自主防災組織の充実を計ること。避難訓練への参加を徹底させる。
- *何事にも無事を願うだけです。
- *今回は、7月9日・7月13日共、子供達と一緒に居たので良かったがこれが、日曜日や、夕方ではなく自分が家にいない時だったらどうしたんだろうかと思いました。家に、体の不自由な年寄りがいるので、一人でいる時だったら、おばあちゃんがパニックを起こしていたと思いました。
- *やはり再度噴火が起きるかもしれないということが多少気になります。
- *全くとは言えないが、もう噴火するとは思えない。
- *大きな地震と、爆発。
- *特に考えていないが、成り行きまかせです。
- *伊東に移住して1年余りのため、防災訓練等の連絡やその他の連絡、また、先日の噴火の時でもどのような避難場所へ（道順）その時の連絡をどの方より、といった事が分からずにおりました。が、一段落してから、町内の回覧板が回り知りました次第です、日頃から、引越た方へ最初の町内会費を集めにきた時でも、その様な内容のお知らせ等を渡す様にしたら良いと思います。
- *職業柄、お預かりしている品物が多いので心配です。（クリーニング業）今回の海底噴火後は、毎日配達に追われる毎日でした。危険物が多いので、おちおち仕事も出来ませんでした。
- *伊豆半島がいつか孤島（本土から離れてしまう）になってしまうのではないかという不安になったこともあります。今は、このまま何ごともなく平和でいつまでも自然のある伊豆であってほしいと思います。ただまだ天気山の地熱が上昇しているらしいとかサザエがものすごくとれ始めたなど、普段と違う情報も入っているので、定期的に広報等でデータを伝えてほしいです。

問33. 最後に、今後の伊東市の防災対策を進めていく上で、あなたは国や県や市に対して要望したいことがありますか。先ほどの問いと重複しても、またどんな細かいことでも結構ですから教えてください。

○桑原1区

- *市からの放送マイクが遠いのか、とっても聞き取りにくく、響いてしまうので、いつも「うるさいだけ」と感じています。せっかくの情報もこの様な状態では役に立たないのではないのでしょうか。（地震の時は2～3回ですが、はっきり聞こえたように思いました。）
- *正確な情報の充実
- *市長が、住民の安全より観光客の方に力を入れ、本当の防災対策をしていないことに不安を感じる市の庁舎もかなり老朽化しており、災害があった時、一番にくずれると言われている4階に災害対策本部を設けるのはどうかと思う。
- *噴火又は地震に対する予知体制の充実を情報連絡は正しく、且つ機敏に。
- *自然災害は避けられないことですので、せめて大きな地震や津波や噴火がおきる前に避難できるよう連絡が欲しい。災害復旧資金の援助。
- *情報連絡の充実
- *地震発生時のくわしいことはさっぱりわかりません。有線放送などでもあまりくわしいことは分かりませんし、民放テレビ等でニュースの時などのほうがくわしいというのもどうかと思われます。地元の人たちは口をそろえて言う、口ぐせのように出る言葉は、地震のことで、テレビはどこの放送局が、何チャンネルが一番くわしく知らせてくれるかということです。私たちの居る場所で知らされるのではなく、全国放送で知らされるのはどうかと思います。
- *情報の伝え方
- *市の防災無線をもっと増やして、聞こえる様にしてほしい。体に感じない群発地震でも知らせてほしい。

- *市の防災無線が窓をしめた状態でもきちんと聞きとれるよう速急な設備の改善が望ましい。
- *CATVを各家庭に引き込む。現在加入金や工事金が5万くらいかかる。
- *情報の伝達がより速く、市民に伝わる様にして頂きたい、又、災害の為の資金援助も防災対策の1つに入れてほしいです。
- *情報のみ。
- *まず、電話が不通になり、家族との連絡がとれなくなった。次に市の広報が聞こえない。市内には7万人以上の方が生活している。誰にでもすぐに的確な情報が流れるような仕組みを作れないものだろうか。現在は車社会、伊東市内から逃げる道路が少ない。それに狭い。また、市内にはお年寄りの方も多くいるようで、災害が起きた場合、迅速な救援態勢をたてられるように、日頃から対策を練ってほしい。災害は予知することは非常に困難なことと思われます。が、市内関係者の重席にいる方が、テレビ等のマスコミに対して、噴火や地震にたいしての軽い発言はやめていただきたい。
- *ある程度地震を予知できるような対策をしてほしいと思います。
- *地下、海底のことが、もっと何日も早くわかるように、天気予報みたいにはいかないものかと考えます。
- *これは時間のかかる問題でしょうが、少しでも早く確実な災害予報が出されるような時代になってほしいと思います。市の防災無線放送はほとんど聞きとれませんでしたので、改善をお願いしたいと存じます。
- *予知体制の充実
- *避難場所の問題
- *避難場所が自宅から遠いので（歩いて30分）その途中で何かあったらと思うと心配です（場所をもっと近くに）。情報連絡体制の充実
- *上記にも書きましたが、職人さんを手配していただけるともっと安心致します。長い間ビニールシートをかけたままのお家が、つい先日まで身受けました。
- *やはり噴火予知体制の充実につきと思う。
- *防災無線（市の広報無線）がほとんど聞こえないので伊東市全域聞きわたる様にしてもらいたい。
- *市へお願い。放送が全市へ聞こえる様にしてください。
- *地震保険に加入しておりますものの、大きい被害でないと保険金の適用が受けられないのは困る。どんな被害でも受けられる様な保険がほしいです。
- *遠隔地にも放送が入るようにしてほしい。主要道路に非常電話を設置してほしい。学校は、もっと避難訓練や連絡網をしっかりとやってほしい。
- *事務的な訓練より、個々の訓練を充実。津波、水害の防波等に身をいれてもらいたい。
- *今のところ特にありませんが、災害又事故にあった場合どれだけのことをしてもらえるのか、例えば1人になった場合はやはり心配になると思います。
- *市の放送はあまり聞きとれにくかったのですが、有線放送やNHK民放のテレビがとても一生懸命情報を放送してくれたのでとてもたすかりました。これからも正しい情報を早く知らせていただけるととても不安もなくなると思います。今回私はとてもたすかりました。
- *市の防災無線の放送をもう少しどこにいても聞きとれる様にしてください。家屋内で受信出来る様な受信機は出来ないだろうか？
- *確かな情報と避難場所の体制。生活の保障。
- *市の防災無線放送でかなり分かりますが、僕の場合テレビ特にNHKの放送はよく分かる。
- *今度の災害で家もがたがたになってしまい、来春でも建て直さなくてはなど思っているんですが、そんな時、国などで無利息で貸してくれる資金などがあったら良いなとつくづく思います。
- *情報の伝達が正しく行われる事。
- *私は民生の仕事をしております関係上、次の事を提供致します。いざ災害が発生しますと他人様より自分本位になりますので、介護を必要とされます高齢者、身体傷害者、寝たきり老人等の避難に対しては前もって1対1の責任ある介護者を決めておくべきである。
- *避難場所については、市で指定した場所だけでなく、その最寄りの地域の実体にあった小単位設定を地域の方に任すべきであると思う。地震、津波、噴火ではそれぞれ避難場所は変わると思う。
- *最大の被害があった時、食料の事、道路の事、医療の事等心配です。
- *現在情報を得るのは、主にテレビですが、の様子ばかりですので、震源地に居る者にとっては非常に不安です。予知体制を充実し、速やかな情報伝達ができる様にしてほしい。
- *異常事態の場合には専門家を早く現地に派遣し、高度な機械（深海2000等）を使い現地調査を強化してほしい。

- *放送とかをする時に、もう少しはっきりと言ってほしいです。何を言っているのかわからないので。
- *地震、噴火予知体制の充実及び情報連絡体制の充実。
- *情報伝達訓練や情報連絡体制の充実。
- *速い情報。
- *市からの的確な情報が早く欲しい。防災無線の改善。
- *防災無線の放送を早く、判り易く。崩れかけた石垣など復旧の指導。噴火予知体制の充実。
- *誤報やマスコミのオーバーな報道はやめてほしい。観光都市（伊東）なので1年の内、最も収入の有る夏期にこれほど騒がれてしまって今年の夏はさんざんでした。市に収入が無ければそこに住む住民にも自ずとマイナス面が各家庭に出てきたと思う。正直言って、災害や地震噴火も恐ろしいですが、それ以上にマスコミが怖いと思いました。（騒ぎ過ぎ）でも被害のあった家庭には、国・県・市からもっと援助してあげた方がよろしいのではないかと思います。
- *災害が発生する度にその対策が一步遅れて処理されるので、誠に遺憾ではある。
- *情報伝達の迅速ですが、せっかく放送されても聞き取れないのでは何ものならず、正確に各人に伝達出来る様、少なくとも隣組単位に出来ないものでしょうか？
- *毎年群発地震が発生していたのに、専門家による調査が十分出来ていなかったのは、誠に残念です。今後の調査を希望します。
- *市の防災無線の放送をもう少し聞き取り易くしてほしい。
- *噴火の予知体制の充実。情報連絡体制の充実。
- *噴火予知体制の充実。
- *マスコミの方があまり大袈裟に報道をすると伊東は観光地なので非常に悪い影響を及ぼすので、TVなどであまり報道しすぎない様にしてほしいと思います。地震や噴火は自然の力なのでどうする事も出来ません。問題はその後のパニックやその場の行動だと思います。その点にもっと重点を置いて市民に注意を呼び掛けてほしいと思いました。
- *国・県・大学の発表が一番知りたい時に間に会わなかった。情報がまちまちだったと思う。
- *市の防災無線がはっきりと聞き取れないので、何処からでもよく聞こえる様にして下さい。確実な情報をきちんと伝えて下さい。
- *宇佐美地区の避難場所が小学校になっているが、海拔5メートル位しかなく、津波発生時にどの位安全なのか。場所によって地震の感度がだいぶ違うので自宅に居るのが一番安全と思っている。情報伝達の整備を要望する。
- *情報伝達を速く正確に伝えて欲しい。
- *市の広報用のマイクの性能が悪いためか、音だけで言葉は全く聞き取れないこと。
- *情報が各放送まちまちの時があるし、テレビ等オーバーな放送をするので市、又は県の防災無線が市民に全て正しく分かるようにして欲しい。我々の家は山のそば故、余り良く聞こえない時あり。
- *1. 正確な情報を早く伝達してほしい。2. 防災無線の改良（やまびこの様で聞きにくい）。3. 国県には防災体制のより強化を望む。4. 評論家の無責任な情報は市民の不安を大きくするのでTVでまたは新聞での情報はいい。5. 今の情報が欲しいのであって予知や予報などの不安要素を含むものはいい。
- *国市に対してテレビなどを通して速やかに情報データなど知らせて欲しいです。
- *私の家は宇佐美駅から歩いて5～6分の所ですが市の放送が殆ど分かりません。
- *個々の情報伝達がどのようになっているのかよく分かりません。今回の事があってから、聞き取りにくかった市の広報無線が最近よく聞き取れるようになりました。
- *情報が早くすみずみまで届く様に。（今回は噴火が海中であったもので良かったですが、一時沿岸か又は陸地で噴火するかもしれない、又は爆風ですごい被害があるかもしれないと云うことで無知な私達は不安になりました。探索機（飛行機）が飛んだ際、市民からうるさいと言われる前に何等かの方法は取れなかったものか？）
- *今回の件に関してマスコミの報道の仕方がかなりオーバーな一面が見られた。田舎からすぐ避難して来いと連絡が有り、聞いてみたらテレビをみると伊東が全滅するという感覚である。又予知連の方や評論家の方々がテレビ等で色々話しているのを聞いたが、自信の無い結論の無い話を長々と・・・。不快である。自信の無い事は言わぬこと。それが住民の他の人達にもどんな影響を与えているか考えての事か。市と国の情報伝達の方法がくいちがいがあったり、まさにお役所仕事の典型であり、こんなことで実際の災害にどう対処出来るのか腹立たしさを乗り越えて呆れております。
- *1. 防災無線がもっと聞き取り易い様工夫してほしい。2. 今回見られた様な市と中央情報との緊密とは思えない連絡の徹底。3. マスコミの過剰取材とも思えるものに対する規制。

- *市の行動が非常に消極的であり、私達はテレビニュースにより情報を把握していた。避難についても家族友人等と話し合いに決断した。県、国の指示を受けてからという待ちの姿勢ばかりで市独自の態度が無かった。
- *地元の有線放送があるにも関わらず民放のテレビの方が早く情報が伝わっていた。
- *瓦が壊れた時が心配です。すぐ修理やお金のこともあります。
- *避難場所が住んでいる家寄り山や川の近くで危険な場所にある。安全な場所を避難場所に指定してほしいと思います。
- *早い情報伝達。遅いとデマがとんで迷います。
- *毎年9月1日に行われる防災無線方法について考えるべきであると思います。（訓練事態が形式的でマンネリ化している）地域で寝たきり老人、一人暮らし老人の避難策を考えておくべきではないか。
- *10年来群発地震が発生する時は、無感地震が数日続くが観光地と言うことで公表せず、有感地震があって初めて公表される。防災対策上は是非公表して欲しい。（物質、心の面からも早く準備が出来る）連絡体制は災害が起こる前にしっかり整えて欲しい。
- *情報伝達一般住民に対する徹底。放送と併用し各戸伝達の方法。
- *今回の地震で消防団や市役所の方々、又警備して下さい皆様には本当にお疲れ様でした。別に要望する事ありません。
- *正確な情報を伝えてほしいし、もっと細やかに説明して欲しいと思う。
- *1. 災害時、海岸線の交通網が寸断され避難に時間がかかるので宇佐美の亀石峠の下にトンネルを開通させてほしい。2. 空振りでもいいから早めの避難命令を出してもらいたい。
- *地震が発生したら早く震度がどの位か速やかに発表して欲しい。個別受信機があれば付けたい。その理由は上記の受信のため、市からの情報が確実に聞ける。（窓を閉めると聞きにくい）
- *一般の家庭に早く情報が伝わるようにしてもらいたい。
- *市の防災の放送は「地震がありました。火の始末をして注意しましょう。」と分かりきった事しか言いません。私の友達は「今、放送聞こえなかったけど」と電話で尋ねて来たことが何回も有りました。放送があると、皆緊張します。分かりきった事は放送しない方が親切だと思います。
- *正確な情報を早く伝えてほしい
- *もう少し早く情報を伝えて欲しい。
- *毎年9月1日の防災の日の訓練は、ここ数年間殆ど無意味な訓練の繰り返しの感じがする。名目だけの感じ。市の広報伝達の方法を早急に考えるべきだ。何を伝達しているのか、殆ど内容が聞き取れない。
- *上に記入した様な訳ですので、情報や避難などについての伝達などは速やかに、そしてすみずみまで行き渡る様をお願いしたいと思います。
- *放送は早く正しくはっきりとしていただきたい。網代、伊東、宇佐美、川奈など近接地地がさいがいは同一ではなく、今回は宇佐美が一番強く来たのでその点が心配でだった。これからも心配です。
- *正しい情報伝達の仕方を考えてほしい。
- *正しい情報を伝えて欲しい。判り易くはっきりと。
- *伊東市の場合、うみの道は大雨が降れば崖崩れ等で動く事が出来なくなるなだから、安全で広い道が必要とする。何かあってから考えるんじゃなく、あったら困るから広い道路を早く。136号線では不安。スカイラインも冷川（？）も狭すぎる。
- *宇佐美の海岸に防波堤を造って欲しい。
- *はっきりと分かりやすい情報を十分に流して欲しい。市の放送が聞きにくいので、何とかしてほしい。
- *今後も続けて地震について点検したりしてもらえたら安心して生活が出来ると思いました。
- *地元の有線を通して身近な放送をしてもらいたい。民放の方が早い場合があり残念でした。これは地元有線の方達が、率先してやってもらいたいと思いました。市の関係者の方、御苦労様でした。
- *白石のヘリポートを山の手の方に持って行ってほしい。市の防災無線の放送を早く知りたいと思います。
- *今まで以上に噴火予知体制を強化して、特に長年のこの地域に住む人々の情報意見も取り入れて欲しいと思います。又、必要以上に大袈裟に報道するマスコミに対しても規制の枠を設けて欲しいと思います。
- *広報はもっと正確に適切な放送をしてほしい。子供がいると荷物等を持って避難出来るかどうか不安なので、必要な食料等は市でしっかり準備しておいてほしい。
- *マスコミの異常さに乗せられる事なく、正しい今をみつめ現在の様子を一番知りたがっている我々に、

率直に注意及び様子を知らせて欲しい。NHK等ニュースの時間がもう少し細かくあった方が知る機会があると思う。

*何にしろ行商なので家に昼間はあまりおりませんが、市の放送だけははっきり聞こえる様にしてください。

*地震予知。

*国に対してはやはり正確にデーターを速やかにTVなどで報道してほしい。パニックばかり気にしたりせず、上層部だけで（国、最寄りの機関、報道関係）事を運ばず、噴火の日は朝から報道機関は海の方にカメラを向け、NHKも朝から大々的にセッティングを始めていたのをこの目で見、何かおかしいと話している矢先に予想もしない噴火が起き、分かっていたのだから勝手に感じた。市・県に望むことはこの町の性格上やむをえないが、商売より人の命の方を優先させて安全の方を第一に考えてもらいたい。長期戦になると生活とのバランスは難しいが。

*1. 地震予知情報を早く知りたい。2. 情報は的確なもの。3. 発災後でも現在の状況等。4. 道路が確保出来るか。（一般車、観光の車等がいかに協力してくれるのか）

*市外地でも分かる様情報が欲しい。

*非常時発生を一刻も早く、何かの方法で市民に知らせて欲しいと思います。

*先ず市の情報無線の研究から・・・。

*現在はNHKテレビで情報は十分です。

*毎年毎年同じ現象が続くと「ああ、またか。」になっているのでしょうか、もう少し事前のチェックがあってもいいのではないかと・・・。道路の状況とか。（落石、崖崩れなど）災害が起こり易い地域なのだから、それなりの準備が必要だしいろいろな条件を想定した対策を立ててみてはどうだろうか（この場所でこの強さの地震が起きたら・・・）。又、防災無線とかなり聞き取りにくく車の音などで掻き消されてしまって、ところどころの単語だけで不安になってしまうのでは。もう少し工夫を・・・と思います。

*市の情報が山にこだまして消えるのを待って、次の言葉を言うのが余りにもゆっくり過ぎて分からない様で聞きにくいです。

○桑原1区

*上記にも述べたが、先ず連絡の徹底（町内の組長に市からの情報を伝えるとかの措置がほしい）等の住民に不安を与えさせないようにしてもらいたい。

*マスコミの情報ばかりが耳に入ってくるので、国の予知等早め早めに流して欲しい。

*三宅島の噴火、大島三原山の噴火、毎年の川奈沖群発地震等、それに続き、手石海立噴火、どれ一つとして予知らしい事、又はそれに近いような事は一度も聞いていません、予知としてそれほどむずかしい事なののでしょうか、なかには予知なんてできっこないよと言っている人もいます。

○中里2区

*津波の時どの位河川に被害が出るのか知りたい。

*被害の復旧を早く、地元の情報を早く知らせて欲しい。

*普通の無線放送さえ聞きにくく、全く聞きとれない。いざとなった時役に立たない。もっと聞きよくした方が良くと思う。

*市、地域の利も大切ですが、報道関係を四六時中現地において情報を流してほしい。

*情報連絡の充実

*市の防災無線がほとんど聞こえないので、良く聞こえる様にしてほしい。

*政府、予知連に対して、非常に不安が残る。

*どんな細かな事でも正確な情報を全て提供してもらいたい。

*正しい情報の伝達を早くして下さい。違法駐車、駐輪は避難にさしつかえます、取締りの強化をお願い致します。

*緊急時における市の防災放送の充実を計ってほしい。現在、日頃の広報の放送もほとんど聞こえない状態ですので（地域によって）早急に調査の上お願いしたい。

*正確な情報と、早い伝達。

*もっと早く予知出来ないものか。

*市役所の広報をもっとはっきり聞きやすくして下さい。

*被害が小さかったが、大災害がなかった時この様な情報伝達で良いだろうか？もう少しはっきりした伝達がほしい。

- *防災無線放送が市民全員に明確に伝わる様、検討してもらいたいと思います。
- *防災無線が近くになく、聞きとれない。
- *救急(医療)センターが遠くにありすぎるし、12時以降になると、終了してしまう。24時間体制の病院がほしい。
- *要望しても期待なし。自分自身と自分にあうよう処理する。
- *事が起こるといろいろなうわさが人の口から口へと伝わり不安ですので、市が情報を正確に市民にわかる様に伝えてほしいとおもいます。
- *市の広報無線が全然聞こえません。早急に対策を考えてほしいと思います。
- *マスコミの過大の報道は、大変迷惑でした。かえって余計不安になるばかりでした。正しく伝えてほしいと思います。
- *誘致対策は慎重に、検討を重ねて下さい。
- *広報連絡体制の充実
- *地震、噴火予知体制の充実
- *防災無線を考えてほしい。
- *防災無線の充実、情報連絡体制の充実
- *市の無線が聞こえないので、全家庭に無線を付けてほしい。
- *予知がむずかしい事なので津波に対しては、堤防の補強など...被害を最小限に防ぐ努力をしてほしいと思います。
- *避難誘導の考え方(設備を充実させること)
- *正しい情報、伝達
- *自主防災組織の充実(今回の地震の時、何の音沙汰もない状態だったので、組織が活動していない。今後、いろいろな面で活躍できるようにしてほしい。)
- *伊豆地方に地震がここ毎年の様に発生しているので、伊東市にも網代と同様に観測所が必要と思う。(気象、地震観測出来るもの)伊豆半島全般に渡り、災害救援物資輸送の為、国道135 以外伊豆横断道及びその支線を作るべきだと思う。防災訓練も必要であるが、各地区は居住する老人(寝たきり、独身等々)に対する救援対策も必要であると思う。公園も避難場所(一時的)として必要性があると思うので、公園の整備(樹木の手入れ等)が望ましい。
- *防災無線の充実。
- *情報連絡体制の充実。
- *宇佐美地区の広報スピーカーが各所にあるが、家の中では、聞き取れる家はまず、少ないと思う。エコーが出て、少しでも風があれば何をいっているのか、さっぱりわからず、評判が悪い。天城、湯が島、町他、中伊豆地区では何十年も前から、各戸にスピーカー付きの有線電話を設置、確かな情報、お知らせ等伝達が行われている。
- *スピーカーでの放送内容は全く理解出来ず、音は聞こえるが、内容不明はどうにかならないものか。
- *放送内容ははっきりと。
- *予知や、情報伝達の徹底を要望したい。特に予知に関しては、もっともっとお金をかけても良いと思うし、実際に災害があったからといってクローズアップするのではなく、いつでも予知に対しての現状などを広くみんなに伝えている方が良いと思う。
- *国自治体も縦横連絡を密にしてやって欲しい。
- *民放テレビでしか情報が得られないのでは全く話にならない。この様な事にこそ行政機関は予算を充分にとり、市民(国民)の為になる防災対策を確立する必要があると思う。
- *情報連絡体制の充実。
- *今回の地震、噴火を経験し、市防災体制(市民に対する情報伝達)の貧弱さが露呈された。(殆どの人が、テレビから情報を得ていた。)原因としては市に専門的学問をした人がいないため、特に国、学識者とのつながりが全くなく、早期、的確な情報を得られなかったためと考えられる。(市の責任を問うものはない。)等地域では、今後とも地震噴火の発生が予測されるので、東部伊豆地区(当面は伊東市)に、国から専門官を派遣してもらい、国、県との連絡体制の強化をはかるとともに、市防災対策について指導をお願いしたい。
- *まず、避難するときの、最低準備品とか避難した時の食べ物の配給具合とかを、具体的に文書などで示して欲しい。報道等であまりに情報が大きくなりすぎて実際はどうなのか、真実がわかりにくかったので、そのへんをきちんと住民にわかりやすく対処してほしい。
- *国や県が市に対して市民にたいしても結果を教えてください。
- *市のスピーカーがはっきり聞き取れるように。

- *市の無線が聞き取りにくい。
- *噴火体制の充実。
- *情報連絡体制の充実。
- *地元テレビの活用。(CATV)
- *市の防災無線の拡充、機能の充実。
- *通信連絡体制をしっかりと。
- *噴火予知の充実。
- *市の無線の充実。
- *放送や情報をはっきり、わかりやすくしてほしい。
- *市の広報がよく聞こえず、わかりません。それを何とかしてもらいたいです。
- *災害復旧資金をもっと充実させて欲しいと思う。
- *情報連絡体制の充実。
- *防災無線が風の具合で全く聞き取れないので何とか工夫をしてほしいと思います。
- *市の放送が聞き取れなく、やたら放送があると不安を感じてしまうのもっと放送を考えてください。
- *崩れ易い山、石垣の防護対策。
- *古い石垣(寺、神社等)を整備に力を入れてもらいたい。
- *市の防災放送が良く聞こえる様にしてもらいたい。
- *噴火予知体制の情報連絡体制の充実。
- *市の役員の方も一生懸命努力していただいた事と思っていますが、もっとより早く情報の確実性をお願い致します。
- *情報の正確な伝達。
- *確かな情報を迅速にはっきりと通達していただきたい。(風によっては放送が聞き取れない。)
- *情報連絡体制の充実。市の防災無線は聞き取りにくいために、不安を大きくするばかりなのでもう少し、何とかできないかと思う！
- *気象条件、立地条件にも関係する事ですから、「完全に・・・」という事にはいかないと思いますが、情報無線の充実。
- *電話がすぐパンク状態になるのでもう少しなんとかならないのか。
- *調査をもっと普段から行って欲しい苦情など気にすることはない。(ジェット機の音等。)そこに住んでいる人々のためにもなるのですから。
- *避難場所が近所の学校などではたいした意味もないのでは？伊東市以外での避難する場所も少しは考えておいてあるのだろうか。私達には知る術もない。
- *防災、無線の充実。
- *情報連絡体制の充実。
- *噴火予知体制の充実。
- *情報の伝達の正確さと速さ。
- *噴火の以前になるべく早く予報通知を一般に分かるよう通知してもらいたい。
- *防災情報連絡の整備。
- *生きていくのに一番困ると思います。借家で営業している者でも久居にも相談に乗ってもらいたい。
- *もっと正確で分かりやすい情報をスムーズに伝えてほしい。無責任な情報だけは避けてほしい。
- *防災無線の整備。群発や海底噴火場所など、わかり易い地図を印刷し、市民に配付して欲しい。今回の緊急事態に備え、特別自主防組織(永年勤めて貰う)の拡充。防災受令機の整備。
- *市の人より、マスコミの方が情報にくわしく、ちょっとおかしいと思います。情報伝達の仕方がおかしいですね。お役所仕事といわれても仕方ないではないでしょうか。
- *市の防災無線が確実に聞き取れるようにしてほしい。
- *避難命令がいかにげんにするため、避難していいのか、分からない。もっとはっきりしてほしい。
- *情報網の完備とスピードかをお願いしたい。今回はNHKのテレビのみに頼っていた。
- *本年度より防災等の予算が大幅に増額された様ですので、伊東市においては安心出来る内容で対策案が生まれるとおもっております。ただ、現状の街燈設置の情報伝達の為のスピーカーからながれる広報のアナウンスが反響して(こだま)良く聞き取れませんのでなんとかしてほしいと思います。又、即テレビ、ラジオで発生した事のみを中心に流すだけでなく、今後どの様な、備えや、予測が生まれるかを専門家の立場の方がはっきりと私たちが行動しやすい方向で指導してもらいたい。又、専門家の先生方をお呼びして講習、講演をお願いしてほしい。私の様な、地震等に殆ど体験した事の無い地

方からの転入者は本当に何をして良いのかと思います。

- *市の防災無線がほとんど聞き取れない状態です。風が少し吹いている日などは、全々聞こえませんが、何とか対策を考えてほしいと思います。
- *保育園がガス会社のそばなので、今回のように海底噴火ならばよいのですが、地上噴火だったら、と思いますと恐ろしいです。又、川もありますので大津波がくるようなことがあったら、無事、子供達を保護できたでしょうかと不安です。各火気を扱う会社に事故防災の強化をお願いしたいです。又、お年寄りを抱えている家庭はいつも確認して頂き、いち早く、避難できますよう、お願い申し上げます。同報無線は今でも大変不便な思いをしていますので、早く、改めて欲しいです。今回の噴火中、マスコミの方々のおかげで一はやく、情報を得られ、大変感謝しております。
- *伊東市の防災対策については異論はございませんが無線放送が立地条件（自動車の騒音）が悪いのか放送しているのはわかるのですが内容がほとんど聞き取れません。この点について改良して欲しいとおもいます。
- *避難場所や避難進路の整備。
- *噴火や津波には防災対策はむり。復旧対策のが重要。
- *噴火予知体制の充実。
- *伊東市の防災無線ですが毎日、毎日同じことの繰り返しでした。もうすこし、考えて話してもらいたいです。防災無線が聞こえるのにテレビからの放送でいろいろ知りました。もうすこし無線で市の人たちに話していただきたいと思います。
- *防災情報を的確にしてほしい！今回の地震、噴火でかなり誤った情報が流れたので・・・。マスコミが騒ぎすぎたと思った。
- *伊豆は観光地なので他県の車が多いですね。地震でも平気で運転している車、とばしている車、怖いですね。
- *テレビ、ラジオ等は事故がおこらなければ放送しない。防災無線の充実化。
- *各家庭への防災無線の受信機の設置を又情報の細部の公表をお願いしたい。
- *防災対策が出来るだけの事をしてほしい。
- *新しい、本当の事を、早く知らせてもらいたい。（デマ、誤報は全く困ります。）
- *市や国や県では良くやって来たと思うが商売が出来なくて困った。（保障金が欲しい位だ。）
- *地区別による避難場所への誘導標識の設置路上駐車取締り。（特に路上市が狭いため。）
- *たとえ、どんな小さな情報でも、ちゃんと市民に流してもらいたい。観光客の減少は非常に大きな問題ですが、地元で安心して住んでいくには、小さな異変も隠さずに流してもらいたい。いきなり大きな地震が来るとか、噴火、津波が来るとだけ放送されても慌ててしまうだけだと思います。
- *再びこのようになった場合の情報連絡体制の充実を特に望む。
- *少しの被害でも直せるようにしてもらいたい。マスコミ対策を考えてもらいたい。情報を正確に。
- *あまりデマなど流れない様にして下さい。
- *早くて正確な情報が欲しい。
- *避難先についてとても心配で、本当に安全な所か、みんながそこに集中的に避難しても大丈夫か、いろいろな面でもっと検討して欲しい。
- *今回の場合、自分で情報を知り、自分で判断しなくてはいけなかったのも、放送の仕方を考えて情報をもっときめ細かく流して欲しい。
- *噴火や地震に対しての予知体制の充実。
- *情報連絡体制の充実。
- *災害復旧資金の援助。
- *情報の伝達（正確で迅速な情報）対外ではなく地元に対する情報の提供。
- *救急体制の充実。
- *市の広報（防災無線放送）をもっと充実して、聞こえにくい所などチェックする必要があると思う。噴火騒ぎがおさまったあと、市から広報が聞こえるか聞こえないか、一軒々の問い合わせがあってもいいと思う。
- *此の度の地震では、市の職員、上司の方々大変だったと思います。消防の方等々～～～マイクで話す事が、全々わからないのはみなさん困っているようです。
- *予知については空ぶりになっても良いから早く伝えて欲しい。交通では当地には迂迴路がないので困る。無線放送の充実をお願いします。
- *万が一の援助、救援を万全にしたい。

- * 紛らわしい放送はやめてほしい。
- * 市の放送がはっきり聞き取れない。
- * テレビを見ろと言っても何チャンネルを見ればよいのか？静岡放送は入らない。（東京のみ）地方有線放送の加入率は少ない。
- * なるべく隠さずに細かく教えて頂きたいと思います。
- * 噴火が起こる前に、予知できる様にしてもらいたいと要望します。
- * 別荘地に隣接している為、水道が不動産会社個人のものなので、すぐに水がでなくなり、今回の地震時にも一週間水道が断絶し、家族でもらい水をしながら過ごしたのでこれからのことが心配です。
- * 地震火山についての予知網の整備を充分整えて、完全な予知がいち早く出来るようにしてもらいたい。
- * 噴火の予知と情報の連絡が速やかに行われることを強く望みます。
- * 今回は県の協力で機動隊が出動しましたが、法的基準（被害の）はともかく、火事場泥棒も出現したというので、治安上（自衛隊）の避難安全に出動を考慮して頂きたい。
- * 広報の情報を信用しています。
- * 各機関に対し、防災予知体制を充実してほしいことはもちろんですが、今回の地震、噴火のマスコミ報道に対しては、行き過ぎ、誇大を感じました。住民のための情報というよりは、これらを利用してたとえば、視聴率をあげようなどというマスコミ関係者の行き過ぎに対しての規制なども必要ではないでしょうか。
- * 1 噴火予知体制の充実。2. 消防力や、救急医療体制の充実。3. 避難道路の充実。4. 情報連絡体制の充実。
- * 地震などの情報の充実。
- * 噴火予知の体制の充実。消防力や、救急医療体制の充実。情報連絡体制の充実。
- * 予知連方達のお話を聞いていると、そんな程度の事は自分達も感じると思う事がしばしばありますが、もっと納得の出来る発表が欲しいと思います。
- * 今回の噴火により、山に地割れがでたり、山が崩れたりしたので市の方に連絡を取り、見回りに来てもらっても何の排除もなく「引越しをしたらどうですか？」ということでしたが、あまりにも冷たい言葉だと思います。裏山が別荘地ということもありますが、持ち主もわからず、又現在では不動産屋も倒産しているため、どこに怒りをもっていったらいいのかわからない始末です。
- * グラウンドの照明灯位のを（夜の為に）避難救急用に地域に設置して欲しいと思います。墓地も90%に被害がありました。家は壊れる、観光地故に収入は減る、ダブルパンチです。多くの人にもっと安い融資を国に望みます。
- * 早く正確に知らせて欲しい。
- * 1. 予知を正確に早く町内の役員より、伝達して欲しい。2. 防災無線の放送の話かたの速さが余りゆっくり過ぎても、よくわからないし、早口すぎても尚わかりませんので。話し方を研究してください。（災害時はこの放送を特に重視しています。）
- * 未確認情報が流れる前に、より早く正確な情報を流すことにより、今何が起ころうとしているか、を知ることで、市民の不安感もあり、次の行動に移れます。一番不安なのは、何か起こっているのか分からない事です。
- * 市民は「頼れる者は我一人」で自主性をもち、行政は的確な情報（行政なるが故、得られる情報）を速やかに流し、他の流言飛語的なものを毒消して欲しい。一にまどわされない様にしてほしい。
- * 私の家では母一人娘一人で住んで居ます。夜はお店に行きますので、母が夜一人になります。噴火の時、市から、〈コミセン〉に避難するようにとの事ですが、付添いかいなければということでした。付添いをお店ではなかなか出来ませんので、お断りしたのですが、そんな時、二、三人の保健婦さんなどいてくれればとおもいました。
- * どんな情報もできるだけ市の無線で知らせて欲しいと思う。
- * 今少し情報をわかりやすくお願いします。

○留田東地区

- * 今度の地震噴火で特に思ったことは、情報が不明のため、デマが飛び、噴火が大崎に起こるということ（後に聞いた話だか）。そのため1町内の大半の人たちが避難するという騒ぎがあった。
- * 放送ですと、こだまして聞きにくいので、広報車が廻ってきてくれると良いと思います。
- * デマ等がおごらない市広報車を出して下さい。
- * 市の放送が聞こえないので困っております。是非留田の上の地区に聞こえるようお願い致します。

- *防災無線がよく聞き取りにくいので改善して欲しい。今回はテレビ・ラジオの放送に注意していましたが、市でも、もう少し情報をながして欲しいと思います。
- *伊東沖海底噴火は、毎年起こるような気がいたしますので、国や県としては、このようなアンケートを資料として防災対策をよく考えてもらいたいと思います。
- *宇佐美の警報機（スピーカー）東町のは山側、峰方向に向いているので山にこだまする。また、混同するので、聞き取りにくいので、山間地区より海上方向に流す（一定方向）ことが良策だと思います。（全宇佐美地区）
- *御殿場市のように、家の中に市の広報を放送する設備をもうけると良いと思います。
- *伊東市の防災に対する態度や、海岸の近くに住んでいる民家への保障問題、災害にあってからでは遅いと思う。何らかの形で、安心していられるような対策を、早く望んでいます。
- *けが又は病人が出た時に心配です。火事が出た場合。
- *市に要望したいことは、放送施設をもっと密にして、各家庭によく分かるよう施設の充実をお願いします。
- *噴火予知体制の充実です。
- *一に家族の健康、二に子供達の遊ぶ場所が海岸に近いので津波が心配。
- *山林の伐採をやめてほしい。
- *保育園に勤務しています。もし保育中に噴火があったりしたら、心配です。保育園は、幼稚園と違って親の都合に合わせることが多いので、非常事態がおきた時は、速やかにトップの人が判断し、休園（完全に）していただきたいと思います。いつも保育園は、9月1日の防災訓練には、親は関係なく、職員が子供をつれて見学に行っています。幼稚園は、時間を指定して親（祖父母）が迎えに行つて子供を引き取って帰ります。この差を毎年感じています。
- *9月1日の防災訓練は、保育園も必ず親（祖父母）が迎えにきて、年に1度の訓練に参加するようトップで決めて頂きたいと思います。また、市の放送は私のところまで聞こえません。聞こえるよう配慮して頂きたい。
- *情報伝達がどの様に早く行われるか、そこが心配です。
- *地震、火事、台風、津波などの防災対策の充実をお願いします。
- *市の無線の放送がよく聞こえるようにしてもらいたいと思います。
- *聞きますところによると、当地、伊東市は観光地だから、地震等の情報をあまり詳しくテレビ等で放送することを観光協会より差し止められているとのことですが、絶対にそういうことのないようにしてもらいたい。
- *7月13日の噴火後、市周辺に数多くの地震計が設置されたそうですから、異常が発生したら本当のことを直ちに発表することをお願いします。
- *どんな災害がおきても道路の通行止めで市外に出ることができなくなることが一番心配です。
- *早く正確な情報の伝達が必要だと思います。
- *自主防災組織において、漁船を組織の中に入れて早い情報を得たいと思います。今まではどうにか漁業者は取りのこされたような気がします。今回の噴火の時もそのように思いましたので、今後参考をお願いします。
- *市役所の放送をはっきり聞こえるようにお願いします。
- *海と山に囲まれ、しかもおしこまっている町で、どうしても避難場所が高台のため、上記で申し上げました通り、せまい道路、1本道のため、日常不安を感じます。安心して避難場所まで円滑に避難行動できるよう（道路の正常化、その他）要望いたします。
- *予知体制の充実。国・県・市の情報における連係。（今回、気泡の探知を海底の隆起と誤認する事態が生じたが、誤認であったことの情報伝達におおきな混乱があった。）

○城宿4区

- *文明時代で良い器械が発明されており又、関東震災の資料もある事と思います。時代が変わり堤防等も完備されておりますので、やたらと津波、津波と騒ぐ事はないと思いました。
- *市からの放送がはっきり聞こえる様、良い方法を考えてほしい。
- *今回の地震では、随分と広報なども頼りにしましたが、テレビを見てやっと本当の事、かつ解る様なわけでは、電気が消え、トランジスターや、人の噂などをたよりにしていたらもっと、混乱していたと思います。有線を持たない人たちもいるわけですから、テレビ、（NHK、民放）などでもっと情報をスポット式的に的確に、早く流してほしいと思います。

- *噴火、予知体制の充実を特に要望します。きてからではなく、来る前に対策を...
- *少しでも噴火の兆候などがあった場合、観光への影響などと言わず、すぐに発表して欲しい。又、CVAZチャンネルの情報が遅いので、即刻放送できる様にしてほしい。
- *的確な情報。
- *1. 広報無線の聞き取りを良くすること。2. 主原因はわかっているのに、緊急時での、放送文は、簡単、明瞭にする事。(津波退避・津波逃げろを連呼の方が一般に適する)(伊東市街大火の時の放送でも、主文は、消防関係者の応援要請であったが、放送を注意深く再度聞いても主文が判明できなかった。長い放送分は、わかりにくい)。3. 地震のおこる不安を感じるのに、老人・子供など(体の弱い者)は、各自(家族)で判断して避難場所・公共性建物(小学校、コミセンなどの強固建物中)に)先に避難させた方がよい。
- *なかなか、むずかしいこととは思いますが、早く地震予知ができる様になればと思います。それから、今回の地震で痛感したことで、この地震の現場にいても情報はテレビから知ることが一番多かったのだ、正確に早いニュースをテレビが流してくれることを望みます。テレビでも民放の方がニュースが早く、NHKは、番組の変更などが少なく知りたいことをすぐ知ることができず、イライラしました。NHKをこのような場合、流動的に番組変更などをしてくれたらと思いました。
- *少しのことでも、何でも、情報を知りたいと思います。
- *市の消防署などの放送の際、男の人の声は割れて聞こえにくい。関係の方が各地にまわって放送の音声を確認してほしい。放送の言葉が間のびして、イライラするので、有線放送のアナウンスは、もっと研究してほしい。
- *市はもう少し詳しく状況の説明をその都度又は、定期的にしてほしい。
- *1. 一番欲しいのは身近な情報です。市の広報が必ず一軒、一軒聞き取れる様にしたいこと。(地震前に要望しましたが、無視され、現在も市の広報は全然聞いてくれません。現在の設備のままだったら、市は広報の際に、声質の違う人を使うとか、音量に工夫するとか普段を使ってテストすべきです)。2. 避難命令を持っているのですから、確実に伝わる様にしたい。
- *噴火の予知がまったくあてにならなかったのもっと早く確実に予知できるようにお願いします。
- *広報無線がよく聞こえないので聞きとりにくい時(重要な時)などは、連絡網などがほしい。
- *情報を的確に伝えて下さい。
- *今回は民放のテレビの方が情報その他早いので、おかしいと感じたとき市の広報よりもテレビの方に耳とか目がいったりしてやっていた。市民に正確に伝わる方法を市も考えてほしい。
- *地震のあったあと、地震予知の人達が集まって協議して結論が出るまでの時間(4時間くらいとか)がかかりすぎた。その時間に何かが起こるのではないかと不安だった。
- *耐火、免震住宅に立て替える資金援助と指導が必要ではないか。私の店はフロント部が半壊したので、ウィンドケースと2MX3Mのはめころしガラス部分を新たに柱2本入れてサンの多いガラス部の小さいデザインに改装したが、同様に大きいガラス部分のある店でもそのまま又ガラスを入れかえるだけの改良なしの補修になっているところが気になる。又ブロック塀の点検、注意など個別の細い注意、指導も必要ではないか。
- *きっちりと通じる方法で情報を流してほしいと思います。今は情報時代で、マスコミの関係者も沢山見えていた様ですが、何かお祭りで取材している様な気がします。
- *地震や噴火を徹底的にやしてほしい。
- *正確な情報の伝達。
- *予知をもっと早めに出来ないか思う。
- *地震噴火情報はわかりやすく早く知りたい。
- *今回の群発地震、噴火では、市の放送が聞きにくくそのためいろいろなうわさばかり耳に入り、とても不安になりました。一番大事な時に放送が聞きとれないのは、不安になりますし、動揺してしまいます。市の広報、放送などは、はっきりとわかりやすくしていただきたいです。
- *自分の事は自分で守る事しか有りません。
- *正確な情報伝達を早く知らせてほしい。
- *噴火予知体制の充実。
- *情報の正確を望む。そしてより分かりやすく、細部にわたって伝達するように。
- *地震や噴火が2度と無い事を願って居ますが、もしやの時は市の情報を正確に早くしり守る事だと思います。

- *市の無線放送がよく聞き取れる様にしてもらいたい。地元の有線放送が情報が遅いので早く伝えてもらいたい。
- *観測データに異常があっても市民には特別の異常は認められません。とった情報の流し方は、納得がいきません。現段階で分かっている情報、隠さず公表してもらいたいと思います。
- *広報伊東の放送をもう少し聞き取り易くしてほしい。（放送設備の充実）病院設備の充実を望みます。
- *伊東市の防災の無線がもう少しはっきり聞こえる様にしてほしいです。
- *町会長、班長の連絡網の徹底をしてほしいと思う。
- *災害時の情報を正確にいち早く放送してほしいと思います。
- *1. 噴火予知体制の充実。2. 消防力や救急医療体制の充実。3. 避難所や避難道路の整備。4. 情報連絡体制の充実。5. 観光客の誘致対策。6. 災害復旧資金の援助。
- *非常事態が起きた時、同市内にすんでいる身内親戚との連絡（電話）が、すぐパニック状態になり、なかなか連絡が取れず不安になるので、何か手段はないかとつくづく感じました。
- *事実を正確に早く知りたい。予知情報を失敗してもよいから何回でも出してほしい。その中で個人個人で判断し、対応したい。
- *防災無線がよく聞こえる様にしてほしい。
- *正確迅速な報道をしてほしい。特に伊東にはC A Vがあるが、はっきり言って今回の災害では情報が遅く、テロップがただ流れているだけで、それも何時間も同じものが、（ ）何の役にも立たなかった。市もこうしたC V Aを災害時には有効に活用してほしい。
- *確実の情報を早く市民全体に知らせて欲しい。
- *消防力の充実、救急医療の充実。何か起きた時には通報を早くして頂きたい。
- *防災無線の放送をはっきりと聞き取れるようにしてほしい。
- *地震予知連の充実。地震学の発展。
- *正確な情報の提供。
- *民放テレビに先を越されないでほしい。人々は不安にかられたらどんな情報でも欲しい。そしてその情報で判断をしてしまう。民放テレビは同一事項について「わっー」と放送しすぎると思う。ただ情報を流せばいいのではないと思う。もっと国県市と連帯して情報を流してほしい。伊東に引っ越して1年ちょっと、毎年の地震で防災対策が出来ていると思っていたが、今回の地震ですごいいいかげんなもので頼りにならないことがわかった。一体今まで何をしていたのと言いたい。広報の放送が聞き難いことは、ずっと以前から分かっていたことです。
- *群発地震の時もとても不安であったが、学校はいつもどおりであり、平常そのものであった。いくら伊東は地震がよくありなれているとはいえ、もう少し対策をしてほしかったと思う。
- *新聞やニュースなどでは、伊東市では出来る限り市を回り老人の一人住まいや障害のあるひとたちのお世話というか対策を尽くしたようですが、やはり短期間に急に万全にするのは無理だと思うので、日頃からもう少し話合ったりして頂きたいです。後、テレビのニュースは情報は速いのですが、少し過剰している部分もあるのでどうかして頂きたいです。
- *一部の人の間ではヘリコプター戦闘機の音がうるさいとか調査のための苦情等、市や警察果ては気象庁にまで電話をした人がいたという事を聞きましたが、そういう事に折れる事はないと思います。万全を尽くし、調査し安全対策をより一層考え、よい方法を探して行って下さる事をお願い致します。
- *とにかく車が多く、駐車場が少ない事。駐車場を増やして欲しい。道幅が狭いので拡げて欲しい事等です。
- *市の放送が殆ど聞こえない。言葉がきれぎれになって聞き取れない。それを直して下さい。
- *国や県に対して何を希望すれば何をしてくれるというのか。例えば家が壊れたから建て直す金でもくれるというのか。（それならそうして頂きたい）この土地に住んだ以上、覚悟は出来ているつもり。報道関係の金儲けの為にヤラセ等は絶対にさせない様にしてほしい。でも報道関係の報ずる針小棒大の報には伊東市民はその後どれ程泣いている事が御存じですか。
- *情報が早く正確に知ることの出来る事。
- *確実な予知を早期にみんなに知らせる。災害が起きてからでは何もならない。情報無線の充実。
- *防災無線放送の改善。
- *先ほどNHKで地震噴火の討論会をやっていましたが、噴火と地震の学者さん達がそれぞれの分野で研究して一緒に（？）出来ない様な事を聞きました。今回の様に何年も地震が続く、その後噴火になった訳ですからもっと密接な関係で研究が必要ではないかと思ひます。そして伊東の噴火専門に学者さん達を置いて、もっと細やかな情報や測量を実施して頂きたいと思ひます。

- *伊東市の防災対策に携わる方々も一生懸命頑張ってくれ感謝致しておりますが、これからもより早くより正確な情報を我々市民に伝えてもらいたいと思います。
- *防災無線が聞こえないので、有線放送（CATV）などで情報を流してほしい。
- *1. 生活資金の返済機関を長期にしてもらいたい。2. 避難港の指定。（1の場合、漁業者は1年間。その他は1～5年間の期間があり不公平）
- *地震台風などがあると大きな建物の下ですの夜もゆっくり休む事が出来ません。今回の事で子供達も随分怯えてしまいました。余り無理な所の建物の許可はもう少し考えてもらいたい。
- *情報の早く伝達。
- *予知情報です。パニックを恐れる余り慎重になるよりは、空振りでもよいから少しでもその危険性がある時は、きちんと予知情報を流して欲しいと思います。
- *余り細かい情報が知られないので、いつ避難したらよいかと不安だ！津波の事もパニックになったと思う。地元の人にもよく分かる様な情報が欲しい！
- *一日も早い地震噴火予知体制の確立。避難場所の整備。災害発生時の交通手段の確保～陸上交通網はズタズタに寸断されると予想されるので、海空路による輸送手段の整備。遠隔地勤務の家族の帰郷手段。
- *1. 地震の震度が測候所の発表と常に現地での感じと1～2度異なる。この10年間毎年群発地震が発生している故、地元と震度計等を設置して正確な震度を発表されたい。2. 災害対策本部の設置は速やかに行う必要あり。今回は余りにも遅すぎた設置である。3. 災害復旧資金の利子補給制度の所得制限を撤廃し、借入限度額（被害の程度により数段階）制で（？）導入しては、地震等による災害は一般の福祉制度とは異なる。被害者には平等に制度の恩恵を与える様にしては。
- *地震による道路の崩れなど集中豪雨による再被害など応急処置のままになっているように見かけられる箇所があり、心配。
- *崖崩れが起こらない様に、崩れそうな所は修理して欲しい。
- *情報を詳しく何度でもお願い致します。
- *噴火予知体制の充実。避難道路の整備。情報連絡体制の充実。
- *突然津波が来たら、もしくは津波警報が発令されたら、その間にいくら避難しても間に合わないですよ。又、この間の噴火にしてもその前に海面に泡状に気泡がなっていた時でも、全然何ともなくて（真剣に取り合わず）、4～5日たってからテレビ等で大騒ぎしていて、すぐにでも（気泡が分かった時にでも）何とかしていれば、もう少しと対策の方法が分かったんではないんでしょうか。
- *留田地区は、地震津波自然災害時の避難場所か何（？）近くに建設して下さい。防災放送が聞こえず避難場所が遠く、近くに建設して下さい。
- *地震や噴火に直面している地元の住民にこそたくさんの情報がもたらされるべき。予知はのぞんでいない。（必ずしも当たる必要は無い）予知出来る程自然は甘くはない。それよりその時起こっていることをすぐに知らせた上で、起こり得る事柄をいくつでも（ニュースステーションで司会者が一番樂觀的な見方、又一番悲観的な見方としてどんなことがおこりそうか、と聞いていたが一番私が知りたかった事で、とても参考になった。）発表して欲しい。意見をまとめて発表するのはとくに死んでいる。（地震予知連の方々へ）
- *何時も市の放送の内容が理解出来ません。なんとかならないものでしょうか。台風の時期になると思います。災害を受けた皆さんに1戸当たり100円のお金でも市単位、県単位で見舞金を送れたらよいと思います。
- *地震や噴火を経験しましたので今度地震が起きれば自分で身の回りの整理をすることも出来ます。再噴火の情報は定期的に知らせて欲しい。（伊東市民）だけでよい。国でも調査しているんだから。市の方々には正確に早く情報を欲しい。
- *地震予知、噴火予知など正確迅速な情報の提供をして欲しい。
- *崖や道路のためになった所を直して欲しい。
- *避難場所の整備。山崩れ防止工事費用の全額負担。
- *観測計器類の設置など充実していることは情報でいろいろ知りますが、観測データをある程度定期的に公表解説して頂けると有難い。
- *避難道路の整備をお願い致します。
- *道路の悪い所を早く直して欲しいです。
- *早く裏の山の工事をしても欲しい！噴火予知体制をより以上充実して欲しい。
- *予知に全力を尽くして欲しいと思います。

- *市の津波の情報で津波の恐れがあるで避難し、色々と問題になりましたが、海に近い場所ではその時点で避難しないと間に合わないと思います。テレビの前に毎日何もしないで情報を待つ事も出来ない場合もあるし、地元と全国と等しい情報を聞く訳ですので不安です。今回大雨と地震による裏の国道の亀裂と、家の前は海で噴火と津波の心配で毎日不安の日が続きました。
- *市の有線放送が今一つ聞き取れ悪く困った。
- *国から県、市と回り道しないように保安所から市へ直接に。
- *災害工事を早くやってほしい。
- *避難道路が悪いからもっと良くして欲しいと思います。
- *学校を休みにするのももう少し早く決めてもらいたい。
- *人員を余り大きくまとめ過ぎないで情報だけは的確に知らせて貰いたいです。どうしたら的確な情報を知らせる事が出来るか重点的に考えて貰いたいです。
- *情報を正しく早く伝えて欲しい。
- *津波対策をしてほしい。防波堤など。
- *情報伝達の正確さ。予知連の活躍を期待しています。
- *避難道路の整備と群発地震噴火で崖崩れ、道路の損壊箇所を早急に直してもらいたい。
- *地震等が発生して数日たってから、前兆現象があったなどと発表されますが、小さな事でどんどん災害の起きる以前に予知された事は発表して、住人の安全の為に協力を欲しいものです。
- *1. 近所でも随分崖崩れが起きているので（大雨のせいですが）危険箇所の補強工事を進めて下さい。
2. 前回の地震でひび割れや落石で道路が不通になりましたので、大きな被害が出た場合外部からの救援を受けるのにも支障がかなり出そうです。その場合も、敏速に対応出来るようにしておいてほしいと思います。
3. 防災無線放送を聴きやすく改善して欲しいです。
- *崖崩れの発生しそうな地点の調査をして対策を明解に住民に通達する

問1. あなたのお名前（ ）

問2. あなたの性別〈ひとつだけ〉

	%	N (人)
1. 男	36.7	315
2. 女	59.6	512
3. DK, NA	3.7	32
計	100.0	859

問3. あなたの年齢（ ）才

	%	N (人)
1. 10代	0.9	8
2. 20代	5.8	50
3. 30代	15.0	129
4. 40代	25.6	220
5. 50代	21.8	187
6. 60代	18.6	160
7. 70代以上	7.2	62
8. DK, NA	5.0	43
計	100.0	859

問4. あなたの職業〈主なものをひとつだけ〉

	%	N (人)
1. 農業	2.9	25
2. 漁業	3.3	28
3. 商業	5.8	50
4. サービス業	12.6	108
5. 旅館・民宿	3.8	33
6. 公務員	3.4	29
7. 会社員	15.0	129
8. 無職（主婦を除く）	10.4	89
9. その他	29.3	252
10. 主婦	7.9	68
11. DK, NA	5.6	48
計	100.0	859

お忙しいところを、ご協力まことにありがとうございました。あなたのご回答は貴重な防災資料として活用させていただきます。